



目次

序章 ドブの底	
序章 ドブの底	3
第一章 飼われしもの（前編）	
第一章 飼われしもの（前編）	9
第一章 飼われしもの（中編）	
第一章 飼われしもの（中編）	15
第一章 飼われしもの（後編）	
第一章 飼われしもの（後編）	21
第二章 奈落の夢（前編）	
第二章 奈落の夢（前編）	27
第二章 奈落の夢（中編）	
第二章 奈落の夢（中編）	33
第二章 奈落の夢（後編）	
第二章 奈落の夢（後編）	39
第三章 無明坂（前編）	
第三章 無明坂（前編）	45
第三章 無明坂（中編）	
第三章 無明坂（中編）	51
第三章 無明坂（後編）	
第三章 無明坂（後編）	57
第四章 マリオネット（前編）	
第四章 マリオネット（前編）	63
第四章 マリオネット（中編）	
第四章 マリオネット（中編）	69
第四章 マリオネット（後編）	

第四章	マリオネット（後編）	75
第五章	死角回廊（前編）	
第五章	死角回廊（前編）	81
第五章	死角回廊（中編）	
第五章	死角回廊（中編）	87
第五章	死角回廊（後編）	
第五章	死角回廊（後編）	93
第六章	偽りの青空（前編）	
第六章	偽りの青空（前編）	99
第六章	偽りの青空（中編）	
第六章	偽りの青空（中編）	105
第六章	偽りの青空（後編）	
第六章	偽りの青空（後編）	111
第七章	秤の鎖（前編）	
第七章	秤の鎖（前編）	117
第七章	秤の鎖（中編）	
第七章	秤の鎖（中編）	123
第七章	秤の鎖（後編）	
第七章	秤の鎖（後編）	127
第八章	傷鏡（前編）	
第八章	傷鏡（前編）	133
第八章	傷鏡（中編）	
第八章	傷鏡（中編）	139
第八章	傷鏡（後編）	
第八章	傷鏡（後編）	145
第九章	停止線（前編）	
第九章	停止線（前編）	151
第九章	停止線（中編）	
第九章	停止線（中編）	157
第九章	停止線（後編）	
第九章	停止線（後編）	163

第十章 黄昏に問わず（前編）	
第十章 黄昏に問わず（前編）	169
第十章 黄昏に問わず（中編）	
第十章 黄昏に問わず（中編）	175
第十章 黄昏に問わず（後編）	
第十章 黄昏に問わず（後編）	179
第十一章 錆びた向日葵（前編）	
第十一章 錆びた向日葵（前編）	185
第十一章 錆びた向日葵（中編）	
第十一章 錆びた向日葵（中編）	191
第十一章 錆びた向日葵（後編）	
第十一章 錆びた向日葵（後編）	197
第十二章 屑菩薩（前編）	
第十二章 屑菩薩（前編）	203
第十二章 屑菩薩（中編）	
第十二章 屑菩薩（中編）	209
第十二章 屑菩薩（後編）	
第十二章 屑菩薩（後編）	215
第十三章 暗雲（前編）	
第十三章 暗雲（前編）	221
第十三章 暗雲（中編）	
第十三章 暗雲（中編）	227
第十三章 暗雲（後編）	
第十三章 暗雲（後編）	233
第十四章 潜入（前編）	
第十四章 潜入（前編）	239
第十四章 潜入（中編）	
第十四章 潜入（中編）	245
第十四章 潜入（後編）	
第十四章 潜入（後編）	251
第十五章 水漬く屍（前編）	

第十五章	水漬く屍（前編）	257
第十五章	水漬く屍（中編）	
第十五章	水漬く屍（中編）	261
第十五章	水漬く屍（後編）	
第十五章	水漬く屍（後編）	265
第十六章	帰らざる河（前編）	
第十六章	帰らざる河（前編）	269
第十六章	帰らざる河（中編）	
第十六章	帰らざる河（中編）	275
第十六章	帰らざる河（後編）	
第十六章	帰らざる河（後編）	281
第十七章	水葬花（前編）	
第十七章	水葬花（前編）	287
第十七章	水葬花（中編）	
第十七章	水葬花（中編）	291
第十七章	水葬花（後編）	
第十七章	水葬花（後編）	297
第十八章	日常（前編）	
第十八章	日常（前編）	303
第十八章	日常（中編）	
第十八章	日常（中編）	309
第十八章	日常（後編）	
第十八章	日常（後編）	315
第十九章	ボイス（前編）	
第十九章	ボイス（前編）	321
第十九章	ボイス（中編）	
第十九章	ボイス（中編）	327
第十九章	ボイス（後編）	
第十九章	ボイス（後編）	333
第二十章	粘影（前編）	
第二十章	粘影（前編）	339

第二十章 粘影（中編）	
第二十章 粘影（中編）	345
第二十章 粘影（後編）	
第二十章 粘影（後編）	351
第二十一章 人形崩し（前編）	
第二十一章 人形崩し（前編）	357
第二十一章 人形崩し（中編）	
第二十一章 人形崩し（中編）	363
第二十一章 人形崩し（後編）	
第二十一章 人形崩し（後編）	369
第二十二章 盲心暗流（前編）	
第二十二章 盲心暗流（前編）	375
第二十二章 盲心暗流（中編）	
第二十二章 盲心暗流（中編）	381
第二十二章 盲心暗流（後編）	
第二十二章 盲心暗流（後編）	387
第二十三章 孤走（前編）	
第二十三章 孤走（前編）	393
第二十三章 孤走（中編）	
第二十三章 孤走（中編）	399
第二十三章 孤走（後編）	
第二十三章 孤走（後編）	405
第二十四章 次の闇（前編）	
第二十四章 次の闇（前編）	411
第二十四章 次の闇（中編）	
第二十四章 次の闇（中編）	417
第二十四章 次の闇（後編）	
第二十四章 次の闇（後編）	423
第二十五章 再会（前編）	
第二十五章 再会（前編）	429
第二十五章 再会（中編）	

第二十五章	再会（中編）	435
第二十五章	再会（後編）	
第二十五章	再会（後編）	441
第二十六章	暗黒連鎖（前編）	
第二十六章	暗黒連鎖（前編）	447
第二十六章	暗黒連鎖（中編）	
第二十六章	暗黒連鎖（中編）	453
第二十六章	暗黒連鎖（後編）	
第二十六章	暗黒連鎖（後編）	459
第二十七章	人と獣の境（前編）	
第二十七章	人と獣の境（前編）	465
第二十七章	人と獣の境（中編）	
第二十七章	人と獣の境（中編）	471
第二十七章	人と獣の境（後編）	
第二十七章	人と獣の境（後編）	477
第二十八章	虫の眩き（前編）	
第二十八章	虫の眩き（前編）	483
第二十八章	虫の眩き（中編）	
第二十八章	虫の眩き（中編）	489
第二十八章	虫の眩き（後編）	
第二十八章	虫の眩き（後編）	495
第二十九章	サイレントジャマー（前編）	
第二十九章	サイレントジャマー（前編）	501
第二十九章	サイレントジャマー（中編）	
第二十九章	サイレントジャマー（中編）	507
第二十九章	サイレントジャマー（後編）	
第二十九章	サイレントジャマー（後編）	513
第三十章	乾きの群れ（前編）	
第三十章	乾きの群れ（前編）	519
第三十章	乾きの群れ（中編）	
第三十章	乾きの群れ（中編）	525

第三十章 乾きの群れ（後編）	
第三十章 乾きの群れ（後編）	531
第三十一章 異端者（前編）	
第三十一章 異端者（前編）	537
第三十一章 異端者（中編）	
第三十一章 異端者（中編）	543
第三十一章 異端者（後編）	
第三十一章 異端者（後編）	547
第三十二章 闇の奥（前編）	
第三十二章 闇の奥（前編）	553
第三十二章 闇の奥（中編）	
第三十二章 闇の奥（中編）	559
第三十二章 闇の奥（後編）	
第三十二章 闇の奥（後編）	565
第三十三章 ゴミ掃除（前編）	
第三十三章 ゴミ掃除（前編）	571
第三十三章 ゴミ掃除（中編）	
第三十三章 ゴミ掃除（中編）	575
第三十三章 ゴミ掃除（後編）	
第三十三章 ゴミ掃除（後編）	581
第三十四章 異能者（前編）	
第三十四章 異能者（前編）	587
第三十四章 異能者（中編）	
第三十四章 異能者（中編）	593
第三十四章 異能者（後編）	
第三十四章 異能者（後編）	599
第三十五章 夜姫（前編）	
第三十五章 夜姫（前編）	605
第三十五章 夜姫（中編）	
第三十五章 夜姫（中編）	611
第三十五章 夜姫（後編）	

第三十五章	夜姫（後編）	617
第三十六章	黒の終焉（前編）	
第三十六章	黒の終焉（前編）	623
第三十六章	黒の終焉（中編）	
第三十六章	黒の終焉（中編）	629
第三十六章	黒の終焉（後編）	
第三十六章	黒の終焉（後編）	635
第三十七章	屍者（前編）	
第三十七章	屍者（前編）	639
第三十七章	屍者（中編）	
第三十七章	屍者（中編）	645
第三十七章	屍者（後編）	
第三十七章	屍者（後編）	651
第三十八章	沈む夜明け（前編）	
第三十八章	沈む夜明け（前編）	657
第三十八章	沈む夜明け（中編）	
第三十八章	沈む夜明け（中編）	663
第三十八章	沈む夜明け（後編）	
第三十八章	沈む夜明け（後編）	669
第三十九章	哀情（前編）	
第三十九章	哀情（前編）	675
第三十九章	哀情（中編）	
第三十九章	哀情（中編）	681
第三十九章	哀情（後編）	
第三十九章	哀情（後編）	687
第四十章	居場所（前編）	
第四十章	居場所（前編）	693
第四十章	居場所（中編）	
第四十章	居場所（中編）	699
第四十章	居場所（後編）	
第四十章	居場所（後編）	705

第四十一章	表崩れ（前編）	
第四十一章	表崩れ（前編）	711
第四十一章	表崩れ（中編）	
第四十一章	表崩れ（中編）	717
第四十一章	表崩れ（後編）	
第四十一章	表崩れ（後編）	723
第四十二章	容赦無き明日（前編）	
第四十二章	容赦無き明日（前編）	729
第四十二章	容赦無き明日（中編）	
第四十二章	容赦無き明日（中編）	735
第四十二章	容赦無き明日（後編）	
第四十二章	容赦無き明日（後編）	741
第四十三章	転流（前編）	
第四十三章	転流（前編）	747
第四十三章	転流（中編）	
第四十三章	転流（中編）	753
第四十三章	転流（後編）	
第四十三章	転流（後編）	759
第四十四章	鬼畜（前編）	
第四十四章	鬼畜（前編）	765
第四十四章	鬼畜（中編）	
第四十四章	鬼畜（中編）	771
第四十四章	鬼畜（後編）	
第四十四章	鬼畜（後編）	777
第四十五章	見えざる蛇（前編）	
第四十五章	見えざる蛇（前編）	783
第四十五章	見えざる蛇（中編）	
第四十五章	見えざる蛇（中編）	789
第四十五章	見えざる蛇（後編）	
第四十五章	見えざる蛇（後編）	795
第四十六章	マッドチェイサー（前編）	

第四十六章	マッドチェイサー (前編)	801
第四十六章	マッドチェイサー (中編)	
第四十六章	マッドチェイサー (中編)	807
第四十六章	マッドチェイサー (後編)	
第四十六章	マッドチェイサー (後編)	813
第四十七章	怪動 (前編)	
第四十七章	怪動 (前編)	819
第四十七章	怪動 (中編)	
第四十七章	怪動 (中編)	825
第四十七章	怪動 (後編)	
第四十七章	怪動 (後編)	831
第四十八章	笑う獣 (前編)	
第四十八章	笑う獣 (前編)	837
第四十八章	笑う獣 (中編)	
第四十八章	笑う獣 (中編)	843
第四十八章	笑う獣 (後編)	
第四十八章	笑う獣 (後編)	849
第四十九章	執行者 (前編)	
第四十九章	執行者 (前編)	855
第四十九章	執行者 (中編)	
第四十九章	執行者 (中編)	861
第四十九章	執行者 (後編)	
第四十九章	執行者 (後編)	865
第五十章	逡巡 (前編)	
第五十章	逡巡 (前編)	871
第五十章	逡巡 (中編)	
第五十章	逡巡 (中編)	877
第五十章	逡巡 (後編)	
第五十章	逡巡 (後編)	881
第五十一章	見敵必殺 (前編)	
第五十一章	見敵必殺 (前編)	887

第五十一章	見敵必殺（中編）	
第五十一章	見敵必殺（中編）	893
第五十一章	見敵必殺（後編）	
第五十一章	見敵必殺（後編）	899
第五十二章	影の背中（前編）	
第五十二章	影の背中（前編）	905
第五十二章	影の背中（中編）	
第五十二章	影の背中（中編）	911
第五十二章	影の背中（後編）	
第五十二章	影の背中（後編）	917
第五十三章	欠心（前編）	
第五十三章	欠心（前編）	923
第五十三章	欠心（中編）	
第五十三章	欠心（中編）	929
第五十三章	欠心（後編）	
第五十三章	欠心（後編）	935
第五十四章	ON THEEDGE（前編）	
第五十四章	ON THEEDGE （前編）	941
第五十四章	ON THEEDGE（中編）	
第五十四章	ON THEEDGE （中編）	947
第五十四章	ON THEEDGE（後編）	
第五十四章	ON THEEDGE （後編）	953
第五十五章	野良猫（前編）	
第五十五章	野良猫（前編）	959
第五十五章	野良猫（中編）	
第五十五章	野良猫（中編）	965
第五十五章	野良猫（後編）	
第五十五章	野良猫（後編）	971
第五十六章	負う者、追われる者（前編）	
第五十六章	負う者、追われる者（前編）	977
第五十六章	負う者、追われる者（中編）	

第五十六章	負う者、追われる者（中編）	983
第五十六章	負う者、追われる者（後編）	
第五十六章	負う者、追われる者（後編）	989
第五十七章	鬼嘴（前編）	
第五十七章	鬼嘴（前編）	995
第五十七章	鬼嘴（中編）	
第五十七章	鬼嘴（中編）	1001
第五十七章	鬼嘴（後編）	
第五十七章	鬼嘴（後編）	1007
第五十八章	欺鬪（前編）	
第五十八章	欺鬪（前編）	1013
第五十八章	欺鬪（中編）	
第五十八章	欺鬪（中編）	1019
第五十八章	欺鬪（後編）	
第五十八章	欺鬪（後編）	1025
第五十九章	血着（前編）	
第五十九章	血着（前編）	1031
第五十九章	血着（中編）	
第五十九章	血着（中編）	1035
第五十九章	血着（後編）	
第五十九章	血着（後編）	1041
第六十章	BETRAYER（前編）	
第六十章	BETRAYER （前編）	1047
第六十章	BETRAYER（中編）	
第六十章	BETRAYER （中編）	1053
第六十章	BETRAYER（後編）	
第六十章	BETRAYER （後編）	1059
第六十一章	去来（前編）	
第六十一章	去来（前編）	1065
第六十一章	去来（中編）	
第六十一章	去来（中編）	1071

第六十一章 去来（後編）	
第六十一章 去来（後編）.....	1077
最終章 狐蛭	
最終章 狐蛭	1083
あとがきにかえて	
あとがきにかえて	1093

序章 ドブの底

序章 ドブの底

夕方。年明けの繁華街。笑い声がウザい。

バカオンナども

友達のだれがど～ただの、ヤッただのおろただの、イエローボイスばら撒いて楽しい廃棄ングの真っ最中かよ。

クソガキども

つるんで歩いて、でけえ声のバカ笑い、いきがったナリによく似合うキョドツた目つきで、びくつきながら街を這いずってやがる。

しね

うせろ

ニンゲンやめちまえ

センター街をやっと通り過ぎると、ノイズのような喧騒が後ろへ遠ざかってゆく。

中央通りを抜けた所で地下鉄に入った。階段の手摺りをぶん殴る。

この街に戻って2年、通りを流すたび沸き起こるドロドロした思いをここで吐き出してきた。

鉄製の手摺りは知ってるだけで2回は交換されている。

俺のパンチごときでベコるとは欠陥品に違いない。

次の駅で降りた。

街の反対側からもうひと流し、今日の『ゴミ漁り』はそれで終わりだ。

◇

収穫ナシ。目ぼしい『ゴミ』は今日も見つからなかった。

Gパン皮ジャンの俺に、耳屋のおっちゃんがくれたシステム手帳は全く似合っていなかったが、そこには大事なメシの種がびっしり書き込まれていた。

蟻の群れのような文字の羅列から、俺は一つをピックアップした。

佐田義雄、二十七歳

派遣会社勤務

住所〇〇県〇〇市

0 〇〇〇〇 - 〇〇〇〇 - 〇〇〇〇〇〇

B→A

ランクA移行中か

次はこいつだな

なんとかハニーミルクってデカデカ書かれた風俗の看板の前に座り込んで携帯をポチポチ押した。

間抜けな呼び出し音が鳴ると、陰気な男の声が響いてきた。

「だれ？」

「……まだかよ」

「ああ？ 誰だよおまえ」

「毎日まいにちコンビニ弁当食ってよ、そのデカイナイフで箸でも削ってんのかよ、フヌケ」

「なんだとお」

「夜中にマンガ買いに行く暇があんならポントウでもブン回してスッキリしてこいよ。もってんだろ？」

「なんでしてて……」

聞かずに切った。

ケツが冷てえ。

後ろの看板に灯りがついた。

毒々しい赤とピンク。

立ち上がり、軽く蹴った。

偽物だらけの街

守るもんなんかない

お前らはみんな……

ただの餌、だ

擦れ違ったよっぱらいの背中に、せいぜい気をつけなと呟いて俺は寝ぐらへ足を向けた。

第一章 飼われしもの（前編）

第一章 飼われしもの（前編）

昼メシどきの駅前通り。

6 m程後ろからずっと奴をつけてきた。もう10分は歩きっ放しだ。

地味なブルゾン姿の男、佐田は気づきもしなかった。

フラフラと先をゆく奴は時折、擦れ違う人を目で追った。暗くどんよりとした目の奥に瞬間、ギラリと光が射す。

少しずつその回数が増えてきていた。

そろそろか

奴との距離を詰めにかかった。

この程度の人出なら擦り抜けなど訳もない。

他人よりちょい高い背丈はこんな時、大いに役に立つ。

内ポケットから幅広のサングラスを取り出し素早くかけた。

奴の足が遅くなった。

片手が腰の後ろへ差し込まれている。

引き抜いた何かが、ふとところに隠される刹那、ギンと陽光を反射した。

大型のサバイバルナイフか包丁、そんなところだろう。

口元に笑みが浮かぶのをおさえられなかった。

イツ ショウタイム

一気に背後まで詰め寄った。

気配を感じて奴が振り返る。

よお

低く言って、目の前の間抜けズラを軽くはたいた。

こいつの人生やら存在やら根こそぎバカにし切った態度で。

赤く血を昇らせた顔が形を変えた。

ひとが、ひとじゃないもの……『人でなし』になる瞬間。

腹に衝撃。

でもそれは俺を突き通せてなかった。

奴は口をアングリ開け、見開いた目で俺の顔と腹のナイフとをとっかえひっかえ眺めていた。

「だめだなあ、アンタ」

俺は奴を大袈裟にハグしながら、耳元に口を寄せて囁いた。

「チカラはってないじゃん、それじゃガキも殺せねえよ」

更に引き寄せ、皮ジャンのたるみでナイフを覆い隠す。

「かわいそうになあ。ブスブスやっちゃ良かったのによ。もっかい試してみっか？」

腰を捻ると、防刃シャツの下に挟んだハニカム構造プラスチックの特殊防護板に刺さったナイフが澄んだ音をたてて折れた。

またこいよ

あそんでやっからよお

耳をベロリと舐めあげて、両肩を叩き突き放した。

よろけてアスファルトに尻を落とし、呆けたように見上げる奴に中指おっ立てて、俺はその場を後にした。

サングラスの内側に貼ったミラーのなかで、棄てられたでかいナマゴミがヒトゴミに埋もれていった。

第一章 飼われしもの（中編）

第一章 飼われしもの（中編）

声を掛けると、しみったれた小男が振り向いた。

寝ぐらの隣りにある古びた床屋。

いつきても店主は置物のようだった。

年期の入った散髪椅子の方がよっぽど存在感ってやつがある。

「ぼん、か」

初めて『仕事』に手を染めた頃からずっと、店主は俺を「ぼん」と呼んでいる。

3ヶ月に1回は髪を切りにきた。

仕事以外でここに来るのは、それくらいだ。

「座ってな」

店主は店の奥へと消えた。

待たされるのは、旨いコーヒーにありつくためと割り切っていた。

逆さに振ってもデガラスの番茶くらいしか出てこないようなこの店で飲むコーヒーは、そこらへんのファミレスで泥水を啜る気をなくさせる。

暫く待ってたら、湯気をのぼらせたカップを手に店主が姿を現した。

何も言わず俺の前にカップを置く。

俺も黙ってカップを持ち上げた。

空いた片手でふところのシステム手帳を応接セットのテーブルに放り出した。

それを持って、また店主が店の奥へ引っ込む。

耳屋。

名前は知らない。

俺に、街の裏を教えた男。

『ゴミ漁り』を仕込み、その為の情報を俺に流している。

一人なのか、仲間がいるのかさえ知らない。こんな男がと思うほど、耳屋の情報は的確で迅速だった。

おれたちや、街に飼われてるんだ

この世界に足を突っ込んだ頃、耳屋が言った言葉をぼんやりと思い出した。

ひと、ゴキブリ、ドブネズミ

みんな街に飼われてる

ぼん

お前もだ

これからずっと、飼われてくんだ

半分も飲み終わらないうちに店主は戻ってきた。

俺がやったようにシステム手帳を放り出す。

「コーヒーもこんくらい早くいれてくれりゃいいのによ」

「うまいコーヒーにや手間暇かけなきゃいかん。情報ってのはナマモノよ。さっさと捌かなきゃ腐っちゃう」

「そんなもんか」

残りを飲み干し席を立った。

テーブルの手帳を拾いあげる。

「こないだの奴、やるぜ」

『ゴミ漁り』が先だ。暇なら、好きにしな」

「へいへい」

……街を守ってる訳じゃない。

見境無く刃物ブン回すような野郎をいたぶって、追い込んで、自滅させる。

それが俺の『仕事』だ。

「いけよ、邪魔屋」

耳屋は珍しく、俺をぼんと呼ばなかった。

第一章 飼われしもの（後編）

第一章 飼われしもの（後編）

深夜の路地裏。

陰気な男どもと、すらりとした女がひとり。

黒のスーツの肩口で、ストレートヘアが微かな風になびいている。

眠れずにウロついてた街のドブ底で、嫌な奴に会っちゃった。

「仕事熱心だな」

「あら、邪魔屋の坊や。子供のうろつく時間じゃないわよ」

クソいまいましい女の後ろで、男どもがシートにくるんだ丸太のような荷物をトラックの荷台へ放り込んだ。

女が行く先を指示すると、無表情な男どもはわらわらとトラックに乗り込み、闇の中へと走り去っていった。

後には俺と、女だけ。

「また『こまったちゃん死体』かよ」

「ビジネスよ。あなたが知る必要ないでしょ」

「別にしりたくもねえよ」

「そ、なら消えて」

女はそっけなく言い、タバコに火をつけた。

赤のマルボロ。吸ってるモクも吸い方も男みてえだ。

キツイ目してるが美人の部類に入るだろう女の顔を、俺はなんとなく眺めていた。

「なに？」

視線に気づいた女が聞いてきた。

「はたらくオンナは綺麗に見えるっていうじゃんか」

「まさかアタシに欲情したの？ 帰ってエロビデオでも見てなさい」

「なんだよ、そりゃ」

タバコを投げ捨て、女は真正面から俺を睨んだ。

「前の邪魔屋が随分とおせっかいでね、おかげで大損くらったわ。まるで保安官きどり。それから邪魔屋が大嫌いになった」

「しるか、そんなこと」

「死ぬ奴はね、死んでくれなきゃ困るのよ」

女が髪をかきあげ言い捨てた。

俺とは別の、この街のゴミ処理係。

行き倒れ……ヤクザの置き土産……腐りかけの、あいつやこいつ。

人目に晒せないそんな連中を、絶対に表に出ない所へ葬るのが、この女の『仕事』だ。

ホームグラウンドは東京湾から南極まで。

海専門の死体処理屋、水草屋。

センス悪いネーミングだ。

ほかにも肥溜屋っていう、山の中に埋めちまう専門家もいるらしいが、俺は会ったこと

ない。会いたくもない。

会いたくもないクセに、俺はちよくちよく水草屋と出っくわしちまう。

「アンタ歳いくつだ？」

「？」

「死ぬ奴は死ぬなんて、いい歳ぶっこいたオンナのセリフじゃねえよ」

「.....ガキね、女に歳を聞くなんて」

そのまま背を向け、片手を挙げた女は夜の向こうに溶けていった。

第二章 奈落の夢（前編）

第二章 奈落の夢（前編）

駅で買った新聞を開いた。

佐田義雄の記事が紙面の片隅に載っていた。

〇〇線で人身事故 夕方のダイヤ乱れる

指でなぞってデコピン一発。新聞に穴があいた。

耳屋のリストにめでたくランクA登録された佐田のストーキングにとりかかったのは、あれからすぐだった。

目新しい情報もなく『ゴミ漁り』も暇だった俺は、久しぶりの獲物をたっぷり堪能した。

無言電話、窓への投石、郵便受けへの糞尿ブチ蒔けとかいった入門編から始めて、近所や職場へのよからぬウワサ流し、サラ金で奴名義の借金、大麻育成でサツへ密告、などなど。

ほかにも色々カマしてやったが、いちいち覚えちゃいない。

血管されそうになった佐田は、ナイフやらスタンガンやら持ちだしてちよくちよく出かけたが、そのたんび俺に邪魔され半ベソかいて帰ってった。結局、奴が壊れちまうまでひと月もかからなかった。

物足りなかったな

もちっと愉ませろよマッタク

ウェイトレスを呼びつけコーヒーをおかわりした。

ひでえ味だが、ひと仕事終えた朝、人もまばらなファミレスのソファでふんぞり返って成果確認するのは、カップの中身が泥水だろうと気分がいい。

コーヒーをついで、ウェイトレスは引っ込まなかった。

じっと俺を見下ろしている。

「なんだよ」

「.....」

「なんかようか？」

「..... アンタ、変態？」

「ああ？ てめケンカ売ってんのか」

「ときどき、くるよね。いつもおんなじ席で新聞読んで、キショい顔でニヤニヤ笑ってる」

「それがどした」

「吐き気がする。アンタ見ると。こないでくれる、ココ」

「いいのか？ バイトがそんなこといって。オレ客だぜ」

むっつりしたウェイトレスの顔を改めて見直した。

チビ。童顔。薄い茶髪。大きな瞳。

.....似てた。忘れたくても忘れられない、あの顔.....

「.....る」

「え？」

「かえる。気分わりい。オレが消えりゃ満足なんだろ」

「あ……うん」

「ホラよ」

勘定を置いて席を立ち、出口に向かった。

「ねえ、レジで払ってよ！」

金をひっ掴んでウェイトレスが後を追ってきた。

変態だと思ったらかかわんなよ！

ころされちまうぞ！ オマエも！！

振り向きざま怒鳴り、ドアを叩きつけ俺はウェイトレスを視界から消した。

第二章 奈落の夢（中編）

第二章 奈落の夢（中編）

リストにない相手だった。

目がいっちまってる。

いつも5回は街を流していた。

今日はまだ2回目、日の傾いた繁華街でコイツに出くわし、体当たりしてビルの裏に押し込んだ。

あとチョット遅れてたら、前から歩いてきた母子は確実にドタマかち割られてたろう。

特殊警棒とはシャレてやがる。

一発くらっちゃった

左腕.....折れてるかもしれねえ

目の前でよだれ垂れ流してるヤツと対峙しながら、俺は自分のうかつさを呪っていた。

◇

こないだのファミレスでの一件いらい、カッターくて仕事に身がはいらなかった。

報酬.....だれが払ってるのか耳屋は教えてくれない。『街』の連中がアパートの管理費みたいに少しずつ出し合ってるみたいな事は聞かされていた.....でサイフが膨らんでるからヤル気が起きないんじゃない。

あのウェイトレスのせいだった。

ダンベル、サンドバック、漬け物石に洗濯機.....

毎晩々々、思いつくだけの重量物をおっかぶせ、心の底の底のどん底まで沈めてきた記憶。

血を吐く思いで封じ込めてきた記憶。

夢を見そうな夜は、眠らず朝まで街をうろついた。

忌まわしいという言葉すら生易しい過去。それが突然、目の前に現れた。

よく似てたんだ。

小夜子

いつも俺のあとをおっかけてきた

ケラケラよく笑った

二人で一緒に買い物にもいった

「カノジョいないでしょ？ じゃあいいよネ♪」

照れながら腕をくんできた

可愛い妹、だった

あの日

久しぶりに家族で出かけた、あの日.....

血だまり

目を開いたまま動かない、おふくろ

脳味噌はみ出した、俯せのおやじ

メッタ刺しにされた小夜子は、おどろいたような顔のまま俺の腕の中で冷たくなっていた

つめたかった、すげえつめたかった……

日本中を戦慄させた通り魔事件。

被害者は、俺の家族を含めて13人にのぼった。

うち二人は制止に駆けつけた警官だった。

犯人は改造銃にアーミーナイフ、金属バットで完全武装していた。

頭のイカれたミリタリーマニア。

射殺されるまで、奴は殺しまくった。

俺は全てを喪い、流れ、またこの街に戻ってきた。

そして俺は……

『邪魔屋』になった。

第二章 奈落の夢（後編）

第二章 奈落の夢（後編）

きしゃあー！！

男が突っ込んできた。

滅茶苦茶に警棒を振り回してくる。

乱打の雨、避けるしかなかった。

後ろは表通り、もう下がれない。

ださねえぞ、ヨダレ野郎

足下を見た。ゴミ袋の山。

蹴り飛ばした。

最初のゴミが、叩き落とされ中身をブチまける。

さがれ

さがれコノヤロォー！！

片っ端から蹴った。蹴りまくった。

空飛ぶゴミが次々とヨダレ男に命中した。

奴がフラフラと後ろにさがる。

その隙に皮ジャンを左腕に巻き付けた。

防刃シャツもプロテクターも付けずに『ゴミ漁り』に出たドジも、そんなざまで『ゴミ』を拾っちゃった後悔もわすれた。

いくぜ

腹の底から叫び、顔じゅう口にして突っ込んだ。

左腕に右手を添え、頭への打撃だけをカバーする。

警棒がボディークい込んだ。

かまわず抱きつき、奴とダンゴになってぶっとんだ。

馬乗りになり、髪を掴んでアタマを路面に叩きつける。

たて続けに6発、それで奴からすぐ離れた。

下から刺されるのは、たいてい馬乗りの時だ。

ヨダレ男はゴミの海でのたくってる。俺は転がっていた汚い犬のヌイグルミを拾った。

アバラが痛い。

蹴りをいれ、跨いだ背中にケツを降ろして奴の口にヌイグルミを押し込んだ。

そのまま両手を口にかけて、思い切り後ろに反った。

くぐもった声を漏らしながらヨダレ男がエビぞりになる。

更に力を込めた。

.....しねえ.....

ヨダレを泡に変えた男の身体が痙攣を始めた時、誰かが肩を叩いた。

「そこまでだ」

耳屋だった。

手を離した。

ヨダレ男がぶっ倒れ動かなくなる。

俺はゼーハーいいながら立った。

「おっちゃん……」

「すっぴんで『ゴミ漁り』なんぞ教えてねえぞ」

耳屋が脇腹をはたいた。痛みで息が詰まった。

「この程度でよかったな。もちっと気のきいた奴なら、ぼん、お前死んでたぜ」

「アンタの情報網はなにをやがった？」

「俺あ神様じゃねえ。毎度こんな連中を見つけられる訳じゃない。その為の『ゴミ漁り』だ」

「なら止めんなよ、こんなクソ殺っちまったって……」

「のぼせんな。こっからはぼんの仕事じゃねえ」

耳屋が視線を振った先に、背の高い女が立っていた。

第三章 無明坂（前編）

第三章 無明坂（前編）

「またアンタか……」

ゲンナリして俺は女に毒づいた。

「なんでそんなしょっちゅう出てくんだ」

「ひとをゴキブリみたいに言わないでよ」

苦勞して皮ジャンを着込む俺の隣りに、ヒールの音を響かせて水草屋が歩いてきた。

「このゴミ、もらってくわね」

「アンタ死体専門だろ？ 生きてる人間にや用はねえだろが」

「だからガキは嫌いななのよ」

水草屋はバッグからマルボロを取り出し火をつけた。

「どいて。邪魔よ、『邪魔屋』ちゃん」

「なんだと……」

ムカついてつかみかかろうとした時、目つきの悪い奴らがドカドカと狭いビル裏になだれ込んできた。

由緒正しいヤクザファッション。どう見てもその筋の男たちだった。

連中はヨダレ男を抱えおこし、一人が首にテグスをかけて後ろ手に縛り上げた。

頭からジャージを被せ、押し包むように拉致ってった。1分もかかってない。

恐ろしく素早い手際だった。

「あのゴミ、売人からヤク盗んで好き勝手にとんじゃったの。あいつが捕まると警察に睨まれて、ルートが1つ潰されちゃうのよ。困るでしょ、ちゃんと商売してるオトナが失業しちゃ」

「ヤク売りのどこが『ちゃんとした商売』だってんだよ」

俺は吐き棄てた。

「売って買って、儲けて使う。経済原理ってやつね。あいつは始末されて、そのあと私が『始末』する。エコよ、エコ」

ぽろっと煙草を捨てた水草屋は、じゃあねと言って背を向けた。

「殺そうとしたな、ぼん」

そばで耳屋が呟いた。

『『邪魔屋』は自分の手を汚すな。ゴミが勝手に死ぬのはいい、だが殺しちゃなんねえ』

「何が違うってんだ？ 俺は何人も殺したぜ、死にたくなるまで追い込んでよ。直接殺るのとなんも変わんねえじゃないか！」

じっとこっちを見てる耳屋に吠えた。

「.....ゴミの臭いがよ、染みついて抜けなくなっちゃうのさ.....」

耳屋が言った。

「それがどーした。ゴミは死ねばいい、死ななきゃ俺が殺してやる！」

「へっ。あんときのボロクソ小僧がいうようになったもんだ」

その言葉に、俺はふいに思い出した。

耳屋と初めて出会った、あの夜の事を。

第三章 無明坂（中編）

第三章 無明坂（中編）

二年前だった。たぶん、あれは。

◇

「んな所で寝てんじゃねえ。おら、起きな」

ケツを蹴られて、ぼんやりした頭のまま俺は身体をアスファルトからひっぺがした。

宵の口。裏通りのど真ん中。

知らない男が見下ろしている。

「まだガキじゃねえか。よっぱらうなんざガッコでべんきよしなくなってからでいいだろ」

「……っせえよ、さわんじゃねえ……」

「口だけは達者かい、ほれ、手かせ」

「さわんなっ！」

立ち上がって腕ブンまわして、その勢いで頭からゴミ捨て場に突っ込んだ。

ポリバケツが派手に宙を舞い身体じゅうに気持ちの悪いもんがくっついた。

男は、今度は手を貸そうとはしなかった。

じっと俺を観察していた。

「ガッコだ？ べんきょうだ？ そんなモンなんになるってんだ！ なんもできなかつ

た……盾になることも、身代わりになることも……みんなしんじまった、みんな……ちくしょう、ちくしょう……」

言っただけえ吐いた。

吐いても吐いても楽になんかならなかった。

「どっかで見たことあると思ったら、坊や、オマエあんの生き残りか」

「……あん、とき？……」

「13人死んだ。ひでえ事件だった」

「……」

「きな。そのザマじゃいくとこ、ねーんだろ」

「ほっとけ……じじい……」

「じゃあそこで腐ってろ」

男の足音が遠ざかっていった。

口をぬぐって、ズボンについたゲロを払って、ついでにバケツを蹴りとばして、俺はただなんとなく声が消えていった方へと歩いた。

自販機にぶつかり、看板ひっくり返し、正面衝突した電柱にもたれかかってまた吐いた。

ぐるぐる回る視界の端に人影が映った。貧相な小男。

さっきの奴だった。

口を開く気力もなかった。

男がへたへたと歩いてきて俺の髪をわし掴みにした。

「オマエにゃ資格がある。教えてやる、『街の裏』ってやつを。その気があんなら、そっ

から先もな」

体格からは思いもかけぬ強い力で、俺は男に引きずられていった。

もうなんでもいい

勝手にしろ

どいつもこいつもクソッタレだ

転がり落ちてゆく感覚だけが強かった。

この男が俺を何処へ連れてゆくのか……

ドロドロになってる頭じゃなんもわかんなかった。

辺りが暗かった。

戻ってこれそうもなかった。

第三章 無明坂（後編）

第三章 無明坂（後編）

いきなりだった。

小男と出会った翌日。

夜中に叩き起こされ、部屋から引きずり出され、知らない飲み屋街の裏へ放り出され、わけわからないままイカれ野郎に包丁むけられてた。

「なんだよコレ、どうなってんだよ！」

包丁男は何も言わず斬りつけてきた。

「無駄口きいてっと死ぬぞ」

「だから！ コイツなんだよ?! なんでオレこんな奴にからまれてんだよ!!」

小男は後ろで立ってるだけだった。

「助けるオイッ！ ケーサツ呼んで……よんでこいって！」

夢中で刃をかわしながら俺は怒鳴った。

「おっさん！」

「おなじだ、あん時と。どうする？ 泣きながら刺されちまうか？」

「ざけんなっ！ なんで……」

なんでこんな目にあうんだ

逃げよう……

逃げだそう

包丁男のひと振りをおかし、俺は背を向け必死でダッシュをおました。

「逃げんのか！ 坊主！！」

小男の一喝に頭をぶん殴られ足が止まった。

「また逃げんのか。ネズ公みたいに。だから不様に生き残っちまったんだよオマエは！！」

こわばった身体でギクシャクと振り返った。

「そいつあ『ゴミ』だ。オマエはゴミクズに怯えてんだ」

「ゴミ……」

「そうだ。ゴミだ、ただのゴミなんだよ。どーする？」

「ゴミ……ゴミなら…おれは……」

包丁男が突っ込んでくる。

おれは

おれは……

このクソごみいいー！！

頭から包丁男の顔にブチあたった。

どこかに痛みが走ったが、構わず男の髪をわし掴みにして額を打ちつけた。

何度も、何度もなんども。

とまらなかった。

さげんでた。

……気がつくと、首から上が腐ったトマトみたいになった男が足元に転がっていた。

「ボンボン坊やにも、ちゃんと牙はあったな」

小男が近寄ってきた。

「おい、オマエ笑ってるぜ」

ドブ脇の水たまりに顔が映ってた。

血まみれの俺が笑ってた。

『『邪魔屋』になれ、ぼん』

「邪魔……屋？」

「ゴミ処理屋だ。おまえならやれる。復讐も出来るぜ」

「嫌だっけいったら」

「いわねーよ、そんな風に笑う奴は」

小男が鼻で笑った。

「俺は耳屋。この街に飼われてる。ぼん、お前も飼われていけ。これからずっと、な……」

顔を拭った。

血とネオンで、両手が真っ赤に染まっていた。

第四章 マリオネット（前編）

第四章 マリオネット（前編）

こないだの件（ヨダレ野郎とのゴミまみれの大乱闘）があつてからしばらく、耳屋の店へ出禁をくらつてた。

頭を冷やせと言つてるつもりなんだろうが、こんなショボい店、押し入ろうと思えばそのへんの中坊だって簡単にやっちまうだろう。それでも、旨いコーヒーにありつけなかったのはちっとばかり苦痛だった。

「なあ、おっちゃん」

久しぶりに散髪にきた耳屋の店で、俺はコーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。

「なんだ」

耳屋が道具を片付けながら聞き返してきた。

「最近、近くの住宅街でぶっそうな事件、起こつてんじゃないか」

「それがどーした」

「不思議だよな。街はおれたちみたいなのを飼つてる、なのに人が住んでる辺りじゃ今、バンバン殺しがおこつてる。誰かいねえのか？ 例えばさ、住宅街専門の『邪魔屋』みたいなのがよ」

「オマエがいきやいいだろが」

「マジで聞いてんだぜ」

散髪鋏を引き出しにしまうと、耳屋がゆっくりとこっちへ振り向いた。

「ぼん、街って奴あなんだと思ってる」

「そりゃいろんな奴がいたりきたりして、店があって、ポン引きがいて、ショッピングしたりケンカしたり、ヤクザがいればマザーテレサもいてよ、ようはグチャグチャ人間が集まるとこだろ？」

耳屋は声を出さずに笑った。

「2年も邪魔屋やってて、オマエなんも判ってねえな」

「わるいかよ、んな事知らなくたって『仕事』は出来るぜ」

「街ってのは生きてんだ。石器ガシガシ叩いてた頃から人の集まる所に街が出来て、出来た時から街は自分の意思を持つ」

「じぶんの……いし……？」

「そうだ。街は自分を生かす為、ヒトを動かしヒトを飼う。俺たちみたいなのは大昔からいたって事さ」

「……なんかスнгеエ話になっちまったな」

少しシラけた気分になった。

暇つぶしのヨタ話が石器時代までいっちゃうとは。

「事件が起こるってこたあ、今そこには『飼われてる』連中がいねえって事だろうよ」

「そんなもんなのか？」

「ああ。ここもそうだった。オマエがくるまでな」

思わぬ言葉に意表を突かれて口を噤ませた。

その時、不意に店の電話が鳴った。

第四章 マリオネット（中編）

第四章 マリオネット（中編）

はい、いこい理髪店です

耳屋は商売言葉で返した直後、俺のよく知る顔になった。

「……そうか。ああ。大丈夫だろう。丁度いま『邪魔屋』が来てる……」

じゃあなと短く返答し、耳屋は受話器を置いた。

『『仕事』の話かよ』

「そうだが、ちと違う。警察からだ」

「ああ？ おっちゃんなんかやったんか？」

「アホ。ここの警察にも飼われてる奴あ幾らでもいる。所轄なんざ俺らと同類だぜ」

初耳だった。耳屋が警察とつるんでは。

「サツだろうが議員だろうが、街に飼われてる事に変わりはない。時々、自覚の無い青二才が喚いたりするがな」

「どうでもいい、んな連中は。それより何だっただ」

「一週間後、駅前選挙演説がある。応援で現首相が来るそうだ」

「はあ。それで？」

「公安から回ってきた要注意人物リストと、俺のリストにダブリがあった。はぐれもののテロリズム信奉者だ。潰せ」

「おれが？」

「ほかに誰がいる」

「いつから俺はSPになったんだよ」

「バカ、オマエに護衛なんかできっかよ。いつもどおり『仕事』をやりゃあいいんだ」

「でもよ、サツがいるじゃんか？ そーゆう話なら俺の出番じゃねえだろ」

「サツがこようがシュショーがこようが関係ねえ。言っただろ、街は『生きて』んだ。そこに俺たちの意思なんてもんはねえ。黙って働きやがれ」

高飛車チックな物言いにカチンときて正面から睨んだ。

耳屋も睨み返してくる。

長いこと耳屋とニラメッコしたあと、俺はカップをテーブルに置いた。

『ゴミ』やっちまえるんなら理由なんかどーでもいい。ただよ、また水草屋にイヤミいわれるなんてのはゴメンだぜ」

「わかった。手帳を出せ」

俺はシステム手帳をテーブルに放り出した。それを拾い、耳屋が店の奥に姿を消す。

『仕事』にありついた。

それだけだ、と思おうとした。

誰かの都合で使われるなんざゴメンだった。

煙草に火をつけ、いっぱつだけ吹かしてカップにねじ込んだ。

くすぶる吸い殻を黙って見ていた。

いつの間にか戻った耳屋は、何も言わず手帳を放り出した。

そしてやっぱり、くすぶる吸い殻を眺めていた。

第四章 マリオネット（後編）

第四章 マリオネット（後編）

急ぎ仕事は今まで何度もあったが、期限を切られたのはこれが初めてだった。

ちいっとばかりいたぶっても都合良く自殺などしてくれそうもない相手だったんで、今回はヘルプを頼んだ。

便利屋

街の裏に住む連中はそう呼ぶが、別に引っ越しとかやってる訳じゃない。

ロマンス通りなんてシャレた名前のついたホテル街の裏手で雑貨店を営む老人。

無口なジジイだが、なんだか俺は嫌いじゃない。

表の顔は痴呆症寸前に見えるが、裏じゃ自分で『仕事』をこなすこともあった。

ウワサじゃ元医者で、患者ボコボコ殺しちまって裏の世界に逃げ込んだなんて言われている。

もとの職業だけ噂通りなのは本人から聞いていた。

渡されたのは中身も判らない粉薬、分量の加減で無気力にも錯乱状態にも出来ると、皺だらけの顔でヒッヒと笑いながら便利屋は俺に告げた。

「試そうなんて思うなよ」

「ヤクに興味はねえ」

「そおかい。じゃ、いきな」

「風邪ひくな、ジジイ。歳なんだから」

「アリガトよ、坊や。またおいで」

店を出ようとしたら、背中に何かがあたった。

足元に酢こんぶが転がってる。

振り向いた。

「なんだよ」

「気が乗らねえみたいじゃないか」

『『仕事』だ。関係ねえ』

ぶっきらぼうに返答した。仕事を詮索されるのは好きじゃない。

「耳屋は坊やの師匠だ。いうこと聞いてりゃ間違いはねえ。だがよ」

便利屋が椅子から身を起こした。

「ヤバいと思ったら手を引け。片っ端から『仕事』するのが『邪魔屋』じゃねえんだぜ」

妙に哀し気な目をして便利屋が言った。

「ゴミを潰す。それだけで『邪魔屋』やってる。他にやることなんかねえ」

「坊やもいつか『邪魔屋』をやめる。別の人生ってやつをみつけるさ。タダじゃ抜けらんねえ世界だ、引きずってるモンは少ないほうがいい」

「ジジイ占いもやってんのか」

茶化して言ったつもりだったが、便利屋は怖い顔になった。

「オレたちや飼い主の気分しだいで棄てられるんだ。いつまでもこんな所に居るんじゃねえ、坊や。思い出も復讐もいつかは薄れる」

「……くるんかよ、そんな日が……」

重い視線を浴びながら俺は店を後にした。

第五章 死角回廊（前編）

第五章 死角回廊（前編）

街頭演説まで、あと3日。

仕込みは順調だった。

今度の『ゴミ』……木島裕太とかいう名前らしいが、俺のしたこっちゃない。せいぜいキ印って縮めて言うくらいだ……を初めて見た時は驚いた。

短く刈り込んだ髪。

およそ曲線の無い、ゴツい人相。

分厚い体躯。タツパも俺とどっこいだ。

ロボットみたいにまっすぐ道を歩く。

どっからどう見ても軍人か何かには見えなかった。実際、陸上自衛隊に入隊していた経歴も持っている。もっとも1年ちょいで除隊しているが。

まともな職業の人間なら誰でも、積極的に関わりあいたいとは思わないだろう。『危険物取り扱い注意』の坎バンが服着て歩いてるようなもんだ。

気にくわなかった。

判りやす過ぎる。

俺の経験じゃ『ゴミ』はたいてい、どこにでも転がってる石ころみたいな奴ばかりだった。

無個性という名の個性.....

ヒトでも殺っちまわなきゃ死ぬまで目立つ事もないだろう、埋もれて、いびつで、壊れた連中。

だがコイツなら、いつでもどこでもどんな無茶な理由でもこじつけて、挙動不審者としてニンドー（任意同行）出来るはずだ。サツなら必ずやる、VIPがいるような場所なら100%確実に。

邪魔屋が出る幕なんぞ、どう考えてもない筈だった。

街は『生きて』んだ

そこに俺たちの意思なんてもんはねえ

耳屋の言葉がまたアタマをかすめた。

つまり街は、このキ印野郎を『ゴミ』として片付けたい訳だ。

サツに渡したくない理由が何なのか、考えたところで判りゃしない。街の意思なんてカッコつけちゃいるが、とどのつまりはどっかの誰かの利害が絡んでるに決まってる。

街ってなんなんだ

ぶるっとひとつ頭を振り、浮かんだ疑問を追い払った。

『仕事』が終われば考える時間なんぞ腐るほどある。今は目の前の『ゴミ』を始末する事だけ考えてりゃいい。

ほかにやるべき事など無かった。

キ印が小汚ないアパートから出てくるのを見届けてから、俺は路地の角を離れ駅の方へと歩きだした。

奴の毎度のパターン、駅前のファミレスでお食事タイムだろう。俺からのおクスリタイ

ムでもある。

キ印の足取りが微妙にヨタってた。

あと一息だった。

第五章 死角回廊（中編）

第五章 死角回廊（中編）

街頭演説まで、あと2日。

昨日からクスリの分量を増やしていた。

キ印野郎は外食オンリーなんで比較的コントロールし易かった。

今朝の食事の時には勘定を間違え、店の奴とひと悶着おこしている。ろれつも怪しくなつて、うまく自分の意思を伝えられなくなってきていた。その苛立ちが精神不安定に拍車をかけている。

ネガティブスパイラル。バッチリつぼにはまっていた。

今夜、とどめのイッパツをかます。

明日には奴もお出かけだ。あっちの世へ。

上か下かは知らねえが、まあ明るい方じゃないだろう。

今、街はどうなってるんだ

アパートを見張りながら、ふと疑問が浮かんだ。

俺が『ゴミ』どもにストーキングを仕掛けている時、街は誰が守ってるんだ？

『守ってる』なんてカケラも思っただけでなかったから考えたこともなかったが、俺がどう思おうと『邪魔屋』は実質的な街の守護者だ。

いくら『ゴミ漁り』が暇だからといって、『ゴミ』がいつ沸いてくるかなんて誰にも判りゃしないじゃないか。耳屋の情報網に引っかからない奴だっている。このあいだもそうだった。

そんな時、俺がでばっていたら……

『邪魔屋』のいない街

それが何を意味するか、俺自身が一番よく知ってる。

あの事件のあった日、この街には『邪魔屋』がいなかった。たまたまのか求人広告の出し忘れかは知らないが、そのせいで俺の家族は皆殺しにされたんだ。

……やばい……

腰を浮かしかけて、やめた。

アスファルトに敷いた段ボールの上であぐらをかき直した。

今やめる訳にはいかない

あとチョットで、あのキ印は地獄行きだ

それに街の奴らがどうなろうと俺のしったこっちゃない

あの時だってだれも助けちゃくれなかった

腐るほど人間がいて、でもただの一人だって奴を、あのイカレた殺人鬼を止めなかったじゃないか

我先に逃げ出しただけじゃない、倒れた被害者を写メした外道までいやがった

あんな奴らが何人死のうがかまわない

奴らはエサだ、エサなんだ

葛藤は、キ印の部屋の灯りと一緒に消えた。晩メシの時間だろう。

ポケットの中で薬包を握り締めた。

おまえらに明日なんかねえんだよ

『ゴミ』め.....

第五章 死角回廊（後編）

第五章 死角回廊（後編）

街頭演説まで、あと1日。

昨日の夜、錯乱すると聞かされていた分量の1・5倍のクスリをキ印の晩メシに仕込んだ。

一晩中クソ寒い路地裏でアパートを見張ってたが、奴が飛び出てくる気配は無かった。

いつもならもう朝メシに出てくる筈だったが、それもない。

死んだかと思ったが、クスリの致死量は昨日の10倍だったし、例えそうだったとしても俺にはウェルカムだったから待ち続けることにした。

ただ耳屋に文句いわれるのは嫌だったし、サツもうっとうしい。

出てこなかったら様子を見にいこう

クシャクシャのパッケージを握りつぶし、新しい煙草の封を切った。

◇

俺は呆然として立ち尽くしていた。

キ印のアパート。中をうかがい、ドアの鍵をあけ思い切って踏み込んだ部屋はもぬけの空だった。油断してた。

あの状態でアタマ使えるなんぞ思いもしなかった。でも奴は耐えてた。歯をくいしばり自制していたようだ。

歯形のついた角材には血まみれの犬歯が一本、くい込んだまま残っていた。

奴はどこいったんだ？

ひとつしかなかった。演説予定会場。

俺は部屋を飛び出した。

3つ並びの家の塀を曲がり、現れた線路ぞいに駅へと走りに走った。

息がアがる寸前、遠くに駅舎が見えてきた。

手前の踏切が鳴り、遮断機が降りて列車の接近を告げていた。

人影……まさか……

キ印がゆらゆらと揺れながら警報機に寄りかかっている。

なんでこんなところウロウロしてんだ奴は

ヤクが効いてて会場まで行けなかったんか

限界いっちゃった俺は足腰グダグダのまま奴の方へとヨタ歩きしていった。

気配を感じたのか、キ印がこっちを向く。

泣きそうな目。口の端から一筋の血。

いかつい顔を歪めてなにか言おうとしていた。

「なにやってんだよ」

「……あ……うあ……」

「木島。てめえはゴミだ。消えろ」

「……な……に……した……おれが……オマエは……こんな……」

キ印が線路内に飛び込んだ。

警笛と怒声が交錯した。

おれがなにをしたってんだああ～！！

最後の『あ』がグチャンといって潰れた。血飛沫が俺を被った。

◇

アスファルトの上で奴が俺を睨んでた。

あばよ

吐き捨て、目玉を踏み潰した。

第六章 偽りの青空（前編）

第六章 偽りの青空（前編）

店に入るなり耳屋をブン殴った。

「どういうことだっ！」

派手にブッ飛んだ耳屋は、ケツをおとしたまま口を拭った。

「こたえろっ！」

胸ぐらつかんで引きずり起こした。

「オレをなにに使った？ 誰に頼まれた！」

ガクガクと揺さぶられても耳屋はなにも言わない。

あさってのほうを見たままだった。

「木島は『ゴミ』じゃなかった！ 奴よりもっとヤバいのがいたじゃねえか！ アンタ知ってたんだろ！！」

思い切り洗髪台に叩きつけた。

鏡が割れ、きらめく欠片が床に降り注いだ。

立ち上がった耳屋が、ネットリした目で俺を睨んだ。

こめかみから一筋、赤い線が顎へとつたっている。

「気がすんだか、ぼん」

「すむかよ」

「奴あ確かに第一候補じゃなかった。だが『ゴミ』だ。嘘はついてねえ」

「アンタの手帳、あのランクじゃ奴はAだった。Cからひとつ飛びにな！」

「それがどーした」

「どーした、だ？」

「テメェはどうやって『ゴミ』を見分けてんだ？ 気に入らない奴を片っ端から始末して
るのか」

「はぐらかすんじゃねえ、なぜ木島の奴を始末させた、いえっ！」

「いっただろ。奴が『ゴミ』だからだ。『街』はそう判断した。それだけだ」

「そんなのが理由になるかよ」

「オレたち家畜なんだ。くえと言われりゃ喰う、しねと言われりゃ死ぬ。理由なんぞ
ない」

「冗談じゃねえ、オレは殺し屋じゃない！ オレは！！……」

「『邪魔屋』やってる復讐鬼、か」

耳屋がグサリと吐いた。

「やめてもいいんだぜ」

「なんだと？」

「今やめれば、街は黙っちゃいない。当然だ。次はオマエが『ゴミ』だ」

「おどしてるつもりかよ」

「……必要ねえか。オマエは『ゴミ』への復讐だけで生きてる。やめりゃほっといても
くたばるさ。それともほかになにかあるんか」

ほかになにがある。

その言葉に返すものが、俺にはなにもなかった。

耳屋がタオルで頭を押さえた。

「手帳を出しとけ。リストはこうしてる間にも変わってる。座ってろ」

よろよろと店の奥に消える耳屋に何も言えないまま、俺はテーブルに広げられた新聞をみた。

群衆に刃物男、首相は無事

死者、重傷者合わせて3名

見出しが虚しく躍っていた。

第六章 偽りの青空（中編）

第六章 偽りの青空（中編）

あてどなく歩いた。

ここを出ようと思った。

何度も街のはずれまでいった。

その度に、足は未練がましく来た道を引き返した。

どうでもよくなっちまった。

何の為に『邪魔屋』を続けてきたのかわからなくなった。

ビルの間隙に見えるちっぽけな空が、イヤになるほど青かった。

アホみたいにつっ立って空を仰ぐ俺を、道行く奴らは見事にかわして過ぎてゆく。

いっそ誰か肩でもぶつけてくれれば喜んでかみついてやるんだが。

やっぱダメだ

今ならオレ、子犬にも殺られちまう

肉片になった木島を見て、いつも通り暗い悦びが身体じゅうに染み渡るのを感じた。

だが次の日、あの『ゴミ』が演説の観衆に乱入したと知り、脳味噌が瞬間に沸騰して一気に冷めた。

まんまとダメされた怒りもなんもかも、底無しの脱力感と共に足裏から流れ出していった。

俺は殺人狂だ。間拔けで、無慈悲な。

『ゴミ』どもとなんも変わらない。それが判っちゃった。

これから、どうする

なにすりゃいい

どこいきゃいい

答えなどあるはずがなかった。

見つからないまま彷徨っていた。

顔をおろすと、誰かがいた。

ミニスカートにブーツ、小さな身体を白いダウンに包んだ茶髪の女が、ポケットに手をつこんでこっちを睨んでいる。

ぎくっとした。

「あんた、ここでなにしてんの？」

「おまえ……」

泥水コーヒーのファミレスのバイトだった。

「バッカじゃない、歩道のど真ん中でぼけえ〜っと上なんか見て」

「カンケーねえだろ」

「邪魔よ、みんなの。どきなさいよ」

「みんなの？ 邪魔？ ハッ、ハハハッ！」

「なにがおかしいのよ」

「オマエほんっにおせっかいだな。長生きしねえぞ」

「勘定叩きつけて『殺されちまうぞっ!』って怒鳴って出てくような奴に言われたくないわよ」

「ガキとからむ気分じゃねえんだ」

「ガキじゃない! アタシこれでも高3よ!」

「相手してほしいけりゃ名前ぐらいいいな」

「小夜。小さい夜って書いて、サヨ。あんたは?」

一文字違いの、小夜子。

乾いた笑いが喉で凍りついた。

「.....ジャミー.....」

「?」

「邪魔な奴なんだろ、オレ」

今夜、夢を見るだろうな。

確実に。

第六章 偽りの青空（後編）

第六章 偽りの青空（後編）

なんでか知らないが、小夜は黙ったままてくてくと俺のあとをついてきた。

拷問だった。

顔ばかりか名前まで酷似した妹の亡霊が、どれだけ邪険にしようとしてつきまとってくる。

木島の奴が俺を呪っていると本気で思った。

奴だけじゃない。今まで俺があの子に追っ払った『ゴミ』どもの、ここぞとばかりにうらめしく騒ぎ立て、わめき、口汚く罵る声が背中越しにハッキリ聞こえた。

「うるせえ！！」

我慢できず振り返りざま怒鳴ると、小夜がきょとんとして俺を見ていた。

「……なにさ……」

棒みたいにつっ立った小夜の大きな目に、みるみるうちに涙の塊が溢れあがった。

「どなることないじゃん……アタシあんたが淋しそうだったから……なんかほっとけないから……アタシ……だから……」

幼稚園児みたいにヒクヒクとしゃくりあげる小夜の姿を見て、俺ははじめて慌てた。

「オマエに怒鳴ったんじゃねえ、なくなよ」

「なに……だ……ほか……ッシュン……いな……じゃ……」

「わかった、マジでわるかった、だから泣くな」

「……」

手をあわせペコペコしながら、気がつくまで真正面から小夜を見ていた。

俺はどんな顔してコイツを見ていたのだろう。

泣きやんだ小夜が、腫れて濡れた二つの瞳でこっちを見上げていた。澄んだ湖水のような目で。

「……怒ってる？」

「怒ってない」

「うそ、どなった」

「オマエにじゃない」

「じゃあ、なんで？」

「後ろの連中がウルサかったんでよ、つい、な」

「アタシしかいないじゃん」

辺りをキョロキョロした小夜が不満そうに呟いた。

「オマエ、こないだ俺に『変態か』っていったよな。ハズレだ」

「え？」

「俺は殺し屋さ。見境もなく殺しまくる殺人鬼だ。わかったらもう付きまとうな」

見上げる小夜の両肩を軽く揺さぶって、一歩二歩、俺はあとずさった。

「もう声なんかかけるなよ。殺されちまうぞ」

そのまま背をむけ歩きだした。背中が遠ざかってゆく。

「アンタ違うよ！ そんなんじゃないよ！ アンタ迷子だよ！ アタシとおんなじだよ！ わかんだよっ！！」

遠くから、小夜の絶叫がぶつかってきた。

「ジャミィ～！！」

……ありがとよ、サヨ……

ちょっとだけ立ち止まり眩いた。

第七章 秤の鎖（前編）

第七章 秤の鎖（前編）

街をこんな上から見下ろしたことはなかった。

見上げるだけだった空の端っこに自分がいる……

開放感より戸惑いの方が強かった。

「たまにやいいだろ、こんな眺めも」

「なんでこんなそこはいれんだよ、ジジイ」

「長生きするとよ、色々オマケがついてくんだ」

剥き出しのコンクリに胡座をかいた便利屋は、どうでもいいといった口調で酢こんぶをヒラヒラさせた。

◇

丸一日なんもせず街の端から端までうろついた俺は結局、余ったクスリを便利屋に返しにいった。

拾ったカネ交番に届けるガキじゃあるまいし、そんなもんとっととポイしちまえばいいと判っていたが、捨てるのも持ってるのもイヤだった。

怖かったのかも知れない。

便利屋は何もいわずに薬包を受け取ると、ちょっと付き合えと言って俺をここに連れてきたのだ。

この街で一番高い高層ビルの屋上。警備員は誰何すらしなかった。

『飼われてる』んだろ、たぶん、奴も。

「言った通りになっちまったな、坊や」

「なにがだ」

『片っ端から仕事するのが邪魔屋じゃねえ』って、あん時忠告した筈だが」

「……」

「手えだして、なあ〜んも考えずに殺っちまって、やり直しかなくなってからケツまづいて。どんだけ不器用なんだよ」

「っせえよ……」

「で、いくとこ無くなった挙げ句、ヤクぶらさげてノコノコ俺んどこ戻ってきた、と」

「わるいか」

「悪いね。『仕事』の痕跡は残さない、それが決まりだ」

「そりゃアンタの『仕事』だろ？ こっちにゼンブ押しつけんじゃねえよ」

「俺は手え貸しただけさ。アフターケアまでやる義理はないね」

「ここに連れてきたのは、じゃあなんなんだ？」

「気紛れさ。お代にゃ入ってねえ」

言い捨てた便利屋が、かぷっと酢こんぶをくわえた。

「広いひろいとおもってたけどよ、上から見るとこの街、大したことないな」

「ヒッヒッヒ」

「なあジジィ。『邪魔屋』って何なんだ。街のボディガードみたいなもんか？ それとも都

合よく使えばされる殺し屋なのか？」

手摺りに身体を預け、オレは煙草に火をつけた。

「しってんだろ、オレよりも。長生きしたオマケって奴だよ」

ちっこく座り込んでた便利屋の目が細まり、皺に埋もれた。

第七章 秤の鎖（中編）

第七章 秤の鎖（中編）

いってほしいんか

坊やの単純な頭でもわかるよう簡単に、よ

小馬鹿にした感じだったが、便利屋の皺だらけの顔は口調ほどふざけちゃいなかった。

皺の隙間から眼光が漏れ出てきた。

「ああ、オレのバカな頭でも判るよう簡単にな」

「馬鹿とはいっちゃいない。馬鹿に『邪魔屋』は務まんねえ。単純だ、とிட்டんだ」

「なにがちがう」

「オモシロけりゃ笑う。くだらなけりゃ怒る。痛けりゃ泣く。ダルけりゃ塞ぎ込む。腹が減りゃ喰うし、腹一杯になったら寝っ転がる。眠けりゃ何処だろうと寝て、凍え死のうが潰されようが気もつかない。畜生となんもかわんねえ」

便利屋の言葉が俺をバツサリ斬った。

「坊や。街ってのはヒトの集まりだ。誰もが自分に有利な条件を求め、安全が保証された場所を探す。どれひとつとっても同じモンはねえ。だのに何故、街は『意思』を持つんだ？」

「……わかんねえよ」

「いいや。坊やにゃ判ってる。耳屋の奴から『仕事』まわされた時からわかってた筈だ」

「……」

俺はあん時、思った。

誰かのいいように使われるのはゴメンだと。

でも……

「昔フロイトって学者がいてな、その弟子にエラく生真面目な奴がいたんだ。ユングってんだがよ、そいつが師匠の学説をコネクリまわして全く新しい説をひねり出したんよ。『集合的無意識』ってってな、ヒトの集団は意識せずに同じ考えを持つってゆう内容だった」

「しゅうごうてき……むいしき……」

「そうだ。だがよ、その無意識の合意が決まった方向へ動き出すにはトリガーが必要なんだ。誰かがバンッ！引き金を引いて、それで一気に溢れ出す。ダムが崩れたみてえによ」

そこまで話して、便利屋は次の酢こんぶをくわえた。

「坊やが感じてた違和感はな、その引き金ひいた奴のエゴよ。それが気に入らなかつたってだけの事さ。街はアイツを始末したがってた。それが必要だと判断した。そして坊やの背中を押した。それだけじゃ不満かい？」

「それじゃあ、オレを使って誰かを始末させたきゃ、うまいことそのシューゴーテキなんたらをくすぐってやりゃ、誰だって誰かをブツ殺せるって事じゃないか！？」

身を乗り出し、俺は便利屋に噛みついた。

第七章 秤の鎖（後編）

第七章 秤の鎖（後編）

無理だ、と便利屋が言った。

「学者100人集めても、街を思う通りに操ることなんて出来ねえ。『集合的無意識』ってのは単純な群衆心理じゃねえんだよ」

「そんなんでも納得できるか。ジジィ、知ってんなら教えろ！ オレに殺しをやらせた奴はだれだ!？」

締めあげてやろうと勢いこんで便利屋に近付いた時、ふっと足の裏から地面が消えた。

気がつくと屋上のコンクリにケツを落としてた。足を払われたのだと判ったのは少ししてからだった。

立ち上がった便利屋が、えらくデカく見えた。

「『邪魔屋』になって2年、か。ボンヤリ過ごすにゃ長すぎる時間だ。今までの『仕事』の中で、坊やなりに考えたこともあるだろう。わしたち裏の人間はな、みい～んな同じ事を考えとる。街ってなんなんだ、とな。そして……」

「そして？」

「考えるのをやめる」

「はああ？」

腹の底からすっとなきょうな声が出ちまった。

「なんだよそりゃ？ イミフじゃね〜かよ！」

「それが答えじゃ。正体の見えない大勢の人間が、ハタから見りゃよう判らん同意の上で、それでも全体としての利益を得ようと表や裏を動かす。それが『街の意思』じゃよ。いくら考えようがナンも出てくるわけなからうて」

「そんな……そんなワケわかんねえ理由でオレは……」

身体じゅうの力が抜けちまった俺の頭に、便利屋がひからびた手をのせた。

「いいか。俺たちやみんな、訳あって裏に堕ちたハンパもんだ。街に飼われることでしか生きてけない。だがよ、どう生きてくかまで街は面倒見ちゃくれない、みんな勝手に決めてんのさ。坊や、お前は どうしたいんだ？」

「俺……オレは……」

顔をあげてみた。

遠くまで抜けた空。サイレンの音が遠く薄く響いてきた。

ぴくんと身体が動いてしまう。

「なんかあったらしいな。行きたいかい」

「……」

「おい坊や」

「……行く。オレは坊やじゃねえ、『邪魔屋』だ」

「そうかい。じゃ、いきな」

立ち上がってみた。少しだけ身体が軽かった。

そのまま歩き出す。後ろで便利屋が喚きだした。

善悪などねえ、正邪なんぞクソくらえ

ワシらは鎖じゃ、街の秤を繋ぐ鎖じゃ

もうへたれんじゃねえぞ、忘れんな！

口元がひきつるのを感じた。

へっ……元気なジジイだ

第八章 傷鏡（前編）

第八章 傷鏡（前編）

「家族まるごと、だってよ」

カビが臭ってきそうな散髪屋のソファで、俺はふんぞり返ってコーヒーを飲んでいた。

味と香りだけは一級品だと認めてやるが、コーヒー以外のシロモノは木曜の朝に袋に詰めて捨てちまったほうがいいようなガラクタばっかだった。

「このあいだの事件、か」

耳屋が床を掃きながら呟いた。

「隣街のことだ。俺らにゃ関係ない」

「いってみただけさ。ジジババと父親、母親、小学生が一人。赤ん坊までミンチにされたらしいじゃねえか」

「ったく、ひでえもんだ」

「隙だらけじゃんか。あっちの『邪魔屋』はパチンコでもやってたんか？」

「先月くたばったよ。この街で」

「……そうかい」

「くだらん喧嘩だったらしい。肥溜屋が秩父の山の中に埋めた」

「俺んときも奴がやるのか？ それとも水草屋に始末させるんか」

耳屋がむくりと顔をあげた。

「くたばったあとのことなんぞ、お前に何の関係がある。生きてる間は働け。死んだら気に病む脳みそもなくなる」

「働くさ。俺は『邪魔屋』だからな。アンタの情報をじっくり吟味して、よ」

「『仕事』の量が減ってねえか、ぼん。評判落ちてるぜ」

「しるか。評判で喰ってるわけじゃねえ」

「飼い主はな、エサ削ることだって出来んだぞ」

睨む耳屋の視線を無視してカップを置いた。

「じゃバイトでもすっか。今は時給800円くらいだろ、まあそう悪くもねえや」

「.....オマエ変わったな.....」

相変わらず抑揚の無い声だったが、耳屋の言いぐさにはどこか、いつもと違う色があつた。

「なんも。なんもかわんねえ。でもよ」

「なんだ」

「『ゴミ』はよ、ちゃんと分別しなきゃな。アレもコレもいっしょくたに捨てちまうと.....」

「捨てちまうと？」

「燃せなくなっちまう」

ふ...

ふへへっ...

へっへっへっへっ

気持ち悪い声で耳屋が笑いだした。

「なにわらってんだよ」

「まあいい。そうやって生きてく奴らもいる。せいぜい頑張んな」

「あんたもな」

耳屋を一瞥して立ち上がった。

「燃える『ゴミ』は月曜だけにしろよ。服が臭くなる。手もな」

「やっぱり変わったよオマエは。あとで手帳を見とけ、Cランクに新入りがいる」

店を出た俺の前に、厄介事が立っていた。

第八章 傷鏡（中編）

第八章 傷鏡（中編）

ひでえ臭いだった。

ホームレスにしちゃ若過ぎる男が、ヨレヨレになって店を覗いていた。

「だれだ、おまえ？」

「……」

「そこで突っ立ってなにやってんだ」

「……」

「メシならねえぜ。よそ行きな」

「……しってるか……」

「？」

「おまえしってるか」

「なにをだよ」

「ころしてくれんだろ」

「ああ？ なに言ってんだ」

「ころすんだろ、そいつにいえば。しってんだろ」

こいつ……

「おまえがそうか。ころしてくれよ、アイツぶっ殺してくれよ、なあ、いいだろ」

酒臭い息を吐き散らし、ふらりと手をあげたそいつはアスファルトへ顔面ダイブした。

これでも結構図太いつもりだったが、さすがに慌てた。

そりゃそうだ、何処の誰とも判らない奴がいきなり目の前で棒みたいにぶっ倒れりゃ、便利屋のジジイだってキンタマひっくり返るだろう。

とりあえず抱え起こしてみた。

鼻から盛大に血を吹き出しながら、そいつはまだ呟いていた。

殺ってくれよ

なあ

たのむよ

どうしようもないまま、そいつを肩に担いで耳屋の店に入った。

「なんだ？ なにしに戻った。そいつは何だ？」

いつもは抑揚の無い耳屋の言葉が、この時ばかりは何だかうわずって聞こえた。

「わかんねえよ。『殺ってくれ、やってくれ』言いながらいきなりブツ倒れて、しょうがねえから担ぎ込んだんだ」

「とにかくそこに寝かせろ」

応接セットのソファにタオルを敷いた耳屋が頭と肩を持ち上げ、足を抱えた俺と二人でウンセと掛け声かけながら男を横たえた。いい気なもんだ、ぐうぐうイビキかいてやがる。

「こいつは……」

男を見下ろす耳屋の顔が険しくなった。

「おっちゃん、知り合いなのか？」

「アホ。さっき話してたじゃねえか、隣町の一家惨殺事件」

「おおよ、それが？」

「コイツ生き残りだ。あの一家の長男坊さ。間違いねえ」

「なんだって」

耳屋の言葉が胸の奥をがりっと引っ掻いた。

「こいつが……なのか？」

「ああ。昔のぼんとおんなじだ、酒臭えとこまでな。ウワサをすればなんとやら、か。皮肉だな」

よく見ると俺より若かった。

顔の節々に刻まれた深い皺が、まるで傷跡のように見えた。

第八章 傷鏡（後編）

第八章 傷鏡（後編）

後ろでもぞもぞと身を起こす気配がした。

「目えさめたか」

棚に一個だけ置いてあったビールジョッキにタップリ水を入れてテーブルに置いてやった。

「飲みな」

「……」

少しの間ジョッキを眺めていた男は、やおら掴むとゴビゴビと水を食った。こぼれるのもおかまいなしに一息で飲み干すと、太い息を吐いてジョッキをテーブルに置いた。口元を乱暴に拭う。

「スッキリしたか。じゃ、出てけ」

俺は背を向けたまま手をヒラヒラさせた。

「アンタが俺を拾ったのか？」

「……」

「礼、いわなきゃなんないな」

「……」

男の口調は歳に似合わずしっかりしていた。

口をききたくなかった。

寄り合いだとか言ってとっとと後始末を押しつけ店を出た耳屋の奴を腹の中で呪った。

「オレ、なんかいったか」

「.....」

「なあ、なんかいえよ」

俺はゆっくりと振り返った。

男と目があう。

何故だか、何処かに痛みが走った。

「おいガキ。まっ昼間から酒かっくらって、ひとんちの店の前でブッ倒れて、介抱までしてもらって『口きけ』だと？ ざけんじゃねえぞ」

目に力を込め男の視線をねじ伏せた。

「子供はじゅーすでも飲んでろ。わかったらさっさといけっ！」

ねじ伏せられた下から男の視線が押し返してきた。

「っるせえ！ テメエになにがわかる！ 家族みんな殺されちまったオレの何がわかるってんだ！！」

吠えながら男が立った。

「オマエみたいにチンタラ生きてる糞野郎がよ、エラそうに言いやがるんだ！ 『忘れろ、あれは事故だ』って.....忘れられるわけねえだろがっ！！ どこまでいったって憑いてくんだよ！ 家族が.....あの日見た光景が..... テメエにわかるかっ！ ああっ！？」

テーブル押し退けて出てこようとする男の髪をわし掴みにして、そのまま叩きつけた。

二度、三度、四度……

十回しないうちに男はぐずぐずと崩れ落ちた。

おとなしくなった男に、俺はその日初めて優しい声で語り掛けた。

「オマエ、これからどうしようってんだ。死ぬまでそうやって喚きながら世のなか呪って生きてくか？ やめとけ、今ならまだ間に合う。忘れろ」

自分の言葉が酷くしらじらしく聞こえた。

第九章 停止線（前編）

第九章 停止線（前編）

「うらむぜ、おっちゃん」

「なんのことだ」

「とぼけんな。あのガキ俺に押しつけたのは何かの嫌がらせかよ」

耳屋が帰ってきたのは、とっぷり日も暮れ晩飯の時間になろうかという頃だった。

看板の電気を消し、やる事もなく店んなかブラブラしながら耳屋の帰りを待っていた。

『ゴミ漁り』に出ようとしたが、店の鍵を預からなかったのを思い出した。

何もせず自分と向き合う時間。

昼間のことがなけりゃ、いつも位の苦痛しか感じなかったろう。

「気がついたか？ ぼん」

「なにをだ。なんも感じねえよ」

表情は消したつもりだった。

「カッコつけてんじゃねえ。オマエの昔話にあの小僧を絡めたんじゃない。アイツ『邪魔屋』のこと知ってやがった」

「『殺ってくれ』って、アレか。ただの寝言さ。ここがアンタの店で、俺が居るって判っててきた訳じゃねえだろ」

「ここに来たのは偶然だろうが、少なくとも『殺人者を殺す誰かがいる』ってのをどっかで聞いてたから、ベロベロに酔っぱらってもあんな事を口走ったんだろ」

「それで？ なんか都合悪い事でもあるか？」

「どアホ。俺たち裏の人間なんだ。表に知られちゃ『仕事』にならんだろが」

「俺は別に構わないがな」

ばさっ

耳屋が手にしていた週刊誌をソファに放り出した。

「あのガキを探れ、ぼん。情報の出どころを聞き出すんだ」

「ああ？ なんで俺がそんな面倒臭いこと……」

「ツベコベぬかすな。事と次第によっちゃオマエ、『邪魔屋』をクビだ」

「は？」

「街が殺し屋を飼ってるなんて事が公になったらタダじゃすまん。始末されるぞ」

.....

「.....認めやがったな」

「なにをだ」

「『邪魔屋』が街に雇われた殺し屋だって、よ」

滅多に表情を変えない耳屋の顔が引きつった。

「いいぜ。やってやる。今ポロッと漏らした本音に免じてよ」

「.....」

「始末されるのが怖いんじゃない。ゴミども殺すしか能の無いオレが、紛いなりにも二年間生きてこれた。それで充分だ。いらねえんだよ、オレには。明日なんてもんは」

「ぼん……」

「ネットを探っとけ、耳屋。俺は奴を捜す」

言い捨てて店を出た。

五月の闇。

夜風はまだ冷たかった。

第九章 停止線（中編）

第九章 停止線（中編）

3日後に奴を見つけた。思ったより早かった。

ペロペロに泥酔したガキが毎晩、どっかの飲み屋街で喧嘩してりや噂にならないほうがおかしい。

ゴミ捨て場にうずくまった男は、傷だらけの顔で俺を見上げた。

「……だれ……だ……」

「覚えてねえか」

冷たく見下ろしながら、俺は強烈な既視感に襲われていた。

「しるか……てめえなんか……」

「立ちな。聞きたいことがある」

「っるせえ、ほっとけ……」

「たてよ。手えかせ」

「くるんじゃねえ！！」

がぱっと立ち上がった男が腕を振り回してきた。大振りのパンチを余裕でかわし、右足のつま先を鳩尾に蹴り込んだ。ぶっ倒れた男が盛大にゲロをぶちまけ始める。

「なんも出来ねえガキが、酒飲んでキャンキャン吠えるだけか。みじめだな」

「……」

「おきろ。胃袋ハレツするほど蹴っちゃいねえ。俺のヤサにいくぞ」

抵抗する気配のない男の腕を掴んで立たせようとした。グダグダと崩れ落ちる。

髪の毛をわし掴みにして引っ張り上げた。

「……オマエ臭えんだよ……」

そのまま引きずり歩きだした。

◇

服ごとユニットバスに叩き込んで、湯と水を交互にブツかけるのを10分ほど繰り返したあと、シャワーヘッドで頭を軽く一発叩きバスルームのドアを閉めた。

6畳ぼっちの俺の部屋に異臭が充満していた。

西日しか差さない窓も換気じゃ充分役に立つ。ガラリと開け放ち、床に転がしたままだったバーボンの瓶を拾って窓辺に腰掛けた。向かいに流れる川面に映ったネオンを眺め、ひとくちあおる。

すぐ隣りに住む耳屋に感づかれてないかに注意を向けていた。

30分もすると、バスルームのドアが開いた。ブリーフ一枚の男が出てくる。

頭からタオルをかぶっていた。

ヨロヨロと歩いてくると、俺の前にあぐらをかいて座り込んだ。

「思い出したよ。アンタだったのか」

少しは酔いが醒めたらしい男が、おずおずと話しかけてきた。

「また世話かけちまったな」

「オマエ、名前は？」

「きりはら……桐原実。アンタは？」

「ジャミーって呼べ」

とっさに小夜に名乗ったテキトーな名が口を出た。意外と気に入っていたのかも知れない。

桐原が顔をしかめた。

第九章 停止線（後編）

第九章 停止線（後編）

「そんなにブツ殺したいか」

「殺る。俺は絶対、アイツを殺す」

「どこにいるかもわかんねえ野郎をどうやって殺すんだ？」

6畳間の真ん中で、俺は桐原とさし向かいであぐらをかいていた。

バーボンは俺だけ飲んだ。これ以上壊れてもらっちゃ話も出来ない。

桐原は答えなかった。

「なあミノル、オマエ『殺ってくれ』って散々喚いてたけどよ、んなこと一体誰に聞いたんだ？」

「あれか。しらねえよ」

「あん？」

「まえにネットで見たんだ。『被害者が頼めば犯人を殺ってくれる奴がいる』って。でもよ、あんなのがせだぜ。しんじる奴がアホだ」

「そのアホネタを言いながらブツ倒れたんだぞ、オマエは」

俺の言葉に桐原が口籠った。

「……自分で殺る……」

「？」

「アイツは必ず捕まる。ニッポンのケーサツは優秀なんだ。捕まったその時……オレが……」

「やめとけ」

俺は冷たい声で言った。

「オマエみたいなガキになにができる。そのゴミ野郎と仲良く捕まるのがオチだ」

噛みついてくるだろうと思ったが、桐原は不敵な笑みを浮かべて俺を見た。

「オレ、けっこう強いんすよ、ケーサツに」

「あん？」

「無線だのネットだの、奴らの動きなんて幾らでも判る。だから簡単なんだ……カンタンなんだ……」

桐原の目がすわっていた。酔いとは違う狂気が宿っていた。

「ケーサツはさ、犯人しか見ちゃいない。護送の時は特にそうだ。誰も予想なんかしない。フラッシュ浴びて犯人連れ出す花道でよ、いきなり誰か殺されて……慌てるさ。注意はヨソいっちまう、そのときがチャンスだ」

ぞっとした。

「オマエ本気か？」

「ああ」

「てめえの復讐の為にだれか殺すってのか！？」

「しらねえよ。しらねえ誰かが俺の家族、助けてくれたってのか？ なんもしなかった。タダの役立たずじゃねえか。だったら役に立ててやるだけさ」

言い返そうとして言葉を搜した。

その通りだとか、そんな言葉しか思い浮かばなかった。

桐原が立った。

「アンタにやまた借りが出来た。出来たけどよ……邪魔すんなよ」

そのままバスルームに戻ると、桐原はビショビショの服をひと絞りして身につけ部屋を出た。

俺には止められなかった。

第十章 黄昏に問わず（前編）

第十章 黄昏に問わず（前編）

ヤバい状況だった。

あの日の翌朝、俺は耳屋を叩き起こして奴をリストに追加させた。

桐原 実

無職

住所XX県〇〇市（注：所在不明）

電話0X-XXX-XXXX（注：現在不通）

特徴身長170cm未満、痩せ型、釣り目、顔に傷多し、服装は……

SA

滅多にいないスペシャルAとして、ありったけの情報網を使わせ耳屋に奴の動きを追わせた。

それにもかかわらず、桐原の姿はあの日を境にふつつり消えてなくなった。

『ゴミ』の捕捉率なら98%以上だと豪語してた耳屋の情報網は、あれから1週間たっても奴の足跡ひとつ見つけられなかった。

「街がスンナリあの小僧を『ゴミ』認定したまではよかったんだが、どうもいけねえな」

耳屋が苦い顔してコーヒーを啜った。

「どこつついても見つかりゃしない。ま、ぼんの首がつながったのはいい事だ。悲観することばかりじゃねえさ」

桐原が口走っていた『街の殺し屋』の件は、ただのネット上の噂、都市伝説の類いとして問題無しとされたらしい。

「また『街の意思』か。いっとくけどよ、オレはアイツを『始末』する気はねえぜ、おっちゃん」

「あんだと？」

「この二年でS Aを扱ったのは3回だけだ。そのうち2回をどーしたか、忘れちゃいねえだろ」

「一人は逃げ場無くして喫茶店に籠城、S A Tにとっ捕まった。もう一人は張り込み中の警視庁特捜班に駅のホームでフクロにされた」

「どっちもサツにソッコー『捕まえさせた』。悠長にストーキング仕掛ける暇なんて無かったからな。今度もそうするつもりだ。『邪魔屋』はゴルゴ13じゃねえからな」

睨むでもなく俺は耳屋を見た。

「そりゃ結構な話だが、あと1つをどうしたか。オマエこそ覚えてるよな」

「.....国外逃亡。消息不明。実際にゃ水草屋が日本海溝の底まで沈めちまった.....」

「手配したのはオマエだったよな。別れ際のイッパツかませてよ」

「.....」

「オマエが直接、手を下すのを認めた。あれが今んとこ最初で最後だ。今度もそうならないとは限らねえんだぜ」

「ミノルは『ゴミ』じゃない。アイツは被害者なんだ。訳もなんもなしに家族みんな奪

われた。これ以上奪われていいモンなんかねえ」

「だといいがな」

醒めた声で耳屋が言った。

第十章 黄昏に問わず（中編）

第十章 黄昏に問わず（中編）

一家惨殺事件の犯人が捕まったのは、あれから更に一週間が過ぎてからだった。

ファミレスの壁掛け液晶テレビが、そのニュースをデカデカと流していた。

世間の注目度も高いのだろう。ワイドショーの三文レポーターが悲痛そうな顔を装いながら嬉々としてマイクに唾を飛ばしていた。

桐原の行方が掴めないままイライラと泥水コーヒーを啜っていた俺は、ヒステリックにまくし上げるレポーターの声を聞いて顔を跳ね上げた。

XX署前からの中継か

俺の縄張りじゃねえ

護送のタイミングはいつになるか考えを巡らせていると、呼びもしないのにウェイトレスが来た。ドボドボとポットの泥水をつぐ。頼んでねえだろと怒鳴りつけようとして、喉の奥がでんぐり返った。

小夜だった。

「おっオマエ、なんでここに」

「前んどこやめたの。店長がスケベでさ、ボーナスだからイッパツやらせろって。タマゲリして飛びでちゃった。もちボーナスは貰っといたケド♪」

「それじゃオヤジ狩りだろ」

木島という名の『ゴミ』を始末した時、色々あって目的を喪っていた俺に声を掛けてきた女。

あの時は、掛けられた言葉に少しだけ救われたような気分になったが.....

死んだ妹にうり二つのこの女を俺は避けた。行きつけのファミレスも今の所に変えた。

もう二度と会うこともないだろうと思ってた。

思ってたんだが。

「なにあってんのよ！ セーとーぼーえって知ってんの、ジャミー」

「気安く呼ぶんじゃねえ。『声かけるな』って言っただろが」

思い切り不機嫌なツラで睨むと、急に真面目な顔になった小夜が囁くような声で言った。

「.....ヘンな奴、みたの.....」

「？」

「バイトあがりにさ、家の前のマンホールがいきなり開いて、きつない男が出てきたの。アタシこわくなって逃げちゃったんだけど、なんか悪い奴だったらヤダなって。アタシ暇そうだから、一緒に見に行ってくんないかな？」

なんで俺が.....と言いかけ口を止めた。

「オマエんち、どこだ」

「いつてくれるの？」

「今すぐだ。バイト抜けてこい、急げ！」

剣幕に押され小夜がすっ飛んでった。

俺はもう一度テレビを睨みつけた。

第十章 黄昏に問わず（後編）

第十章 黄昏に問わず（後編）

小夜の住むボロアパート前のマンホールを開け、中に入った俺はようやく合点がいった。
見つからない訳だ。

桐原はずっとここで、息を潜めて待っていたのだ。

ポータブルテレビと壊れかかったノートパソコンの配線が、マンホールの蓋の穴から近くの電柱に繋がっていた。

考えやがったな

下水道か

「ジャミー、アイツしってんの？」

穴底から出てきた俺に、小夜は不思議なものでも見るような目を向けてきた。

「ミノルは必ずあの警察署に行く」

ここには戻らない。パソコンの傍受記録を見て確信した。

護送は1時間後。アイツはもう向かってる、今日、殺る。

「ミノルっていうんだ。警察って……アイツなんかヤバいことすんの？」

「関係ねえ。オマエは帰れ」

「アタシが教えてあげたんだよ！ ねえ教えてよ、アイツなんなのよ！？」

いいから帰れと小夜を怒鳴りつけ、俺はタクシーを拾いに走り出した。

◇

別の街の、別の所轄。

その街の邪魔屋へのツナギは間に合わない。耳屋はよその街に無関心だ。

自力で止めるしかなかった。

車から降り闇雲に走り続けた。

いた。

夕日に染まった群衆の中に埋もれて。

警察署前ではマスコミのフラッシュの中、今まさに犯人が連れ出される所だった。

近づく俺に桐原はすぐ気づいたようだった。

薄汚れてるが目立ちもしない、どこにでもいそうな青年がサッパリとした顔で笑った。

いい顔、だった。

「よせ」

「やっときた、この日が。見てろ、殺るぜ」

「よすんだ」

「ハラえぐってやる。目え突いてもいい。苦しんで死ぬ所.....どこがいいと思う？」

野次馬の群れはみんな夢中で前を見ていた。

誰も俺達の会話を聞いていなかった。

桐原自身が何も聞こえていなかった。

俺の声も。

「コイツ声がデカそうだ……コイツが喚いてる間にオレは……」

大型のナイフをそろりと抜いた桐原が、前に立つ男の背に切っ先を当てた。

手を伸ばせば届く距離だったが、とびかかる、ナイフをつかむ、押さえつける、どれも間に合わない。

ひと押しで大型ナイフは楽々と前の男の背を貫くだろう。

「やめろミノル。オマエまで『ゴミ』になるな。かえろう、かえろうぜ、な？」

「……」

「頼む、オレにやらせないでくれ、たのむからっ！！」

答えぬまま桐原がナイフを軽く引き、真っ直ぐに……

！！っ！

……ナイフが止まっていた。

刃が微かに引かれた刹那、俺の手は勝手に動いていた。

右手を引くと、極細の金属針がぬるりとミノルの後頭部から抜ける。

左手はナイフを取りあげ懐にしまっていた。

そのまま背を向けた。崩れ落ちる音が聞こえた。

先程までと違うざわめきが背後に広がるのを感じながら、振り返らず歩いた。

てくてくと。とぼとぼと。

なんで

なんでなんだよ

なんでこうなるんだ、このどアホウが

両目を焼く落日が、流れ落ちた俺の問いを蒸発させていった。

第十一章 錆びた向日葵（前編）

第十一章 錆びた向日葵（前編）

いつもの『ゴミ漁り』。

ガキと年寄りばかり目につく街中を流していると、通りの角にもたれていた人影が声を掛けてきた。

「なんだ、ちゃんと『仕事』してるじゃない」

「ゴキブリ女か」

「今度いったら南氷洋に沈めるわよ」

キッと睨み、水草屋が壁から背を離した。

「稼ぎそびれたわよ、このあいだは」

「……」

「どうせなら、いつかみたいに船に乗せてから殺って欲しかったわね。あんな『ゴミ』でも街と取引すれば幾らかにはなるんだし」

「……」

「どしたの？ いつもみたいにキャンキャン吠えないのね」

「……気がすんだか」

「え？」

「どけよ」

そのままシカトして歩きだした。

脇を擦り抜けぎわ触れてきた手を思い切り払った。

細い眉を歪めた水草屋が、肩をおさえ意外そうな顔で俺を見た。

「機嫌、悪そうね。いつも『仕事』のあとはルンルンしてるくせに」

「『仕事』じゃねえ。止めたかった。でもアイツは『ゴミ』になっちまった」

水草屋の暇つぶしにつき合う気は無かった。

口をきくのもおっくうだった。

歩きだした。

「じゃあ『仕事』の話しましょう」

払われた腕をだらんと垂らしたまま、水草屋が並んで歩いてきた。

「私からのオファーよ。報酬は弾むわ。耳屋にも話をつけてある、『ゴミどもがおとなしくしてる間だけなら』って条件付きだけど」

「『邪魔屋』はよ、殺ししか出来ねえんだぜ」

「その殺しにウンザリしてるんじゃない？ リハビリが必要よ、アナタには」

「何でオレがアンタにリハビリしてもらわなきゃならない？ だいたい邪魔屋は大嫌いだったんじゃないのかよ」

「ビジネスに私情は持ち込まない。だから今まで生き残ってこれた」

足を止め、水草屋の端正な顔をじっと睨んだ。

「オレに何をさせたい」

「ある男のアシスタント……っていうのは表向き、実際のところは護衛よ。今、ウチの会社はソイツが殺されるとマズいのよ。なのにソイツは殺されるような真似を好んで

やってる」

「アンタ会社なんかやってんのか？」

「これでも輸入商よ、私」

「それで副業が死体処理か。で、何者なんだ？」

「ウチの顧問弁護士」

水草屋がもう一度、眉を歪めた。

第十一章 錆びた向日葵（中編）

第十一章 錆びた向日葵（中編）

レンガ作りの古めかしい建物を二階へ上がり、松本通商とだけ書かれた味も素っ気もない看板が掛けられたドアをノックした。

「どうぞ」

中へ入ると、立ち上がった水草屋が妙に生真面目な顔をしたまま近寄ってきてオレを紹介した。

「さっき話したガードスタッフよ。暫くは貴方についてもらうから、そのつもりでいてちょうだい」

水草屋の対面で、こちらに背を向けソファに腰を降ろしていた男が立ち上がり、ゆるりとオレのほうを向いた。

オレより首ひとつ小さい背丈。

細い目、細い鼻筋、細い口、ひよろ長い手足。

テレビの矢追純一スペシャルで見たような顔がこっちをじっと見ている。

目で見えそうな警戒のオーラがメラメラと押し寄せてくるのを感じる。

「……若い、ですね。思っていたよりずっと若い」

身にまとった雰囲気とは裏腹に、男の声は穏やかで理知的だった。

「県央総合警備保障のSSチーム所属、御島と申します」

水草屋との打ち合わせ通り、俺は作り物の名刺を差し出した。

「.....ジャクソン.....御島？」

「父が米軍の将校でして。母は日本人です」

「お父上の所属は？」

「エアフォース。横田ベースで勤務しています」

「顔立ちはハーフに見えませんね」

「身体だけは父譲りです」

「なるほど」

いかにも弁護士らしく詮索を入れようとしていた男は、見上げる俺の体格に納得したように言葉を止めた。

「県央総合警備保障と言えば国内最大手のセキュリティサービスですね。心強いです。よろしく」

表情を変えぬまま、男も名刺を出した。

弁護士 佐竹啓介

03-XXXX-XXXX

この事務所の看板並に素っ気ない名刺だった。

俺はポケットに名刺をしまい、もう一度男の顔を見た。探るような目つきは変わらない。

「貴方は今日から、そこに居る彼女の依頼で私の警護について頂きますが、その前にひとつ聞いておきたい事があります」

「何でしょう」

「悪魔はいる、と思いますか？」

不意打ちのような問いに、とっさの答えが出てこなかった。

水草屋を見たが知らんぷりで天井を見ている。

「……ヒトの心に、という意味なら、ええ、たぶん……」

俺は言葉を濁した。

第十一章 錆びた向日葵（後編）

第十一章 錆びた向日葵（後編）

佐竹は、俺の返答に唇を薄く引きつらせた。

「心、ですか。あやふやで曖昧な表現ですね。だが少なくとも貴方は素直だ。『そんなものはない』と言える者よりはね」

佐竹が水草屋のほうを向いた。

「いいでしょう、この方なら。ただし警護は明日から御願います」

「? どういうこと」

「これから例の被告に面会がありますので。ウルグアイの取引先との件は、後ほど」

軽く目礼し佐竹は事務所から出ていった。

残された俺達はどちらともなく向かい合った。

ぷっ

吹き出した水草屋がクツクツと笑いだした。

「スーツ似合うじゃない……フッフッ……ジャクソンだって、なに、それ……アッハッハッ……」

「偽名なんざなんだっていいだろが」

あの妙な顔、さては笑いを堪えてやがったか

埋めるぞこのメスガッパ

「いい加減に口、閉じな。マジで始末するぞ」

「笑わせてくれた分は追加料金にしとくわよ。なんでハーフなの？」

「そんな風に名乗ってんだ、最近な」

ジャミーがどんな名前の愛称か。気がつくとなんなことを考えていた。

どうでもいいが、偽名は少しでも馴染みのあったほうがいい。

ひとしきり笑ったあと、いつもの冷たく冴えた顔に戻った水草屋が腰に手を当てこちらを睨んだ。

「追って」

「今から？ ジョーダンだろ」

「おおまじめ。ていうか今、この瞬間だってヤバいのよ。敵が多すぎるの、あの男は」

「だったら契約切っちまえばいいじゃんか」

「それが出来ればね。あれ程海外ルートに詳しい奴はちょっといないの。アイツが消されたらウチの取引の半分は海の藻屑よ。こんな小さな会社、ひとたまりもないわ」

「ツライもんだな、経営者は」

「邪魔屋は気楽ね、個人営業で」

どこに持ってたんだか、魔法のようにマルボロを取り出した水草屋が一本くわえて火をつけた。

深々と吸い込んで天井を仰ぐと、ゴジラのようにドバツと煙を吐き出す。

「行き先は判ってる。東京拘置所」

「なんだ、『ゴミ捨て場』じゃねえか」

「そうよ。アイツが面会にいった相手、誰か知りたい？」

「どーでもいい」

「この間の一家惨殺事件の犯人、片桐猛」

聞くなり身体じゅうがこわばった。

第十二章 脣菩薩（前編）

第十二章 屑菩薩（前編）

てめえ

なんのつもりだ

口から漏れるように言葉が出た。

水草屋はじっとこちらを見ていた。

観察しているようだった。

「なにか問題でも？」

しゃあしゃあとぬかしやがった。

相手が女だということも忘れ、俺は水草屋の胸ぐらをねじり上げた。

「知っててオレをアイツの護衛につけたのか！ このクソアマッ！！」

思い切り床に投げつけた。

普段ならモデル並の肢体が、潰されたハエみたいに床のタイルに貼り付いた。

反吐が出るほど醜くかった。

「冗談じゃねえ！ あんな糞、刺されようがミンチにされようが関係ねえ！ オマエの会社
なんぞ知ったことか！ とっとと潰れちまえ！！」

「……」

「ミノルはなあ！ ミノルはそのカタギリとかいう『ゴミ』のせいで、なんもかんもなく
したんだぞっ！ それを弁護だどっ！？ ふざけんなっ！！」

オレは吠えた。

あとからあとから、言葉は雪崩をうって溢れ出た。

「ミノルは……アイツはあの『ゴミ』殺っちまおうとして……それでオレはアイツを……」

潰れたままだった水草屋がすっと立ち上がった。そばまで来ると手を上げた。

がしっとオレの頭を掴む。

氷のような顔だった。

「甘ったれんじゃないわよ、クソガキ」

「……あんだと……」

「佐竹も私もビジネスなのよ。アンタもね。同情だのなんだの、そんなものがなんだっての。黙って聞いてりゃいい気になって。アンタその『ゴミ』殺ってメシ食ってんでしょうが！」

アタマ掴んでた手が目の前で拳になり、オレの喉に叩き込まれた。

不意を喰らってゲハゲハ咳込んでると、追い打ちのように水草屋の細い指が両目にめり込んできた。

「立派なメンタマね。でもなんも見えてない。いらないでしょ、こんなの」

ズブズブと指が眼架にめり込んできた。悲鳴をあげて腕を払おうとした。

嘘みたいに水草屋の細腕は俺の手を弾き飛ばした。

「やめろお！ ブス！ メスガツパああ～！！」

ありったけの罵声を浴びせながら俺は水草屋の腕を掴んだ。

握りしめようとした刹那、しなやかな指が眼架から外れた。

顔を覆ってひざまずいた俺を、遙か高い所から水草屋が見下ろしていた。

第十二章 脣菩薩（中編）

第十二章 屑菩薩（中編）

「アンタ見てると、アイツを思い出すよ」

「アイ……ツ？」

「アンタの前の『邪魔屋』。熱くるしくて、目障りで。でもいいオトコだった……」

ひとのメンタマ抉りだそうとした女が、少女のような面持ちで遠くを見る顔になっていた。

「……まさか惚れてたなんていうなよな」

「惚れてたわよ」

何の躊躇いもなく水草屋が言った。

「ソイツの名は？」

「『邪魔屋』に名前なんてない。アンタもそうでしょ」

「いえよ。目玉取られそうになったんはそれでチャラにしてやっから」

「口だけは達者ね」

水草屋が横を向いた。

「九条 誠」

「それが前の『邪魔屋』か」

「ええ」

「今どーしてんだ、ソイツ」

「眠ってる。海の底で」

俺は目の痛みも忘れ水草屋を見た。今まで見たことのない顔だった。

「アンタが始末したのか」

「お喋りは終わりよ」

水草屋が手をヒラヒラさせた。

「忘れないで。『街の裏』の住人はね、表の連中の何十倍も背負ってるの、いろんなものを。それでも生きてる。表のアホどもみたいにギャアギャア喚くだけの奴はいらないのよ」

涙と鼻水を拭い立ち上がった。

「東京拘置所、だな」

「よくできました。さ、早く」

クソオンナがドアを指差した。とっとと行け、と。

「ひとつ、いいか」

「？」

「松本ってアンタの名前かよ」

「看板のことね。あれは前の社長の名。あたしじゃない」

「アンタの名は？」

「言ったでしょ。『街の裏』の住人に名前は無いの」

少しだけ睨みつけたあと、俺は事務所を後にした。

◇

「あなたは……」

佐竹は少し驚いた顔で俺を見上げた。

拘置所前で佐竹を待っていた。中に入る気にはなれなかった。

関係者だと言えば受付の辺りまでは行けたかも知れなかったが、試そうとする事すら忌まわしかった。

「やはりすぐ付いて欲しいとの依頼でしたので」

「そうですか。心配症ですな、あのひとも」

「どういった弁護なのですか？」

自分の口調が白々しくならぬよう注意しながら聞いた。

「ニュースで見たでしょう。この間の一家惨殺事件。あの被疑者です」

「被疑者？ 犯人ですよ」

「判決がでるまでは被疑者です」

佐竹の口調は岩のようだった。

第十二章 脣菩薩（後編）

第十二章 屑菩薩（後編）

「犯罪者にも人権というやつですか。ご立派ですね。それとも弁護士としては当たり前なのですかね」

うわずりそうになる声を抑え込んだ。皮肉な口調までは抑えられなかった。

「人権、とは何だと思えますか、御島さん」

「その呼び方は勘弁して下さい。慣れてない」

「では、なんと？」

「ジャミーでいいです。友人はそう呼ぶ」

小夜の顔が頭を掠めた。

「ではジャミーさん、いかがですか」

「近所の雑木林みたいなものでしょう。誰も意識しない。当たり前のようであって、一部では邪魔扱いされてる。ヤバい連中には恰好の隠れ場所だ」

「おもしろい例えですね。多分に皮相的ではありますが」

「貴方にとってはメシの種でしょう」

「人権で食っている訳じゃありません。弁護士は弁護をする事で生活しているだけです」

「じゃあ人権って何なんですか！」

今度は声を抑えなかった。

チャカされてるようでムカついた。

「憲法という条文に刻まれた、ただの言葉です」

「は？」

「ただし万人に適用される。例外はありません」

「相手が人殺しの外道でもか」

「例外は無い、と言ったでしょう。心情だけで変える事は出来ません」

「ただの言葉だと今、言ったじゃないか！」

「この国が法治国家であり続ける限り、憲法が存在し続ける限り、人権は消えてなくな
らない。そうであるなら私はそれを行使し続けますよ。相手が誰であろうとね。むしろ難
しい相手のほうがやりがいがある」

頭に血が昇りかけてる俺の前でも、佐竹は涼しい顔のままだった。

「.....アンタ敵が多いそうだな」

「ほう。それが貴方の本当の顔ですか」

「そんな事はどうでもいい。何故だ」

「殺人犯、異常犯罪者、死刑囚。随分とそんな連中を無罪にしてきましたからね。私を
恨んでいる者も多いでしょう。いや、無罪放免になった連中でさえ私には恨みがある筈
です」

「? どういうことだ」

「死刑相当以外の犯罪には興味が無いからですよ。コソ泥やら横領、売春斡旋、恐喝に傷
害、そういったつまらん案件は片端から有罪にしていますからね」

「何が違うってんだ」

わかりませんよ

法に殺されてみなければ、ね

佐竹の目は硬玉のようだった。

第十三章 暗雲（前編）

第十三章 暗雲（前編）

一週間に三件。二日に一度のペースだった。

それがもうすぐひと月になろうとしている。

佐竹を狙った凶行は途切れることが無かった。

「センセイ、いくら何でも多過ぎなんじゃないですか？」

「こんなものでしょう」

「よく生き延びてこれましたね」

「マンションに籠もってましたから。でもこの一ヶ月は案件が目白押しでね。そうもいかないのですよ」

梅雨明けの街は溶けるような暑さだった。

俺達はキンキンに冷房された喫茶店で、休憩という名の避難を貪っていた。

「それで彼女は護衛を？」

「気の利くかたです。いい奥さんになれるでしょう、あの性格さえ直せば」

「ビミョーに同意できません」

佐竹が声をたてずに笑った。

初めは気にくわなかった。

ミノルを『始末』する羽目になったあの事件、その犯人を弁護しているこの男に、どうやっても好意なんぞ抱けなかった。

だが行動を共にするうち少しだけ見る目が変わった。

佐竹は『犯罪者の人権』なんてものの為に弁護を引き受けているんじゃない。

法律をあざ笑うように無罪を勝ち取るコイツはまるで、そうすることで『法への復讐』を果たしているようだった。

そう思い始めた頃から、オレは佐竹をセンセイと呼ぶようになっていた。

つまりはオレと同じ人種なのかも知れない、と。

ポケットの中で携帯電話が震えた。

「すみません、ちょっと」

言って席を立ち、誰もいない一角までゆき声を潜めて電話にでた。

耳屋からの連絡を聞かれる訳にはいかない。

「ぼん、店に来い」

「なんかあったんか？」

「マズいことになった」

耳屋の声が、いつになく張りつめていた。

「どうした」

『ゴミ』だ。いや、こりゃテロと言ってもいい」

「なんだよ、そりゃ」

「とにかく戻れ。話はそれからだ」

携帯を切って顔をあげると、佐竹の前に見知らぬ男が突っ立っていた。

青い顔で右手の包丁を振るわせている。

しねえええっ～！！

包丁を突き出す男に向け、とっさに手近な椅子を掴み放り投げた。

もの見事に顔面に命中すると男は綺麗にソファに横になった。

「警察に連絡して下さい。緊急事態なので失礼します！」

何か言おうとする佐竹を残しオレは店を飛び出した。

第十三章 暗雲（中編）

第十三章 暗雲（中編）

「なんだおっちゃん、テロってどーいうこった！」

体当たりかますようにドアを開け、俺は突っ立ってた耳屋へ喰いつくように聞いた。

突っ立ってた訳じゃなかった。

応接セットをどかした店の中で、地図のような紙が床一面に拡げられている。

難しい顔の耳屋がそれを睨み下ろしていた。

「なんだよ、こりゃ」

「港湾図だ」

言われて見下ろすと、確かに普通の地図とは違っていた。

大きくえぐれた図形、意味不明にのたくる線、やたらと多い英字の記述。

「海はオレの縄張りじゃねえぞ。水草屋にでもいえよ」

「狙われてる御本人にか」

「？」

「入管の関係でな、例の弁護士センセイと水草屋は月に1～2回、入港した貨物船に乗り込む。そいつを船ごと沈めちまおうってんだ、これがテロでなくて何だ」

「船ごと、かよ。ゴーセイな話だな」

「このウルトラドアホ。いいか、こんな狭い水路で貨物船一隻沈んでみろ、港の機能は半

年近くは麻痺しちまう。陸路空路があるといったって、海外との物流はまだ多くが海路に依存してる、街が被る被害も甚大だ」

「そんなすんげえ話ならよ、とっととサツ動かしゃいいじゃねえか」

「港は水上警察の領分だ。所轄は水上警察とソリが合わねえ。それに『街』の影響力も奴らにや及んでない」

「じゃあ自衛隊でも呼んでこいよ。アイツらこないだ横浜のベイブリッジでゴジラと殺りあってたぜ」

耳屋が呆れた顔で蒸しタオルをオレの顔に投げつけてきた。

「おうわぁっチチ！！」

「マジメに聞け、クロスぞ」

オレは顔をハタハタしながら耳屋を怒鳴りつけた。

「んな話、オレにどーしろってんだよっ！」

「阻止しろ、絶対に。何がなんでもあの二人を助けろ。殺させるんじゃない」

耳屋がいつになく厳しい顔で言い放った。

「まるで『街』よりあの二人のほうが大事みたいな言いぐさじゃねえか、おっちゃん」

耳屋は答えなかった。

ふと感じた何かを、俺はそのまま口にしてみた。

「.....アンタが庇いたいのは、もしかして水草屋のほうか」

耳屋の目が俺を覗き込んだ。黒目が恐ろしいまでに黒かった。

奥底の伺えない、深淵のような黒色の.....

「くだらねえこといな」

耳屋が静かに呟いた。

第十三章 暗雲（後編）

第十三章 暗雲（後編）

今月の入港は三回、いつもより多かった。

今度のは夕刻に到着、湾内停泊で翌朝に接岸、荷揚げというスケジュールらしい。

ボトルのコークをラッパに飲みながら、埠頭の端で真っ暗な海を睨んでいた。

そろそろ契約の一ヶ月が過ぎようとしているにもかかわらず本業……街の『ゴミ漁り』……に戻る気配を見せない俺に最近、水草屋は怪訝な表情を見せることが多くなった。知らんぷりで通した。

耳屋からは、二人に警告するのを禁じられていた。いちばん手っとり早い方法をとらないのは何故かと疑いもしたが、奴の考えなど判る筈もない。

おおかたあの二人を餌に頭痛のタネをとっと片付けちまおうってハラだろ

オレはバシリかよ、おっちゃんの

空になったペットボトルを弄んでいると、腹に響くエンジン音が近づいてきた。

闇より黒い空間を赤い灯火が左へ横切ってゆく。

さて、お仕事タイムだ

ペットボトルの口に尖らせた唇をつけると、ぼう～と音が出た。

追いかけるように船の汽笛が響く。

俺は揺れるボートに飛び乗った。

◇

舷側のラッターから貨物船に移った。

入港時に二人が同乗する時はラッターを降ろしておくという約束は守られているようだった。

邪魔屋しか乗り込まない、乗り込ませないという耳屋の言葉を水草屋は信じているのだろう。

お人好しのメスガツパめ

口約束で身を守れる奴なぞ街にゃあいないぜ

アイツもただのお嬢ちゃんってことか

もやいを解き、ボートを流した。

ウインチのチェーンを引いてラッターを上げる。けっこうな音がしたが、誰も顔を出さず気配はなかった。

独航船（トランパー）と呼ばれる中程度の貨物船では、乗組員の数もたかが知れている。

移った瞬間から身体がこわばっていた。

耳屋がどこからあんな情報を仕入れてきたか知らねえが.....

やるなら、今夜だ

昼間が嫌なら今夜しかねえ

『ゴミ』は紛れるのが好きだからな

人混み.....暗がり.....夜の、海.....

うってつけの舞台じゃねえか

唇のはじを舐めた。

海の上での『仕事』は二度目だったが、関係ない。

『ゴミ』がのさばる場所が俺の猟場だ。

久しぶりの獲物だった。

血が、静かに沸くのを感じた。

第十四章 潜入（前編）

第十四章 潜入（前編）

右舷側の救命ボートの陰で煙草をふかしながら星を数えていた。

ひとつ……ふたつ……

甲板員のワッチ（見回り）は2時間おきにあるだけだった。

ブリッジから見えない位置に身を隠してさえいれば、酒盛りしてても見咎められる心配はない。

ななつ……やっつ……

数えた星の数が増えるにつれてアタマの中がしんと静まり、思考が鮮明になってくる。

悪夢に責め苛まれる夜はいつも、こうして星を数えていた。

じゅうに……じゅうさん……

たった一人に恨みを晴らすため、船一隻沈めちまおうという発想はどこから湧いてくるのだろうか。

船に乗り込む前からずっと、その事を考えていた。

じゅうく……にじゅう……

手間だ。いや、とてつもない重労働だ。

普通はそう思う。当たり前だ。

だがコイツは違う……何故？……

さんじゅうさん……さんじゅうし……

なるほど。

そうか。

この『ゴミ』には、街中でヒト襲うよりそっちのほうがカンタン確実なんだ。

奴は船乗りか。

さんじゅうはち……さんじゅうく……

間違いない。

奴はこの船に乗り込んでいる。

独航船は中継港で乗組員の交代ができる。

おそらく、その時に。

よんじゅうご……よんじゅうろく……

だが、どうやって『ゴミ』を見分ける？

少ないとはいえ、乗組員の数は10人近い筈だ。

ごじゅうく……ろくじゅう……

どうやって沈めるのか。

気付かれず、脱出の暇を与えずに、石のように。

爆発物などあり得ない。

ドンッ！ いっばつでみんな逃げ出すだろう。

なら……

ななじゅうさん……ななじゅうし……

バルブを開ける。それしかない。

それも一番、空間のデカイ貨物スペース近くの海水バルブを、一斉に。

ななじゅうはち……ななじゅうきゅう……

動く。

船内の見取り図は耳屋からレクチャーされていた。

はちじゅう

立って吸い殻を海に投げ捨てた。

俺は待つてればいい。『ゴミ』は向こうからノコノコ姿を現すだろう。

待ち伏せがあるなど夢にも思っていない筈だ。

よし

いくか

『邪魔屋』は特殊部隊でもSATでもない。身軽なもんだった。

ただ今夜はいつもと少し違った。

腰のダガーナイフを確かめ、俺はボートの陰から走り出した。

第十四章 潜入（中編）

第十四章 潜入（中編）

闇に沈んだ甲板からハッチを抜け、狭い船内に滑り込んだ。

滑り止めのついたスリッポンは綺麗に足音を消していたが、俺は用心深く辺りを探りながら進んだ。

通路の角では耳をそば立て、手鏡を使い死角を窺う。

居住区脇を通る時が一番ヤバかったが、抜けてしまえば何てことない。誰に出くわす事もなく最下層まで辿り着いた。

俺の読み通りなら、この先の貨物庫で待ってりゃ『ゴミ』は向こうから勝手にやってくる筈だ。

◇

待つのは慣れていた。

船底に近い貨物庫では星が数えられないのだけが辛かった。

闇の中でも目はつむらない。妹の顔が浮かんでくるから。

佐竹と水草屋が乗り込んでいるのは間違いない。ラッタルも降ろしてあったし、その点については疑っていなかった。

積荷の確認と入管書類を整える為、二人が深夜まで船に留まるのも判っていた。

それにしても……

遅い。

この船を乗組員もろとも沈めるなら、そろそろ行動をおこさねばならない筈だ。船には素人のオレにだってそれくらいはわかる。

何かがアタマの中で鳴った。

までよ

巨大な貨物庫……注水して、満水になるまでどれだけかかる？

1時間かそこらじゃきくまい

蛇口ひねって風呂いっぱいにするだけでも待たされるんだぞ

間に合いっこない

じゃあ、どうやって……

その時、気がついた。

床一面が濡れているのに。

浸水音やバルブを捻る音は聞こえなかった。

やりやがったか？！

跳ねるように立ちあがり振り返ると、出入口のハッチから灯りが漏れていた。

ぱしゃぱしゃ耳障りな音が響いたが、構わず走り半開きのハッチに手をかけた。

！！！！っ

もの凄い衝撃でアタマが吹き飛んだ。

……頬の脇を冷たい海水が流れてる。俯せに倒れているらしい。

飛び出しかかった目んたままで必死に見上げた。

霞む視界の中、黒い影がゆらいでみせた。

ハッチを抜け近寄ってくる。

汚い船員服を纏った小柄な老人だった。

両手で特大のスパナを抱えている。

薄暗がりの中、目だけ爛々と光らせていた。

くそ、やりやがったな.....

便利屋のジジイみたいだと思った瞬間に、プツンと意識が途切れ真っ暗になった。

第十四章 潜入（後編）

第十四章 潜入（後編）

……まぶしいぞ……

クソッ、灯りをけしやがれ……

アタマがイテェじゃねえか……

なんだ、このウッセェ音は……

朦朧としながら痛む箇所をさすろうとした。

??? 手がうごかねえ

こりゃオレの手だぞ

なにしゃがる

なんだってんだ……

ギンと激痛が脳天を貫き、それでようやく意識がハッキリした。

すぐ近くで得体の知れない巨大な機械がごうごうと音を立て、熱気が肌を焼くのを感じた。

天井は見上げるほど高い。

スパナでブン殴られ後ろ手に縛り上げられた俺にも、そこが機関室と呼ばれるエンジン区画であることくらいは判った。

「気がついたか、わっば」

壁のほうから声がした。

痛みと喧嘩しながら声のした方を見ると、ひとのアタマをゴルフボール代わりにしやがった張本人がゆっくりと歩み寄ってきた。

初めてまじまじと顔を見た。

どう見ても90越えてるようにしか思えない、皺くちゃで、しみだらけで、枯れ切った顔。

でも背筋はピンと伸び、足取りもがっしりと床を捉えている。

老人らしい仕草のひとつもない老人、だった。

「あんな所でなにしておった、小僧。邪魔する気だったのか？」

「何をだ？ オレはちょっとアソコでサボって……」

「何処の船員がそんな恰好してる？ 密航者にしちゃ着てるもんが綺麗過ぎる。それに……」

「それに……なんだよ」

「兵士だ。お前の目は前線にいる兵士の目そのものだ。間違いや逃亡で紛れ込んだモンの目じゃあねえ。ワシには判る」

老人が重々しくうなずいた。

シラ切るのは通用しないらしい。

俺は真正面から斬り込んだ。

「なんでこの船を沈める。アンタも船乗りだろが」

「やっぱりか。どこで聞いた？」

「そんな事ぁどうでもいい、答えろ」

男は暫くの間、答えなかった。

沈黙の間をエンジンの轟音が埋め続けた。

「……ある男を……殺すためだ」

「なぜ？」

「奴は、あの男は奪ったんだ！ 今日子の……孫娘の幸せを！ 人生を！！ 根こそぎ滅茶苦茶にしたアイツへの復讐の……裁きの機会を奪いおった！ なにが無罪じゃ！ なにが精神鑑定じゃ！ 人殺しが許される世の中を作る為にワシらは闘ったんじゃないわっ！！」

老人は顔を真っ赤にして激昂していた。

第十五章 水漬く屍（前編）

第十五章 水漬く屍（前編）

「あんた……」

「あの戦争から60とゆう余年、この国は豊かになった。誰もかれも、明日の命の心配などせずやりたい事をやれるようになった。御国を守るため、御国のために命を差し出した者はみな、役目を終え歴史の壁に埋もれてゆく。それでよかった。それでよかったんじゃ。なのにアイツは……」

真っ赤だった顔が今度は青くなってゆく。

「……あり余る時間を、自分の命を保証してくれる社会を裏切り、せせら笑い、やった事は縁もゆかりも無い他人を犯して殺しただけだ。ワシの孫を……あとひと月で幸せな結婚が待っていたあの子を、アイツは無惨に殺したんだ。アイツが裁きの場で何と言ったと思う？『メスイヌなんぞ畜生だ、オレが好き勝手にして何が悪い。保健所と同じだ。害獣駆除みたいなもんだろ？社会貢献してるオレが何もしないお前らごときに何でああだこうだ裁かれなきゃならない！』そう怒鳴って法廷で暴れ狂いやがった。生かしちゃおけない。絶対に殺す。山本元帥閣下から賜った短剣を抱えて、わしや裁判所に行った」

日焼けしてカサカサに乾いた両の手をじっと見つめながら、老人は喋り続けた。

「警備員がな、金属探知機を持って出入り口を固めていた。諦めたよ。海兵として鍛え抜かれていた昔ならいざ知らず、今のわしはタダの非力な爺だからな」

植え込みの陰に短剣を隠し傍聴席へ向かったのだと言った。

そして佐竹を見たのだと。

「もう法の裁きに任せるしかないと観念していた。ところがどうだ、あの男は弁舌鮮やかに検察官を、裁判官を丸め込んでいった。極悪非道の男が、不幸な生い立ちと社会の犠牲者へと見る間にすり替わっていった。わしや信じられんかった。この目を、耳を疑った。こんなバカな話がまかり通っていいもんかと」

結審の日。

心神喪失、責任能力無しと認められ無罪。

それが全てじゃったと、むしろ淡々とした口調で老人が俺に告げた。

「ヒトとは思えぬ冷たい顔で笑ったアイツが、わしは許せなかった。孫娘を殺した男よりも強く、わしゃあの男を憎んだ。それからずっと今日の日を待ったんじゃ」

開いていた両手を、みしりと音をさせて老人が握り込んだ。

第十五章 水漬く屍（中編）

第十五章 水漬く屍（中編）

「これからどうしようってんだ」

握った拳を震わせながら黙ってしまった老人に、痛む頭をフル回転させながら話しかけた。

状況は不利だ。

身動き出来ない上に、どつかれた脳天辺からは雷のように激痛が振りそいでくる。

会話を引き延ばし、活路を見いださねばならない。

少しは痛みが和らいでくれればいいのだが。

「沈めるさ、簡単なこった。誰も逃げられない。誰も助からない」

「下手すりゃ死ぬぞ、アンタも」

「知らんわ。一人一殺、いや多殺か。あの男を葬れるんだ、こんな爺の命などいらんわ」

「バルブを開けたところで、こんなデカイ船がそう簡単に沈んでくれるかよ」

歯の抜けた口を開け老人がひゃっひゃと笑った。

「素人だな。バルブ開けたところで船は沈まんよ」

「？」

「軍艦だろうが貨物船だろうが、船ってのはいつでも海水バルブは開けっ放ちなんじゃよ。知らんのか？」

「それじゃ沈んじまうじゃんか」

「船はよ、やじろべえと同じなんじゃ。ほっときやすぐひっくり返っちまう。バラストタンクに海水を入れて、それでやっと真っ直ぐ浮いてられるんだ。だから海水バルブはいつでも開いてる」

「じゃあなんで床が濡れてた？」

「ちい〜とばかり多めに開けた。それで充分じゃ。この船がバランスを崩す程度にな」

「.....そうか。やらねえと思ってたが.....アンタ吹き飛ばすつもりだな、船尾を」

「ほう、あんだけ叩いてもアタマは回るようじゃの」

「大穴があいた船はバランスを崩して、船尾から貨物スペースにかけて一気に浸水、石ころのように沈む。やじろべえと同じなら、重いエンジンのあるほうが真っ先に沈み始めるだろう。洗面器に水入れるんだって傾けりやすぐだ」

「飲み込みが早いな。爆発音を聞いて逃げ出そうとしても手遅れじゃ。轟沈じゃよ」

「轟沈、か。さっきの話といい、アンタ兵隊だったんだな。第二次世界大戦.....オレらにやガッコの教科書ん中だけのことだけだよ」

「太平洋戦争と言え。ドイツとイタリアは世界中で、陸軍はもっぱら中国で戦っておったが、わしらや、南海の孤島に放り出された兵士にとって、あの戦争は太平洋での戦い以外の何者でもなかった」

老人がすぐそばに腰を降ろした。

第十五章 水漬く屍（後編）

第十五章 水漬く屍（後編）

「酷いくさじゃった。勝ちに浮かれていたのは始めのうちだけ、ミッドウェイで南雲艦隊が壊滅してからは坂道を転がり落ちるように形勢は悪化していった。ワシは駆逐艦の砲手じゃった。ボロボロと僚艦が沈んでゆくなか、ワシらの船は太平洋じゅうを駆け回った……」

老人はピースを取り出し火をつけた。

一本よこせというと、渋い顔をしながらくわえていた煙草を俺の口にねじ込んできた。

ひどく辛い煙だったが、深々と吸って吐き出したら頭痛が少し薄らいだ。

「運がよかった。ワシらの船は終戦まで生き残ったからな。最後の沖縄特攻にも参加したよ。小僧、大和って知っとるか？」

「アニメなら見たことあるぜ」

「アホか。無敵の船じゃった。世界一の戦艦じゃった。だが毒蜂のようなアメリカ軍の大編隊に、なぶり殺しにされて沈んだ。生存者を助けながら、この戦争も終わったと思ったよ。ワシらの負けじゃとな」

座り込んでいた老人が、両膝の間に頭を垂らす。それきり黙り込んでしまった。

長いお喋りが終わったらしい。

「なあ、ジィさん」

短くなった煙草を最後にひと吸いし、ぷっと股の間に吐き出して俺はおもむろに老人へ話しかけた。

「殺るならよ、アンタの孫ゴーサツ（強姦殺人）した奴を殺りゃいいじゃねえか。あの弁護士殺したってなんもなりやしねえ。復讐ですらないぜ。気持ちは判らないでもねーけどよ」

老人ががばっと顔を跳ね上げた。

『判らないでもない』だどっ！？ キサマごときに何が判る！！』

「判るさ。被害者は……肉親殺された奴はみんなよ、どっか壊れちまうんだ。マトモじゃいられなくなる。殺した奴だけじゃない、助けてくれなかった奴も、殺した奴を『仕事』で弁護してる奴も、世の中ぜんぶが敵に見えちまうんだ。そんな連中を腐る程見えてきた。俺も……」

それ以上は言わなかった。

「見えるだけじゃないわ！ みんな同罪じゃ！ なら誰を殺っても同じじゃろが！！』

「おなじじゃねーだろ！ 的が違うっていつてんだ！ 鬼畜外道を殺るなら喜んで手伝ってやる、でもアンタ怒りでトチ狂ってる！ 目えさませや、ひき返すなら今しかねえ」

苦い唾が染み出してくるのを感じた。

第十六章 帰らざる河（前編）

第十六章 帰らざる河（前編）

「もう遅いわ。時間が来たら爆薬のスイッチを押す、それでしまいじゃ」

老人の顔から表情が消えた。

「アンタよええな」

「？」

「結局アンタはよ、てっとり早く復讐心を満たせるほうを選んだだけじゃねえか。『ゴミ』ぶっ殺そうにも邪魔がはいる、それを取っ払う意思も力もモウロクして無くしちゃった。何が海兵だ、何が太平洋戦争だ！ アンタとっくの昔にキンタマなくしちゃってんじゃねえかよっ！！」

半分本気の俺の挑発にも、老人は乗ってこなかった。

「これがワシなりのけじめじゃ。そこで好きなだけ吠えてな、坊や。いずれ何も感じなくなる」

「おい……」

「悪いが縄を解いてやる訳にゃいかん。諦めてヘドロに沈むんじゃな、あの男と一緒に」

すっと立ち上がった老人は、振り返ることもなく機関室から出ていった。

「……やれやれ……」

縛られた手首を返し、ベルトのダガーナイフを抜いた。話しの最中、こいつが取り上げられていないかを指先で確かめてあった。

腰の後ろも調べただろうが、薄く、ベルトと一体化したダガーには気付かなかったようだ。

慎重に摘んで逆手に握る。

刺殺用のダガーの刃はロープを切るには向いてなかったが、贅沢は言ってもらえない。時間も無い。

俺はロープに刃を当てた。これなら10分もあれば切断出来る。

唇を噛みしめ作業に集中した。

◇

15分かかった。

焦りに背中を焼かれるながら機関室周辺の船底近くを探し回ったが、老人の姿は何処にもなかった。

爆弾らしきモンも見つからない。

闇雲に甲板へ向け狭い階段を幾つも駆け登った。

途中で二人ほど船員と擦れ違ったが、もう構っている暇はなかった。

真っ暗な甲板に出ると、星を数えながら潜んでいた救命ボートの所へと走り、隠してあった携帯電話を取り出してボタンをプッシュした。

「あなたね。船にいるの？」

2回のコールで水草屋が出た。

「ヤバイ、救命胴衣つけて佐竹とすぐデッキにでろ！」

「どういうこ……」

「ツベコベぬかすなっ！ 死にたくなきゃ急げメスガッパ！！」

怒鳴って切った。

船底にいないなら、有線じゃなくて無線起爆だ。

なら爆弾の直上あたりに……

船尾甲板か。

走った。

今夜はあとどれ位走るんだろうか。

第十六章 帰らざる河（中編）

第十六章 帰らざる河（中編）

老人は、船尾の手摺りにもたれかかり夜を仰いでいた。

目をこらさねば消えてしまいそうなほど小さな影だった。

「動くな。撃つぞ」

「なんだそれは。指なんぞ伸ばしおって」

こっちを向いた老人の呆れた声が聞こえてきた。

「ちっ」

俺は舌打ちしてピストルの形にした左手を降ろした。

「こんだけ暗けりゃハッターりでもビビるかと思ったのによ」

「見えとったよ。帝国海軍々人は夜目が利くんじゃ。舐めるなよ」

くだらない遣り取りの際に2 mは間合いを詰めた。なにげを装い少しずつ近付くのが始めからの狙いだった。

うかつに飛びかかって起爆スイッチを押されたらアウトだ。

ポケットにつつまれた老人の右手に意識を集中した。

「よく抜け出せたな」

「本業はマジシャンでね」

「殺し屋にでも見えるがの」

「止めろや、じいさん」

「覚えの悪い坊やじゃな。何度も言わせるな」

「オレもだ。何度も言わせるんじゃねえ、アンタ相手が違うんだよ」

「わかっとなるわ、んな事あはじめっからな」

老人がまた空を仰いだ。

「憎いわ、あの畜生も弁護士も。じゃがの……『まともじゃいられない』さっきそう言いおったな。ワシらは、あの戦争の生き残りは皆、とうの昔にまともじゃなくなっとなるんだよ。それをひた隠しに今日まで生き恥晒してきた。もう膿んだ……腐れ外道どもを道連れに、ワシも戦友達の所へ逝くとするわい」

「ざけんなジジィ！」

飛びかかろうとした俺に向け拳が突きだされた。小さな箱が握られている。

「おすぞ」

両手を振り上げたまま凍りついた。

腕を突き出し、老人が手摺りの端まで後ずさりした。距離、約3m。絶望的に遠かった。

そのときだった。

「三浦……源次郎さん、ですね」

背後から響いてきた声は、怒鳴るでもなく闇の船上に通り渡った。

およそこの場にそぐわぬ、落ち着いた、だが冷ややかな声。

俺も老人も声のしたほうを見た。

「公判でお見かけしました。その節は」

軽く会釈した佐竹の隣りには、険しい表情の水草屋が腰に手をあて立っていた。

二人とも救命胴衣は着けていない。

「おおおまえ……おまえは……」

老人の体がブルブルと震えだした。

第十六章 帰らざる河（後編）

第十六章 帰らざる河（後編）

「わすれたとは言わさんぞ！ あんなキチガイを無罪にしおって……キサマも今日子のカタキじゃ！！」

すぐにでもスイッチを押しそうな三浦はだが、おこりにでもなったように震え続けた。

「こんな形でお話するのは本意ではありませんが。三浦さん、なにか勘違いしていませんか？」

俺は耳を疑った。

コイツ、ここを法廷と間違えてやがる

勘違いしてるのはアンタのほうだ

「お前の言葉なぞきかんわっ！ このボタンを押せばキサマらはしまいじゃ、死んで今日子にわびろっ！！」

三浦が俺の懸念を代弁した。

「やりたければ、どうぞ」

佐竹の声には何の怯えも無かった。

「遺族感情という奴ですね。察しはしますがそれだけです。感情では世の中のなにも変わりはない」

「商売で外道を助けるキサマがなにぬかしとるっ！」

「商売？ ふっ、フハハ……」

本気で失笑しているらしい佐竹に呆れながら、それでも俺は振り上げた腕を降ろさなかった。

「なにがおかしい」

「三浦さん。駆逐艦『雪風』乗員としてあの戦争を生き残った貴方も、しょせんただの年寄りだったのですね」

「なんだと……」

「戦争は終わっていません。今こうしている時も戦争は起こっていますよ、この国で。わからないのですか？」

「キサマなにをいってる」

三浦の顔に、べったりと困惑が貼り付いていた。

「国と国の戦争は終わった。だがその後には『生存競争』という名の戦争です。誰もが、自分ひとり生き残るのに他人を喰い殺す地獄のような戦争が。貴方もお孫さんも、その中を生きてきた。今日子さんは敗れた。それだけです」

なんだそのリクツはっ！？

爆薬のことも忘れ、俺自身が三浦より先に喰いつきそうになった。

「ふざけるなっ！」

三浦が口から泡を飛ばした。

「そんな屁理屈でキサマがやった事を正当化出来るとでも思っとるのか！」

「思っていない。必要もない」

佐竹の声はどこまでも穏やかだった。

「ヒトは自分の生存の為に戦う。そして勝ち、敗れる。それでしさいです。死んだ者は何も考えることなど出来ません。残された者の感情、それは死者とは何の関係も無いものです」

佐竹は冷たく言い放った。

第十七章 水葬花（前編）

第十七章 水葬花（前編）

「関係ない……だと？」

ヒトの顔がここまで歪むかと思えるほど、三浦の顔は奇妙な形をなした。

「ありません。全く」

この状況でどうしてと思えるほど、佐竹の顔は平静そのものだった。

「まさか今日子さんが化けて出て『おじいちゃん、私のかたきをうって』なんて言ったとは言わせませんよ。貴方は貴方の憤りに導かれるまま、あの男を、そして私を殺そうとした。それは貴方の感情の現れでしかありません。そうしなければ生きてゆけない、貴方自身の心の叫びなのですよ」

俺は虚を突かれていた。

佐竹の言葉は、三浦だけでなく俺自身の内側をも抉っていた。

「……二十年ほど前になりますか。私も肉親を殺されました。誰か、にでなく法律に。冤罪という奴です。父は最後まで無実を叫んでいました」

初めて、佐竹の声が沈んだ。

「結局、冤罪の有力な証拠は揃わず、父の刑は執行されました。その日から私は弁護士を志すようになったのです」

警察に、法に、そして国家に。

復讐の対象はどんどん大きくなっていったと佐竹が呟いた。

「でもある時、気がついたのです。復讐を喜ぶのは自分だけだと。満足するのも自分一人だと。何も終わらない。未来永劫、たった一人の戦争を続けて死んでゆくしかないのです。それで報われるものなどない。誰も肩を叩いてくれない。誉めるどころか文句すら言ってくれない。無音……でした」

表情を崩さぬ顔が真っ直ぐに三浦を睨んでいた。

見慣れたその顔が、どこか疲れているように見えた。

「私を殺したいほど憎んでいるのは貴方だけじゃない、数えるのもおっくうな位です。星の数ほどって奴ですよ。貴方は新参者に過ぎないのです。どうです？ あの星を全て数えきれますか？」

すっと佐竹が顔をあげた。

三浦も。水草屋も。

俺さえ釣られて空を見上げそうになった。

んな事する訳ない。

振り上げたままだった右手を短く振り降ろした。

右肩を押さえずくまった三浦に飛びつき、細い右手を手摺りに叩きつけた。

黒い箱が宙を飛び、もっと黒い海に吸い込まれていった。

刺さったダガーを引き抜いた三浦が、うらめしそうに俺を見た。

第十七章 水葬花（中編）

第十七章 水葬花（中編）

「ジジィ、ここまでだ」

三浦が引き抜き放り投げたダガーナイフを拾い、俺は冷たく告げた。

「そんなモン隠してやがったか。ローブもそれで切ったな」

「恨むならよ、刃物は包丁の親戚みたいな形だろとタカくくってた自分を恨みな」

ダガーをベルトのホルスターに納める。

「よのなか広いんだぜ」

「いかれた刃物なんぞ詳しくなりとうないわい」

言葉に悔しさの色が無いのが妙に引っかかった。

よろよろと立ち上がった三浦が佐竹を睨んだ。

「いつまで続けるんじゃ、あんたは」

「法への復讐は続けますよ、現行法が変わらぬ限り。貴方のような方の声が、行いが社会を国を変えるかもしれぬ将来まで、ね」

「それで満足か。痛む心は無いのか？」

「とっくに無くしましたよ、そんなものは。誰もかれも好きなだけ戦い続ければいい。今はそう思います」

「そうか。オマエもマトモじゃないんだな」

フラフラと船尾の角まで歩を進めた三浦が振り返ると、両手で物差しほどの物体を握っていた。

鞘を払うと、しらと光る白刃が姿を現す。

「恩寵の短刀じゃ。わしの魂じゃ。虜囚の辱めを受けず……事成らぬ今、わしの行くべき先は決まった」

三浦が切っ先を腹へと向けた。

「おいジジィ、オマエなにしてんだよ」

「本物の切腹は見たことないじゃろ、殺し屋の坊や。見せてやるよ」

「なにいつてんだ！ おれは殺し屋じゃねえ、それにアンタ死ぬこたあねえだろ、『外道殺すなら手伝ってやる』ってさっき言ったよな？ 嘘じゃねーって！！」

頭ん中で非常ベルがガンガン鳴ってた。

引っかかってたのはこれだった。

クソッ！ おせえんだよ！

自分で自分に文句ぶちまけた。

「言ったじゃろ、もう膿んだと。そいつの言ってること……口惜しいがワシにも判っちゃまった。どこまで行ってもこの世の中、いくさばかりなんじゃな。ワシのような年寄りのいる場所なぞとっくの昔に喪くなってたのさ。もういい、そろそろ戦友達の所へ逝かせてくれ」

「ざけんなっ！ 孫娘の仇とるんじゃねーのかよ！ 恨み晴らすんじゃねーのかよ！ そんな……そんなアッサリ逝っちゃまってよ、それでなにがどーなんだよ！」

なんで俺が取り乱してんだ。

判っていても止まらなかった。

第十七章 水葬花（後編）

第十七章 水葬花（後編）

やらせてあげなさい

黙って成り行きを眺めていた水草屋が初めて口を開いた。

「あんだと！ テメなにいて……」

「ガキの出る幕じゃないわよ」

甲高い水草屋の声には、今まで聞いたことない威圧感があった。

つつかかと歩み寄った水草屋が三浦の前に立った。

「お嬢さん、あの男の雇い主かね」

「彼はうちの会社の顧問弁護士です。そしてそのガキンチョは私が雇った護衛です、三浦さん」

恐ろしい程しおらしい声で水草屋が答えた。

「そうか。備えは万全だった訳じゃな。頭に血が登ってはやいでおったのはワシひとりだったということか」

「止めはしません。でもその前に聞いておきたいことがあります」

「なんじゃ」

「あのクソガキは殺し屋じゃありません。『街』の依頼を受け危険分子を排除する仕事をしています。そして私は彼の同類……死体処理を請け負っている者です」

暗闇の中で佐竹が目を見開いた。

「貴方が御自分をどうしたいのか、それを聞かせてください」

「なんとまあ。ワシらが護ってきたこの国は、今じゃそんな連中まで養っとるんか」

「『街』は国の形の一部です。国そのものが巨大な『街』と言ってもいいでしょう。その裏側で私達は飼われ生きています。60年以上前、その大きな『街』のため命を投げ出し戦った貴方に、私は敬意を表します。お聞かせ下さい、どうしたいかを」

水草屋の言葉に、三浦は長い沈黙で返した。

むせ返るほど濃い塩風の中、俺達は誰も口をきかなかった。

「.....沈めてくれんか.....」

「どこに、ですか？」

「坊の岬沖、大和の沈没地点。戦友が沢山眠っとる。それが望みじゃ。お願い出来るかの？ お嬢さん」

「わかりました。必ず」

三浦が水草屋の目をじっと覗き込んだ。

「アリガトよ。これでいい」

言うなり短刀を腹へ突き立てた。

きりりと横一文字に切り裂き、更に下腹へ刺して真上に引き上げる。

返り血を浴びた水草屋は、瞬きもせず眼前の光景を凝視していた。

もの凄い血臭.....

顔を上げた三浦が俺を見た。

清々しい顔だった。

じゃあな

そう言って頸動脈を掻き切った。

笛のような音と共に血飛沫が星空へと舞った。

第十八章 日常（前編）

第十八章 日常（前編）

少ししか見えない水平線のへりに太陽が顔を覗かせようとしていた。

夜明け。

『仕事』後の爽快感は今度も無かった。

三浦の亡骸は丁重に梱包され船倉の冷凍庫に納められた。

血溜まりも夜のうちに綺麗に洗い流されていた。

終わったわね

報酬は耳屋から受け取って

おつかれ

水草屋はそれしか言わなかった。

俺はなにも言わなかった。

言うことがなかった。

手摺りにもたれ朝日を眺めていると、隣りに人の気配がした。

「小さな会社にしては資金繰りが潤っていた。まさか副業持ちとは思いませんでしたよ」

佐竹が手摺りに肘を置き遠くを眺めていた。

「驚いたか、パートナーが非合法的なビジネスに手を染めてて」

「意外ただただけですよ、ジャミーさん。『ジャクソン御島』もこれでやっと終わりで
すね」

「……知ってたのか……」

「ええ。そんな人物は県央総合警備保障に在籍していませんから」

こちらを見ようともせず、独り言のように佐竹が呟いた。

「何時からだ？」

「初めてお会いした時から」

「ウソだろ」

「あの日、受け取った名刺をすぐポケットにしまいましたね。名刺交換の経験の無い者のする事です」

「それだけで疑ってたのかよ」

「県央のチーフは古い知り合いなのです、連絡をとったのは大学卒業後はじめてですが。豪田という無愛想な大男で、学生時代はよく飲みに行ったものです」

「知っててオレを側に置いてたのか？」

「ヒトを見る目はあるつもりなんです」

俺を見ようともしなかった佐竹が、はにかんだような笑顔を向けてきた。

「貴方には感謝しています。それがどういう経緯からであっても」

こちらへ向き直った佐竹が、深々と頭を下げた。

「よせよ。アンタにそんな真似は似合わねえぜ」

「そう、ですか」

「ああ。いい機会だから言っとくけどな、オレはアンタが嫌いだった」

「なぜ？」

「片桐の弁護をしてたからな」

「彼に恨みでもあるのですか」

「アイツのせいで人生滅茶苦茶になった奴がいた。オレはそいつを止めるため、やりたくない事やっちまった」

「……桐原実さん、ですね。片桐が逮捕された日、警察署の前で不審死をした……」

「オレが殺ったんだ」

佐竹の表情は変わらなかった。

第十八章 日常（中編）

第十八章 日常（中編）

「オレを告発するか、センセイ」

正面から佐竹を見下ろした。

見上げてくる視線に害意は無かった。

「何の証拠もありません。残してもいないでしょう。私に出来ることはありませんよ」

いつものように薄く笑ってみせた。

「これからも、こんな事続けてくんかよ」

「ええ」

「確かにこの世は戦争だらけかも知れねえ。でもよセンセイ、アンタのやってる事はいらぬ火種をばら撒いているだけじゃねえのか」

「何も待っていないと判っていても止められないのが、復讐という奴でしょう。今まで通りやりますよ。弁護士はヒーローなんかじゃないですから」

「そっか。やっぱりアンタとは判りあえそうもねえな」

そのまま佐竹に背を向け歩きだした。

「またお会いしましょう、いずれ」

背中から声がした。あと15分で接岸だ。

仕事は終わり、また一日が始まる。

嫌になるほどいい天気だった。

◇

その日の午後。

港を見下ろす小高い丘の上。

さほど朽ちていない墓石の前に、背の低い中年男と長身の女が立っていた。

「……まだ来てるんだな」

「時々。散歩がてらにね」

「忘れろ、もういい加減」

「忘れようにも、ここには何も無い。あのひとの欠片さえ埋まってないわ」

風が黒髪を乱す。

瞬きすらせず、水草屋は墓碑銘をひたと見つめていた。

「ここに来て、自分が誰かを思い出すの。ひとつ誰かの命が消えるたび。ひとり誰かを沈めるたび」

「そりゃ大変なこった」

耳屋が、両手でライターを囲いながら煙草に火を着けた。

「これでよかったの？ あの坊や、むすっとしたまま船を降りたわよ」

「いいさ。アイツも判っただろうよ」

「そんなに簡単にいくかしら」

「始末するだけが『仕事』じゃない。こういう結末だってある。割り切れる事ばかりじゃねえって知ればアイツも変わってゆく。それでいい」

「そうやって育ててゆくつもりなの？ あのひとのように」

「.....」

「彼、誠さんに似てる。それが危なっかしい。同じ道を辿るんじゃないか.....そんな気がするの」

「だから何だ。奴には邪魔屋やるしかねえんだぞ」

「そして喪う。後悔しないでね、あの時みたいに」

目を合わさぬまま二人は別れた。

第十八章 日常（後編）

第十八章 日常（後編）

「ねえ、ねえったらあ」

「うっせえぞ。アッチいけ」

久しぶりの泥水コーヒー。

こんなモンでも口にしてなきゃ物足りない気分になる。この一ヶ月は佐竹の護衛でここに来る暇もなかった。

儲かってなさそうなファミレスのいいところはただひとつ、いつ来ても静かだということだけだ。

なのにこいつは.....

「ひさしぶりなんだからさ、ちょっとくらいオシャベリしよーて気にならないかなあ」

仕事中だというのに、小夜は俺の陣取るテーブルを離れようとしなかった。

「バイト中だろ。なにサボってんだよ」

「お、いいカンジでチョーシ出てきたじゃん」

抗議の言葉はこいつの脳まで届いてなかった。

「ジャミーはそうでなきゃ！ いっつも不愛想で不機嫌で、すぐアタシを怒鳴る」

「テメェ、マゾか？」

「ザンネンっ、バリバリのドS」

「ってかよ、いっつもなんていうほどオレ達、会ってハナシしてっかよ？」

「今日で4回め。凄い！次で5回目だぁ！」

よっぽど暇らしい。

呆れながら小夜を見た。

「なあ……頼むからほっといてくんねえか。『仕事』がやっと終わってよ、久しぶりにクソまずいコーヒー飲んでゆっくりしようって時に、なんでオマエの相手させられなきゃならない？店変えるぞ！」

精一杯凄んでみせたが、小夜はニコニコしっ放しだった。

「いいモンッ！そしたらアタシもバイト変える」

「カンベンしろよ……」

降参だった。

諦めて席を立とうとした。

「かえるの？」

「うっせえウェイトレスのいないところ行く」

「マジで怒っちゃった？」

「さっきからずっとマジだ」

「……」

手のひら返したように小夜がシュンとなった。

「ゴメン、アタシひさしぶりにジャミーに会えたから……それでその……チョットはしゃぎ過ぎたかも……それでね……あの……」

股に杭でも挟んだみたいにモジモジしました。

なんだコイツ？

「あんだよ、なんか言いたいことでもあんのか？」

「あのさ……あたしと……その……デート、とか……してみる？」

「はあぁっ？」

今度こそまじまじと小夜の顔を見た。

耳たぶまで真っ赤になってやがる。

その時気がついた。

自分が、何の躊躇いもなく小夜を見ていることに。

第十九章 ボイス（前編）

第十九章 ボイス（前編）

完全にど肝を抜かれてた。

俺ともあろうものが、むざむざと従った。

小夜の奴め……

もう何度目かの愚痴とも呪詛とも判らない眩きを漏らしながら、俺はしかたなく地下鉄を降りた。

でえとだと？

よりもよって、あのチビと

なんでこーなんだよ

階段を上る足が重かった。

眩しいだろうと身構えていた地上は、どこもかしこも夕暮れの朱に染まっていた。

東京、市ヶ谷。日本武道館。

それが目的地だった。

力の抜けた身体を引きずって歩き始めた。

◇

あの日。

どうして小夜の誘いに乗ってしまったのか、今思い出してもよく判らない。

『ゴミ漁り』はいつも通りやっていたが、耳屋はなんでか『仕事』についてうるさく言わなくなっていた。

結局のところ俺は、やる事やった後どうにか時間を潰すしかなかったのだ。

他にいくところも無い。暇だから約束を守ろうって気になったのだろう。

あるいは.....

あの時、小夜を真っ直ぐ見ていた自分に驚いていたから、かも。

妹の事を忘れた訳じゃない。死んでいった小夜子の姿は今も脳裏に焼き付いている。

思い浮かべるだけで心は鮮血を吹き出した。

だが。

小夜を見ても、小夜子を思い出さなかった。

胸を抉る痛みは沸き起こってこなかった。

.....慣れたのか？

そんな風に思ってみた。それ以上は考えたくなかった。

ただでさえダルいのに。

◇

大通りからかなり離れた所に、へんな形の屋根が見えてきた。

足早に側をゆくのは、なんかどっかで見たことあるようなデブとヤセとチビのトリオばかりだった。

絵に描いたようなオタク集団。奴らも武道館を目指していた。

小夜が俺を誘ったのは、聞いたこともないアーティスト.....『声優』と呼ばれてる吹き

替え専門の役者……のコンサートだった。なんでも今、CDがバカ売れしてるらしい。

武道館でやるなんてアイドル並じゃないか

小夜がアニオタだとは知らなかった。

知らずに乗った自分のアホさ加減を呪った。

まわりつくように増えた人ごみのなかを歩いてゆくと、向こうでメイド服姿の小柄な女が嬉しそうに手を振っていた。

……カンベンしてくれえ……

頭掻きながら小夜の方へと歩いていった。

第十九章 ボイス（中編）

第十九章 ボイス（中編）

一曲目から会場のテンションは大爆発した。

歓声と絶叫、振り回される腕、腕、腕……

飛び跳ね、踏みしめ、また跳ねあがる。

ちょっとした地震のなか、座っているのは俺だけだった。

小夜も負けじと叫びまくっている。

なーなっ！

なーなっ！！

なぁーなっ！！！！

ナナあああ～！！！！

……ダメだ、ついていけん。

諦めモードで辺りを見回すしかなかった。

曲が進むごと観衆の興奮は天井知らずにヒートアップしていった。

そのうち誰かノーミソの血管切れるだろうと思いながら、傍らで跳ねている小夜に目をやった。

額に汗を光らせ、夢中でステージへと手を振る小柄な女の子……

何かがすとんと胸に落ちてきた。それが苦痛でなかった事に驚いた。

哀しみでなく、辛い記憶でもない。

すっかり忘れていたもの。

懐かしさ、だった。

◇

思い出すこともなくなった遠い昔。

片思いが破れずっと泣いていたアイツを誘って、二人で遊園地にいったっけ。

兄貴としては複雑な想いを抱えながら、それでも一所懸命に笑わせようとした。

ずっとうつむいて肩をこわばらせていた小夜子が、閉園のアナウンスに顔を上げた時、こわばった顔にやっと笑みを浮かべて言ったんだ。

……ありがとう、おにいちゃん。楽しかったよ……

それから今度はニッコリ微笑んでくれた。

そんなこともあった。

すっかり忘れてた。

◇

気がつくとも会場は静まりかえっていた。

あれだけ熱狂していた観衆がひとり残らず席に座っている。

ゆるやかな伴奏と共に、よく通る澄んだ声が聞こえてきた。

「今日はわたしのコンサートに来てくれて、ホントありがとう。ここにいるみんなに心から感謝を込めて……歌います」

伴奏が止み、ピアノだけが響き始める。

バラード。

澄んだ声が更に透明に、広い会場の隅々まで響き渡った。

背中がゾクリとした。

今の今まで絶叫にかき消されて聞こえなかった声が、頭のとっぺんからつま先まで走り抜けた。

ボイス オブ エンジェル.....

そんなものあるなら、これがそうかもな

天使から遙かかけ離れた俺にも、そう思える声だった。

第十九章 ボイス（後編）

第十九章 ボイス（後編）

「ジャミー、ねえジャミーったらあ」

いつの間にかコンサートは終盤に差し掛かっていた。

小夜に肩を揺さぶられるまでぼうっとしていた事が俄かに信じられなかった。

「……オレ、どしてた……」

「わっかんないよ。でもほっぺ濡れてるよ」

「え？」

「ジャミーでもカンドー泣きする事あるんだ」

「んなわけねーだろ」

「あ、照れ隠ししてる、かわいいー」

小夜が無邪気に笑った。

照れ隠しだ？ テメかえりに棄ててくぞ

出掛かった罵声は口にしなかった。

「もうすぐ終わりだな」

「うん。あと一曲、それでアンコールがあつて……」

小夜の言葉は最後まで聞こえなかった。

突然、場内アナウンスが入ったのだ。

ご来場の皆様、大変申し訳ございません

ただ今警察及び消防から、本会場が危険な状態に置かれつつあり、お客様の安全を計るため避難が必要との連絡がございました

係員の誘導に従い、速やかにご退場下さいますようお願い致します

会場内が騒然となり、観客が一人二人、出口目指して走り出した。あっという間に人数が増える。

隣りのアンチャンが駆け出そうとするのを足を引っかけ倒した俺の頭は、一瞬で邪魔屋に戻っていた。

なんだってんだ

危険な状態だと？

『ゴミ』か！？

「パニくるんじゃねえ！ 出られなくなるぞっ！」

目一杯怒鳴ったが、ケツの穴のちいせえ連中はソッコー出入り口に殺到して大渋滞を巻き起こしていた。

ダメだ、どうしようもねえ

こんな大人数、どうしろってんだ

あやふやアナウンスしやがって、パニックってくれって言ってるようなもんじゃねえか

対処法を頭ブンブンいわせ考えてた俺の耳に、あの澄んだ声が響いてきた。

「みんな！ あわてないで、ひとりずつ外に出てくださいっ！ ワタシみんながちゃんとでるまで、ここでみえていますから。大丈夫、なにも起こりませんよ、ワタシがついてるから」

思わずステージを振り返った。

フリルの可愛いスカートをはいたおさげの女が、マイクを握りしめたままステージに突っ立っていた。

あの声の主……

バカか、あのオンナ！

スタッフはなにやってやがる！！

誰も彼女を連れだしにこなかった。女はただジッと観客席を眺めている。

「小夜、こいっ！」

「え？ なに！？」

「いーからこいっ！！」

小夜の手を引っ張って俺はステージに向け駆け出した。

第二十章 粘影（前編）

第二十章 粘影（前編）

人の流れに逆らっていたのは始めだけだった。

出口と反対に走る俺達の前から、人影はすぐにはなくなった。

警備員はレミング化したオタクの群れに押し潰されまいと必死の抵抗を試みていた。

もはや避難なんてもんじゃない、キモオタどもの暴動だ。

小夜の手を離しステージに飛び乗った。

おさげの女が俺を見る。

怯えの色……

だが真っ直ぐな視線は瞬きもしない。

お守りのようにマイクを固く握りしめていた。

「にげろっ！」

「？」

小首を傾げた。修羅場に似合わぬ仕草だった。

「ヤバいんだ！ わかんねえのか！」

そのままじっと俺を見ている。

つぶらな目がライトを照り返し美しく光っていた。

うつくしく、だ？

なに考えてんだオレは

狼狽えながら女の手を掴んだ。

「こいっ！」

「ダメ！ ワタシここでみんなが逃げるまでまってる！」

「アホか！ ヤバいんだぞっ！！」

「ヤバいって、なにが？」

言われて気が付いた。そもそも『危険な状態』ってなんだ、と。

状況把握……相手と自分の力量を冷静に秤に掛ける……そして行動。

邪魔屋の鉄則が脳天辺から降ってきた。

くそ！ オレとしたことが

今度は落ち着いて話しかけた。

「何かが起こってる。マジかイタズラか知らねえが、こんな所でパニックを引き起こさせるような何かが。いいことじゃないぐらい、アンタにも判るだろ」

光を湛えた瞳が別の色を浮かべた。

「スタッフが誰も連れにこない、絶対にヘンだ。だからここから出る。わかるな？」

今度はこくりと頷いた。

その時やっと小夜がステージへと這い登ってきた。

ゼィゼィ言いながら、それでも目をキラキラさせて近寄ってくる。

「あ……あの……ほ……穂月奈々さん……ですよ、ね？ あ……アタシ、ナナちゃんの大ファンなんです！」

手を握ろうと飛びついてきた小夜の頭を思い切りグーパンチした。

「○△◇☆ッ！！」

「アホかっ！ 逃げんだよっ！！」

女二人の手を纏めて掴んで引っ張った。

「いったあ〜……ひどいよジャミィ〜」

「いいからこい」

「どこへ？」

「確かめておきてえことがある」

二人の手を引き舞台袖から階段を下った。通路までゆくと、廊下の途中に半開きのドアが見えた。

控え室の表示。二人が転ばぬ程度に走ってゆき、そのまま中に入った。

女どもが息を呑んだ。

部屋じゅうに人が倒れていた。

第二十章 粘影（中編）

第二十章 粘影（中編）

女が俺の手を振り払った。

倒れている連中に駆け寄り、片端から身体を揺さぶってゆく。

「佐野さん！メイちゃん！！みんな……みんなどしたのっ！？起きて、おきてよっ！！」

半狂乱の女と立ち尽くしている小夜をそのままに、俺は床に転がっていた瓶を拾い鼻を近づけてみた。

それからテーブルのお茶、紙コップのジュース。思いつくまま嗅いでみる。

甘い匂いなら要注意だが。

湯呑みに残った茶を指ですくい、舌になすりつけてみた。

微かに粉っぽい。

「……これ……みんな……しんでる……の……」

小夜は真っ青だった。

「触ってみろ」

「ええっ？」

「いやーから。胸に手えおいてみろ」

ぎくしゃくと前に出た小夜が、足元に倒れた女の胸に手を置いた。

「……うごいてる。心臓、どっくんどっくんいってるよ」

ほっとしたような表情で俺を見た。

「眠ってるだけだ」

「ねむる？」

「睡眠薬だ。溶けきらないで残ってやがる。茶にもドリンクにも」

便利屋のジジィならともかく、俺に見破られるような混ぜ方などまるっきりど素人の手口だ。

ショーの最中、戦場のように慌ただしいスタッフにしか通用しない手口だった。

小夜を立ち上がらせ、悲鳴のように叫びながら倒れた人間を揺さぶり続ける女を指差した。

「アイツを連れて外に出ろ」

「ジャミーはどうすんの？」

「コイツら起こしてく。救急車も呼んだほうがいい。建物の裏で待ってろ、すぐいくから」

「まさか、こんなことしたヤツ捕まえる気なの？」

ひたと俺を見返してくる。

小夜の眼差しに妹の姿がいきなり重なった。

すぎるような眼が、無力な俺を恨めしく射抜いていた。

不意打ちだった、何の警戒もしてなかった。

衝撃は、膝が震える程の動揺となり俺を襲ってきた。

「……ぶ……ぶあつかやろう！ おっ俺がそんなコトすんわけねえだろがっ！ いいから早くいけ！！」

走り去る足音が消えるまで、ただっ立っていた。

外からはまだレミングどものざわめきが波打って響いてくる。

小夜子……おまえ……まだ成仏出来ないのか

もう許してくれ

おまえを助けられなかった兄ちゃんを許してくれ

床がぐにやりと歪む感触がして、机の端を掴みかろうじて身体を支えた。

何度も何度も頭を振り自分を殴って、つきまとう妹の幻影を部屋から追い出した。

捜すんだ

何処かで見ている筈だ……醒めた目が

俺はよろめきながら部屋を出た。

第二十章 粘影（後編）

第二十章 粘影（後編）

大脱走した筈のオタクどもが建物の裏側にも姿を現していた。

通用口から顔を出すと、小夜と女は20人近いオタクに囲まれていた。

警備員は遙か向こうで大集団と格闘中だった。

ぐっと胸を張り背筋を伸ばして辺りを威嚇した。

「みなさあーんっ！ 避難命令が出ていますっ！ 警備員の指示に従って避難してくださいっ！！」

大声を張り上げながら極悪顔でオタク集団を睨みおろしてやった。

片っ端からガンづけしてやると、行儀のいい小市民連中は素直に女どもから離れていった。

勿論、俺の迫力だけでなく控え室でくすねてきたスタッフバッチが威力を発揮しての事だったが。

「遅いよジャミー、もう大変だったんだからあ」

「すまねえ、救急車呼ぶのにちよいと手間どったんだ」

「でも無茶しなかったんだ。ちゃんと来てくれてアタシ安心したよ」

覗き込んでくる小夜の目にまた妹の亡霊が見えそうな気がして、俺は慌てて視線をそらせた。

「あの……助けてくれてありがとうございます」

俺の前に立つと、女が深々と頭を下げた。

「ワタシみんなが倒れてて……動揺しちゃって……その……」

「気にすんな。あんな光景見せられりゃ取り乱すのが普通だ」

手をヒラヒラ振り、俺は向こうで警備員に突っ込んでゆくオタクどもを睨んだ。

「気にしないで！ アタシたち二人ともナナちゃんのファンだから。危ない目にあったら助けてあげなきゃって思うの当たり前でしょ」

「そう、なんですか？」

女の疑問は俺だけに向けられていた。そりゃそうだろう。

どう見ても俺はアニオタには見えないからな。

女を見下ろした。

「ファンじゃねえ、ただの付き合いだ。でもあのバラードはよかった。CD買っていい」

「本当ですか？ アリガトウ！」

女の視線が熱を帯びた。同時に、小夜の視線が冷たくなるのも感じた。

何なんだコイツら……

二人の視線を無視し、もう一度オタクどもへ目を戻してみた、その時。

いた

一人だけ立ち止まり、じっとこちらを見ていた。力士のようにでっぷりとした男。

粘りつくような視線を無遠慮にこちらへ投げかけている。

おまえか

そのカオ、おぼえたぜ

糸を引く視線を残し、男は群衆に紛れていった。

第二十一章 人形崩し（前編）

第二十一章 人形崩し（前編）

暫くの間、バラバラと近付く奴らを追い払っていた。

やがてパトと救急車が並んで正面入り口につけると、白いヤツ黒いヤツがどやどやと建物の中に踏み込んでいった。

ようやくと仕分けされたオタクどもが、遠巻きにそれを眺めている。

通用口からやっと一人、一服盛られなかったらしいスタッフがこちらへ駆けよってきた。

「大丈夫ですか！？ 中はもう大変で」

頭頂部がだいぶ淋しくなった男が、目をまたたかせながら俺達を見た。

「上条さん、みんなは？」

穂月とかいう女が聞き返した。

「いま救急隊員が見ています。飲み物全部に睡眠薬が入ってたらしくて。いったい誰がそんな事を……」

バックレるタイミングだった。

俺は二人の会話に割り込んだ。

「救急車はオレが呼んだ。アンタは彼女を連れて戻ってくれ」

「あなた、会場スタッフですか？」

「ああ。おかげで変なモン飲まなくてすんだ」

さらっと答えながら素早く女に目配せした。

何か言いかけた女が、口をつぐんで小さく頷いた。

「じゃあ、あとたのんます。オレはこの娘をそこまで送ってくんで」

「そのコは？」

「オタどもから彼女を守ってたんですよ、こんなに小さいのに。誉めてやってください」

小夜の頭をガシガシと撫でた。

嬉しそうな顔が俺の手の下でクシャクシャになった。

「そうですか、イヤありがとう！ お礼くらいしたいが、この有り様じゃなあ」

「いいから、早く行って下さい」

「わかった。じゃ」

上条と呼ばれた男が、女の手を掴み通用口の方へ歩きだした。

女は何か言いたげに何度も振り返りながら引っ張られてゆく。

「引き上げるぞ、小夜」

こちらも名残り惜しそうにしている小夜の肩を叩いた。

「なんかもうチョットああしてたかったなあ。ジャミーに誉めてもらえたの、ウレシかったケド」

「サツに絡まれるとやっかいだぞ。痛くもないハラ探られるのはゴメンだ」

サツという言葉に小夜の身体がビクンと反応した。

「……いく。アタシもヤダ、あいつら……」

さっきまで上気していた顔が酷く強ばっていた。

少し躊躇って、聞くのを止めた。

誰だって臍に傷くらいある。

その時、女がこっちへ駆け戻ってきた。

第二十一章 人形崩し（中編）

第二十一章 人形崩し（中編）

あの！

スママセン！

女が軽く息を弾ませながら俺達の前まで来た。

「ワタシなんのお礼も出来なくて」

「んな事ぁいい、早く戻れ。まだ何かあるかわかんねえんだぞ」

少しだけ語気を強めた俺の言葉に怯んだ女は、それでもキッと目をあげ小夜のほうを見た。

「ケータイ、ありますよね？」

「え、あ、ハイ」

「だして」

小夜がおずおずと出した携帯電話の先に自分のそれを重ねた。

「アドレスと番号、送って下さい。ワタシのも送るから」

赤外線通信はあっという間に終わった。

「あとで連絡します。今日はホントにありがとう！」

深々と頭を下げると、バツタみたいに飛び起きた女は、突っ立ってこちらを見ていた上条とかいう奴の方へと走り去った。

「うそ……ナナちゃんのアドレス……電番、ゲットしちゃった……」

惚けている小夜の背中をどやしつけた。

「こんなトコでイっちゃうんじゃねえ、いくぞ」

脇にひっ担いで走り出した。とにかく今は、ここを離れるのが先だった。

◇

地下鉄を避けた。

差し迫った危険の予感は無かったが、逃げ場の無い地下鉄が嫌だった。

今日のゴタゴタで神経質になっていたのかも知れない。JRの市ヶ谷駅を目指した。

いくら俺でも、武道館から市ヶ谷までの道のりを女ひとり抱えていけるもんじゃない。

靖国通りに出たあたりで小夜を降ろし、後ろからせつつきながら夜道を歩き始めた。

「おら、ちゃっちゃと歩けよ」

小夜はまだどこかアサッテの雲の上をさまよっていた。

「なんかさあ、ナナちゃんに会えたらもう……カラダのちから、抜けちゃった感じなのよねえ～……」

「わかったから、いけ」

まるで宝物のように胸元の携帯電話を抱いたままフワフワと歩く小夜に、俺はいい加減イライラし始めていた。

俺達同様、市ヶ谷を目指し歩いている連中はいた。

あの騒ぎの最中、俺や小夜がやっていた事を見てた奴がいるかも知れない。

下手に顔を憶えられたりしたら後がやっかいだった。

暫くして懸念が現実になった。

声を掛けてきたのは、隣りに座っていた奴.....俺が足をかけスッ転ばした男だった。

ほれみろ

俺は目を細め身構えた。

第二十一章 人形崩し（後編）

第二十一章 人形崩し（後編）

奇抜なシャツを重ね着した男は、斜めに立って俺達を見ていた。

「あんた、足ひっかけたよな？」

金髪ボリボリ掻きながら聞いてくる。

「ならどうした」

睨み返ししながら、さりげなく立ち位置を変え小夜を後ろに置いた。

少しの間、そいつは俺達を値踏みするように眺めていた。

小さな目がすぼまり……

ニッと笑った。

「あんがと」

「は？」

「たすかったっち」

「へ？」

「オレ、転んだんでいきてるってかなあ」

「ほ？」

「たいへんだったんす、将棋倒しのブタメンどもがグッチャングッチャンで。オレ逃げ遅れたんでたすかったっち」

「はあ～……」

ワケワカメな言葉使いだが敵意は無いようだ。俺は肩から力を抜いた。

「あんたカッコよかった！ そのコ連れてステージへはしってったじゃん、右手のほーから。左手はけっこうなブオタがいたから、身動きとれめーし。スッパマンみたいだったぜよ！」

男は妙に興奮してまくし立てた。

よく見てやがる……

あの混乱の中でそこまで観察してる。

見かけチャライし言葉は滅茶苦茶だが、見る目が少しだけ変わった。

同時に別な警戒心が沸き起こった。

「そのあとも見てたのか？」

「え？ あれから？ ムリムリ、オレもうちょっとで隣りのデブの下敷きになるとこだったんよ、めっちゃ大ピンチ！ ってなカンジで」

肝心な所は見てないらしい。

今度こそ俺は警戒を解いた。

「助かったならよかったよ」

「ウスッ！ サクッす！」

なんか脱力しちゃった俺の影から小夜が顔を出した。

「……ねえアンタ、ことばヘンだよ……」

「うっさいメイドッ！ おれっちアニキと話してんじゃん！」

「あ、そ。アンタもナナちゃんのファンなんだ」

「ナナちゃんいうな！ ほっチャンていえっ！」

気がつくと、俺を挟んでワケわからん同士が意味不明のファン談義をおっぱじめてた。

ああ……

いますぐかえりてえ

「でもさでもサ、今日の選曲よかったじゃん！ 一曲目から『星のトレイン』だよ！！」

「そっかなあ～、ボクちん物足りなかったぞん。それに」

「それに……なにさ？」

「なんか今日のほっチャン、中身ぬけちゃってた。ヒトガタみたいだった」

男が、急に遠くを見る目になった。

第二十二章 盲心暗流（前編）

第二十二章 盲心暗流（前編）

そっかなあ

すごい燃えてたよ

今日のナナちゃ……ほっちゃんって

言い直しながら小夜が男に異議を唱えた。

「ウン、盛り上がりはサイコーだったケド。なんて一のかなあ、オレ萌えなかった」

男が下げさなくらい眉を寄せて言った。

何か引っかかり、俺は口を挟んでみた。

「なんか気になる事でもあったのか？ オマエ……」

「あ、おれ三四郎。須藤三四郎。シローでいいっすよ、アニキ」

「アニキはよせ」

「じゃあ、なまえ何つーんすかあ？」

「ジャミーでいい。コイツもそう呼んでる」

後ろの小夜を軽く小突いた。

「ゲージンっすね、カッチョエエなあ！ なんかサッソーとしてっし……HKみたいだ」

「エッチケー？」

「知らないんっちゃ？ ネットで噂っすよ。『人殺しや強姦野郎を人知れず殺して回る現代の必殺仕事人』って」

背中で血が音を立てて雪崩れ落ちた。

桐原実……俺が手にかけた男……の言葉がいきなり脳裏に蘇った。

『頼めば殺人者を殺してくれる奴がいる』

「ジャミー、どしたの？ なんか顔、青いよ」

心配そうに小夜が脇をつついてきた。

「……なんでもねえ」

無理矢理、動揺を抑え込んだ。

「ハンターキラーが語源らしいっすケド、まあ都市伝説ってヤツ？ そんで……」

「んな話はどうでもいい。シロー、オマエが萌えなかったってのは何でだったんだ？ さっき言ってた『中身ぬけてた』のせいかな？」

話を戻そうとする俺にシローはすぐ乗ってきた。コイツにとってはそっちの方が重大事なのだろう。

「そうっす。ほっちゃんいつもステージ出てくる時は、目つむって、お祈りするカンジでくるんすよ。ジッと始まりを待ってるってーんか……あの姿がもう女神サマみたいでチョー可愛い！ 萌えるっす！！ でも今日はスポット当たってすぐコッチ見たっちゃ、なあ～んかキョドってたし、あれでもうガックシもんだったんす」

「キョドってたって、何かに怯えていたとかか？」

「わっかんねえ。でもゼッターいつもと違ってた」

そうか、と納得した。

コイツの勘違いや妄想じゃなきゃ、あの女はステージに出る前から何かを察知していたか、少なくとも予感していたことになる。

騒ぎは始まってたんだ、とっくの昔に。

第二十二章 盲心暗流（中編）

第二十二章 盲心暗流（中編）

チンタラ歩くオタク二人組は時折俺にも話題を振ってきた。シカトする気すらおきなかった。

そもそも俺にやついてけない。ひたすら相槌を打って凌ぐしかなかった。

シローとは市ヶ谷駅前であ別れた。

身体がすげえ軽くなった。

電車を待つ間、まだ喋り足りない小夜が隣りで話すのをボンヤリ聞きながら、俺は別の事を考えていた。

◇

スタッフの殆どは眠らされていた

まともだったのは警備員と、あの上条とかいう男を含めほんの僅かの連中だけだった

広い会場

顔も判らないスタッフ

目印はバッチ位しかない

そいつらを一人残らず睡眠薬漬けに……

一人でやれるか？

そしてシローの言っていたこと

あの女が何か事前に知っていたとしたら

しかも、それが他人に明かせないものだったら

脅迫

身近な人間達も含めた、直接的な行為までご丁寧にあげつらった事前通告があったとしたら

誰にも相談出来ない、追いつめられた状態での女はステージにあがっていた

辻褄は合う

◇

そこまで考えて我に返った。

よその『街』のことになに首突っ込んでんだ

俺には自分の縄張りがある、それだけで手一杯だし充分だ

『ゴミ』なんざ何処にでもいる

あの女がどうなろうと俺の知ったこっちゃない

ポケットの携帯電話が震えた。耳屋からだった。

あっちいってろと小夜に言い、送話口を手で覆いながらホームの端へと歩いた。

『『ゴミ』だ、ぼん。1時間で戻れ』

「今からかよ？」

「Bランクがはねっ返りやがった。梟どもが張り付いてるが、繁華街へ移動し始めてるらしい」

フクロウってのは耳屋が使ってる連中だ。

『街』が飼ってる耳屋に飼われてる。

情報源だが、ノミやダニの同類だった。

「足止め出来ねえか？ 10人もいりゃ……」

「んな事できんなら梟なんぞやってねえよ、奴らは。とにかく逃げ」

携帯が切れると同時に電車がホームへ近付いてきた。

離れてた小夜がこっちを見て……

ジャミーうしろっ！！

俺が振り向くのと、滑り込んできた電車に人影が飛び込んだのは同時だった。

警笛とブレーキ音が夜の駅に響き渡った。

第二十二章 盲心暗流（後編）

第二十二章 盲心暗流（後編）

相変わらず閑口鳥が鳴きまくってる耳屋の店でコーヒーを飲んでいた。

夕べの『事故』はしっかり新聞に載っていた。

◇

あれから大変だった。

玉砕ダイブかました馬鹿のおかげで、目撃者として引き留められるわ、事情聴取されるわで散々な目にあった。

勿論、住所や職業は嘘八百並べたてておいたが。

遅れを取り戻すためタクシーに特急料金払って街へ戻ったまではよかったんだが。

『ゴミ』野郎を見つけ、いつも通りやるつもりが結構ヘビーに潰してしまい、くたばるようなら水草屋に始末させとけと電話の向こうの耳屋へ嫌味たっぷりに告げて、寝ぐらと反対方向へ足を向けた。

一晩中ウロウロと街を彷徨い、空が青白く明け始めた頃、俺は耳屋の店を訪ねたのだ。

◇

「悪かったな、で～との最中に」

気色悪い声で耳屋が言った。

「じゃねえよ。ひでえ目にあったぜ、付き合いのコンサートじゃ大騒ぎ、帰ろうと思えばオタクどもに絡まれるわ電車で飛び込むバカはいるわ、やっとなら駆けつけてみりゃ『ゴミ』はヘタレ過ぎて死にそうになるわ。タクシー代は必要経費だよな？ おっちゃん」

「知るか。『街』に請求してみろよ、どやってやんだか知らねえが」

「すっ飛んで来たんだぜ！？ 奴らにや払う義務あるだろーが！！」

「奴らって誰だ？『街』は『街』だ。誰でもねえ」

「そういう話にしたいんならいい。考えただけでアタマ痛くなる。報酬でガマンしてやるよ」

「そうしとけ」

耳屋は脇を通り過ぎぎわ、俺が読んでる新聞を指で弾いた。

「なんだよ」

「随分、熱心に読んでるじゃねえか。あの騒ぎの事か」

「おっちゃんには関係ねーだろ」

シカトしようとする俺を無視して、耳屋は新聞を覗き込んできた。

「そのナントカいうねえちゃん、脅迫されてたんじゃねえか？」

驚いて顔を上げた。

「知ってたんか！？」

「どアホ。んな事あちっと考えりゃ誰でもわかる。状況が不自然過ぎるわ」

耳屋の分析力に舌を巻いた。

「まあ、テメエには関係ねえ事だ。新聞読むくらいにしとけ。他にやる事あ幾らでもある」

しっかり釘を刺された。

刺されたが.....

「気になる奴を見た。調べらんねえかな」

「そこまでだ。よその『街』の事に首、突っ込むんじゃねえ」

耳屋の言葉はいつになく厳しかった。

第二十三章 孤走（前編）

第二十三章 孤走（前編）

オンボロアパートの階段を登り、角部屋のドアをロックした。

だれ？

蚊の鳴くような女の声。

「オレだ」

「……じゃみい？」

「あけるよ」

細く開いたドアの隙間から小夜が顔を覗かせた。

「仕事あがりにファミレス寄ったらよ、ここ2日ばかり休んでるってーから、ちょっとな」

「……うん……」

「差し入れだ。たい焼きだけど」

「アリガト。ちょっと待って」

隙間が閉じ、物を動かす音がひとしきりすると、今度は大きくドアが開いた。

淡いピンクのパジャマにセーターを羽織った小夜が玄関に立っていた。

目の下にべったりと隈が貼り付いている。

「あがって」

狭い玄関口で靴を脱ぐと、目の前のテーブルにあるポットに手を掛けながら小夜が聞いてきた。

「紅茶しかないけど、いい？」

「もらうよ」

そこに……と指差された椅子に腰掛け、首を巡らし部屋を眺めてみた。

六畳ほどの、こじんまりとしたキッチン兼ダイニング。隣の部屋との境らしいガラス戸は閉められ、奥がどうなっているかは判らなかった。

片づいていても何故か乱雑な感じがするのは、流しの食器が積み重なっているからなのか、洗濯機のカゴから洗い物がはみ出しているせいなのか。

「あんまり見ないで、散らかってるから」

「すまねえ、いきなり来ちまって」

「ううん、嬉しい、来てくれて。でもずっと横になってたから」

「目の前でひとひとりミンチになるの見ちまったんだ、調子も悪くなるさ。気になってたんだ、オマエに謝んなきゃな、って」

「ジャミーが？」

「ああ。あの日『仕事だ』ってほっぽり出していっちゃったからな」

「いいよ。おかげでタクシー乗せてもらえたし。助かっちゃったから」

テーブルを挟んで座った小夜がカップを差し出してきた。

「いい匂いでしょ。アールグレイ。好きなんだ、これ。ジャミーはコーヒーのほうがいいかも知れないけど」

「眠れないのか、オマエ」

自分のカップを両手で包み、うつむいた小夜は何も言わなかった。

「ショックだったろう。無理に寝ようとするよけい眠れなくなるぞ。こーいう時はなんか楽しいコトでも考えて……」

「二度目だよ。これで」

小夜が顔をあげ俺を見た。

第二十三章 孤走（中編）

第二十三章 孤走（中編）

「ひとつてさ……マネキンみたいにバラバラになるんだよね……手も足も頭も綺麗にちぎれて飛んでく……違うのはほかの汚いモンもいっぱい飛び散るってトコ……」

表情の無い顔が真っ直ぐに俺を見ながら、凄惨な言葉をさらりと吐いた。

「ジャミーはあるんだね、みたこと」

断定だった。

「あるよ」

何度もなという言葉を紅茶と一緒に飲み込んだ。

「だから我慢できたのかな。アタシはダメ、あんなの二度と見たくなかった」

「災難だったな」

「どっちが？」

「どっちって」

「一度目のこと？ それとも二度目？」

「どっちもだろ、オマエには」

「ママだったの。一度目のほう」

カップを持ち上げかけた手が思わず止まった。

「三年くらい前、かな。自殺しちゃった。アタシって運、悪いんだ。丁度ガッコーから帰ってきた時。あと一本早い電車だったら止められてたかも。最悪、あんなモン見なくて済んだ筈なんだよね」

相変わらず何の表情も見せず小夜は話し続けた。

怒りも、哀しみも、後悔もない顔。

怖い顔だった。

「あれからひどかった。アタシ家に帰らないで友達とこあっちこっち泊ってた。帰れなかったんだ.....そしたらアイツが.....」

「もうよせっ！」

自分で驚くほどデカイ声で怒鳴った。

話よりも、俺を見る小夜の顔に耐えられなくなっていた。

「なんでベラベラ喋る？ オレはオマエの事なんぞなんも知らねえ、知りたくもねえ。クソ生意気でオシャベリでワケわかんねえアニオタのウェイトレスだってだけだ。ちっとくらい関わったってだけでよ、そんな話アカの他人に語って聞かせるんじゃねえ」

「.....いいじゃん.....」

「？」

「はなしたっていいじゃん.....聞いてくれたっていいじゃん.....知ったっていいじゃん！ ワケわかんなくっていいじゃん！！ わるいかよお！！！」

なにもなかった顔から一気に噴き出してきた。

蛇のような。鬼のような。得体の知れないもの。

般若

「てめえになにわかるってんだ！ 耳ふさいでろっ！ 目えとじてビクビク街はいずってろ！ なんも見えてない変態野郎が説教垂れんじゃねえええ！！！」

飛んできたカップが頬をかすめ玄関で粉々に飛び散った。

第二十三章 孤走（後編）

第二十三章 孤走（後編）

テーブルの上の、ありとあらゆるものが飛んできた。

止めなかった。

ポットが右目に命中し火花が散ったが、それでも何もしなかった。

流しに走っていった小夜が包丁引っ張りだしても動く気になれなかった。

高々と振り上げ、ふうふう言いながら投げる構えをする小夜に、ひと声だけかけた。

いいぜ

荒い呼吸を繰り返し、目をつり上げた小夜を黙って眺めてた。

そのまま待った。

◇

どれくらい時間が過ぎたか。

差し込む日差しは赤味がかってきていた。

振り上げていた腕をがくんと落とし、床にへたり込んだ小夜の手から包丁が離れた。

憑き物が消えた顔はグシュグシュに濡れていた。

前に膝をつき屈み込んだ俺を、小夜は不思議なものでも見るような目で見ていた。

「きったねえツラだなあ」

落ちてたタオルで顔を拭いてやる。

「……血、でてる……」

「気にすんな。慣れてる」

目蓋が切れて血が滴っていたが、しみるだけだ。

「ゴメンね、アタシ……」

「溜め込むなよ。吐き出せ。何でもいい、コンサートでもコスプレでも。暴れたくなったらオレを呼べ」

「ヤダ、ジャミーに怪我させるなんてやだよ」

「もうやったじゃねえか」

精一杯カラッと笑ってみせた。

血だらけの顔じゃすげえ事になってるかも知れないが。

「アタシ、家出してんだ」

「だろうな」

「ホントに知りたくないの？ アタシのこと」

「話す気になったら聞いてやるよ。でも今日みたいなのはゴメンだ」

「……わかった。ちゃんと話すね、いつか、ちゃんと」

「おお、いいぜ」

肩を抱いて小夜を立ち上がらせた。ガラス戸を引き開けようとするのを止められた。

「ダメ。そっちは恥ずかしい」

「バカ。気にするかよ、オレが」

構わず開けた。

一瞬、呆気にとられた。

てっきり寝乱れた布団やら散らかった部屋があると思ってたが、違った。

何も無かった。

壁にあの穂月とかいう声優のポスターが貼ってあるだけ。床には寝袋と枕が転がっていた。

それでも、小夜を座らせ横たえた。頭をひとつ撫でてやる。

「今夜は眠れる。ぐっすり寝ろよ」

「キスして。そしたら眠れる」

「調子にのんなアホ」

笑いながら部屋を出た。

もうすぐ夜だった。

第二十四章 次の闇（前編）

第二十四章 次の闇（前編）

ったく

来月はクリスマスだってのに

アホか、どいつもこいつも

年末が近付くと『ゴミ』も増える。

邪魔屋は大忙しだ。

ここんところ毎日、休む暇も無い。

何人『始末』したか……

直接、手を下す訳じゃない。いつも通りだ。

だが冥土逝き特急券の大サービスってのは、身体ひとつしかないこっちにゃトンでもない重労働だ。

ひとりだけつけ回してりゃいいストーカーなんぞ花畑の散歩ババァと同じさ、気楽でウラヤマシイぜ。

ブツブツ言いながら耳屋の店に入った。

そこからシステム手帳をブン投げた。

背中に命中するのと耳屋が振り向くのは同時だった。

「投げんじゃねえ」

「っせえ！ オレ殺す気かよ、なんだよこの『ゴミ』の量は！？」

「知るか、聞きたきゃ『ゴミ』どもに聞け」

「あらからくたばったぜ。あの世まで聞きに逝ってか？」

「チューチュー百鬼夜行にでも乗ってけよ」

いつかコロスと思いながらドカンとソファに腰を降ろした。

「大したもんだよ、ぼん。二週間で6人か。新記録だぜ」

「自慢出来るこっちゃねえだろ、俺らの『仕事』は。それにあと4人残ってる」

「このペースなら時間の問題だな、そっちも」

「カタついたら少し暇もらうぜ」

「あん？」

「ちょっとよ、調べてえことがあるんだ」

こっちを見た耳屋が露骨に顔をしかめた。

「なんだよ、そのカオは」

「てめえが気にしてる事っていえば、アレしかねえだろ。まだ引っかかっているのか？」

「ああ。どーにもーこーにもな」

「よその街の事だって前にも言った筈だぜ」

「判ってる。判ってるケドよ」

「けど……何だ？」

足を組み直して天井を仰いだ。

「なあおっちゃん。俺たち『街』に飼われて『街』の利害の為に動いてるんだよな」

「おう。それがどーした」

『『ゴミ』が湧いたら、その『街』の邪魔屋が『始末』する……』

「今更なんなんだ？」

「もしよ、よその『街』の『ゴミ』が俺らの『街』に来るってわかってたら、おっちゃんならどーする」

「なんだと……」

顔を降ろすと、耳屋の視線が刺さってきた。

第二十四章 次の闇（中編）

第二十四章 次の闇（中編）

「前から思ってた。おっちゃんの持ってくる情報、ありや余所の『街』からのモンもある。多分、どの『街』にも耳屋がいて、連絡取り合ってるんじゃないかって。そうやっておいしいネタつまみながらよ、てめえんトコの利害を秤にかけて邪魔屋に『始末』させてる」

「それで？」

「便利屋が言ってたぜ。街の意思ってのは、不特定多数の何だかわかんねえ共通した意識のことだって。それを誰かがボンと後押しするんだと。つまり一人とかわんねえってコトだ」

ソファから立ち上がり、ポケットから出した両手を脇に垂らした。

「情報を握り、実行まで一手に引き受けてる。『街』ってのはつまりおっちゃん……アンタのことじゃねえのか」

何か飛んでくるか。

あるいは切ってくるか、突いてくるか。備えた。

口封じ。

座ったまま殺られるつもりはなかった。

耳屋はじっとこちらを睨んでいる。

店の中の空気が張りつめていた。

寒く感じるのは暖房がきれたからだろう。

それでも手が汗ばむのを感じた。

◇

「……悪くねえよ、ぼん。悪くねえ……」

しばらくして耳屋が口を開いた。

「なにが悪くねえんだ」

「読みが利くってのは、生き残る為にや大事なこった」

「じゃあやっぱり……」

「落第、だ」

「？」

『街の意思』の端っこに俺が関わってるってのは確かさ。だが情報のつまみ食いなんぞやっちゃいねえし『街』を裏で牛耳ってもいねえ。それ程大物じゃねえよ。ま、永く関わってりゃ特典くらいはあるがな」

「じゃあ残りはブブーか」

「耳屋はこの『街』にしかいない。なり手がいねえんだよ。梟みたいな奴らなら腐る程いるがな」

「余所の『街』への繋ぎは？」

「邪魔屋たちが自分でやってる。俺は知らせてやるだけさ。見返りに奴らからも情報が得られる。持ちつ持たれつ、さ」

「それだけじゃねえだろ」

「梟なら余所でも飼ってる。今んとこそれで充分だ」

耳屋は淡々と語っていた。

俺はそっと身構えを解いた。

『『ゴミ』が何処にいても見つけられるのは、邪魔屋どもがおっちゃんに情報を流しているからか。でもよ、肝心の連中が見逃したりドジったりしたらどーする」

「……」

「イベント、コンサート。人に隠れて『ゴミ』は移動する。くるぜ、ここにも」

テーブルにチラシを置いた。

第二十四章 次の闇（後編）

第二十四章 次の闇（後編）

「なんだそりゃ」

「コンサートさ。全国ツアーってやつ。あの声優のだ」

「おい……」

何か言いかけた耳屋を手で制した。

「こないだの船の時もそうだったけどよ、おっちゃんの情報は早いときは異常に早い。でもそれ以外の時はフクロウども総動員して『街』のケツっぺたを舐め回してるんだろ」

「それが情報戦ってモンだ」

「ならあの武道館の騒動、続報入ってるんか？」

耳屋は何も言わなかった。

言える筈がない。

「おっちゃんのこった、自前の情報くらい集めてるんだろうがよ、あっちの邪魔屋からなんも言ってこねえんじゃねえか？ だから無関心なフリしてた。網にかかるまで動きようがないってこったろ」

何も言わせなかった。

それだけの確信が俺にはあった。

「おっちゃんの情報にはムラがある。今までもずっとだ。急ぎ仕事は何度もあったし、手の出しようがない時はシカト決めこんでた」

「……いつからだ」

耳屋がやっと口を開いた。

「ミノルを殺っちまった頃から。アンタの動きを不審に思うようになった。それまでは闇雲に『ゴミ』始末する事しかアタマになかったからな、気がつきようもなかったぜ」

「信用できねえか、オレが」

「自分のアタマもちったあ使ってやろうって気になっただけだ」

耳屋が舐め上げるような目で俺を見た。

上から見下ろしながら、俺はいい気になってたのかも知れない。

少なくともその時、俺は耳屋の視線の意味に気付いてなかった。

「で？ ぼんのアタマで考えた絵図ってのはどうなってんだ」

「たぶん、前から脅迫はあった。おっちゃんの言った通りさ。でもコンサートが開かれたってことは、他のスタッフは何も知らされていなかったってことだろうよ」

「それで？」

「実行したのは複数犯だ。最低でも二人、うち一人があの日、口封じで殺されてる。俺の目の前で。小心者が飛び込んだだけかも知れねえがよ」

「続ける」

「殆どのスタッフに睡眠薬が盛られた。あれが毒で死人でも出れば確実に『邪魔屋』が動いただろーがよ、眠らされただけってのはビミョーなとこだな」

「……」

「見ろよ。来月、この街でコンサートが開かれる。奴は来るぜ、必ず」

耳屋が唸った。

第二十五章 再会（前編）

第二十五章 再会（前編）

「元気になったみたいだな」

「うん。なんとか、ね」

毎度おなじみのファミレス。

小夜の顔は少しだけ白かったが、部屋を訪ねた時よりはかなりマシになっていた。

いつものハジけたお喋りはない。

しおらしくコーヒーを注いできた。

「今日は早いね。仕事終わったの？」

「いや。それはいいとして、小夜、時間とれねえか」

「え……ウン、いいケド。なんで？」

「あの穂月って声優の件だ」

短い間、意味ありげな目で俺を見ていた小夜が小さく頷いた。

「お昼過ぎたら店の裏にきて」

「すまねえな」

「ううん、こないだのお詫び、しなきゃならないなって思ってたから」

小夜の指が右目の上に触れた。

「傷跡、すごくなっちゃったね」

「これぐらいのほうが箸がついていいさ」

じゃあ、あとで。

薄く笑いながら俺は席を立った。

◇

ファミレス裏にある駐車場の隅で、制服の上にダウンを羽織った小夜が俯いて立っていた。

「悪いな。こんなトコで待たせちまって。ホラ」

缶のおしるこを渡し、俺も自分の缶のプルトップを引いた。

「ナナちゃんの事って、なに？」

「あんときオマエ、あの女とメアド交換とかしてたじゃねえか。あれから何か連絡とったか？」

「ううん、特には。なんか気が引けちゃって。恐れ多いっていうか……判るでしょ？アタシあんなだったし」

「そっか」

「あ、でもシローからはメールきたよ。『こらメイド、元気っちゃ？』って」

「オマエ、アイツともメアド交換してたんか」

「おんなじ声優好きの友達っていなかったからさ、悪いヤツじゃなさそうだったし」

「ワケわかんねえぞ、アイツは」

「友達を作らないようにしてたんだ、今まで。アタシひとと違うからさ」

それ以上、小夜は言わなかった。俺も聞かなかった。

それに今日は小夜の事で来たんじゃない。

「シローの事はいい。オマエに頼みがある」

「なに？」

「穂月奈々に連絡を取って欲しいんだ。出来れば会って話がしたいと」

「どうして？」

「こう言え。『また同じことが起こるかも知れない』って。今度はもっと酷い事が起こるかもってな」

「そんな……」

小夜の顔が引きつった。

第二十五章 再会（中編）

第二十五章 再会（中編）

待ち合わせに指定したアウトレットモールは人影もまばらだった。

平日の午後3時半。仕事人間と暇人たちの狭間に置かれている……そんな時間帯だった。

女は雑貨店の入口近くに所在なげに立っていた。サングラスや帽子の類いは身につけていない。

武道館を満員に出来る人気者だというのに、無防備に素顔を晒していた。

しばらく観察していたが、不思議なほど誰も振り向かなかった。

時折チョロそうなガキが無遠慮な視線を投げかけてきたが、それも女の端正な顔立ちに魅かれてのことだろう。

どう見ても相手が誰だか判っている様子じゃない。

頃合いを見計らって物陰を出た。

◇

俺を見た女の目が見開かれた。

「あなたは……」

「小夜はこないぜ。来たがってたがよ、今日はカンベンしてもらった。まずかったか？」

「いえ、この間のお礼もまだしてなかったし、ワタシも会えればって思ってたから。あの、もしかしてワタシを呼び出したのって……」

「ああ、俺だ」

『また起こるかも知れない』って、いったいどういうことなんですか？」

「オレも知りたい。だから呼び出した。回りくどいのは好かねえから一発で答えてくれ、
アンタ脅されてたんじゃねえか？ コンサートの前から」

女が口を引き結んだ。

タレ目の大きな瞳で、すがりつくように睨んでくる。

シチュエーションが違ったらちょっとドギマギするような視線だったが、あいにく俺は『
『工作中』』だった。

「言えねえのか」

「.....」

「黙ってねえでナントカいえよ」

「.....」

すがるような眼差しは変わらない。

ふと違和感を感じ辺りを見回してみた。

誰もかれも、こちらを見ようともせず通り過ぎてゆく。

「見張られてる.....そう思ってるんだな？」

まだ何も言わず、動きもしない。

「そのままでもいい、オレの顔、見てろ。言いたくないのか、言えないのか、言えないんなら一回だけまばたきしろ。言いたくないならなにもするな」

長い睫がゆっくりと瞳の前を上下した。

『言えば誰かが傷付く』とかなんとか、オマエは聞かされてるんだな？」

もう一度、ゆっくりとまばたきする。

「わかった。場所、変えるぞ」

女の手を引き、俺は早足で歩きだした。

第二十五章 再会（後編）

第二十五章 再会（後編）

レンタカーを走らせたのは1時間に満たなかった。

バイパスを降り、信号を急ターンで折り返すと埠頭はもう目の前にあった。

ゲート脇でコンテナの陰に止まり尾行の有無を確かめた。

夕刻が近づく埠頭は港湾関係のトラックが行き交う程度で、おかしな動きをする車は見あたらなかった。

今度はゆっくりと転がし、埠頭の端でエンジンを切った。

促すように車を降りた。

女……穂月奈々もドアを開け車を降りると、黙って後ろを付いてきた。

ベタ風の海。

波は申し訳程度に岸壁のコンクリに当たっているだけだった。

「誰もつけてきてねえ。ここならいいだろ」

溜息のような仕草を見せると、女は閉ざしていた口をやっと開いた。

「その前にひとつ、いいですか」

「なんだ」

「あなたはいったい、どういうヒトなんですか」

モールで俺を睨んでた時とは違う光が女の瞳に宿っていた。

「武道館の時はとっさだったかも知れない、でも今はまるで刑事さんか探偵さんみたい。今日だって、普通の人ならあんな時間を指定したりしないと思う。もしかして……アブナイ関係のかた、なんですか」

言葉とは裏腹に、宿った光に怯えの色はなかった。

信頼にも嫌疑にも振りきれない薄い光。

黄昏時の空の、あの薄明かりに似ていた。

「ハズレじゃないが当たってもいない。今がオレの『勤務時間』さ」

「それじゃあ、やっぱり」

「違う」

キッパリと告げた。

「アンタのアタマんなかにあるどの想像も違う。誰も知らない『仕事』なんだ、オレがしてるのは」

「意味がわからないんですが」

「少なくともアンタのような人種には関係もなければ害にもならない、それだけは確かだ」

「それってつまり……」

「難しく考えるな。オレはこの『街』を守ってる。そう思っててくれればいい」

「まちを……まもる……？」

「そうだ」

自分でも意外な科白だった。

「あの騒ぎを起こした奴が、アンタを追ってここにも来る。だから協力して欲しい」

「あの」

「また質問か？」

「アンタって呼ぶの、やめてほしいんですが」

「じゃあナナちゃんって呼ぶかい？」

「ワタシ、本名は堀川といいます。堀川 美幸」

女がうっすらと微笑んでみせた。

第二十六章 暗黒連鎖（前編）

第二十六章 暗黒連鎖（前編）

街へ戻った頃には、もう日はとつぷりと暮れていた。

待ち合わせの喫茶店。小夜の隣りには思わぬ人物が座っていた。

「ほっちゃんだぁあ～！ ホントーのホンモノのほっちゃんだぁあ！」

店じゅうに響く声を張り上げ、ひよろ長い影がぶっとんできた。

「お、おれ、いやボク、須藤っていいますっ！ 大好きですっ！ ボク僕ぼくう～！！」

抱きつかんばかりに穂月奈々、いや堀川美幸の両手をわし掴みにしたシローの手を大慌てでひっぺがしながら小夜を睨んだ。

「なんでコイツがいんだよ！？」

「え……ちょっとだけなら……いいかなって……ダメ？」

「アホ、どアホ！ ファンクラブじゃねえんだぞ！！」

「アニキい～、んな連れないコトいわんといてえやあ～」

「てめ、シロー、おまえどこの出身だオイ？ そのムチャクチャ言葉やめやがれ……じゃねえ、手え離せ！ 落ち着いて座りやがれ！！」

まばらな客達から白い目で見られながら、興奮のドツポにはまってるシローを何とか小夜の隣りに座らせ、俺達は向かいに腰を降ろした。

おかしい

ゼツタイオカシい

なんでコイツがでてくんだ

なんか間違ってるぞオイ……

腹の中で毒づきながら、俺は堀川美幸の話を思い起こしていた。

◇

埠頭で一通り彼女の話聞いた。

俺や耳屋が考えていた通り、事前の脅迫はあった。

要求も何もない、幼稚で理不尽な脅迫が。

『コロス。誰かにいったらそいつらもコロス。近タリハーサルするから待ってろ』

そんな内容だったらしい。

初めはただの、よくある悪質なイタズラだと思っていたという。

ところが、彼女の住む一帯の家々で奇妙で残虐な事件が頻発するようになった。

ペット達が殺されていったのだ。

一匹、また一匹……

腹を裂かれたチワワ。

首を数回以上ねじられたインコ。

灯油で焼かれた猫。

串にまとめて刺され吊されていたコイ。

不法侵入と動物虐待で警察も動いたらしいが、彼女自身には何の被害もなかったため捜査対象にすらならなかったらしい。

それでも堀川本人には、『それ』が何を意味するのか充分過ぎる程判ってしまったという。

恐ろしくて誰にも言えなかったのだと。

さて、どう動くか。

三人の顔を見渡した。

第二十六章 暗黒連鎖（中編）

第二十六章 暗黒連鎖（中編）

「ねえ、二人でなに話してたの？」

小夜が聞いてきた。

「その事だけだよ……」

「えええ！ ふたりっきりってアニ……ウゴ○△(Eっ！！)」

ややこしくしなる前にシローの口におしぼりを押し込んだ。

「彼女は狙われてる。相手はヤバい奴だ。武道館はたぶん、奴にとっちゃ小手調べ程度だった筈だ。次はもっと酷くなる。話を聞いて確信したよ。来月アリーナでコンサートがあるだろ。おこるぜ、この間よりもっとトンデモねえことが」

三人を見回し、囁んで含めるように話した。

小夜は真剣な顔で俺を見ていた。

シローは口からおしぼりを出すのも忘れ、きょとんとしながらこっちを見ている。

「小夜。今までオレが何の『仕事』してるか話したこと、なかったよな」

小夜がこっくりとうなずいた。

「オレはある興信所の下請けをやってる。探偵助手みたいなモンだ」

言いながら堀川美幸に目を向けた。

何も言うなという俺の視線の意味を彼女は察したようだ。

大きな瞳がほんの微かに伏せられた。

「そっか。ナンカそんな気がしてた。ジャミーってどっかヒトと違ってたし」

「じゃみい？」

小夜の言葉に堀川が反応した。

「そー呼べって。だからずう〜っとジャミーのまんまなんだよ、ナナちゃん」

「.....それがあなたの名前、なんですか？」

堀川がひたと俺を見つめてきた。

「それでいいし、それ以外に名乗るつもりもねえ」

見返した俺と堀川の視線がぶつかる。

「アニキ、やっぱりアルHKみたいじゃん！ カッコいいっすよ！！」

ようやくとおしぼりの刑から脱出したシローが間の抜けた声をあげた。

俺と堀川の間には張りつめていたものが、そのひと声で緩んだ。

「んでんで、これからどーすんっちゃ？」

ノー天気なシローの問いが、俺の躊躇いに区切りをつけた。

「おまえら二人に手伝って欲しい。奴を捕まえる」

「捕まえるって.....アタシたちなにすればいいの？」

「考えがある。任せろ」

その時、堀川がすっと立ち上がった。

「ワタシ、ジャミーさんを信じます。お友達のあなたがたも」

深々と頭を下げ、もう一度俺達を見た。

「堀川美幸です。よろしくお願ひします」

神妙な堀川。

熱気を秘めた眼差しの小夜。

コーフンで鼻の穴が膨らんだシロー。

そして、無表情な俺。

奇妙なチームの誕生だった。

第二十六章 暗黒連鎖（後編）

第二十六章 暗黒連鎖（後編）

いいのか

送っていかなくて

寝ぐらに戻ると、階段の手摺りに耳屋がもたれていた。

「フクロウか。ったく、どこにでもいやがるな」

「あんなトーシロどもと何やろうってんだ」

非難というより威圧の色が濃い言い種だった。

「頭、使うっていったら。あの二人は使える。今度みたいな場合にはな」

「ぼんなら一人でも楽勝だろう。わざわざガキ二人まき込む理由なぞない筈だが。それに……」

「なんだよ」

「表の奴らに『裏』を見せるってのがどーいう意味か、知らねえ訳じゃねえだろ」

「だれが見せるって言った？ アイツらは今回だけのアシスタントさ。『仕事』が終われば消えるぜ」

「だどいいがな」

物憂げに立つ耳屋。

俺はアパートのドアの前。

風を巻いた。

耳屋に手首を掴まれていた。

「サビてねえな、おっちゃん」

「てめえ……」

「オレが気に入らないなら現役復帰したらどうだい？ 元『邪魔屋』さんよ」

耳屋の左目の直前で止まっていた親指をクイクイツと曲げてみせた。

「どうしてわかった」

耳屋が、片目突きをかけた俺の手をゴミのように払いのけた。

『耳屋』はいない、他の街には。そりゃつまり、この『街』の邪魔屋は情報収集の能力を買われて『耳屋』になったって事だ。違うか？」

「なんでもお見通しだな。で？」

「おっちゃんの情報は信用してるし頼りにもしてる。でもそれだけだ」

「それだけ、だと」

「先読みして動くこたぁ滅多にない。今回はオレが先に読んだ。オレの絵図通りにやらせてもらうぜ」

有無を言わせぬ口調で言い放った。少しだけ睨みあう。

「好きにしろ」

耳屋が折れた。

「だがオレの指図を離れるってこたぁ、それ相応のリスクをしょい込むって事、忘れんなよ」

「ああ」

耳屋の脇を抜けドアに鍵をさした。

「いっとくけどよ、おっちゃんにはシッカリ働いてもらうぜ、今までどおり」

「やだね」

「バカ言うなよ、てめえらの都合にあう限り『街』はオレらを使うさ。サボらせちゃくれねえぜ」

「じゃあ、ひとつだけ新しい情報をやろう」

耳屋がこっちへ向き直った。

「先週、広島であった女子大生バラバラ事件。あれな、繋がってるぜ。武道館の事件と」

俺は目を剥いた。

第二十七章 人と獣の境（前編）

第二十七章 人と獣の境（前編）

「広島的事件って……ありゃマトモじゃない。証拠隠滅でバラしたんじゃないかねえぜ、あれは……たぶん……」

喰ってる

口に出す気になれない言葉だった。

「そうだ。趣味嗜好の為、恐らくは行きずりの女、若くて肉の綺麗そうな女を選んでさらい『料理』した。アジの開きみてえにな」

「どうして武道館の件と繋がってると？」

「動きだ。幾つかの『街』からの情報、あの日の武道館の出来事、その前後にあった脅迫絡みの人間の動向、そしてそれぞれの事件の時系列的な並び。ネットの噂話まで含めて考えりゃ、バラバラに見える全てが一本の線の上に載っかってくるのさ」

「……オレにはそこまで読めなかった」

「先を越したんじゃないのかよ」

嘲笑を浮かべた耳屋を怖いと思った。

やはり分析力はハンパじゃない。

「ビビんな、顔が引きつってるぜ。奴の正体はまだハッキリしねえ。一人なのか複数なのかもな。俺の読みがどこまで当たってるかは奴を見つけりゃ判る。ぼんが例のコンサートに目をつけたのは悪くねえ絵図だぜ」

「やっぱマズかったかな、小夜やシローを巻き込んだのは」

「今更なに言ってやがんだ、やるって決めたんだろ。それに相手が何人かわからねえ、おとりや別動隊は幾らいてもウェルカムさ」

耳屋の笑いは酷く酷薄なものだった。

「オレをほっぽり出そうなんぞ100年早えんだよ、ぼん。だがまあ大見得切ったんだ、好きにやってみるさ。オレあぼんの言う通り、情報だけ提供してやるよ。今まで通りな」

「いいぜ。そうやってヘラヘラ笑ってろよ。やってやる」

「ああ、せいぜい頑張んな」

もう話す事は無かった。

俺はドアを開け、閉めた。

◇

真っ暗な理髪店の中へ入ると、耳屋は携帯電話を取り出した。

店の明かりはつけない。

「.....おまえか？」

「なに？ こんな時間に」

「肥溜屋に繋ぎをとれ。近々『仕事』があるかもってよ」

「嫌よ。商売仇よ、自分でやりなさい」

「奴とは色々あってな、出来れば話したくねえ」

「子供じゃあるまいし。だったらこっちに回して、キレイな『死体』なら喜んで取りに行くから」

受話器から流れる水草屋の声はけだるそうだった。

「そうじゃねえ。ぼんがヤバイ」

「え？」

「手綱を緩め過ぎたかも知れねえ。俺を差し置いて『表』の奴らを使おうとしてる。『街』がどう出るか……」

「……わかった……」

水草屋が切った電話をソファに放り投げ、耳屋はひとつ溜息をついた。

第二十七章 人と獣の境（中編）

第二十七章 人と獣の境（中編）

コンサートまであと2週間を切っていた。

堀川美幸とは一日一回、定期的に連絡をとり身の回りに異変がないかどうかを確認していた。

関係者で、俺達のことを知っているのは彼女一人だけだ。

今のところ誰が裏で繋がってるか判らない。うかつに手の内を明かすような真似は出来なかった。

堀川からの推薦という形で、小夜をサブマネージャーとして一週間前からそばにつけていた。

勿論ファミレスのバイトはしばらくお休みだ。

喜々として通い始めたのは最初だけ、今じゃ連日、あの上条とかいうオッサン……実は堀川の事務所では社長も一目置く古参マネージャーらしい……にシゴかれまくりで、戻ってくるなりバタンキュ〜の半病人状態だった。

肝心の本番でブツ倒れちゃったら、なんの為に送り込んだのか判らなくなっちゃう。

入れ込むのもほどほどにしとけと言った俺の言葉がちゃんと脳味噌の隅っこにでも引っかかってくれてるか。

いささか自信がない。

シローには会場警備のスタッフに混ざってもらう手筈になっている。どっからどう見ても、

警備するほう

じゃなく、

とっ捕まるほう

にしか見えない奴だが、武道館の騒動で見せたとっさの観察力が今回みたいなケースじゃ役に立つと踏んでのキャスティングだった。

『目』って奴はオレらの『仕事』にも通じている。

耳屋がいつかいった。

いいか、ぼん

邪魔屋は誰にでも出来るもんじゃねえ

何よりも必要なのは、相手に惑わされねえ『目』

余計なことは聞かず肝心な所を漏らさねえ『耳』

少ない情報から最大限の打つ手をひねくり出す『頭』

この三つだ

……と。

シローにはその『目』がある。素質なんだろうな、アイツの。

手筈はすんだ。

あとは獲物が動き出すまで待てばいい。

楽観など出来ないが、姿の見えない相手にいたずらに怯えていても、いい事はなんもない。

待つときは、待つ。

相手が仕掛けてくりゃ、耳屋の情報網にもなんか引っかかる筈だった。

どちらかと言えば今はまだそっちに期待してる。

◇

そんな風に過ごしていた、ある日。

堀川美幸に呼び出された。

俺はいつもの支度で、待ち合わせ場所へと赴いた。

第二十七章 人と獣の境（後編）

第二十七章 人と獣の境（後編）

勝手の判らない街はどうも苦手だった。

無意識に店の並び、通りの形、交通量や人の混み合い具合をチェックしてるのは職業病みたいなものだ。

都内の某ショッピングモール。

行き交う人々の足取りには活気が漲っていた。

堀川美幸はブティックのショーウィンドウをぼんやりと眺めていた。

黙って後ろに立った。

「……まるでストーカーね」

「バカバカ足音立てるシュミはねえんだ」

堀川は振り返らず、ウィンドウに映る俺に話しかけていた。

「ちゃんとやったか」

「ええ。発車する地下鉄から降りる、2つの路線で2回ずつ。地上に出てJRのホームに入ったら反対側の改札を抜けて、すぐタクシー。尾行はそれで振り切れる……ですよね？」

「上出来だ」

ニヤリと笑った俺のほうへ、堀川がやっと振り向いた。

充血した目。隈がべっとり貼り付いている。

笑みが引っ込んだ。

「何があった」

「きたの。また、怖い手紙が」

「持ってきてるか？」

黒のロングコートのポケットから堀川が黙ったまま封筒を取り出し、こっちへ差し出した。

「座って話が出るトコ知ってるか」

「よくランチに行くお店が近くに。店長さんは顔見知りだから、変なお客がくればすぐに判るわ」

「そこでいい。行くぞ」

促して歩きだした。

◇

「共演のみんなが心配しちゃって。このところアフレコが立て込んで睡眠不足なんだから、誤魔化すの大変だった。あと1本スタジオ取りが残ってるし、今日は全部で4本掛け持ちなの」

小洒落たイタリアンレストラン。

堀川は少しだけ緊張の解けた顔で話し始めた。

「声優ってのは随分チマチマ仕事してんだな」

「ワンテイクで決まらないと終電まで続く事もザラなのよ。お休みは殆どないし」

「そんだけいいギャラもらってんだろ？」

「みんなが思ってるほどいいお給料、貰ってる訳じゃないの。芸能人って言っても、知らない人は全然知らないし。なんでワタシなんか狙われるのか……」

「ああ、まったくだぜ」

封筒の中身を見た。

新聞を切り抜いた、呪詛。

たべたい

おまえを

しろいにく

まつてろ

胸の悪くなる文字の羅列だった。

第二十八章 虫の眩き（前編）

第二十八章 虫の眩き（前編）

暫くして小夜も駆けつけた。

こっちは堀川とは別の理由でげっそりとやつれていた。

「ごめんなさい、奈々さん。あさってのレコーディングの打ち合わせが長引いちゃって」

「美幸でいいよ、小夜ちゃん。そっちはもう慣れた？ 上条さん仕事に厳しいから大変でしょ」

「いえ、シンドいけどヤリガイあります！ ジョーさんが鬼に見えることあるケド」

小夜の言いぐさに、固かった堀川の様子が和らいだ。

「オレにいうことは？」

ワザとムツとした顔で小夜に絡んだ。

「ほっといてスマン」

「待たせてだろっ！」

ツッコミいれると堀川が、ついで小夜がクツクツと笑い出した。いいボケだ。

少しの間だけ、何の為に集まったか忘れさせた。こんな状況だ、笑える時に笑っておくのは悪いこっちゃない。

深刻なツラからいい考えなど浮かぶもんじゃないからな。

「さっきシローも呼んだ。短い時間だが作戦会議だ」

頃合いを見計らって口を開いた。

「何かあったの？ ジャミー」

見たほうが早い。俺は例の封書を小夜に放ってみせた。

目を通した小夜の顔が凍りつく。

「おどかさわけじゃないが、俺の情報じゃコイツ、この間の広島的事件に関わってる」

「広島って……女子大生が殺されたっていう……」

「そうだ」

堀川にはもう話してあったが、改めて口にすると小夜ともども暗い表情に沈んでいった。

「コイツは殺しの味を知っちゃった。最初は市ヶ谷、あの晩の駅でだ」

「自殺じゃなかったの？」

小夜が驚いた声をあげた。

「死んだのは神尾祐二、21歳。アンタ……堀川の熱烈なファンだ。不自然だったのは、あのコンサートに神尾がいてない点だった。そっから辿ってあの夜、奴の足取りが掴めないのが判ったんだ」

「でも、それだけ？」

「なワケねえだろ。会場付近で神尾らしい男を見たモンがいる。いる筈ねえよな、チケット買ってもない奴が」

「じゃあ……」

「睡眠薬事件の実行犯か、その一味か。神尾が誰かと話しているのを見た奴もいる。オタクってのは記憶力いいんだな」

小夜も堀川も小さく息を呑んだ。

その『誰か』の特徴.....

俺も思い出した。

あの日、武道館の裏手でこっちを見ていた男。

粘りつくような、あの視線を。

第二十八章 虫の眩き（中編）

第二十八章 虫の眩き（中編）

遅れて来たシローを交え作戦会議を始めた。

いきさつを説明する。

「これは現実だ。テレビの2時間ドラマじゃねえ。心してかかんなきゃ返り討ちにあうぞ」

「アニキの話だとコイツ、始めはタダの変態だったんだっちゃ？」

黙って聞いていたシローが口を挟んできた。

「それがナナちゃんLOVEでだんだんオカシくなってペット切り刻んだり……で、仲間集めてイタズラ仕掛けたケド、たぶん怖じ気づいたソイツ、神尾とかいうヤツ？ を駅のホームからポイしちゃった。スカウターはずれたヤツは、ナナちゃんとカンケーない女の子でリハーサルして、あげくたべちゃった。そういうこっちゃよね？」

相変わらず言ってる事は滅茶苦茶だったが、要点はしっかり押さえていた。

コイツには『目』だけでなく『耳』もあるらしい。

だんだん怖くなってきた。

自分が、須藤三四郎という青年の人生をねじ曲げてるんじゃないかという思いが一瞬、頭を掠めた。

「で？ これからどうするの」

小夜も口を開いた。

「やりやすくなった」

「え……」

俺の言葉を聞いた堀川が青ざめた。

「悪く考えるな。いろんなケースがあったんだぜ、誘拐、陵辱、無差別殺人。でもよ、奴の欲望は今じゃ一点に絞られてる。オマエを殺して喰う、それだけに凝り固まってる筈だ。網を張るところがわかってりゃ獲物がかかる率も高い」

ふてぶてしく笑ってみせた。

それで堀川の不安がどれだけ消えるか判らなかったが。

「小夜、オマエは何があっても堀川の側を離れるな。重石になるんだ」

「おもし？」

「一人殺ると二人殺るの、どっちが手間だと思う？ オマエはお荷物になれ、奴の。どんな事してでも邪魔しまくれ。つまり『邪魔屋』さ」

「『邪魔屋』、アタシ『邪魔屋』……」

邪魔屋、と何度も呟いた。

それが俺の『仕事』とは知らずに。

堀川と一緒に殺される危険が大きいとも知らずに。

胸が痛んだ。

「シロー。オマエは探せ、怪しい奴を。見つけたらすぐオレに知らせるんだ」

「まかしてガッテン！」

「二人の命、かかっているのを忘れんじゃねえぞ」

力強く頷くシローから目を逸らし堀川を見た。

頼りなげな視線が、俺を誘っていた。

第二十八章 虫の眩き（後編）

第二十八章 虫の眩き（後編）

どうしてこうなっちゃうのかな.....

駅へと向かう道すがら、堀川美幸がぼつりと眩いた。

小夜は事務所へ戻り、これからバイトだと言いズルイを連呼するシローをド突き放して帰らせたあと、俺は彼女を送っていった。

「ワタシ判らない。誰かを傷つけてでも欲しいものを手に入れたっていう気持ち」

コートのポケットに両手を入れた堀川は、俯きながら歩いていた。

「ジャミーさんは、そんな風に思ったことある？」

「欲しがるモノは人それぞれさ」

「でもだからって.....」

「堀川のことはよく知らねえ。知らねえケドよ、多分オマエは『持ってる』んだろうな」

「もってる？」

「必要なモノぜんぶ。だから欲しいとも思わない」

堀川が足を止めこっちを見た。

通り過ぎる車のライトが、端正な顔に陰影を刻んでゆく。

「ワタシそんなに恵まれてません！ お金持ちじゃないから働かなきゃ暮らしていけない。お休みもない。毎日々々、全然違う人達と何時間も一緒に居なきゃいけないし、生活だっ

て不規則よ。欲しいモノだって沢山ある。スタイルだってよくない。チビだし、花粉症だし、頭悪いし。全然『持って』なんかいないよ！」

ポケットから出した手を広げ、前のめりになりながら訴えかけてきた。

「ワタシなんて小っちゃな虫とおんなじよ！ ナイナイづくしよ！！」

「オマエ、家族は？」

「え？」

「いるんだろ」

「……兄弟はいない、一人っ子だから。お父さんはワタシがお仕事を始めた頃に病気で死んじゃった。もともと身体が弱くて、ワタシが小学校4年生になるまで病院で昏睡状態だったの」

「母親は？」

「元気よ。今でもおばあちゃんと二人で暮らしてる」

「時々は帰ってるのか」

「うん。疲れちゃったりすると、元気をもらいに戻ったりしてる」

「そうか」

「どうしていきなり、家族の話なんか聞くの？」

「必要なモノだからさ。たぶん、一番大切な」

堀川がふっと口をつぐんだ。

「それを持たない奴は、別のモンで埋めようとするんだ。例えどんだけ歪んで狂った願いであっても。オレにはよく判る」

「アナタのご家族は？」

「みんな死んだ。殺されたよ」

堀川はただじっと、俺の目をのぞき込んでいた。

第二十九章 サイレントジャマー（前編）

第二十九章 サイレントジャマー（前編）

孤独ってのはなんだろう……

ひとりぼっちだからか

価値無い人生と見放されるのがそうか

世の中に背を向け歩き続けるのがそうか

全部当てはまる気がする

どれも違ってるとような気もする

俺にはわからない

わかる筈もない

…… マンションで一人、膝を抱える堀川の姿を想像しながらガラにもなく考えた。

スケジュールに空きが出来た堀川に外出を禁じた。必要なものは小夜が調達する手筈になっている。

今は単独行動が最も危険だ。

シローはイベント会社経由でうまいこと警備スタッフに潜り込んだ。

シブる耳屋にひと苦労させようとしていた矢先、さっさと自力で決めてきたのだ。

「どうやった？」

「かぁ～んたんだっちゃ。ほっチャンの親戚だっていったんよ」

「？」

「ノープロブレム、本人の紹介状あるもん」

「.....書かせたのか」

「ヘッドをユーズ、ってね」

一昨日の会話が甦ってくる。

『目』があり『耳』が利き、『頭』も回る。惜しい。

なんなら俺の代わりに『邪魔屋』やってもいい位だと思いかぶりを振った。

耳屋は言わなかった。

『邪魔屋』に必要なもの。

動機と、衝動。

シローにそんなモンある筈ない。

アイツはタダの、アイドル声優好きの街のアンチャンだ。小夜だって変わらない。

そいつらを俺が巻き込んだ。やり直しのきかない一発勝負に。

だが、やるしかない。

これは奴らにとっても自分自身の問題なのだ。ただのファン心理じゃない、自分以外に大切に想う誰かを守る為の闘いだ。

煙草を落とし、踏み潰した。

鉦々と吹く風が吸い殻をどこか遠くへ運んでいった。

「明日が勝負、か」

誰に聞かせるともなく呟いていた。

顔を上げると巨大なアリーナ会場が眼前に広がっていた。

もう一度だけ堀川の事を考えた。

駅まで送っていった、あの晩を。

「みんな死んだ。殺されたよ」

そう呟いた俺をじっと見た後、不意に重ねてきた唇の意味。

あれは何だったのか。

同情も憐憫もいらない。

俺は一人。今も、これからも。

彼女は守る対象でしかないのだ。

まもる？

『餌』じゃないのか.....

躊躇いを抑え込んだ。

明日、決着をつける事だけを考えて。

第二十九章 サイレントジャマー（中編）

第二十九章 サイレントジャマー（中編）

始まりは遅い時間からだった。

12月31日。年越しライブ当日。

昼前からアリーナ周辺のチェックを入念に繰り返した。

とはいえ俺はSPじゃない、確認してるのは不審者・侵入者の有無や出入り口の状態ではなかった。

網の掛かり具合と『罨』の案配。

肝心なのはそこだった。

必要以上に姿を晒さず、1時間おきに上着を替え靴を履き変えた。

靴を変えるとある種の間には印象がガラリと違って見える。下ばっか向いて歩いているような連中には。

ストーキングの初歩の初歩だ。

日が暮れると刺すような寒気が街を、アリーナを固く重く取り巻いた。

古着の軍用コートの襟を立てる振りをしながら、小型マイクに声を吹き込んだ。

「小夜、聞こえるか」

「ウン、スッゴク快調だよ」

「クラ！ 応答はそうじゃねえだろ」

「あ、ごめん」

「ナンかありや悠長にオシャベリしてる暇ねーんだぞ。忘れんな、こいつがオマエと堀川の命綱だ」

「……ハイ……」

「チ・ガ・ウ・ダ・ロ？」

「テンフォー」

「それでいい。堀川から離れるなよ」

ハンディトーカーの周波数を変えシローを呼び出した。

「シロー。俺だ、応答しろ」

「……奴だ、奴がきたっ！あれは……あれは、赤いモビルスーツ……シャアかっ！？」

……………

「今すぐコロス。オモテでろ」

「ジョ～ダンっすよアニキ、りらくすりラックス、ってね」

「しすぎだアホ、遊びじゃねえぞ！」

「わかってますって」

「いいか、オマエが……」

『奴らをとっとと見つけなきゃ二人が死ぬ事になる』でしょ？今のところおかしい奴らは見えないっちゃ、見つけたらウマイこと『網』に誘導するっちゃから心配せんといてーや」

「その前にやることは？」

「アニキに連絡、OKならテンフォー、ヤバけりやテンスリーフォー。でしょ？」

「わかってりゃいい。ホントに大丈夫か？」

「涙声になってるっちゃよアニキ」

「これ以上泣かせるな。仕事になんねえ」

「テンフォー」

マジで泣きたい気分でトーキーを切った。

それでも、俺の中の冷めた部分が準備完了を告げていた。

こいよ

今度はオマエを喰ってやる

このオレが

アリーナを睨みつけたその時、携帯のバイブが震えた。

第二十九章 サイレントジャマー（後編）

第二十九章 サイレントジャマー（後編）

耳屋からの電話。

片手で振り開け耳に当てた。

「俺だ」

「どうした？ こっちはいまから……」

「情報だ。奴ら三人以上いるぞ」

「三人以上って……どんくらいだよ？」

「そこまでは判らん。かなりの人数かも知れねえぞ」

「？ どういうこった」

「広島 of 邪魔屋とあっちの所轄から同時に繋がりがきた。死体遺棄現場から採取された足跡は少なく見ても三人分はあったそうだ」

「骨が折れそうだな」

「どアホ。てめえは対一専門だろ、多人数相手は殆ど経験が無い筈だ。ヘタ打ちちゃやられるぞ」

痛い所を衝かれていた。

「こっちもチームだ。イーブンは無理でも最悪、四分六分くらいさ。そう悲観すんな」

「怪しいモンだが、まあいい。あと一つ」

「まだあんのか？」

「足跡の大きさと深さ、歩幅から身長と体重が推定出来た。二人は160～170cm、50～60kg程度。あと一人は160cm以下で体重は45kg未満だそうだ」

「えらく小柄だな」

「ガキかも知れねえぞ」

「年越しライブだけ、未成年なら入れねえよ」

「ならいいがな。ぼん、気を抜くな。見た目にダメされんじゃねーぞ」

「ああ」

「あとは自分で何とかしろ。俺あここまでだ」

「んなこと言って、会場回りにフクロウども仕込んでんだろ？ けっこういたぜ、らしい連中がよ」

電話の向こうで耳屋が鼻を鳴らすのが聞こえた。

『『表』の奴らに晒すんじゃねえぞ。お仲間にも、な』

「判ってる」

『邪魔屋』の正体を悟られるな。

耳屋はそう言っていた。

「終わったら店にこい。そろそろ髪、切らなきゃなんねーからな」

「そうするよ。じゃ」

短く答え電話を切った。

息を大きく吸い、寒気に肺を焼かれ軽くむせた。

トーキーのスイッチをいれ2回線同時通話に切り替る。

「二人ともよく聞け。『網』は張れた、あとはオレたち次第だ。頼むぞ」

「テンフォー」

「テンフォー」

二人の声が心なしか緊張していた。当たり前だ。ド素人なんだから。

俺は違うぞと低く唱えた。

ショウタイムの始まりだ。何人いようが関係ねえ、喰われる恐怖をたっぷり味わせてやる。

タップリと、な

無意識に口元が釣り上がるのを感じた。

第三十章 乾きの群れ（前編）

第三十章 乾きの群れ（前編）

ライブが始まった。

アリーナの収容人数は武道館より遙かに多い。

それだけの観衆が一気にヒートアップし、歓声は巨大なアリーナを地鳴りのように震えさせた。

俺は会場スタッフを装い、内外のチェックをこまめに繰り返した。

縦に長く前方寄りにステージを据えたアリーナでは、武道館と違い人間の動ける経路がある程度絞り込める。ステージ脇と後方の通路、各通用口はライブ開始と同時に閉鎖されるが、一部だけ『通れる』ようにしてある。破るのは簡単だがピックアップされれば信号が飛ぶスペシャル鍵に、俺が事前に付け換えておいた。

そしてアリーナ内の監視カメラのセッティング変更。映像は全て耳屋のパソコンに送られてる筈だ。便利屋は薬だけでなくメカにも強かった。場内のシローの『目』も含め、これが俺の仕掛けた『網』の全てだ。

そしてもう一つ……

『罨』に思いを馳せていると、イヤホンから呼び出し音がした。

「どうした」

「ステージはおかしな動きナイよ」

小夜だった。

「飲み物は？」

「打ち合わせ通り、スタッフ用のは全部入れ替えた。上条さんにも協力してもらって」

「いいぞ。今のところはOKだな」

「前から聞いたかったんだけどさ……」

「本番中だ、後にしろ」

「ジャミーはどうして、ナナちゃんがコンサート中に狙われるって思ったの？ チャンスなんて幾らでもあったよね。こんな所でやるなんて、見つけてくれって言ってるようなモンじゃん」

小夜は引き下がらなかった。

「自己顕示欲って奴だ」

「なに、それ？」

「考えてもみろ。武道館の時だって、あんな大掛かりでリスクなコトやる必要があったか？ 奴らは愉しんでる。騒ぎを愉しみ、堀川の怯えるサマを愉しみ、テメェらが獲物を狩るのを愉しんでる。目立ちたがり屋のクソガキどもなら、リハ済んでる仕掛けをわざわざ変えたりしない」

「そう、なんだ」

「無駄なオシャベリは終わりにしろ」

その時、歓声に混じって何かが弾ける音が響いた。

連続してはぜる爆発音が場内を一周してゆく。

爆竹？

来やがったか！？

突然の爆裂音に演奏が途切れた場内を、一人二人、立ち上がった観客が前へ向かい歩き

始めた。

あっという間に人数が増える。

まるでゾンビだ。

腹に力を込め走り出した。

第三十章 乾きの群れ（中編）

第三十章 乾きの群れ（中編）

どうなってんだ

コイツら全部グルかよ！？

相手が複数なのは判ってたが、これ程の人数とは思ってもみなかった。

今や観衆の半分以上が席を立ち、ステージへ向けワラワラと足を進めていた。残りの観客は困惑した表情でこの光景を眺めている。

群衆を正面遙か彼方に見ていた俺はトーキーのスイッチを入れた。つもりだった。

繋がらない。慌てて何度かスイッチを押し込み、電源を入れたり切ったりしてたのに気がついた。

くそっ！

今度こそ通話スイッチを入れた。

「シロー、どうなってる！ 奴らなにしようとしてんだ！？」

「……うちに……んな……こりやムリだ……押すなテメ……」

「聞こえてんならちゃんと言えっ！」

「……アニキ、チョー渋滞っちゃ、抑えらんない……」

「バカ！ んな事ぁ他の連中にやらせとけ。よく見ろ、どっかにソイツら扇動してる奴がいないか」

「いなそーっす、気味悪いよ、コイツらみんなヘラヘラ笑ってやがる」

「ステージに上がろうとしてるのか？」

「んな奴いないっちゃ。押してくんだけ……くそお、いい加減にするっちゃぞおおお」

迫力ないシローの叫びがノイズにかき消されそうになる。

わらってるって？

ステージに詰め寄っても上がってこない。まるで警備を困らせてるだけみたいだ。

こまらせる

イタズラ

サプライズ

……

この人数

全部が共犯なんて考えられない

じゃあ……

いきなり閃いた。

サクラだ、畜生

オレとしたことが、目の前の光景に肝飛ばされちまうなんて

「そっから抜け出せ！ 距離をとって騒ぎの見渡せるトコまでいくんだ！！」

トーキーに向け怒鳴った。

「どこいけてんスか？ 身動きとれねえっすよ」

「どこでもいい！ ステージにはあがるな、群衆心理でポケどもが雪崩るぞ」

「テンフォー」

オタクゾンビの群に背を向け出入りにダッシュかましながら周波数を切り替えた。

「小夜！ 堀川をステージから降ろせ！」

「今いってる！ ナナさん、こっちにき……」

「オイ、どした？」

「……」

「小夜、聞こえるか？ 応答しろ、小夜！！」

「……」

通話が切れ、ノイズだけが流れてくる。

出入り口のドアを蹴り開け、外へ向かって全力疾走した。

第三十章 乾きの群れ（後編）

第三十章 乾きの群れ（後編）

走りながら『網』の受信機を見た。バックステージ通路と北側通用口の鍵が破られてる。

シローを呼び出した。

「どこだっ」

「北側出口のあたりっちゃ」

「バッチリだ、外に出ろ。ライト持ってるな」

「ウス！」

「道を照らせ。『罨』の跡が見つかったら追うんだ」

「テンフォー」

北側出口なら反対側だ。こっからだと挟み打ちになる。

いくらしないうちにトーキーが鳴った。

「あったっちゃ！ 車道に続いてる、今おっかけてるぞいっ」

「見失うなよ」

シローが持っているのは紫外線ライト、俺が『罨』に仕掛けた特殊塗料は紫外線に反応して輝く。

「いたっ、ほっちゃんもメイドもいるっ！」

「どこだ!？」

「郵便局前。車にのろうとしてる」

「あれか」

見えた。

道端で影がもみ合っている。

ポケットからスリンガー……パチンコの親玉みたいなヤツで、威力は空気銃並だ……を取り出しながら、なお走った。

奇妙だった。

走り出さない。エンジンがかからないようだった。

影はもつれながら、隣に停まっていた道路工事のトラックへ移動した。

怒鳴り出てきた中年男を運転席に押し込み、二つの影を荷台にほうり込んだ。

堀川と小夜だ。

トラックが急発進した。

車道に飛び出た俺の脇を抜け走り去ろうとする。

振り向きざま膝を折りスリンガーを引き絞った。

逃がさねえ

ピンッ！

スリンガーの強力ゴムが夜気を裂いた。

ピシリと音を立て、粘着スライムでコーティングした信号弾がバンパーに命中した。

トラックは闇の街へと走り去った。

シローがゼイゼイいいながら追いついてくるまで、俺はトラックの去った方を見ていた。

「アニキい！」

「.....かかった。追うぞ」

「アニキとおれっちで？」

「他に誰がいる。サツでも呼ぶか？ 連中がウロウロしてる間にオマエの女神サマも小夜も挽き肉だぜ」

「.....いきます.....」

「ここにいろ」

正面に停めておいたレンタカーをとりに行った。

これみよがしにフロントガラスに貼ってあった駐禁のシールを破り捨てる。

キーを差し込みながら堀川を想った。

小夜と一緒にやバラされねえ

待ってろ

エンジンをかけ思い切りハンドルを切りこんだ。

今なんで真っ先に堀川のコトを考えた

タダの『餌』なのに.....

いや、そんなこたあどうでもいい

『ゴミ』狩りだ

狂おしい夜の始まりだ

飢えた獣が、頭ん中から想いを締め出す。

目だけに力を込めた。

歩道でシローが手を振っていた。

第三十一章 異端者（前編）

第三十一章 異端者（前編）

トラックは街を離れ、山間部へと向かっていた。

次第に街灯が減ってゆく県道を走るその荷台に、堀川と小夜はいた。

◇

.....アタマが痛い.....

視線を上げると、見慣れた顔が心配そうにこっちを覗きこんでいた。

「ナナ.....さん.....」

「大丈夫だよ小夜ちゃん、瘤になってるだけ。寒い？」

こくりと頷くと、堀川は肩にかけていたファーを小夜に巻き付けてくれた。

風が冷たい。

「どうなってるの、アタシたち」

「トラックの荷台。車が動かなかったみたい。工事の車に放り上げられた」

「そうだ」

トーキーのスイッチを入れ夢中で叫んだ。

「ジャミー！ ジャミー！！ 聞こえないの！？ 返事してっ！！ じゃみいいい！！！」

「通じないの？」

「じゃみいいいいいいい！.....ダメ。壊れちゃったみたい.....」

力が抜けた。

この無線が命綱だと言われていた。

それが通じない今、救出を望むべくもなかった。

「ごめんね、ナナさん。アタシなんにも役に立ってない」

「しっかりして。必ず助けにきてくれるよ」

どうしてこのヒトはこんなに落ち着いていられるのだろう

不思議だった。

「ナナさん……」

「美幸でいいっていったじゃない」

堀川がニッコリと笑った。

「じゃあ美幸さん、なんでそんなに落ち着いてられるの？ さらわれたんですよ、殺されちゃうかも知れないのよ、どして？」

「どうして、かな。自分でも判らない。でもジャミーさん達は必ず来てくれる。そんな気がするんだ」

そう言って堀川がさっきとは違う笑顔を見せた。

何かを納得させるような笑顔を。

「アイツらのことしんじてるんだ」

「そうね。そうだと思う。あなたは違うの？」

「アタシ……アタシは……」

言葉が出なかった。

「小夜ちゃんはジャミーさんのことスッゴク信じてる。そうでしょ？」

「.....ウン.....」

「だったら信じてようよ。助けはくる、彼が来てくれる、そう思ってよ、ネッ！」

暗がりの中、堀川のまなざしが吹きつける風の冷たさを忘れさせてくれた。

「美幸さん」

「なに」

「オトコってさ、ちゃんと助けてくれるかな？」

「？」

「ひどかったんだ。アタシの父親。母さんが自殺したのもみんなアイツのせい。それでもってアタシのせい」

「？ どういうこと」

「アタシ.....アタシさ、オンナだったんだ、アイツの」

見開かれた目がこっちを見た。

第三十一章 異端者（中編）

第三十一章 異端者（中編）

「恵まれた家だったとおもう。アイツは不動産関係で結構もうかってたし、母親は料理教室の先生やってたし。二人とも優しかった。アタシが中学にあがるまでは」

どうしてこんな時にこんな話を始めたんだろ

わかっているけど止まらなかった。

「アタシに初潮があった頃からアイツおかしくなった。酒飲んで暴れて。会社がうまくいかなかったとかで、家に帰らずオンナのウチ泊まり歩いてた。でもふらあ〜と帰ってきて。カネなくなっちゃったんだよ。母は完全シカトだった。そしたら夜、アタシの部屋に忍び込んできた。逆らった。ヤだった。でもアイツ泣いててさ、『許してくれ、助けてくれ』って泣きながらアタシを抱いたんだ。……最悪でしょ。初めてだったんだよ、実の父親がさ」

堀川がじっとこちらを見ていた。

叩きつける風の中で、何も言わずに。

「でも可哀想になっちゃった。アタシを抱いてる時のアイツ、昔みたいに優しかったんだ」

「……」

「四年は隠してられた。でも高校二年の夏に母が気付いた。当たり前よね、おんなじ家について、ダンナだし、娘だし。母は狂った、イッチャった。そして電車に飛び込んだ。アタシは逃げ出した、あの変態オヤジから。なにもかもから。もう限界だったんだ」

「……小夜ちゃん……」

「ヤでしょ？ フケツだよ、こんなコ。なんにもできないし。……しんじゃえばいいんだ。そうだよ、アタシが美幸さんの代わりにバラされちゃえばいいんだっ！ それで助かるじゃん！」

「やめて」

「そうしょ！ ネット！」

「やめなさいっ！！」

頬がはじけた。

堀川の平手打ちが、どうにもならない告白の奔流を止めた。

「なにがあったって、いきてなきやダメだよ。しんじやったらなんにも無くなっちゃうんだよ。笑うのも……悲しむことだって、みんな無くなっちゃうんだよ。そんなのいいワケないじゃん！」

被さってきた。

堀川の手……顔……胸。

暖かかった。

「……ダメ。美幸さん、汚れちゃうよ……」

「汚れない。アナタはきたなくなんかない。とってもキレイだよ、小夜ちゃん。自分のコト許せる日がくるから。必ずくるから。だから諦めないで、オネガイ」

気がつくとトラックは止まっていた

第三十一章 異端者（後編）

第三十一章 異端者（後編）

影が一つ、バネのように荷台に飛び乗ってきた。

茶髪。腰パン。幼さを感じさせる横顔。

「おら！ おりんだよ！」

しゃがれ声が荷台の下で喚いていた。

「トオルさあ、デカ声だすのやめね？ チョーうぜえし。ナナちゃんビックリちゃんじゃん」

茶髪がダルそうに運転席側にもたれ、ふんぞり返りながら声をかけた。

「こいつジジィんくせに運転とれえんだよ、いらねーよこんなの！ ヤッチまおうぜ」

「ばあ〜か、おまえクルマころがせねーだろ」

「おまえがやればいーじゃんかよ」

「やだネ、ンなダセエトラックころがせっか」

茶髪がネットリした目でこっちをひと睨みすると、登ってきた時と同じように一挙動で荷台から飛び降りた。

立ち上がって下を覗き込んでみた。

「小夜ちゃん」

堀川が心配そうに声を掛けてきた。

「大丈夫。じっとしてて」

暗がりのなかで目をこらすと、小柄な坊主頭とさっきの茶髪が作業服姿の男を小突き回していた。

「やっ止めろお！ なんなんだオマエたち、こんなトコこさせてどうしようってんだ！？」

「っせえんだよジジイ、バラされたくなくしゃだあーってすわれって」

「そんなこと……グッ……」

男の声が止んだ。腹をおさえてうずくまる。

茶髪がポケットに手を突っ込んだまま男の鳩尾を蹴り上げたのだ。

「おっさんよお、耳いてえんだよ～。クルマ動かすときはよんでやっから、そこで死んでろ」

ダルそうに言い、駄目押しの蹴りを男の背中に叩き込む。

くっと顔をあげこっちを睨んだ。

「そんなオッカネー顔すんなよ、おまけのねーちゃん。スグにやバラさねえからさあ」

「弱いもんイジメがそんなに楽しい？」

「ああ？」

「そのヒトなんも関係ないじゃん。アンタらのが動かないからって、そんなオジサンおどかしてクルマ走らせて、着いたらボコるなんてイカレてるよ！」

茶髪が黙ったまま、もう一度荷台に飛び乗ってきた。

「イカレてる？ だあ～れがあ～？」

大袈裟に耳に手を当ててウロウロしていた身体が瞬時に振り向いた。

火花が舞い、気がつく掘川に抱きかかえられていた。

右目と鼻が猛烈に痛んだ。

「あんまし壊れんなよ、オマケのねーちゃん」

茶髪がいやらしい笑みを浮かべた。

第三十二章 闇の奥（前編）

第三十二章 闇の奥（前編）

トオルと呼ばれていた坊主頭と茶髪が入り口でだらしなく座り込みタバコを吸っている。

細く開いたスライドドアから、月明かりが埃だらけの床を照らしていた。

どこかも判らぬ廃校舎の体育館。夜気が、締め付ける寒気と共に空虚な空間を満たしていた。

殴られ腫れ上がっているだろう顔にはかえって心地よいと小夜は思った。

割れんばかりに痛んでいた頭も今はだいぶ落ち着いている。固い床に当たらぬよう、堀川が横たわった小夜の頭を膝に乗せていてくれたおかげだった。

二人とも手を縛られていたが、後ろ手ではないので上半身は比較的自由に動かせた。

問題は足だった。

体育館の対角線に渡された二本のロープが二人の足に縛りつけられている。おかげで4カ所ある入り口のどれに向かっても動き出せなかった。

少し離れた所に、こちらはグルグル巻きにされた作業員の男が八百屋の大根よろしく転がされていた。

「しっかりして、必ず助けがきますから」

堀川が声を潜めて呼びかけた。

「……ああ……そっちのお嬢さんは……どうだ？」

肋骨にヒビでもはいたのか、苦しそうな息の下から男が聞き返してくる。

「さっき気がつきました。辛そうだけど鼻血は止まったし、大丈夫だと思います」

「そうか。すまん、ワシを庇ったせいでそんな目に合わせちまって」

朦朧とした頭で二人の会話を聞きながら、小夜は身体をおこした。

「……あんなチンケなパンチ、100発打たれたってなんともないわ……」

「小夜ちゃん、無理しちゃ駄目。まだ横になってなきゃ」

「ありがとう、美幸さん。でもノンキにダウンしてる暇ないよ。ジャミーが来てくれるんなら、今のうちに少しでも動けるようになってかなきゃ」

「そんなにすぐ来てくれるかしら」

「無線は壊れちゃったケド、ジャミーってケッコウ頭が働くんだ。イザって時の切り札はちゃんと用意してた筈だよ」

「ホントに？」

「ウン」

口からデマカセだった。

それでも、ここにいる二人を少しでも励まさねばならない、それが自分の役目なのだと小夜は思っていた。

早くきて、ジャミー

アタシ、あんまり頑張れないよ

入り口の方を見ると、三つ目の影が見えた。

第三十二章 闇の奥（中編）

第三十二章 闇の奥（中編）

新たな影が近寄ってくる。

腐った若者二人組と。

薄明かりの下に、でっぴりと太った男が歩み出てきた。

こっちを見るその目に……

ゾットした。

気味の悪い粘液を頭から浴びせかけられたような気がしたのだ。

「……ン……ンフフフッ……フツヒツヒ……」

男が籠もった笑い声を漏らした。

「ほお～ちゃん、こ～んば～んわ～」

「あなたね、こんなコトしたの」

堀川の声はこわばっていた。

「そだよ」

「どうして？ 何がしたいの？」

「しってるクセに。ボクのお手紙読んでくれなかったのお？」

「てがみって……」

「おんもろかったなあ、みんなキョーリヨクしてくれたんだよ。どうだった？ ドキドキしたでしょ？」

「み……んな……？」

男は一度、ネットリした視線を若者達に向けるとすぐにこちらを見た。

「うん。ほお～ちゃんちのそばの子犬シメちゃった時だって、リアル鯉のぼり作った時だって、みーんな面白がって手伝ってくれたよ。裏ネットでカキコしたらすぐ集まった。しんねーヤツばっかだったけどサ」

「じゃあなに？ アンタたち以外はみんな遊び半分でやってたってゆうの！？ 脅迫なのよ！ 誘拐なのよ！ そんなバカなことあるわけないじゃん！！」

黙っていられず、小夜は声をあげた。

「ほんとーだよ、今日だってそうサ。ちょっとネットで呼びかけたらどーよ？ みんなウジャウジャ寄ってきて『俺もオレも』の大祭りだ。どいつもこいつも自分が何やってんかなんて判っちゃいない。バカばっかだよお！……トオルちゃんとまーくんだけがボクについてきた。ゆうじくんは電車に飛び込んじやった。臆病すぎだよな、睡眠薬くらいでさ。つまんないヤツだよまったく」

男は熱に浮かれたようにまくし立てた。

「……イカれてる……アンタまともじゃない……」

「気にしなくていーよ。どーせアンタもリョーリしちゃうんだからさ。でもほお～ちゃんが先よん♪」

「そんなことさせないっ！ ゼッタイさせないから！！」

「うひょひょ、元気なおねえちゃんだね。ス・テ・キ」

アンタはソテーにしてあげるよと言いながら男が若者達に指示すると、二人の手にナイフが握られた。

小夜は堀川を思い切り抱きしめた。

第三十二章 闇の奥（後編）

第三十二章 闇の奥（後編）

茶髪のナイフがぴたぴたと小夜の頬を叩いた。

「いたそ～だねえ～。目、腫れてるじゃん」

「だれがやったのよ」

「へ？ オレ？ なにいっちゃってんのサ、勝手に転んだクセに。撫でただけでコケんなよ」

薄ら笑いを浮かべた茶髪がクルクルとナイフを回すと振り降ろしてきた。

「ひっ！」

「……お前の命はあと10秒……なあ～んちゃって」

刃先が皮一枚食い込んだ頭頂から、なま暖かい血がひと筋流れてきた。

「キャワイイこえだすじゃん。気にいった。アンタはオレとトオルで捌いてやる。ナナちゃんはアイツらでヨロシクやっちゃうんだろーからよ」

「……アンタなんかこわくない……」

食いしばった歯の隙間から言葉を絞り出した。

恐怖で全身が小刻みに震えている。

それでも、言った。

「殺らせない。ゼッタイにナナちゃんから離れない。しんでも離れない」

縛られた両腕を堀川の頭から通し、今度こそひしと抱きついた。

「おいおい、しんだらなあ〜んもできねえぜ」

「やってみろクソガキ」

茶髪の手からナイフが落ちた。

「……かわいくねーじゃん……」

足だった。

丸太のように背中へ食い込んできた。

頬を、こめかみを、固いブーツのつま先がズタズタにしてくる。

3発目までだった。すぐに何もわからなくなった。

堀川を守っているのかも、堀川の身体で自分を支えているのかもわからなかった。

顔が浮かんだ。死んだ母。そしてあの男。

なんででてくんのさ

こんな時に……

おとーさん

……

意識を無くしながら、それでも小夜は堀川から離れなかった。

◇

15m程離れた植え込みの陰から、俺たち二人は暴行の現場を見ていた。

集音マイクを握っているのは俺、隣りでふうふう言ってるシローはもう限界だった。

「なんでとめんだよお、メイドころされちゃうぞ」

「黙ってる、声あげんな」

「いいのかよお。オレいくぞっ」

手を振り払って飛び出そうとしたシローの襟首を掴み思い切り引き倒した。

「まだだ。役者が揃ってねえ。大丈夫、あんな蹴りじゃヒトは死なねえよ」

叩きつけられ伸びているシローの脇で、もう一度茂みの中にかがみ込んだ。

本当は今すぐ飛び出したかった。

奴らは三人。アホ二人以外に『アイツら』だと？

まだ他にいるのか、ゴミが

噛みしめた唇から血の味がした。

第三十三章 ゴミ掃除（前編）

第三十三章 ゴミ掃除（前編）

二人が体育館から連れ出されるのを確かめてから、まだ頭をさすっているシローに声を掛けた。

「オマエ小夜の方にいけ。オレは堀川の方をやる」

「ふたりかぁ。自信ないっちゃ」

「さっき渡しただろ？ アレを投げ込みゃ10秒は動けねえ、オマエでも楽勝だ」

「でも……でもさ、おれっち喧嘩なんかしたことないっちゃよ」

「喧嘩じゃねえ。近付いてって、それでアタマを一発づつ叩きゃしまいだ」

シローの右手には手製のスタングレネード……閃光を発して相手の視界を奪う、便利屋謹製のスグレもんだ……が二つ、左手には俺がこさえてやったブラックジャックが握られてた。

「アニキ」

「なんだ」

「おれっち……おれっちさぁ、ヒトの為になにかやったコトなんてないんだ」

「？」

「親、いないんすよ。生まれたときからずっと施設で育って。メンドー臭くて抜け出して、ずう～とその日暮らしで。バイトってケッコー金はあるんすよ。やってりゃ食いもんだって困らないし。好きな声優のコンサートだって行き放題だし。毎日気楽にチャッチャット。仕事なんかイヤなら辞めればいだけじゃん、あくせく働いてるサラリーマンなんかバツカじゃねえと思いつつ生きてきたんだ」

「……」

「アイツらオレとかわんないっちゃ。ヒトなんてどーでもいって……でもやっぱ違う！ あんなコトしたくもないっ！ 誰かに痛い思いさせて、それでハッピーなんてぜんぜん思わないっ！ どーすりゃあんな風になれっかわかんねえっちゃ」

思わぬ告白だった。

チャラチャラ見えるこの男の中に、こんな想いが埋まっていたとは。

でも俺は何も言わなかった。

「オレ、できるかな」

すがるような目でシローがこっちを見た。

「出来るさ。やりたくなくても、その時が来りゃあな」

「そうなんスカ」

「目の前で家族を殺された。みんなだ。で逃げ出した。俺あ救いようのない臆病モンだったんだよ」

「アニキが？」

「それが今じゃ腐れ野郎どもを狩る側だ。ヒトは変わる。変わっちまうんだ。オレもオマエもなんも違いやしねえ。今、堀川と小夜を救えるのはオレたちだけだ。他にゃ誰もいない。どうする？ やるか？」

ギクシャクとシローが頷いた。

第三十三章 ゴミ掃除（中編）

第三十三章 ゴミ掃除（中編）

ズタ袋のような小夜を引きずったガキどもが体育館脇の倉庫に入ってゆく。

ひと呼吸置いて、神妙な顔をしたシローが走り出したのを見届けてから俺は腰をあげた。

行動開始の前に念を押しておいた。

いいか

ピカッといったらいっかいだけ深呼吸しろ

そしたらダッシュして後頭部を殴れ

目え開けたまま投げんじゃないぞ

必ず最初に、一人イッパツずつだ

動き止めたら、あとは10発ずつ好きにブチこめ

アタマを、おもいきりだぞ

相手がどうなるかなんて忘れろ

リキいれなきゃオマエが殺られっからな

小夜を助けたきゃ……

死にたくなきゃ、やれ

心配はしていなかった。

こんなこと緊張して当たり前だ。

問題は出来るかどうかだけ。

顔見りゃわかる、やれるか、やれないか。

シローは『やれるツラ』だった。

デブが堀川を連れ、倉庫とは反対側の廃校舎へと入ってゆく。

首に縄をかけ、犬の散歩にでもいくように。

足音を殺して後をつけた。

二発持ってきたグレネードは全部シローに渡していた。使う気にならなかったんじゃないかと、考えがあってのことだ。

堀川をエサにデブを釣った。だがデブは雑魚かも知れない。

なら今度はデブをエサに本命を釣り上げてやる。

その為には.....

堀川にや危ない橋を渡ってもらう事になるな

もともとどーでもいい女だった。

ひょんなことから関わりあい、『ゴミ』狩る為にアドバイスし、泳がせ、小夜やシローを使って身辺警護の真似事までやった。全ては今夜のためだ。

なのに.....彼女を危険に晒すことに痛みを感じていた。

残りの『ゴミ』を狙うという理由はあったが、本当なら真っ先に俺が小夜を助けにいった筈だ。

シローに任せちゃおけない。アイツらを巻き込んだのは俺なんだから。

堀川 美幸

住む世界も、生きてきた日々も全く違う女

何も感じる筈などなかったのに

『ゴミ掃除』への渴望。

わけの判らぬ想い。キスの記憶。

衝動と、興奮と、冷血と。

渦巻くものに突き動かされ、俺は廃校舎に侵入した。

◇

誰もいなくなった体育館。

スマキにされていた男がむくりと身体を起こした。

ロープが重い音をたてて男の周りに落ちた。

第三十三章 ゴミ掃除（後編）

第三十三章 ゴミ掃除（後編）

「ひよっひよ、やあ〜とふたりっきりになったねえ〜、ほおお〜ちゃん」

携行カンテラの小さな灯りを背に、デブが笑った。

ローションでも滴ってきそうな粘液質の笑顔だった。

堀川は手首のロープごと床に打ち付けられていた。仰向けに。

めくれ上がったミニスカから夜目にも白い太股が露出している。

「ボク、もうたあ〜のしみでたのしみでさあ〜。なにしようかなあ〜、あーんなコトもこーんなコトもやっちゃおー」

「……こないで、 Hentai」

「ぼくちゃんへんたいだもお〜ん！ だからほお〜ちゃんもオイシクたべちゃうんだあ〜」

左手に四角く光る得物、中華包丁をぶら下げたまま、デブは堀川の胸元、薄いステージ衣装に手をかけブラごといっきに引き裂いた。形のいい乳房が凍てつく夜気に晒される。

「うはっ！ うはっ！ うはははっ！！ ピンクだピンクだああ〜！！ 写メしてネットに流してやろお〜！ みい〜んなイツちゃうぜええ！！」

デブがポケットをさぐり始めた。携帯電話を探しているらしい。

固く閉じられていた堀川の目がその時、ふいに開いた。

「……わい……こわい……アイツやばい……」

天井を睨んだまま堀川が声を漏らす。

「え？」

「.....知られてる.....ニギられて.....来るのかな.....髪ながい.....手配.....カネくれるの?.....こっち.....もうすぐじゃん.....ヤバ、まってなきや.....いいチチしてるぜ.....」

脈絡の無い言葉を垂れ流していた堀川の目がデブを見た。

「いいの？勝手にこんなことして。待たなきやいけないんじゃない？」

「????」

『バラすのは二人で』そういう約束だよな

「な、なにを」

「わかる.....聞こえるよ、アナタの『声』が。気持ち悪い位ハジけてて、でも怯えてる」

「なんで.....」

デブの顔に汗が噴き出してきた。

◇

俺まで肝ぶっ飛ばされてた。

ヤラれるくらいは仕方無い、『ゴミ』さえ喰いつきゃ命落とす前に助けてやろうってつもりで様子を伺っていたが、今じゃあのデブとおなじだった。

アイツ.....

デブの心を『読んでる』

超能力でもあるってんか？

デブがバケモノでも見るような目で堀川を見ていた。

たぶん俺もそうだろう。

自分の顔をひとつ撫でた。

第三十四章 異能者（前編）

第三十四章 異能者（前編）

ヒロシマのときはカンタンだったね

誘ったの、あの茶髪のコ？

そうよね、アナタじゃムリ

誰もついてきやしない

キモくて

でしょ？

床に打ちつけられたままの堀川が、酷薄な声でデブに告げた。

たのしかった？

命乞いするおんなのこを、なぶって、犯して、切り刻むのは

普段のアナタじゃ逆立ちしたって無理

さかな捌くのだって出来ないクセに

荒れ壊れた教室に淀む、冷えきった空気。

それより更に冷たい声が言葉を刻む。

俺の知る堀川は何処にもいなかった。

デブは呆然としながら聞いていた。

互いの位置は変わらぬまま、その優位は完全に逆転していた。

こんなときだけあなたは大胆になれる

オシャベリになれる、誰かにさわれる

わかる？

マーダースハイ

そんなものでもなければあなたはやってられない

誰もあなたを見ない

声をきかない

バカにすらされない

そんな値打ちも無いとすら言われたことさえない

居てもいなくても、どうでもいいから

今までも、ずっとそう

デブがわなわなと震え始めた。寒いからではない。

堀川の言葉がデブの精神を切り刻んでいるのだ。

もう楽しい遊びじゃない

あなたはワタシを黙らせなきゃいけない

これ以上は耐えられないから

あの二人だってあなたなんか何とも思っていない

危なくなったら年上のあなたに全部かぶせて逃げ出すつもりよ

わかってるでしょ？ あなただって

だから小夜ちゃんを与えた

ワタシをひとりじめにしておかないと怖くてしょうがないから

デブの顔面筋肉はもはや制御不能になっていた。

デタラメに引きつり痙攣している。

パクパクする口の端から涎が垂れ落ちていた。

「……黙れ……だまれだまれだまれダメレ、ダメレええええー！」

アル中のように震える腕で中華包丁を持ち上げた。

「オマエほっちゃんじゃねええー！ 魔女めえ！！ ブッ殺してやるううー！！！」

あら、そう

やれば

後ろに気をつけてね

振り向いたデブがもんどり打って吹っ飛んだ。

白目を剥いて倒れた額から鋼弾が転がり落ちる。

スリングショットを構えたまま、俺は言葉無く堀川を見下ろした。

第三十四章 異能者（中編）

第三十四章 異能者（中編）

見下ろしていたのは少しの間だけだったと思う。たぶん。

「大丈夫か」

屈み込み、ケツからポケットナイフを取り出して両手のロープを切断しにかかった。

床に繋がれている堀川が黙ったまま見上げてくる。

憂いを含んだ、つぶらな瞳で。

「小夜ちゃんは？」

「シローがいった。今頃はもう終わってるだろう」

「そう。よかった」

「知ってたな。俺がいること」

「聞こえたから、『声』が」

「声？」

ロープが解けると、おきあがった堀川は両手で身体の前を隠した。

「わりい」

スウェットを脱いで掛けてやった。

「それでガマンしろ。ないよりヤマシだ」

「……ありがとう……」

彼女に背を向け煙草に火をつけた。

煙をくゆらせながらデブを見ると、完全に白目を剥いてだらしなくノビていた。

いい気なモンだ

美女の解体ショーやらかそうって奴が、一発くらっただけでこのザマかよ

手応え無さすぎだぜ

殺っちまうか

「駄目、そんなことしちゃ」

声がしたほうに振り向くと、黒いスウェットを着た堀川が手首をさすりながら立っていた。

「なんで教えなかった……って言うだけ無理か。誰だってドンびきだぜ、ココロ読まれちゃよ」

「そんなのじゃないよ」

「じゃあ、なんだってんだ」

「遺伝……なのかな。父さんは生まれつき目が見えなかったんだけど、時々、ほかの人の『心の声』が聞こえたんだって。ワタシも今までに何度か、何かが伝わってくるのを感じたことはあったけど、こんなにハッキリ聞こえたのは初めて」

「今はどうなんだ」

「きこえてる。はっきりなしに」

堀川が顔をしかめた。

何が聞こえてるってんだ？

いや、聞かなくても判る

俺を満たすもの……

「さぞ嫌だろうな、そのデブより悪質だろうよ」

俺は吐き捨てた。

バケモノでも見るような目で堀川が俺を見た。

「あなた……」

「判ったか。オレもひとごろしだ」

二歩、三歩、堀川があとずさりした。

「オレにはよ、このデブみてえな変態どもブチ殺したい、タツプリ苦しめて殺っちまいたいって願望しかねえ。オマエはその為の『餌』だ」

注がれる怯えた視線を、何故だか痛いと思った。

第三十四章 異能者（後編）

第三十四章 異能者（後編）

違うの

デブを縛りあげ、外へ出ようと促す俺に堀川が言った。

「アナタが何を思って、何をしようとしたか聞こえた。でも、でもね、そうじゃないの」

「何がだ？ 悪いがお喋りにつき合ってる暇はねえ、コイツらのツレが来る前にここから……」

「どうしてそんなに叫んでるの！？ すごく痛い、あなたから聞こえる『声』が。頭が割れそう。『小夜子、さよこ』って。誰？ 恋人だったの？ そのヒトを目の前で殺されたのね」

小夜子の名が、俺を床に縫いつけた。

「それ以上いうな」

「アナタ自分でも気がついてない。殺したいとか言ってたけど、一番聞こえてくるのってそれだけだよ。ずっとその名前を呼んでる」

「いうな」

「小夜ちゃん、その人に似てるのね、だから……」

いうなって一のがわかんねえか！

怒鳴った。

堀川をぶん殴った。

殴ったつもりだった。

でも俺の手は1ミリも動いてなかった。

「いもうと、だ」

「え？」

「小夜子は俺の妹だった。あの日、両親と一緒に仲良く殺されちゃった。オマエの言う通り、俺の目の前でザクザク刺されて、な」

一番、思い出したくない記憶。それが開いた。

開けたのは堀川だった。

「通り魔って奴だ。クソ野郎が13人殺した……13人だぜ！ その中の3人は俺の家族さ。何も出来なかった。オレあびびって、ケツまくって逃げ出しただけさ。それで戻ってみりゃオヤジもオフクロも小夜子も、みいーんな殺られちゃった。嫌なんだよ。もうあんな思いすんのは。あんな目にあう位なら、俺がこの手でクソ野郎どもを狩り殺してやる。そう決めて今まで来たんだ……」

もうマトモにや戻れねえ

戻る気もねえ

そう堀川に告げた。

「オマエの知ってる世界じゃないんだ、オレがいるのは。だからもう言うな。帰ったら、今夜あった事は綺麗サッパリ忘れちまえよ」

「そんなこと出来るとおもう？」

「無理にでもやれ。じゃなきゃオマエも戻れなくなるぞ。恐怖だの嫌悪だの憎しみだの抱えたまま、マトモな眠りにつくことも出来なくなる。1週間のうち5日は、闇を睨んだまま朝日が昇るのを見ることになるんだ。気が狂うぜ」

まだ何か言いたげだった堀川が俯いた。

第三十五章 夜姫（前編）

第三十五章 夜姫（前編）

堀川を廃校舎から連れだし、デブを校庭に放り出すと向こうから人影が近付いてきた。

いびつな形の影がヨロヨロと寄ってくると、カンテラの灯りの前で膝を折った。

シローがそっと背中から降ろしてやると、小夜がふらり一歩、二歩、こちらへ歩いてこようとした。

腫れあがった顔、切れて血だらけの唇。

それがパクパクと動く。

ぐらり、と小さな身体が傾いた。

俺よりも早く駆けだした堀川がひしと抱きとめ包み込む。

「小夜ちゃん、小夜ちゃん！ しっかりして！ もう大丈夫だよ、帰れるんだよ！」

「……い……ゆき……ざん……だい……じょ……」

「ワタシは平気、彼が…… ジャミーさんが助けてくれた。シローさんだって」

「……いろ……スゴ……か……やっつけ……ふだりも……じょっど……カッ
コイ……か……」

堀川の脇にかがみ込み、俺は小夜の額にかかった髪を払ってやった。

「もういい、喋るな」

「じゃ……み……たし……アタシ……」

「判ってる。オマエのおかげで堀川は無事だ。よくやったぞ」

そっと頭を撫でてやると、心霊写真並に酷い顔を引きつらせて小夜が精一杯笑ってみせた。

腫れた両のまぶたに手を置いた。

「目を閉じて、少し眠れ。次におきるのは安全な場所だ。終わったよ……ぜんぶ」

痛々しい顔だった。

でも満足そうだった。

「シロー、その辺に水道があるだろ、タオル濡らしてきてくれ」

魂が抜けたようにつつ立ってるシローに声を掛けた。

「奴らをどうした？」

「縛って……転がしてある……」

「そうか。オマエもよくやった」

「あにき……おれっち……」

「あとで聞いてやる。今は小夜の手当が先だ。はやくいけ」

ぶらりと垂らした手にタオルを握らせ背中をどやしつけると、ぎくしゃくとした動作でシローが校舎の方に歩き始めた。

「堀川。小夜を頼む」

「どうするの？」

「このデブを倉庫に放り込んで、ついでにガキどもの様子を見てくる」

「体育館にまだトラックの運転手さんが縛られてる筈よ」

「わかった、帰りにみてる」

「あの」

「なんだ」

「……さっきのこと、言わないでね……」

「わかってる。ありゃ他人に好かれるモンじゃねえからな」

「ありがとう」

堀川がこっくりと頭を下げた。

第三十五章 夜姫（中編）

第三十五章 夜姫（中編）

デブはうんざりするほど重かった。

崩れかかった体育倉庫に入ると、腐ったマグロのように転がされたガキ二人組が目映った。

ピクリとも動かない。

屈みこんで髪をつかみ、ツラをおがんだ。

二人とも元の顔が想像出来ないほどだった。

外傷は無い。ブラックジャックの恐ろしさは、外傷をつけずに打撲傷と内出血、脳挫傷を狙える所にある。

シローの奴、確かに手え抜かなかっらしい

上出来だ、だが.....

仲良く顔面サッカーボールになったガキ二人の首筋に触れてみた。脈だけはしっかりしている。

逝っちまってもいっこうに構わないんだが、こっちのお楽しみはこれからだ。

デブと一緒に三人とも後ろ手に縛り、ロープの端を首に掛けておく。

こうしておけば暴れても自分で自分の首を絞めるだけだ。

倉庫を出た。

もうすぐ取り壊しが始まるのだろう、倉庫脇には建物解体用のコンボや鉄球マシンやらが虎縞ロープに囲われてひっそりと置かれていた。重機のキャタピラに腰掛け煙草に火をつけた。

ああは言ったが、これで終わりじゃない

まだ『ゴミ』は残ってる筈だ

なりゆきで堀川を助けたが.....

さて、どうする

少しの間、そこで考えを巡らせていた。

とりあえず堀川の言っていたトラックの運ちゃんをやらを拾って、あいつらを帰すしよう。

それから暫く、ここで『罨』を張る。

まあ喰いつかなきゃ別の手を考えるさ。

煙草を踏み消し、体育館へと歩きだした。

◇

誰もいなかった。

自分で逃げたのかと一瞬思ったが、すぐに気づいた。ロープがない。

それだけじゃなかった。

ガキどもが捨てた煙草の吸いながらも1つ残らず消えていた。乾いた地面は拭ったように足跡1つ無い。

まるでここには誰も居なかったかのように、痕跡という痕跡が消し去られていたのだ。

嫌な予感がした。

何かに背中を押され体育館を飛び出す。

校庭の隅、堀川たちがいる筈の辺りへ向かって走った。

携帯カンテラのボンヤリした灯りが遠くに見えた。

それとは別の灯りも。

ハンドライトらしき光線が闇を薙いでいる。

どンドンカンテラの方へ近寄っていた。

走りながらナイフを手にした。

第三十五章 夜姫（後編）

第三十五章 夜姫（後編）

ライトを避け大きく回り込むように走った。

地下足袋のように足に吸いつくスリッポンはうまいこと俺の足音を消してくれていた。

光の筋が堀川たちへと真っ直ぐに近寄り始めた時にはもう、俺はライトの後方から迫っていた。

ナイフは逆手に握り変えてあった。相手次第では柄で急所を突ける。

ライトの持ち主が止まった。

もう手の届く距離だった。

「あ……あの、どうしたんですか？」

逆光になった小さい影から声がした。

おんな？

「だれ？」

堀川の声が強張っていた。

「だれっ、て……ケガしてるじゃない、まって」

たしかバンソーコーが……と肩のポシェットを降ろしてガサゴソはじめた女の後ろに立った。

「だれだ」

「キャッ！」

声を掛けられた女が振り向きざま悲鳴を上げて尻もちをついた。

「こんな夜中にこんなトコでなにしてやがる」

「なに？ アンタだれよっ？ このコこんなにしたのアンタなの？ ヘンタイ！ ひとさら
いっ！！」

バスッ！

いきなり顔面にポシエット叩きつけられ面食らった俺の脇を、女が猫のように駆け抜けた。

「みい～んなあ～！ ヘンタイよお～！ こっちきてハヤクう～！！」

みんなってオイ……

何なんだと思いながら女を追いかけ、腕を掴んで止めようとした。

メチャクチャに暴れて、かみつくは、ひっかくは、トンでもねえジャジャ馬だ。

「落ち着けて！ ちがう！ ちがうんだ！！」

「っせえヘンタイ！ はあなあせえよお！」

すったもんだの挙げ句、息があがった女に話して聞かせた。

二人がさらわれたこと。

後を追って助けにきたこと。

ヘンタイはやっつけたこと。

怪我したのは友達だということ。

たったそれだけ話すのにエラく時間が掛かった。

ナントカ判ってくれたらしい女がやっと暴れるのを止めた。

「そっか、アタシでっきりアンタがやったのかと」

「そう思うのも無理ないケドよ。ところで何でこんなトコ、ウロウロしてたんだ？ 大晦日の真夜中だぜ」

「友達みんなと肝だめしだよ」

女が言った。

「名前は？」

「ケーコ。かみ……神永 圭子よ」

ポシェット置いてきちゃった。

そう言って女は堀川達の方へと戻っていった。

第三十六章 黒の終焉（前編）

第三十六章 黒の終焉（前編）

小夜の怪我は絆創膏くらいじゃとても追いつかなかったが、神永と名乗った女は気にする風でもなくペタペタと貼り付けていった。

「これでよしっと。腫れが酷いから冷やさなくっちゃね」

「ああ」

シローのことを言おうと思ったが、口から出てきたのは曖昧な返事だった。

「動かすの、チョット大変だね。みんな呼んでこよーか？」

「誰も見なかったぞ」

「来たばっかだもん、まだそのへんウロウロしてんじゃないかな。おっきな声出せば聞こえる筈だよ」

「それはカンベンしてくれ。こんな事しでかした奴らの仲間がまだ居るかもしれねえんだ」

「そうなんだ。じゃ、行って呼んでくるね」

「いや。ここから離れろ。他の連中にも言ってくれ、危険だから肝だめしは止めようって」

「……そだね。しょーがないもんね」

少し不満気だが素直に応じた神永が校門の方へ向け歩きだした。

◇

「運転手はいなかった」

神永が見えなくなってから、声を抑え堀川に告げた。

「そんな、だって」

「それだけじゃない、ヒトがいた痕跡も残さず消されてた」

「? どういうこと」

「一緒にさらわれてきたって言ってたよな、そのオッサン」

「うん。あいつらの車が動かなかったみたいで、近くに止まっていた工事のトラックに投げ込まれたの。その時運転手の人を脅して車を奪ったみたい。もめてる声が聞こえた」

「声、だけか」

「だけって?」

「現場を見た訳じゃないんだよな」

「.....」

「連中とグルかもな。状況を見る限り、おっさんが残りの『ゴミ』の可能性が高い」

「でも蹴られてたよ、茶髪のコに」

「逃げられた時のこと考えて、ひと芝居打ってたか、でなけりゃ連中も知らないのかもな、『黒幕』の姿を」

「そんなことって.....」

「とにかく、シローが戻ったらオマエは帰れ。小夜の具合も心配だ」

「アナタはどうするの?」

「気にするな、こっからはオレの『仕事』だ」

足音がして振り向くと、神永が戻ってきた。

「みんな帰るって」

「そうか。オマエも帰れ、神永」

言って堀川のほうへ向き直った、その時。

信じられないものを見た顔で堀川が叫んだ。

うしろっ！

黒い塊が突っ込んできて、左足に激痛が走った。

第三十六章 黒の終焉（中編）

第三十六章 黒の終焉（中編）

とっさに払いのけようとした。

払うつもりが、俺より小さいそいつを押し下げるような形になった。

下腹のど真ん中だったろう、マトモに喰らってりゃ。

そこは防護板を入れてない。腸の隙間から肝臓か腎臓を貫かれイッパツ悶絶あの世行きだった。

ラッキーだった。

刃は左太股に深々と刺り、グリグリと肉を抉っていた。

絶叫しながら突き放そうとした。

横に払った刃が内腿の肉を切り裂き、ちっぽけな足に蹴り飛ばされた俺はぶざまに地べたへ転がった。

小便漏らしたみたいに、大量の血があっという間にズボンをグショグショにした。動脈をやられたらしい。

「油断した。好みでもねえのによ」

傷口にハンカチを押し込みながら言った。

動脈なら縛っても無駄だ。圧迫して、少しでも早く処置を行う必要がある。

だがコイツはそんな悠長な時間はくれそうもない。

「余裕こいてるつもり？ そこ切ったら30分も保たないわよ」

「ジャリガキひとり始末するのに5分もいらねえぜ」

「やってみれば。出来るならさ。立てる？」

カンテラの薄明かりに照らされ、大型の刃物を握ったそいつ……

神永 圭子が不敵に笑った。

「オマエが残りの『ゴミ』か」

「きったないわね。ゴミはそのオンナじゃない」

吐き捨てるように神永が言った。

「ワタシが？ どうして！？」

小夜を抱えたまま動けない堀川が、俺の後ろで驚いたような声をあげた。

「あんなブタどもに媚売って、ヘラヘラまいにち生きて。ゲロいんだよ！」

まだ若い女の顔が、何だか判んねえ感情で醜く歪んでいった。

「ケツふって、へったくそな歌うたって、チャラチャラしながらアニメかナンカの声あてて……ムカつくんだよっ！ 何でテメエみたいのがモテんだ！？ 何で誰もかれもテメエを持ち上げんだよ！ いらねえじゃんか！ ヒトのもんまで持ち逃げしやがって！！」

普段なら可愛いかも知れない顔が、叫ぶたびに鬼へと変わっていった。

「わたしが何を持ってっただってゆうの？ 何もしてないよ！」

「アタシの名前はね、上条 圭子よ」

女が言った。

「まさか……あなた、上条さんの娘さん？」

堀川の顔が蒼白になった。

第三十六章 黒の終焉（後編）

第三十六章 黒の終焉（後編）

上条 一郎はアタシの父よ

神永、いや上条圭子が絞り出すような声で言った。

「パパはいつだってアタシの味方だった、アタシだけのパパだった。それがアンタのマネージャーになって、家にも帰ってこない、毎日まいにち外泊ばっかで。ママはおかしくなっちゃった。パパが浮気してんじゃないかって。でも違う。アンタがパパを持ってっただんだ！！」

「たしかに……ここ何年か上条さん、わたしを売り出す為にももの凄く無理してた。朝から晩まで走り回って。だから社長も、上条さんの言うことだけは文句も言わずに聞いてた。今日みたいにコンサート出来るようになったのだって、上条さんのおかげよ」

堀川がうなだれた。

「ナニサマのつもりよっ！ ふざけんじゃねえよ！ アンタなんかあのブタどもに切り刻まれてクソになっちゃえばいいんだっ！」

「……だからってよ、殺していいってハナシになんのかよ……」

血を止めながら口を挟んだ。

猛烈な勢いで出血していた。おまけに激痛が襲ってくる。

こんなチビ相手でも反撃する力がなかった。

あとの頼りは……

「広島のコは何の関係もねーだろ。あのコ殺る時、てめえも居たんだろ？ 足跡にやたら小せえのが混じってたって話だぜ」

「知らない。あのバカども何しようがアタシに関係あるわけないじゃん。声かけて連れてきてやってただけよ」

「そのコにも『明日』ってモンがあるなんて欠片も思わなかったのかよ？ 他人はよ、てめえの遊び道具でも鬱憤晴らしのオモチャでもねえんだぞ。甘ったれんじゃねえ！」

「ウルサイっ！ アンタなんかに何がわかんのだよ！ パパがどれだけアタシを大事に、一番に扱ってきてくれたか、アンタなんかにわかるかっ！」

「知るか、んな過保護と一ちゃんなんか」

上条圭子がポシェットからひと握りほどの物体を取り出した。

先端からバチバチと火花が散る。

「スタンガンって痛いのかなあ。広島で試した時は面白かった。あのオンナ、口からヨダレたらしてたっけ」

「知りてえならテメエで試せよ」

にじり寄ってくる圭子から堀川を庇うように後ずさった。

クソ……

不意に圭子が振り返った。

その首が瞬間、不自然に曲がり身体ごと吹き飛ぶ。

ブラックジャックを手に、シローが立っていた。

第三十七章 屍者（前編）

第三十七章 屍者（前編）

棒のように立ち尽くすシローの目は、何も見ていないかのようだった。

「アニキ……」

「たすかったぜ、オマエが頼みの綱だったんだ。うまくブッ飛ばしてくれたよ」

痛みをこらえ立ち上がろうとする俺を気にする風でもなく、シローは倒れた上条圭子に近寄り膝を折った。

？

いぶかしむ俺の前でシローがブラックジャックを振り上げた。

グシッ

グシュ

グビュ

杭でも打つように上条の顔へブラックジャックを振り降ろす。

小柄な身体がそのたびに短く痙攣した。

「よせ、もういい」

「こいつもクソだ。オンナのくせにオンナ痛めつけて。クソはきっちり壊しておかなきゃ……」

「もうやめろっ！」

ビッコ引きながらシローの腕に飛びついた。

ブラックジャックをもぎ取り闇の向こうへ投げ捨てた後も、シローは機械のように腕を動かした。

「しっかりしろ、もう終わったんだ！ オレをしろ、みるんだっ！！」

顔を挟み込み額を押しつけて怒鳴った。目に光が戻るまで、そのまま顔を揺さぶり続けた。

手を止めたシローが俺を見た。

「.....アニキ、足、ケガ.....」

「んな事ぁいい。聞け、オマエは堀川と小夜を連れて戻れ。オレはこいつを.....」

「いやだ」

「シロー！」

「アニキに言われた通りやったっす、あのピッカリ玉投げて、後ろからイッパツずつ。ブルッってたケドやれたっす。あと2〜3発いれなきやって近寄った時、倒れてたメイドが見えて.....みえて、おれっちワケわかんなくなった。バリむかついて、ブチ切れちまって。気いついたらアイツらゴゴゴにしてた。止まんなかった。殴っても殴っても止まんなかった。潰れちまえ、潰しちまえって。あんなにヒトが憎いと思ったの生まれてはじめてだった。殺そうと思った。オレ、アイツらと同じになっちゃった」

ピクリとも動かない上条圭子の脇にひざまづいたまま、シローは自分の両手を顔の前に持ち上げた。

「どうすりゃいいっちゃ」

「.....どうもこうもねえさ。オマエは守ったんだ、二人を。オレを。奴らとは違うんだ。てめえ勝手なド変態野郎どもや、愛情ひとつマトモに受け取れねえクソガキとはよ.....」

肩をひとつ叩くと、シローが手を降ろした。

第三十七章 屍者（中編）

第三十七章 屍者（中編）

三人を帰した。

シローはまだぼうっとしていて危なっかしかったが、幸い堀川が免許を持っていたので……不携帯だが……オレの言った病院まで小夜を運んでもらうことにした。

堀川とシローはアリーナに戻るが、大騒ぎのハチの巣に飛び込むようなもんだろう。

堀川が何と言って納めるか。

車の窓越しに交わした言葉。

それがまだ頭の中にわだかまっていた。

◇

「お願いがあるの」

ハンドルを握った堀川が言った。

「アナタが今、思っていることをしてはダメ」

「そこまで聞こえんならよ、さっき教えてくれりゃよかったじゃんか」

「そんな都合良くいかないわよ」

「もういい。早くいけ」

「約束して。警察に渡すって。復讐はなにも生まない。妹さんだって……」

「妹のことは言うな」

「ジャミーさん！」

「オマエがしなきゃならないのは小夜を病院に連れてくことだ」

車のポディーをひとつ叩いた。

「いいか。死んでもいい人間はいねえ。いるのは、生きててもいい奴と、その必要が無くなった奴だけだ。……いけ」

堀川はもう何も言わなかった。車は夜に紛れてすぐに消えた。

◇

上条を体育倉庫に放り込んだ。

チビだが、深く挟られた足には恐ろしく重かった。

こいつらをどうするか

今すぐ『始末』はしない。

アリーナに仕掛けた監視カメラの映像と胸ポケットに潜ませたICレコーダーが全てを記録していた。あとはいつも通り……

それでいいのか

踏ん切れないのは堀川の言葉のせいだろうか。

復讐はなにも生まない、たしかにそうさ

だがケーサツだってなにも生まないじゃんか

躊躇いを抱えたまま外へ出ると、人影が立っていた。

青い作業着の中年男。トラックの運転手だった。

「やっとおでましかよ」

「初めまして、だな」

「奴らの仲間か？」

「まさか」

カラカラと笑い、男は片手のリモコンボックスを持ち上げてみせた。

背後で轟音がとどろいた。クレーン車が鉄球を高々と釣り上げてゆく。

「自己紹介しようか、邪魔屋クン」

「テメェ……なにモンだ」

男の指がスイッチを押す。

「肥溜屋だ」

落下した鉄球が倉庫を粉々に叩き潰した。

第三十七章 屍者（後編）

第三十七章 屍者（後編）

な！？

宵闇よりもっと黒く凶々しい鋼鉄の玉が、持ち上がり、落ちる。

ペシャンコになった体育倉庫が、見る間に瓦礫と化していった。

中にいる人間たちと共に。

「手付けはこんなモンか」

男が言った。

「……てめえが……肥溜屋……」

「名前くらいは知っているか。同じ『街の裏』の住人だからな」

「オレの獲物だ」

「獲物ねえ。どう見ても嘯みつかれたのはお前さんだぜ」

せせら笑いながらコントローラーを足下へ放り出した。

巨大な鉄球が瓦礫にめり込んだまま動きを止める。

「今の邪魔屋はどんな奴かと思ってたが、お粗末なモンだな」

「あんど？」

「あんなガキども相手に『表』の連中まで使い、大騒ぎしたワリにやさっさと『始末』するのを躊躇ってる。遊びかよ」

「あっさり殺っちまいやがった。てめえは死体処理が仕事だろうが。それがしゃしゃり出てきやがって……どーいうつもりだ」

肥溜屋は答えなかった。

相変わらず嘲笑を浮かべたまま、世間話でもするように話し続けた。

「アリーナ前で待ち伏せてた。ありゃ盗難車だな。ハンドルなんぞ握ったこともないのがひとり、もうひとりも無免許で転がしてた阿呆だろう、排気管が詰まりゃエンジンかからないのも知らない。馬鹿相手は楽だな」

「ワザと近くにトラック止めて、ジャックされるよう仕組んだ。後は堀川達が見聞きした通りか」

「あんな蹴りじゃね、やられるのも骨が折れたよ」

「言えよ。何故だ？」

肥溜屋がじっとこちらを睨んだ。

変わらぬ穏やかな顔はもう笑ってはいなかった。

「耳屋だ」

「なに？」

「アイツが伝えてきた、『邪魔屋がヤバい』と」

「ヤバい？ オレが？」

「こんな簡単な仕事に他人を使い、騒ぎを大きくしたあげく『表』に波たてて。これで仕上げをドジリゃ『街』はお前さんを棄てる。『始末』されるんだよ。それが裏の掟だ」

瓦礫の隙間から流れ出してきていた。

軟体動物のような影。大量の、血。

「気をつけな。次はお前さんがあゝなるぜ」

さらりと吐き、肥溜屋はトラックのほうへと歩き始めた。

追いかけてやうとした。

地面がぐらりと傾く。

血を失い過ぎた、そう思った時にはもう、俺は地面に激突していた。

第三十八章 沈む夜明け（前編）

第三十八章 沈む夜明け（前編）

.....

.....

.....

「どこだ？」

目を開けたら耳屋が立っていた。

白い壁。何も無い部屋。ぶら下がった点滴。

聞くまでもないが、目覚めの言葉としては妥当だろう。

「個人経営のクリニックだ。心配せんでも出たい時に出れる。回復すりゃあな」

耳屋が答えた。

「どれくらいだ」

「まるまる二日寝てた。切れた動脈は便利屋が縫った。ここも奴の知り合いがやってる」

「俺を拾ったのは？」

「んな物好きなんざ一人しかいねえだろ」

「そっか」

手を差し出した。

意味を計りかねた耳屋が、数秒躊躇って俺の手を握った。

「！っ！！」

「誰があんな奴よこせっていった。俺がドジるだと？ ナメるな」

握った人差し指を逆に捻ると、半身を起こした俺の脇へ耳屋が落ちてきた。

ベッドの縁に顔がめり込むまで捻り上げる。

「礼は言っとくぜ。あのままオネンネしてたら朝までもたなかったからな」

「……めえは……礼いうのに……こう……するんか……」

「ああ。頭を下げるのは倒れた相手だけ、本音を吐くのはくたばった相手だけ、それが『邪魔屋』だ」

「きいたふうな……クチを……」

「どっちがだ。とっくに引退した元『邪魔屋』がよ。おせっかいにも程があるぜ」

「よせ……おあ……」

握った指を返し、軽く持ち上げ後ろへ振った。

面白いように耳屋の身体が浮き上がり、壁に向かってブツ飛んでった。

叩きつけられグズグズと崩れ落ちた耳屋が、もの凄い目で俺を睨みあげた。

「てめえ……ここでブツ殺されてえか」

「やれよ。オレは動けねえ。『始末』する手間が省けるぜ」

殺意まで浮かべてた耳屋の目が見開かれた。

「メンドクせえのは嫌いなんだ。今だったら殺る気マンマンだろ？」

「ぼん……」

「アンタが拾った命だ、アンタの好きにすりゃあいい。もともとそういう付き合いだった

んだ、オレが文句いう筋合いじゃねえよ」

……

目から力を抜いた耳屋がぬっと立ち上がった。

「下手な煽りだ。オレに殺られて貸し借りチャラにするつもりだったんか」

「しるか」

「この単細胞が。誰がてめえを仕込んだと思ってんだ？」

そうだ。

この指折りも、身に付けたロクでもねえ技もみんな、耳屋が俺に教えたもんだ。

「ひとつ教えとく。少し聞け……肥溜屋のことだ」

耳屋がベッドの端に腰掛けた。

第三十八章 沈む夜明け（中編）

第三十八章 沈む夜明け（中編）

アイツはな……

オレと同じだ

耳屋は淡々と言葉を紡いだ。

「ってことは」

「ああ。元『邪魔屋』だ」

潜めるような声で耳屋が続けた。

「俺たちやコンビで『仕事』をこなしてた」

「そりゃ楽でいいな」

「チャカすな。俺らが現役だった頃、『街』の凶悪犯罪はゼロに近かった。当たり前だ、『ゴミ』という『ゴミ』片っ端から始末しちまったんだからよ」

耳屋がショートホープを取り出した。

指で催促すると一本抜いてよこした。

「～ふう～」

病室は禁煙なんだろうが、気にする風でもなく耳屋は煙を吐き上げた。俺も同じだ。

「7年、だ。長くやってたよ。俺は家族持ちであいつは独り身だったが、どっちも食ってかなきゃならなかった。色々あってな、二人とも『表』にゃ戻れねえ身だったんだ」

「おっちゃん、結婚してんのか」

意外だった。

店でもヤサでも耳屋以外の姿を見たことはなかった。

「家族なんざみたことねえぜ」

「とっくにバラバラだ。元ニヨーボは4年前に死んだ。癌さ。最後はボロボロになってくたばったよ」

「子供はいないんか」

「娘が、ひとり」

「連絡は？」

耳屋は答えなかった。

「とにかく俺たち『仕事』しまくった。驕ってた。誰にも止めらんねえ、意見させねえつてよ。だが所詮は『街』の家畜さ。しっぺ返しがきたのは突然だった」

ガキを一人、始末した。

簡単すぎて油断してたど耳屋が言った。

『『ゴミ漁り』で引っかけた奴じゃなかったのに『街の意思』を確かめもせず鼻歌交じりに殺っちまった。だが相手がマズかった」

「どういうことだ？」

「そのガキは市長の倅で、この『街』の再開発計画の推進者だったのさ」

「関係ねえじゃねーか。『ゴミ』だったんだろ？」

「ああ。表沙汰になっただけで2件、実際にや8件の強姦殺人の犯人さ」

「じゃあよ、問題ねーじゃねえか。市長が横やり入れたんか？」

「いや。だが『街』は奴が人知れず消える事を望んでいた。後任を決め、計画に支障が出なくしてからな」

「……結局おなじことじゃねえか」

「派手に殺っちゃまったのさ。やり過ぎたんだよ、俺たちは」

耳屋はニガい顔で、短くなった煙草を床で踏みつぶした。

第三十八章 沈む夜明け（後編）

第三十八章 沈む夜明け（後編）

「死に方が死に方だったんでな、マスコミどもが群がってよ、あることないこと探られて『街』の再開計画そのものが頓挫しかかったのさ」

計画が潰れてたら始末されてたろうと、二本目の煙草に火をつけながら耳屋が呟いた。

「幸い『火消し』にや成功して計画そのものは進められる事になったが、何もなしって訳にはいかなかった。邪魔屋は金輪際クビさ」

「それで？」

「アイツは事後処理能力を、俺は情報収集能力を買われて今の稼業を許された。飼い主は檻を分けたってことさ」

「よくそれ位ですんだな」

「まあな。『火消し』をしたのが俺で、うるさいブン屋を誰にも疑われずに『消した』のが肥溜屋だったからな」

「……」

「後釜選びは俺に任された。条件はふたつ。見境もなく殺りまくる奴じゃないって事と、てめえの判断だけで勝手にやるような馬鹿じゃないって事、それだけだ」

「オレの前任者……九条とかいう奴か」

「オマエなんで知ってる！」

耳屋が心底、驚いた顔で怒鳴った。

「水草屋がいったぜ。惚れてたってよ、あの鉄面皮のメスガッパが」

「.....あのバカ.....余計なことを.....」

「始末したらしいじゃねえか。あのオンナこええな、惚れてたオトコ殺っちゃうなんてよ」

「誠はいい男だった。正義感が強くてな。ひとが理不尽に殺されるのは見ちゃいらんねえ、そう言って邪魔屋を志願した。あのまま育ててくれりゃあな.....」

言い淀んだ耳屋が天井を仰いだ。

ふと、どこかで見た横顔だと思った。

ありゃあ確かメスガッパの事務所で.....

「ある時、誠は自分だけの判断で『ゴミ』を始末した。そりゃ絶対に許されねえ事だった。誠も覚悟の上でそうしたんだろうよ。.....水草屋にとっちゃ辛い思い出だ」

「で、オレを拾った」

「そうだ。お前を育てたかった。『街』のルールの中かで、てめえで仕切り、後の始末まで出来る男に。でも今度のはヤバい、一歩間違えりゃ誠のときとおんなじだった。だから肥溜屋を使った。奴ひとり動かすだけなら誰にもなにも勘付かれねえからな」

「.....」

暫くすると二本目の煙草が灰になった。

やっぱり床で踏み消すと、耳屋が改めて俺をみた。

「あとひとつ。肥溜屋は骨の随まで『殺し屋』だ。死体処理なんかチマチマやってんのはな、アイツが自分の殺人衝動を抑え込む為でもあるのさ。『街』が許せば喜んでぼんを始末するだろうよ。気をつけな」

耳屋の眼差しは厳しく冷たかった。

第三十九章 哀情（前編）

第三十九章 哀情（前編）

5日間の入院生活になった。

丸2日を昏々と眠り続け、3日目に耳屋の説教が待っていた。いや昔話か。

そして、4日目。

◇

「よお」

「元気になったのね、よかった」

薄い水色のワンピースをまとった堀川 美幸が病室を訪ねてきた。

化粧っ気のない顔が心なしかやつれて見えた。

「大変だったろうな」

「うん。あの時、お客さん達がステージに迫ってきたあれ、ネットで呼び掛けがあったんだって。『みんなでドッキリサプライズ』とかいって。爆竹が合図だったみたい。警察も動いたけど、結局誰が言い出したか特定出来なかった」

「で、人騒がせなオタクどもはどーなった？」

「嚴重注意だけ。無理よ、何百人もいたんだし、みんな悪気があってやった訳じゃないから」

「悪気なきや何やってもいいんかよ」

けったくそわるくなって語気を強めた。

「いい気なモンだな、オタクって奴らはよ。てめえらが人肉パーティの片棒担いでたなんて知りもしねえで」

「知ってたら誰もあんなことしなかったよ」

「だから！ 知らなきゃいいのかっていってんだろ！ どんなアホだってあんな所であんな騒ぎおこしゃどうなるかぐらい想像できんだろーが！ それともアレか、オマエのファンって一のはどいつもコイツも考えるアタマ棄てちまったのばっかなんかよ！」

「そんな言い方しないで」

「ハラたたねーのか！？ 下手すりゃオマエ、あのクソガキどもにバラされてたんだぞ！」

「腹なんかたたない。みんな何か期待して来てくれてるんだよ。ワタシの歌かも知れない、会場の雰囲気かも知れない、知らない誰かと一緒に盛り上がることもかも知れない。でもそれを受け止めてあげるのがワタシなの」

「オマエはアホだ。他人なんざなんの役にも立たねえ、無責任で、ひとの不幸なんざメシウマじゃんかよ！」

「そんなひとばかりじゃない！」

ベッドに腰掛けていた俺の顔の前に、頭突きでもするみたいに堀川が顔を突き出してきた。

「あなただってそうじゃない！」

「オレはてめえのファンなんかじゃねえ。教えてやる、オレの家族が皆殺しになった時のことを……」

堀川は一步も引かず、俺の目を睨み続けていた。

第三十九章 哀情（中編）

第三十九章 哀情（中編）

休日

歩行者天国

通りは活気に溢れてた

誰もかれも楽しげだった……

腰掛けていたベッドの上に胡坐をかき、俺は壁に背を預けた。

溜息がひとつ漏れ、目の前から堀川の瞳が遠ざかる。

「タイヤの鳴る音がして振り返った。薄汚いトラックだった。進入禁止の立て札と何人かをはね飛ばしてマックの角に突っ込んだ。そばにいたんだ、おやじとおふくろ、小夜子が。あいつが『お腹すいたね』って、それで三人でハンバーガー買いにいったんだ」

堀川はじっと俺を見ていた。

向けられた眼差しを、睨んでいると感じた。

「トラックから男が降りてきた。小太りのメガネ野郎だった。デブが事故かよって。最初はそんなだった。違った。防弾ベストだって気づいた時には一人撃たれてた。手製のショットガン持ってきやがったんだ。周りが駆け出すまでに4人は撃たれたよ。一人はおふくろだった」

唾をひとつ飲み込んだ。

「俺はバカみたいに突っ立ってたよ。目の前の光景が信じられなかった。おやじがすげえ顔して奴に飛びかかった。でも奴は金属バット取り出して、野球みてえにおやじの頭をブン殴った。髪の毛つけた頭蓋骨が血飛沫あげて飛んでくのが俺んところからもハッキリ見えた。倒れたおやじはピクリとも動かなかった。即死だった、イッパツで」

病院服の胸元をはだけた。

息がしづらかった。

「……小夜子は動かなかった。動けなかったんだ。声も上げなかった。奴は左手で血まみれのバット引きずりながら、右手にでけえナイフ持って小夜子に近付いた。そんなとき初めてオレの足が動いた。駆け寄ろうと思ったけど、震えてマトモに動きやしなかった。小夜子と目があって、あいつがやっところちへ走りだそうとした……した……とき……」

そこまで話した時、気が付いた。病室が消えていた。

堀川もいなかった。

◇

俺はあの日のあの場所にいた。

目の前で、手を伸ばせば届きそうなところで、小夜子が刺された。

二度、三度、四度……

五度目からは滅多刺しだった。

棒のように倒れた小夜子の向こうで奴がショットガンを俺に向けた。人間の目じゃなかった。

俺は……

っおおおあああああ～！！

……逃げた。逃げ出した。

生き延びようとした。自分だけ。それしかアタマになかった。

◇

狂った俺は、堀川に頬を張られるまで悪夢の中を逃げ続けた。

どこまでも。

第三十九章 哀情（後編）

第三十九章 哀情（後編）

二発、三発。

頬を張られて正気に……

戻らなかった。

歯の隙間から肺の中身を絞り出しながら、俺は堀川に覆い被さっていた。

病院の床。冷たい床。首を絞めていた。

白くて細い、堀川の首を。

しね、みんなしね

どいつもこいつも

おれも

みんなみすてた

おふくろを、おやじを

小夜子を

とりまいてた

おびえて、とおまきに

それでもひとごろしを

みたくではなれなかった

ゆびさしてた

写メとってやがった

わらってた

ひとりうたれた

まわりのやつらがかけだした

ころしてやる

あのキチガイも

キチガイみてたキチガイも

みんなころしてやる

おれも、ころす

おれがころす

逃げ出したおれを……

堀川の指が手首に絡みついた。

俺の手を喉から外す。ただ哀しげな目で見上げながら。

絞め上げていたつもりの両手に力など入ってなかった事にはじめて気づいた。

「いたい。あなたの『声』……」

ゆっくり堀川が身体をおこした。

押されるまま俺も座り込んだ。

「誰も責めないで。自分も。おねがい」

小さな手が頬に触れ、俺の顔を挟み込んだ。

されるままにした。

「忘れられないよね。誰も忘れさせてあげられないよね。あなたの中にはまだ妹さんがいるから」

「……」

「さみしいひと。あのとき……武道館でステージに上がってきた時、『ああ、このひとずっと一人ぽっちだったんだな』って、『声』なんか聞こえなくても判った。辛そうな目、してたから」

「……」

「さみし過ぎて変わってしまった。そうしなきゃ耐えられなかったから。でもあなたは、わたしを助けてくれた……」

ゆっくりと堀川の顔が近付く。唇が重なった。

目を閉じ、忘れようとした。

今だけ……

無駄だと判っていた。

◇

どれ位、そうしていたのだろう。

気がつくと堀川は膝に手を置き座っていた。

「すきよ」

彼女の頬が濡れていた。

「でも居場所がない。あなたの中に、わたしの」

「みゆき……」

「初めてね、名前と呼んでくれたの。最初で最後、だね」

堀川が立った。ニッコリと笑った。

泣きながら。

「もう会いにはきません。アリガトウ……さよなら、ジャミー……」

それ以上言わず、堀川が病室から出ていった。

酷く大事なモノを喪くした気がした。

第四十章 居場所（前編）

第四十章 居場所（前編）

びっこ引きながら街を流した。

『ゴミ漁り』は休めない。

いつものルートだった。

本日3本目が終わり、俺は行きつけのファミレスに入った。

見知らぬウェイトレスが注文を取りにくる。

小夜はいなかった。

知ってた。

傷の癒えた小夜が昼過ぎ、俺のヤサに来たのだ。

耳屋が教えやがったらしい。堀川の時みたいに。

クソじじいめ。

◇

「あたし美幸さんの事務所で正式採用になったんだ」

痣の残る顔で、嬉しそうに小夜が言った。

「座れよ」

座布団しかない殺風景な部屋の中に小夜を招いた。

「堀川はどーしてる？」

「相変わらず。アフレコやら CD のレコーディングで飛び回ってるよ」

「忙しいんだな」

「ジョーさん……上条さん、会社やめちゃったんだ。娘さんが失踪したって。警察はアテに出来ない、自分で捜すんだって言ってた」

「……」

「今まで家族を構わなかった自分のせいだって。あのヒト、いいお父さんだったんだね」

アイツの娘は、肥溜屋が挽き肉にしちまったよ

言える筈がなかった。

堀川にも告げていなかった、あのあと何があったかは。

気を失っていた小夜は知らないことだが、上条の娘が『ゴミ』だって事を堀川は知っている。でもあのオッサンが辞めたってことは、なにも言えなかったって事だ。

だろうな

アイツはそーいう女だ

言う筈ねえ

不意に思い出した。

塩辛く柔らかな感触が口元に甦る。

「どしたの？」

小夜がこっちを覗き込んできた。

「……なんでもねえ」

見透かされた気がして、ぶっきらぼうに返した。

「なあ〜んかヘンだよ、ジャミー」

「うるせえ。仕事あるんだろが、そろそろ戻なくていいのかよ」

「そだ、今日はあと一件アポとっとなきゃいけないんだった！」

がぱっと立ち上がった小夜が、バッグを肩にかけて玄関へダッシュした。

慌てながら引っかけてる靴が黒のハイヒールなのが不思議な気分だった。

「ごめんっ！ またくるからあ！」

「おい。小夜」

「え？ なに？」

「スーツ似合ってるぞ」

振り向いた小夜が軽く微笑み、こっちに敬礼してみせた。

◇

玄関のドアが閉まるのと同時に、携帯が鳴った。

耳屋だった。

第四十章 居場所（中編）

第四十章 居場所（中編）

「おれだ」

耳屋の声はだるそうだった。

「今いいか」

「よすぎだぜ」

「？」

「なんでもねえ。で？」

「まだ『ゴミ漁り』にや出ないんか」

「昼前の一本は終わった。これからメシ食ってまた流す。それがどーした」

「午後は一本減らせ」

……

「……いつまでだ？」

「んあ？」

「トボケんなよ。なおらねえんだろ」

「？ なにいったんだ」

「癌かエイズ、ひょっとして老衰か」

「？？？」

「二年『邪魔屋』やってて、早あがりしていいなんぞ一度も言われたことねえ。おっちゃん、もうだめなんだろう？ 立派なソーシキ出してやっからな」

このミラクルどアホがああ！！

耳から電話をひっぺがした。

鼓膜が破れたかと思った。

「そんなに死んでほしいんかっ！？ ああ！！ 俺あまだピンシャンしとるわっ！！」

「わかった！ わーったからもう怒鳴るな！」

耳屋は電話の向こうでふうふう言ってる。

本気で頭から湯気のぼらせてるに違いない。

10分かけてなだめる羽目になった。

「んでよ、『ゴミ漁り』一本サボっていい理由ってのは結局何なんだ？」

「こないだの件、ありやまだ終わってねえぜ」

「終わってねえって……始末しそびれた『ゴミ』がまだいやがったのか」

「そうじゃねえ。元々はぼん、オマエがおっぱじめたことだ」

「おれが？」

「『裏』の仕事に『表』の人間を巻き込んだ。『街』としちゃ見逃せねえことだ。肥溜屋が『ゴミ掃除』を終えた後ずっと、オレはあの三人を見張ってたのさ」

「……そういうことかい……」

合点がいった。

堀川が俺を見舞った。

小夜が俺のヤサまで会いにきた。

耳屋の奴が、俺を気遣ってガールフレンド二人に声かけるなんてする筈が無い。

世界が滅んでも金輪際ありえない。

全ては、あの二人の反応を観察する為だったのだ。

「一人は黙して語らず。もう一人は何もなかったみてえに新しい生活を始めた。どっちもなかなかいいオンナだな。ぼんにはもったいねえや」

「もったいねえは余計だ。で、あと一人は？」

須藤三四郎。ずっと気にしていた。

もう関わってはいけないと思ってた。

『始末』する」

耳屋が厳かに言った。

第四十章 居場所（後編）

第四十章 居場所（後編）

始末……だと？

耳を疑った。

「シローを、か」

「そうだ」

「なんでだ！」

「自分で見てこい。その為の一本抜かしだ」

『街』は急がねえ

だが、やると決まれば必ず殺る

誰も『街』からは逃げらんねえのさ

いつもと変わらぬ耳屋の声が、この時ばかりは酷く恐ろしいものに聞こえた。

「なんでオレに見にいかせる」

「いっただろ。オマエがおっぱじめたことだって。ケツぐらい自分で拭け」

『街』が決定を下すのは三日後だ、オレが言えるのはそれぐらいのこったと言い残し、耳屋が電話を切った。

腕ごと携帯を畳に落として、天井を仰ぐしか俺にやれる事はなかった。

◇

回想から醒めてもカップの泥水は減ってなかった。

形ばかり満面の笑みを浮かべたウェイトレスが、ちょこまか来ては注いでいくからだ。

鬱陶しくなってひと息で飲み干した。

どこで見てんだか、ウェイトレスが早足でぶっ飛んでくる。

気色悪いツラだ。まるで笑顔でバリアーでも作ってるみたいだ。

初めて会った頃の、仏頂面でコーヒーついでた小夜の方がどれだけマトモだったか。

空になったカップを逆さに置いた。ウェイトレスのポットが寸前で止まる。

まるでわんこ蕎麦だ。

「……ごっさん……」

ぼそりと言うと、顔面バリアーが俺を見ようともせず出入口の方へ腕を伸ばし、お会計はあちらですと言うと次のターゲットめがけ早足で離れていった。

思わず失笑していた。

あれが普通なのだ。どれだけ笑みを浮かべていても、みんな他人と壁を作り、踏み入りもしなきゃ踏み込ませもしない。うわっ面だけの穏やかさの中で、ちっぽけな平和にしがみついている。

どれだけ糞みてえな『仕事』でも、どれだけ嫌々でも踏み込みまくってる俺達『裏の住人』は案外、『表』の誰よりも人間臭い連中なのかも知れない。

自分じゃない誰かの為に両の手を血みどろにして、素知らぬ顔で生き続ける奴ら……

シローがそうだ

アイツは他人の為に手を汚した

汚れちゃった手に苦しんでた

誰もヤツを『始末』する資格などない

勘定放り投げてファミレスを出、歩きだした。

シローを捜すために。

第四十一章 表崩れ（前編）

第四十一章 表崩れ（前編）

ああ、アイツだろ

しってるしってる

イッチまってるよ、アレ……

あのヒトこわい～

たすけてくれたんだけどさあ

なんかボコられてたしい

手になんかハメてたよ……

可哀想になあ

若いのに、頭に障害でもあるんじゃないか

でも勇気ある青年だったよ……

道行く奴らを捕まえて片っ端から尋ねてみた。

腐る程の目撃者。一週間も『街』を離れると、ちまたの噂にもうとくなると思い知った。

手錠男。

そう呼ばれてるらしい。

何の前触れもなく大声でアニソン歌いながら現れて、トラブってる現場に割って入ってはボコボコにされて帰る得体の知れない男。

両手に手錠をはめて、どれ程の修羅場でも絶対に手を出さない。

その代わり、口が凄い。

殴られようが蹴られようがマシンガンのように喚きまくるらしい。

気味悪がってた奴もいたが、皆どこか好意的に話をしてくれた。

シロー、お前何やってやがる

日が暮れそうな大通りを、唇を噛みながら歩いた。

◇

やめなよお！

やめろっつってんだろお！！

いいかげんにしなアンタら！！！！

ちっさなスナックの前。

若いとジジィと、二人の酔客の間で怒鳴ってるのは店のママだろう。

電柱に隠れ黙って見てた。

話に聞いたシチュエーションにピッタリだった。

乱闘一步手前になった頃だった。

聞き覚えのある歌が近付いてきた。

堀川の歌……ひでえ音痴だった。

きた

電柱の影から出て歌のする方を見た。

目を剥いていた。

ぼっさぼさの金髪。

腰パン重ね着はいつも通りだったが、ヨレヨレのアーミージャケットを羽織ってた。

痣だらけの顔。頬にでかい星形のタトゥーシールを貼っている。

そして、両手首にはめた手錠。

「叫んで憎んで怒って嘔んでたたいて蹴って罵って楽しいっちゃ！ いいっちゃ！ でもダメっちゃ！！ 止めなっちゃあ！！」

ママらしい女が、はっとした顔で口を噤む。

「……あんだ？ アホかてめえ……」

年輩のほうがシローの肩を小突いた。

「なぐったって楽しくないっちゃ！ なぐるとグニャって壊れるんだいっぱいっさい血がでて痛いんっちゃダカラだめだっちゃ！！」

シローは止めなかった。ただひたすら喚き続けた。

胸を抉られるような気がした。

第四十一章 表崩れ（中編）

第四十一章 表崩れ（中編）

やがて始まった。

お約束の乱打の雨。

ジジィも若いのも、互いの鬱憤をシローに向けぶつけていた。

アイツは手を出さない。

手錠で縛った両手を、何かを離さないように固く握りしめながら滅茶苦茶に殴られ蹴られてた。

喚く口だけは止まらなかった。

「……チョット……やめなよっ、しんじやうよお！ ケーサツよぶわよお！！」

余りに凄惨な光景に、スナックのママがたまりかねて叫んだ。

バカ二人が、ママの声にどちらともなく暴行を止め、ブツクサ言いながら足早にその場を立ち去っていった。

「アンタ……だいじょうぶかい？」

ママが恐る恐るシローに声を掛けた。

「……しぬっちゃ。チョット殴ればイツちゃうんっちゃ。だからやっちゃいけないっちゃ……」

フラリと立ち上がり、掛けられた声に答えたのかも判らぬ眩きを残してシローが歩きだした。

♪ほお～しのお～

とれえーんは はしるう～♪

『星のトレイン』。

武道館で堀川が一曲目に歌った曲だ。

顔の形は変わっても、音痴のほうは変わってなかった。

呆気にとられて見送るママを残し、俺はシローのあとをつけていった。

◇

川沿い。

J Rの高架橋がある辺りでシローが道を外れた。

河原の草むらに入ってゆく。

瞬間、見えなくなる。

バサリという音が聞こえた。

シローが倒れ込んだ辺りに駆け寄った。ヤツは棒のように伸びて空を仰いでいた。

「……シロー……」

「あにきい。ひさしぶりっっちゃねえ」

腫れ上がった顔のシローが笑った。

「オマエなにしてた」

「なにして……わっかんねえっっちゃよ」

「……」

「キレイっすねえ～、まっくらな夜空って。オレしらなかった……」

へらっと笑うシローの顔が歪んで見えるのは、殴られたせいだけじゃないらしい。

「オレのいない間、ずっとこうしてたんか」

「おれっち、すんげえヤツちまいたいんすよ」

「なにをだ？」

「わっかんねえ。でもヤツちまいたい……殺っちまいたい……」

ごろりと寝返りをうって俺に背を向けた。

「でもそんなことしちゃダメなんだ……だから自分で手錠かけた……ヤツちまったらオレ、あん時みたいに死ぬまでとまんないっちゃ……」

気がつくと、シローの肩は小刻みに震えていた。

第四十一章 表崩れ（後編）

第四十一章 表崩れ（後編）

布団に寝かせたシローは、あっという間に眠りに落ちた。

何日も眠ってなかったみたいに。

抜け殻のような寝顔をしばらく眺めてから、携帯をプッシュした。

「どこだ？」

「オレのヤサだ。いたよ。今、寝かせたとこだ」

「わかったろ。小僧は壊れちまってる。ほっときゃなにすっか判らん。『ゴミ』になるかもな」

耳屋が言った。

「なになが『ゴミ』だ。自分で両手縛ってる『ゴミ』がどこにいる」

「自分で縛ったってこたあ、自分でほどけるってことだぜ。いずれ我慢出来なくなる。ヤク中と同じだ」

「だろうな。オレもそう思うよ」

「ならとつとと……」

「奴が何を耐えてたか、アンタ知ってるか」

「みんな殺っちまいたい、だから荒れ場に首突っ込んでんだろが。『仕事』やった奴がかかる病気さ、ありやあ」

「ああ。でもそんだけじゃねえ」

「ほう」

『なんも出来ねえ自分』にも耐えてんだ、シローは。だからワザとがなり立てて殴られるままにした。無力な自分を、てめえ自身に思い知らせてんのさ」

ひと呼吸置いて、腹に力込めた。

「コイツ、オレに預けてくんねえか」

「なんだと？」

「あと三日あるって言ってたよな。それまでオレがコイツを見極める。このまま『ゴミ』になっちゃうようなら、オレが自分で『始末』する」

「『街』に逆らうってのか、ぼん」

「そうじゃねえ。アンタ言ったよな、『決定が下るのは三日後だ』って。最初からオレに決めさせるつもりだった。違うか」

「……」

「『街の意思』の端っこに自分もいるって、前に言ってたよな？」

「……ああ、言った」

「いいか。オレはコイツを『始末』するつもりはねえ、今のところはな。この先もそうならねえようにする。それがオレのやり方だ。『街』の連中にそう言っとけ。んで認めさせろ」

「オマエに『始末』できんのか？ あの小僧を」

「ナメるな。オレは『邪魔屋』だ。アンタが選んだ、な」

耳屋は答えなかった。

息を殺して待った。『ゴミ』を狩る時みたいに。

「……どうなっても知らんぞ、ぼん」

やっと声がした。了解だと受け取った。

短く礼を言い、電話を切った。

第四十二章 容赦無き明日（前編）

第四十二章 容赦無き明日（前編）

シローを『ゴミ漁り』に連れてった。全部、見せるつもりだった。

どのみち『街』に睨まれたコイツにゃ死亡フラグがたってる、これ以上悪くなったところで行き着く先には変わりはない。

『始末』はゴメンだ

オレはすれっからしの邪魔屋で、コイツはチャラチャラ生きてきたタダのガキで、ひよんなことから『仕事』に巻き込んだだけの筈だったが、もうそれだけじゃなかった。

ヒトは望まなくても関わり合う。その気が無くても『何か』を結んじまう。

桐原 実がそうだった。

三浦のジジィもそうだった。

小夜も、堀川も。

シローも同じだ。

オレが『始末』した奴らも、そうなのかも知れない。

会えば即、冥土へグッバイのひでえ縁だったが。

「ハラへった……」

隣りを歩くシローがこぼした。街の端から端まで10往復以上の『ゴミ漁り』はコイツにゃ苦行だろう。

訳も判らずついてこいと言われただけなら尚更だろうな。

「あそこで折り返したら、外れのファミレスでひと休みだ」

「またあそこまで行くんっちゃ？ 足折れそうっす。そしたらオレ、超人ナメクジマンだっちゃよ」

「なんのアニメだ？ まだ折れてねえぞ」

『足なんて飾りです、エライヒトには判らんのです』

「シャアはいねえ、とっとといけ」

『『現在位置不明、ダメですっ！ ミノフスキー粒子が……』』

ケツの穴を蹴り上げた。

ギャンと喚いてつんのめったシローを追い越し、さっさと歩きだした。

◇

向かいのボックス席に座ったシローは完璧トロけてた。

「あんな歩き回ってよく平気っちゃね」

「慣れさ。昔はオレもダルかったよ」

「もう歩けねえ……」

「足は飾りじゃねえぞ。歩くんだよ、死ぬまで」

「しっしっ、しぬまで？」

「別に驚くこっちゃねえだろ。み～んな歩いてるぜ、毎日まいにち。何でか判るか？」

「わっかんねえ」

「死んだら歩かなくてもいいからさ」

「……よけいわっかんねえ……」

へたったシローを見てたら自然と頬が崩れた。

コイツにや人を笑顔にする才能がある。道化じみた男だった。

天然ってヤツか

「んで、これから何するっちゃ？」

「そろそろ教えてやる。出るぞ」

シローを促してファミレスを出た。

第四十二章 容赦無き明日（中編）

第四十二章 容赦無き明日（中編）

「アニキい、これからどうするんっちゃ？」

「なんもしねえよ」

「へ？」

「なんもしねえ。なんも起きなきゃな」

「教えるってなんやねん？」

「いいから黙って歩け」

あと一本流せば、今日の『ゴミ漁り』は終わりだ。

出来ればまだコイツに『始末』の現場は見せたくなかった。

何の心構えも無いまま見せたら、恐らく拒絶反応を示すだろう。じゃなきゃ真似るか。

でもそれは『仕事』じゃない。『ゴミ』が一人増えるというだけだ。

そうなればオレがシローを『始末』しなきゃならない。

まだあと二日ある。

それまでにコイツが、『街の裏』という本当の現実を理解し受け入れられるようにしなければならぬ。

そうすりゃもうあんなバカな真似はしなくなるだろうし、『裏の住人』の邪魔になることもないだろう。

もっともベラベラ喋っちゃうようなら……

耳屋との約束を果たす。それだけだと思った。

「アニキ……あれ……」

不意に立ち止まったシローが通りの向かいを指さしていた。

オタ仲間でもいるんかと思いをやった。

ジャージ姿の男。

頼りなく揺らぎながら歩いている。

人通りに埋もれてしまいそうだ。

道行く者は微妙に男を避けている。

脇を過ぎるたび、男が視線を向けた。

刃物のような視線を。

間違いない

『ゴミ』だ

「なんか……ヤバくね、あれ」

「いくぞ」

「え？」

振り向きざま走り出した。

「正面から仕掛ける。オマエは後ろからこい」

「な、なんなんすか？」

慌てて追ってきたシローが走りながら聞いた。

「何があっても黙ってみてろ、いいな！」

「だからあ！ なんなんすっかあ！？」

ビル2つ分を戻り、赤信号を無視して通りを横切った。

クラクション喚かせながら過ぎてった車を尻目に、素知らぬ顔で人の流れに乗る。

サングラスをかけた。

「アニキい！」

「……口はいらない。よく見てろシロー、オレがこれからやることを」

「やることってなんちゃ？」

『『ゴミ掃除』だ』

それだけ言って口を閉じた。

そう、口はいらない。

『『邪魔屋』に必要なのは行動だけだ。』

そして怒りと、憎しみだけ。

イッツ ショウタイム

『『ゴミ』に向け足を踏み出した。』

第四十二章 容赦無き明日（後編）

第四十二章 容赦無き明日（後編）

いつもどおり。

絡み

挑発して

心をいたぶり

タツプリと怯えさせ

『ゴミ』として放り出す

他愛ない奴だ。

ポケットの折り畳みナイフだかカッターだかも出さずじまいだった。

泣きそうな顔でこっちを睨んでいるのをサングラスのミラーで確かめ、ゆっくりとその場を離れた。

「放っといていいんっちゃか？」

離れて見ていたシローが戸惑いながら聞いてきた。

「いい。あとは臯どもがヤサまで尾けてくさ」

「フクロウ？」

「この『街』に寄生してるダニだ。そうやって情報を集め小銭を稼いでる」

「情報……」

「アイツはこれでマークされる。『街』にとって危険な人間として、な」

大通りから外れ路地に入った。誰もいない。

少し歩いて振り返った。

「なぜさっきアイツを指さした」

「なぜって……なんかアブナそうだったから……」

「1週間だ」

「へ？」

「1週間。自分からトラブルに首突っ込んじゃボコられるなんてコト繰り返してたおかげで、オマエはヤバい奴の臭いが判るようになっちまったのさ」

「……」

シローが足下に視線を落とした。

「楽しかったか？ んな訳ねえよな。オマエは怒ってた。どうにもならない怒りに任せてあんな事してた。違うか？」

「……」

「あの夜みてえにアブない奴らみんなブツ叩きたくてしょうがなかった。違うか！？」

「……」

「でも出来なかった。ビビっちまった。背中押してくれる奴がいなきゃオマエはなにも出来ない。違うか！！」

叩きつけるように怒鳴った。

「手錠なんぞして良心守ったつもりにももなってたか！ いってみろ！！」

「おれ……オレは……」

べそかき顔を思い切りぶん殴った。

吹っ飛んだシローがビルの壁にぶち当たりズルズルと崩れ落ちた。

「素人が出しゃばらなくても、この『街』にゃオマエが思っている事をやってる奴らがいる。それで生きてる奴らがな。オレもその一人だ」

「……」

「見ただろ。ああやって『街』を掃除してんのさ。オマエがいつか言ってたHKってのは……オレのことだ」

「アニキが、HK？」

倒れてたシローが目を剥いた。

「『邪魔屋』。それが俺の名だ」

これで引き返せない。コイツも、俺も。

第四十三章 転流（前編）

第四十三章 転流（前編）

季節外れの寒気も緩んだ満月の夜。

差し込む月明かりが、全ての者を影として浮かび上がらせていた。

この街で一番高いビルの最上階。

会議室の灯りはいつも通り落とされていた。

「過ぎたな、三日」

長く伸びた会議机。

ずらりと掛けている『影』達を見渡して、最も窓側に陣取る大柄な『影』が言葉を発した。

「『邪魔屋』はどうだ。あの小僧を始末する決心はついたのか？」

「少し待っちゃくれませんか」

大柄な『影』に訊ねられ、入り口近くに立っていたちっぽけな『影』が答えた。

「もう期限だ」

ゆっくりと話す『影』は議長的な存在なのだろうか。

穏やかな物言いの裏に、有無を言わせぬ威厳があった。

「ちょっと待ちなよ！ あの坊や、ナカナカかわいかったよ。歌なんかうたっちゃってさあ、チョッピリ惚れちゃったねえ」

ひときわ小柄な『影』が声をあげた。

「あのコ『ゴミ』なんかになりやしないよ。目え見りやわかんだ、純で、哀しそうな目えしてたよ。『邪魔屋』の坊やがこの街に来た頃もさ、あんな目をしてたね」

「ママさんは惚れっぼくていけませんね」

向かいに座った『影』が呟くと、他の影達が一斉に揺れて息を漏らす。

笑っているようだった。

「悪かったね。あたしゃこれでもこの『街』じゃ古株だよっ！ ダテに客商売やってんじゃねえよ！ 見りやわかるんだよ！！」

小柄な『影』が喚いた。

「あのコはモノになる、間違いない！ ありゃいい『邪魔屋』になるよ」

「……どうします、長老……」

小柄な『影』の剣幕に、口を挟んだ『影』がたじろいで助けを求めた。

『街』の者は皆、あの若者を悪く言わない。誰もかれも『手錠男』に好意を抱いている。不思議じゃな、今までなら即座に『始末』するケースだったんだが。長生きするとこんな事もあるのか」

上座の『影』が肩を落とした。

「皆に聞く。『街の意思』はあの小僧を『生かせ』と言っているように思う。どうじゃ？」

影達がうっすらと身体を折った。

「耳屋。邪魔屋に伝えろ、小僧はおまえに任せると。責任は重い。よく言い聞かせろ、いいな」

ちっぼけな影が、折れ曲がるように頷いた。

第四十三章 転流（中編）

第四十三章 転流（中編）

「で、どうすんだ？」

シャッター閉めた店の中、応接セットのテーブルを挟んで座った耳屋が聞いてきた。

「『始末』はなくなった……だよな？」

「ああ。『街』は小僧を生かしておく事にした。面倒みろってさ、ぼんに」

「オレの好きにしていって事か」

「だから。どうする気なんだ？」

すぐには答えず、カップのコーヒーをひと口啜った。

「余裕こいてんじゃねえ。扱いひとつでテメェもあの小僧も今度こそ『始末』されるんだぞ」

「始末シマツってうっせえよ」

「あんだと！」

「……シローには全部話した。今頃は寝ぐらで膝でも抱えてるさ。壁でも睨みながらな」

真っ赤になってこっちを睨む耳屋の前にカップを置いた。

「前にも言ったけどよ、俺あべつにいつくたばっても構わねえ。でもシローは、出来たら『表』に戻してやりてえと思ってた」

「口封じ出来んのか！ テメェに！」

「ムリだな」

「んじゃどーするってんだ!？」

「パシリにする」

「はあぁっ??？」

耳屋が素っ頓狂な声をあげた。

「なあおっちゃん。みーんな理由があんだろ？『裏』の奴らにはよ。シローにもあるぜ」

「『表』にやいられねえモンでもあるってんか、あの小僧に」

「あるさ。……いや、無いんだ」

「? 言ってる意味がわかんねえぞ」

「いろんなモン抱えて『裏』に堕ちたオレらとは違う。シローにはよ、『表』と繋がってる意味も理由もねえんだ。ただ生きる為だけでアイツは『表』にいた」

シローの話を思い出した。

家族を知らず、その日だけを生きてきた。

喪うモノすらない日々。

アイツじゃなきゃさぞ荒涼とした毎日だったろう。

ある意味、恐ろしくタフな奴なのかも知れない。

「ならどっちにいたってカンケーねえ。俺が使う」

耳屋の顔から赤味が引いていった。

「もうすぐ三年か、『邪魔屋』になって」

「いきなりなんだよ」

「オマエにも『街の裏』が何だか判ってきた筈だ。いいだろう、やりな」

話は終わった。

席を立った俺に、耳屋が手を出してきた。

「？」

「手帳だせ。『仕事』だ。今度のはチトやばそうだけ」

もう一度、席にかけ直しながら懐に手を入れた。

第四十三章 転流（後編）

第四十三章 転流（後編）

流れてた。

若いの。老けたの。幼いの。

つるんでる奴に、一人きりの奴。

人の動きは一刻たりも止まらない。

いつもと変わらぬ雑踏。

地下鉄の入り口にもたれかかった俺を気にする者など誰もいなかった。

待っていた。

ただ、待っていた。

◇

「どうするか決めたら明後日、XX駅までこい」

耳屋に会った前の晩に、そう告げていた。

頬骨の辺りを腫らせたシローは黙ったまま俺と別れた。パンチと俺の話は、どっちも結構なダメージだったろう。

俺を手伝い『街』に飼われてゆくか。黙って今まで通り『表』で生きるか。

二者択一、決めるのは簡単だ。決められれば、だが。

他の選択肢は無い事も言ってあった。逃げる。誰かにくっちゃべる。勝手に殺る。どれをとってもアイツは終わりだ。

終わり……か

アイツの今までの人生に『始まり』なんてあったのか？

施設を飛び出し、ただ生きる為だけに生きてきた

イキモノとして生まれてきたかも知れないが、断じてヒトとして生きてきてはいなかった

生き残る為だけの日々、そんなのはケダモノや虫ケラとなんも変わらない

アイツはヒトになるべきだ

野垂れ死にしろが『始末』されてくたばるんだろが、断じて虫ケラ畜生のまま死ぬべきじゃない

そんな気楽な『死』なんぞ俺は認めないぞ

認めてたまるか

そこまで考えて、ふとおかしな気分になった。

なにムキになってんだ

『ヒト』として生きるってなんだ

俺はいつからそんなご立派なおトコになった？

『ゴミ』どもブチ殺してきただけじゃんかよ

それも陰険で、陰惨な方法で

何言ってやがる

なにしてやがる

問うたところで何もなかった。

俺には所詮、『ゴミ』どもへの憎しみと歪んだ執着しかないのだ。それ以外はボヤけて霞み、あるか無いかも判らない。

諦めた。考えるのを止めた。

いつだったか『便利屋』が俺に言ったように...

◇

気配を感じて顔をあげた。

「きたっちゃ、アニキ」

シローが立っていた。情けないツラでヘラリと笑っていた。

「.....ようこそ。街の底へ.....」

言ってから不意に、ひとつだけ思い当たった。

俺がシローに拘る訳。

死への憤り、だった。

第四十四章 鬼畜（前編）

第四十四章 鬼畜（前編）

「ほっほ、ソイツが例の『手錠男』かい」

ホテル街の裏、寂れた雑貨店の中。

相変わらずしわくちゃのツラをもっと皺だらけにした便利屋が、手にした酢こんぶをこっちに向けヒラヒラさせてみせた。

シローが『街の裏』に来て2週間が経った。

『ゴミ漁り』にも慣れてきたコイツをそろそろ『狩り』に連れていこうと思っていたが、その前にまだ教えておかなきゃならない事があった。

『街の裏』の住人のこと

『街の意思』のこと

『掟』のこと

そして、『街の裏』で生き残ってゆく術

手っ取り早く済ませるにゃ年寄りに任せるに限る。

「シローってんだ、これからオレのパシリを……」

びっしっ！

いきなり酢こんぶが顔に命中した。

「ってえな！ なにしゃあがるジジィ！」

「アホ。オレらに下の名前なんて大層なモンはねえんだよ」

どこからが目だか判らない皺面が首を振りながら呟いた。

「裏のジョーシキじゃろ。しっかりしれ」

「じゃ何て呼ぶ？ どっかで決めんのか？」

「いんにゃ。勝手にしとる、ワシらふりい～だむうじゃからのう」

ヒッヒと笑いながら便利屋がシローの方へと向き直った。

「さてと。坊やはどうやらワシらとはチト違うようじゃな」

「そう、なんちゃか？」

おずおずとシローが答える。

「その『なんちゃか？』っての、なんとかならんか。調子が狂っちゃう」

「おれっちガキンチョの頃からこうだっちゃ」

「やれやれ」

俺までアタマが痛くなりそうだ.....

「坊やにゃワシらみてえな『影』がない、でもまるっきり『表』の人間にも見えねえ。ま、今は見習いってトコか。『裏見習い』ってのはワシも初めてじゃがな」

「.....なんかカッチョ悪いス」

「当分は『手錠男』でいいだろ。似合ってるぜ」

「エエえ～」

不満そうなシローの肩を叩いて、便利屋に告げた。

「こいつを預ける。色々教えてやってくれや。ちょっと出てくる」

「『仕事』か？」

「ああ。今度の『ゴミ』は手強そうだ」

便利屋の前に新聞の切り抜きを置いてみせた。

” 前代未聞の不祥事”

” 白昼の脱走劇、警務官三名重傷”

” 無差別殺人の恐怖ふたたび？”

記事を見た便利屋が低く唸った。

第四十四章 鬼畜（中編）

第四十四章 鬼畜（中編）

死角.....

死角.....

また、死角

街は数え切れぬ程の死角に闇を宿している。

昼だろうと夜だろうと、人混みの外れに、曲がり角の向こうに、見上げるビルの屋上に闇は澱み、人ならぬものを呑み込んだままこちらをじっと眺めている。

大通り。

渋滞の排気ガスを吸い込みながらゾロゾロ群成す者達を横目に歩いた。

こいつらの中にいるかもな

あそこに.....ここに.....

呼び出されたのは百貨店が並ぶ街の一角、そこを折れて少し歩いた辺りにあるゴチャゴチャした飲み屋街だった。

耳屋がこんな所を指定するのは珍しかった。いつもなら、

「店にこい、ぼん」

のひとことで終わりの筈だ。

◇

暖簾を潜ると、申し訳程度のカウンターには客が二人いただけだった。

俺の顔を見た女将は黙って天井を指さした。

酷く狭い店には入らず、入り口脇の階段を上がった。

「おせえぞ」

三畳ほどの座敷で胡座をかいた耳屋の前には、汚い卓袱台を挟んで意外な奴が座っていた。

「おまえ」

「カップだのゴキブリだの言いたそうね。次はなにかしら？」

醒めた眼差しの水草屋がさりと言ったのけた。

「コブつきなんて聞いてねえぞ、おっちゃん」

「コブじゃねえ。まあ座れ」

妙な居心地の悪さを感じながらケツをおろすと、さっきの女将が階段を登ってきた。

ナマちゅう、ひとつ

注文すると女将はすぐに階下に消えた。

「ここで話していいんか？ 飲みたいんならオレがコンビニ寄っておっちゃんトコいったのによ」

「心配すんな。女将も『裏』の人間だ。それにコイツを店に入れたくねえ」

「ワタシも御免よ、あそこは」

間髪を入れず水草屋が言った。

二人とも無愛想な口調がよく似ていた。

「で、わざわざ呼び出してなんだったんだ？」

「この間の件だ」

「あの『脱走ゴミ』か。みつかったんか？」

「この街にいる。そりゃ間違いねえんだが……」

「なんか歯切れ悪いな」

「殺られたよ」

思い切り顔をしかめ、耳屋が水草屋を見た。

「フクロウが三匹。こっちで『始末』しておいたケド、ひどかった。あんなの久しぶりよ」

しかめツラまでよく似てやがると思いながら、俺は身を乗り出した。

第四十四章 鬼畜（後編）

第四十四章 鬼畜（後編）

「いえよ。どんなだった」

「悪趣味ね。聞いてどうするの？」

「んな趣味ねえよ。死体なんぞ腐る程みてきた奴がカオしかめてんだ、さぞ个性化的な殺り方だったんだろう。手掛かりの宝庫じゃねえか」

水草屋が呆れた顔で俺を見た。

「やっぱり根っからの『邪魔屋』ね。イキイキしてるわよ、今」

「相手は一人だ、こないだみたいなメンドクせえ事にやらねえ、ウキウキもするぜ」

「そ。なら教えてあげる」

横座りしてた水草屋が胡座に組み直すと、片膝立ててマルボロをくわえた。

膝丈のスカートがヤバい所までめくれ落ちたが、気にもせず煙草に火をつけた。

「尾行してて見つかった。三人がかりでね。耳屋へ連絡入れた直後だと思う」

「マエフリはいい、で？」

「……喉を裂かれた。殆ど骨だけで胴体と繋がってた」

言い淀む水草屋を、顎をしゃくって催促した。

「二人目は絞殺ね。一番キレイな死体だったケド、自分の腕で絞め殺されてた。右腕はグシャグシャだったわ」

「ほう……」

「30mくらい離れた所で三人目が見つかった。ドブに詰め込まれてたわ。身体じゅうの骨がグズグズに砕けてた。もの凄い力で蹴り潰したらしいの、靴の痕が死体じゅうに付いてたから。それだけじゃあんな狭いトコはまらないケドね」

「どうだったんだ？」

「ワタを抜いてあったの。ワタシが使ってる奴らが野良犬のエサになってるのを見つけたわ。ドブ川に捨ててあった」

少しずつ息が荒くなってくるのを感じた。

恐れじゃない。とびきりの獲物にありついた興奮だった。

「……切り裂きハルク、ってか。いいねえ……」

「ぼん。相手はガキじゃねえ、今度こそ助けがいるぞ」

脇で聞いていた耳屋が口を挟んだ。

「違うだろ」

「？」

「こんな『ゴミ』、脅して自殺するようなタマかよ。殺るぜ。オレが」

「おい」

『掟破り』だなんて言うなよ、おっちゃん。それともアンタなら自殺まで追い込めるんか？」

「むう……」

「だよな。決まりだ」

バンッ！ と卓袱台を叩いて立ち上がった。

「この『ゴミ』、山田 修の情報をもっとよこせ」

言った。

たぶん今、『ゴミ』みたいなツラしてるだろうな、オレ。

第四十五章 見えざる蛇（前編）

第四十五章 見えざる蛇（前編）

山田は見つからなかった。

街じゅうの梟どもがビビっちまって、さすがの耳屋にも情報が集まらなかったからだ。

狙って殺ったな

『ゴミ漁り』のアガりに、ファミレスで泥水コーヒーを啜りながら頭を整理してみた。

手帳には奴のデータがびっしりと書き込まれている。

耳屋の字だった。

◇

山田 修

34歳

身長189cm

体重86kg

兵庫県出身

小学生の時、親の転勤で東京に移住

無口な子供だったが、転校を期に性格が一変、粗暴な振る舞いが目立ち始める

中学1年生の時、傷害で初めての補導

以後、鑑別所と家の往復を繰り返す

定時制高校に進学すると、それまでの行状が嘘のように勉学に励み始めたが、通学以外では殆ど外出しなくなった

高校卒業して15年、引き籠もり人生

ネット三昧の生活

ただ、ありきたりのヒッキーとは少し違っていた

深夜の公園や、人気の無い河原で奴を見かけた近所の者が沢山いた

トレーニングしていたらしい

走り、伏せ、登り、殴り、蹴る

鬼のような形相だったと目撃者は語っている

加えて、ネットで購入していた大量の書籍

薬物や武器に関するもの

医学書に生物図鑑

山ほどの犯罪史

係累はいない、みんな殺っちまった

30歳の誕生日に、父親、母親、4つ年下の妹、そして3つになったばかりの妹の娘を斧で惨殺

三年間、指名手配の網をかいくぐりながら日本中を転々としていた

三ヶ月前、2つ上の兄の家に侵入、一家4人を殺害して現金6万円を奪い逃走

付近を警戒中だった警官4名と応援7名に追い詰められ逮捕された

奴は素手だったにも関わらず2名が殉職している

そして2週間前の脱走

◇

手帳を閉じてテーブルに置いた。

バケモノじみた男だった。

いや、バケモノと呼んでいいのか。

ヒト、でありケモノであった。

自らの意思でケモノと化したヒト。

そこにどれ程歪んだ世界観が、人生観が横たわっているのか、宗教家でもチョーノーリョクシャでもない俺に判る筈もない。

言えるのはひとつ。

こいつはヤバいという事だけだ。

レシートを手に席を立った。

第四十五章 見えざる蛇（中編）

第四十五章 見えざる蛇（中編）

便利屋に預けて三日後、シローを呼び出した。

オフィス街が連なる整然として無味乾燥な一角に据えられた公園。

そこだけが奇跡のように緑に囲まれていた。

ワザと早く行った。

隠れて様子を見てやるつもりだった。

この三日が奴をどうしたか

便利屋は遠回しに語らない。いつも真正面から抉ってくる。

シローには判ったろうか

受け入れられただろうか

『街の裏』ってやつを

公園の隅に並び立つ木立の影で、柵にもたれながら入り口の方を見ていた。

お天気に誘われたのだろうか、何組か親子連れがくつろいでいる。

子供の数が多いのを見て今日が土曜日なのをボンヤリと思い出した。

チビどもは元気に走り回り、転び、泣き、笑ってる。

ガキは苦手だが、そんな光景を見てると身体の芯みたいなモンが柔らかくなるような気がした。

へいわ、か……

目の前の光景が、繰り返される陰気で無惨な『現実』のホンの上っ面でしかないと判っていても、これはこれで悪いモンじゃないと思った。ただ俺の居場所は無い。

それだけだ、表と裏の違いなんて

居るべき場所か、そうじゃないか

ムズかしいことなど何もない

しばらく待つとシローが来た。

ヨタヨタと入り口の方へ歩きだしたミニミニサイズを抱き上げると、慌てて追ったきた母親の前でニッコリと笑ってみせた。

「ほお～ら、ママちゃんだっちゃ！ あっちアブナいっちゃから、いっちゃダメだぞお～」

知らない奴にいきなり抱きかかえられて泣き出しそうだったミニガキが、何度か高く持ち上げられるとキャッキヤと笑いだした。

「はあ～い、ママちゃん来たっちゃよお～」

べこりとお辞儀する、まだ若そうな母親に子供を渡すと、シローは腕の中の子供に手を振ってみせた。

よほどウマがあったのだろう、子供はいつまでもケロケロ笑っていた。

大丈夫

アイツは、アイツのままだ

柵から身を起こし顔を撫で、自分がニヤついているのに気がついた。

ったく、ヘンな奴だなアイツは

母親と話し込んでいるシローに歩み寄った。

「おい」

「あ、いたんスカアニキ～」

「いけるか？」

「ウス！」

いい目をしてる、と思った。

第四十五章 見えざる蛇（後編）

第四十五章 見えざる蛇（後編）

並んで歩いた。

ついてこいとは言わなかった。

シローはもう『面倒見てやる』相手じゃなかった。

「今日は何本目っすか」

「あん？」

『『ゴミ漁り』、おれっちもやるんちゃよね？』

「一人じゃまだだ」

「ちえ～」

「便利屋からなに教わった？」

「メンドくさいことばっか。おれっちアタマわるいから、裏だ掟だ言われてもよくワカンナイっちゃ」

「……」

「でも、わかったのもあるんよ」

「？」

「おれっちここで生きてけんだってコト。いいかワルイかってったら、ちょびっとだけイイこと多いかもってコト。そんだけわかればオッケーちゃよ」

「……そうか……」

今はそれでいい

いずれ嫌でも知る事になる

『裏』で生きてゆくなら、な

気がつくと、シローが俺の顔をまじまじと覗き込んでいた。

「なんだ」

足を止めて言った。

「アニキでもにへらあ〜って笑うんっちゃな」

「わるいかよ」

「うんにゃ。アニキがそんな顔したトコってあんま見たコトないっちゃからさ」

「そうなんか」

「そうなんちゃ」

「そんなモンか」

「そんなモンっちゃ」

「なんちゃんいなあ」

呟いてから慌ててかぶりを振った。

ヤバい、『ちゃ』が伝染っちまった

両手で頬を叩き、改めてシローに言った。

「やってもらう事がある。かなりヤバい『仕事』だ」

「なんちゃか？」

「例の脱走犯だ。情報を集めて足取りを追え」

「ホッホーさんがいるっちゃんのに？」

「ほっほおさんってナンだ？ 新手の情報屋か？」

「……え……フクロウって……便利屋のじっちゃんが……」

「どアホおー！ ならそういえっ！！」

いかん、落ち着け

ワナワナするな

仕事だシゴト

呼吸を整えて話を再開した。

「いいから黙って聞け。奴を尾けてた三匹が殺られた。おかげで街中の梟どもが震え上がっちゃって役に立たない。オマエが代わりに動け」

「でもおれっち、んな探偵みたいなコトわかんないっちゃんよ」

「手掛かりはある。奴は利口だ、意味なくリスク犯して脱走なんぞする訳ねえ。何かやるつもりだ。そこから探って……」

その時だった。

いきなりの悲鳴。女の。

さっきまでいた公園の方からだった。

「シロー！！」

怒鳴って走り出した。

第四十六章 マッドチェイサー（前編）

第四十六章 マッドチェイサー（前編）

目を疑った。

のどかな憩いの場が、風景が地獄絵図に一変していた。

そこらじゅうに大小の人間が転がっている。

それだけじゃない。捻れ、折られ、潰され、耳や口から大量の血を流し地面を朱に染めていた。

鉄棒やジャングルジムにぶら下がったまま息絶えているものもあった。

絶叫したシローがその中のひとつへ駆け寄った。

さっきあやしていたミニガキ……

顔が半分、潰れてた。

惨状を目の前にしても、俺の脳味噌は嫌になる程冷静に状況を分析していた。

死んでるのは殆どが子供だ

倒れてる大人は手や足を押さえうめいている

怪我は大した事なさそうだ

はなから子供だけ狙ってやがる

凶器を使った痕跡は無い

素手で、これだけの人間をこんな短時間で……

こんなバケモノは一人しかいない

「わめくな！」

ちっぽけな遺体を抱え泣き叫ぶシローを怒鳴りつけた。

「奴だ、追え」

「いやだ」

「その子は無理だ、抱いても助けられん」

「いやだ！」

「俺が救急車を呼ぶ、逃げ、逃げられるぞ」

「いやだああ！！」

近づいて子供の亡骸をもぎ取り、空いてる手で思い切りぶん殴った。

「いけ、『手錠男』。これ以上死体を増やすな」

真っ赤に腫れた両目で俺を睨むシローの顔は怒りで別人になっていた。

「.....許さない。ぜってー見つけてコロス.....」

もう一発ぶん殴った。

「尾けるんだ。殺ろうなんてすんな、返り討ちにあうだけだ。ガキの仇とりたいならヤサを突き止めろ。判ったな」

「.....」

「わかったな！？」

こっちを睨んだまま頷くと、きびすを返してシローが走り去った。

亡骸をそっと降ろし携帯をプッシュした。

「奴がでた。今XX公園にいる。子供ばかり10人以上殺られた。大人は6人、たぶん軽傷だ」

「時間は？」

耳屋が固い声で聞き返してきた。

「7分以内に現着だ」

「追え、ぼん」

「シローがいった。フクロウどものケツを叩け、今すぐ」

「駄目だ、ヤツら完全にビビってる」

「見つけたら知らせるだけでいいと言え、『網』を張るんだ」

「だがなあ」

「やるんだ、あんた耳屋だろ！」

返事を聞かず切った。

脇を見ると、女が倒れていた。

さっきの母親だった。

第四十六章 マッドチェイサー（中編）

第四十六章 マッドチェイサー（中編）

「おい、しっかりしろ」

女を抱き起こした。顔の左半分が酷く腫れあがっている。

特大の平手打ちを食らったらしい。頸骨折れてたら逝っちまってたろう。

「……こども……うち……の……あのコが……」

うっすらと片目を開けた。

「喋るな。今、救急車が来る」

ミニガキの遺体は俺の後ろにある。女の頭を抱えて視界を遮った。

「あのコ……ぶじ……で……すか？」

「ああ。手当すりゃ大丈夫だろう」

「よか……た……」

救急車が来るまで15分もないだろう。その間だけの嘘、だ。

今は錯乱してもらっちゃ困る。

「誰がこんなことした？」

「おおきな……おとこ……髪が長い……冷たい目をした……」

やはり奴だ

切り裂きハルク

近くに花柄のタオルが落ちていた。手を伸ばして拾い、巻いて丸めた。

「降ろすぞ。目をつむってろ」

女が目を閉じるのを待って横たえ、頭の下に丸めたタオルをいれた。

立った。もう一度、公園を見回す。

沸きあがる感情はもう無かった。

ヒトは慣れちまう。地獄だろうと極楽だろうと。

そして飽きる。

飽きちまったら

いったいどこいくんだろな

地獄でも極楽でもないところ……

あんのかよ、そんなところ

サイレンが聞こえた。いつも遅過ぎるサツのおでした。

退散する潮時だった。下手に見咎められでもしたら身動きとれなくなる。

地面についた足跡を蹴り消しながら、公園の入り口で振り返った。

死んだチビガキと横たわる母親。殺された子供達。打ちのめされた大人ども。

……ひでえ眺めだ……

自分の眩きを他人事のように聞きながら公園を後にした。

◇

走っていたら携帯が震えた。立ち止まり画面を見る。

登録されてない番号だった。

少し躊躇ってから電話に出た。

「だれだ？」

ぞんざいに言った。

『仕事』用の電話に掛けてくる奴にマトモなのが居る筈なかった。

「よう、足はもういいのか、邪魔屋クン」

「てめえ」

久しぶりに聞いた声は酷く愉快そうだった。

「何の用だ、肥溜屋」

「手え焼いてんじゃねえか？ あの『ゴミ』、なかなかやるぜ」

「だからどーした」

「なあ……手伝ってやろうか？」

胸の悪くなる声だった。

第四十六章 マッドチェイサー（後編）

第四十六章 マッドチェイサー（後編）

「てつだう、だと」

「手が足りねえんじゃないか？ 耳屋の情報網は半身不随、使えるのはあの小僧一人、相手がヤバ過ぎて『表』の協力者なんぞ選ぶ気にもなれない。どうだ？ 凶星だろ」

浮ついた口調で肥溜屋が言った。

「ならどうだってんだ？ これはオレの『仕事』だ、死体処理屋が首突っ込むんじゃない」

「まあそうカラむなよ。なにもアンタの『仕事』横取りしようってんじゃない。ちょ～っくらかませてくれりゃいいんだ」

「オレの許可なんぞいらねーだろ。この間だって勝手に殺っちまったじゃねえか」

「ありゃ耳屋に頼まれたからさ」

「フン。また好き勝手やったら今度こそ『街』に始末されるから、だろ」

肥溜屋が黙った。

「大義名分がありゃ大手振って『ゴミ掃除』が出来る。昔みてえに殺りまくれるって訳だ。違うか？」

「……耳屋か。余計な事喋りやがって」

「あんたは『邪魔屋』じゃない。今も、昔も」

「ほう。言うじゃねえか」

「殺し屋の出番はねえよ。今のところは」

「いまのところ？」

「オレは昔のいきさつなんかどーでもいい。使えるモンなら何だって使う。アンタの手なんぞ借りたくもねえけどよ、必要ならそうする」

「そりゃオーケーって返事だと思っていいのかい？」

「違う。オファーはオレがする。アンタに選択権はねえ」

もう一度、肥溜屋が黙り込んだ。

「いいだろう。そういう事にしといてやる。オレの分が残ってるうちに連絡してくれよ、坊や」

「そっちは期待すんな。後始末なら保証してやる」

「水草屋に回さねえのか？」

「アンタもだが、オレはあの女も好きじゃねえ。なら尻尾振ってきた方にエサ回してやるよ」

電話の向こうから声にならない笑い声が聞こえてきた。

「ま、せいぜい頑張りな」

「そうするよ」

「ひとついいコトを教えてやろう」

「なんだ？」

「山田 修の脱走、ありや単独じゃねえ」

「？ どういうことだ」

「手引きがあったってコトさ。警察内部のな」

今度は俺が言葉に詰まる番だった。

「なんだってんだ」

「さあな。あとは自分で調べな」

「何故、オレにそれを？」

「お得意様にサービスさ。じゃあな」

電話が切れた。

第四十七章 怪動（前編）

第四十七章 怪動（前編）

迂闊にシローへ連絡を取る訳にはいかなかった。もし山田に悟られでもしたら危ない。

待つのは苦手だった。二人の痕跡を確かめようと辺りを走り回り、暫くして諦めた。

近くの地下鉄の入り口を下る。

耳屋の店までは5 駅だった。

◇

『網』は張ったか!？」

店に飛び込むなり怒鳴った。

「アホ。客がいるかくらい確かめろ」

仕事着姿で剃刀を研いでいた耳屋が睨んでくる。

「んなもの見りゃ判る。それよかどーなんだ」

「報酬三倍って条件で半分は動かさせたぜ」

懐の辺りを摘んでバタバタさせてみせた。大損だと言いたいのだろう。

『街』に請求しろよ。で、連絡あったんか」

「まだだ」

「シローからは？」

耳屋が首を振った。

「こっちもだ。見つけられなかったか、見つけても見失ったんなら必ず連絡ある筈だけだよ」

「てえことはやっこさん、がっぷりケツに食いついてるな」

「無茶しなきやいいんだが。アイツかなり頭に血が昇ってたからな」

「知り合いでもいたのか、被害者に」

「遊んでたのさ。ちょっと前まで、殺されたガキとよ」

「そうか……」

耳屋が言葉に詰まった。

「おっちゃん、聞きてえことがある」

「ん？」

「公園を離れたあと、肥溜屋から電話が入った」

「なんだと」

「アイツに情報流してるのかよ」

「いや。死体処理の依頼だけだ」

「野郎、変なコトいったぜ。『あの脱走は警察内部の手引きだ』とかよ」

俺の言葉に耳屋の顔色が変わった。

「そんなこと言ったのか」

「ああ。何か聞いてねえか？」

「聞いてねえ。聞いてねえが……」

「なんかあるんか？」

「奴は『邪魔屋』やってた頃から、俺も知らねえ自分だけの情報網を持ってた。そっから何か仕込んだのかも知れんな」

「さぐり、入れられっか？」

「今夜『街』の寄り合いがある。引き受けた」

「頼んだぜ」

「オマエはどうする、ぼん」

「待つしかねえ。こんな事ならシローに発信機でも付けとくんだったぜ」

「.....さてよ、判るぜ、居所」

耳屋が顎を撫でながら呟いた。

「マジか!？」

「携帯の電波を基地局から追えば、おおよその位置ならな」

「やってくれ、今すぐ!」

身を乗り出して叫んだ。

第四十七章 怪動（中編）

第四十七章 怪動（中編）

てっきり耳屋が携帯の追跡をするのかと思っていたが、違った。

店を閉め、麻のジャケットに腕を通した耳屋は裏口から外に出た。

後を追う俺を気にする風でもなく足早に中央通りへ向かう。

「どこ行くんだよ」

前を歩く背中に聞いた。

「専門家んトコさ」

J Rの駅周辺は都銀やデパート、家電量販店が林立し、家族連れやアベックなどの人混みでごった返していた。

何度か見失いそうになった小さな後ろ姿が、不意に通りを折れた。

ビルの間の狭い通路を追いかけてゆくと、突き当たりの汚いドアへ耳屋が入ってゆくところだった。

後に続きながら入り口の看板を見上げた。

ニコニコラジヲ

なんだよここはと思いながら中へ入った。

◇

「初めてだったな。紹介するぜ、ボギーだ」

「ボギー？」

店の中は、とても店と呼べる状態じゃなかった。

分解されたテレビ、ラジオ、得体の知れない電子部品、渦高く積み上げられた色とりどりのケーブル。

そのガラクタのど真ん中に氷山のように浮かぶ机、そこにつっ伏した男を耳屋が指さした。

「あいつだ。……おきろ。仕事だ」

声を掛けても男はピクリともしない。

「おきろってんだ」

反応なし。

「くおら！」

耳屋が足元にあったテレビを力まかせに蹴り飛ばした。

バネが弾けるように男が飛び起きる。

「なにしゃあがるクソジジィ！」

「まったくガラクタに神経でもついてんのかお前は」

ぼさぼさの長髪、半分髭に覆われた顔が耳屋と俺をネットリと見た。

死にかけのジョン・レノンみたいだ。

「ガラクタ？ フン、あんたにやわかんねえだろーな。ディスクリート（集積回路素子）は日本製に限る、東芝、NEC、日立、古い部品でもバッチリ動くぜ。台湾や韓国にや真似できねえこの芸術的な耐久性を……」

「ご高説はまたにしろ。携帯の逆探知だ。何分かかる？」

アロハシャツの片袖に手を突っ込んでボリボリ掻きながら男が机上のノートパソコンを開いた。

「RS（リバースサーチ）か。NTTのハッキングは面倒くせえな。こっちの言い値でOKなら10分だ」

「いいだろう、やってくれ」

あいよと言った男が、凄い勢いでキーボードを叩き始めた。

第四十七章 怪動（後編）

第四十七章 怪動（後編）

コンピュータの事なぞ何も知らない俺から見ても、コイツが凄腕のハッカーだというのは判った。

10分どころか煙草1本吸い終わらないうちに、

「ほらよ」

とノートパソコンをこっちへ向けたのだ。

画面には地図と、わけわかめな英語が映っていた。

「だいたい判った。1分30秒くれたら座標をグーグルアースに合わせて航空写真と重ねてやる。どーする？」

「ああ、頼む」

「初めての客だ、サービスしといてやる」

油の抜けたどす黒い顔が俺を見てニヤリとした。

「ぼん、オマエはここで待て。俺はいくぜ」

「なんだよ、今日はなんか修理してほしーモンないのか？」

ボギーとかいう奴が、不満そうな、もの欲しそうな顔で聞いた。

「この間のドライバーは助かった、また持ってくるよ」

「なあ、いいマッサージチェアがあるぜ。オレのスペシャルチューンだ、骨までバキバキだぜ！ 安くしとくから……」

『街』の召集だ」

その一言でお喋りが止まった。

「……ならしゃーねえ。またきな」

「おう」

短く答えると、俺を置いて耳屋が店を出ていった。

「なあボギーさんよ、この地図だが」

「おまえだれだ？」

「わりい、名乗ってねえな。『邪魔屋』だ」

「へえ、オマエが『街の番犬』か」

「犬っころと一緒にするな。『飼われてる』のはアンタも同じだろ」

「フン、俺様がオマエら首輪付きと同列だと思うなよ。誰もやれない、他にやいない、オレがいなきやアップアップよ、どいつもこいつも」

尊大な態度の割には卑しい目つきで言い放った。

「……ところでよ、なんか食いもん買ってきてくんねーか？ 昨日からなんも食ってなくてよお……」

「てめえで買ってくりゃいいだろ、オレサマ」

「んなコトいわねえでさあ、たのむよお」

プライドだけの人生破綻者、か

この店見りゃアホでも判るぜ

「食わしてもらいたきゃ早くしろよ」

「買ってくれるんか！？ よっしゃ、ソッコーで調べてやるぜ！！」

急に生氣を取り戻したゾンビ・レノンがまたパソコンを叩き始めた。

「よし、出たぜ。こりゃあ倉庫街……港の方だな」

「動きは？」

「ねえ。最後の移動は40分前だ」

「……ヤバイ……」

ガラクタを蹴り、メシはと叫ぶボギーを残し店を飛び出した。

第四十八章 笑う獣（前編）

第四十八章 笑う獣（前編）

ボギーの店を出て30分程で港に着いた。

密集する倉庫街を抜けると、だだっ広い接岸エリアに出た。

日が沈もうとしている。辺りは片端から闇に呑まれていた。

目を凝らして回りを見た。

搬入されたコンテナがそこかしこに置かれている。

人影。

角に隠れていた。

倒れている。動かない。

見慣れた派手なシャツ。投げ出されたジーンズ。

「シロー！」

駆け寄った。

手を伸ばそうとした時、本能が悲鳴を上げた。

駆け寄った勢いそのまま前方へ飛び込んだ。

何かが掠める感触。

肩から接地して一回転し、すぐ後ろへ振り返る。

闇を切り取ったような影が鬱蒼と立っていた。俺よりデカイ。

「勘がいいな」

影が、ボソリと言った。

「山田 修、だな」

「ほう。俺もユーメイになったもんだな」

生暖かい潮風の中で、影は黒のロングコートを羽織り肩を震わせていた。

笑ってるらしい。

「一人殺ると一人が寄ってくる。そいつを餌にまた一人殺る。それからもう一人。それで暫く誰も追ってこない。邪魔もされない」

「ガキ殺りやがったな、下衆野郎が」

腹に力入れて吐き捨てた。

「そんなガタイしてるくせに。てめえが殺りたいのは女子供ばっかかよ、虫けらが」

「今度はガキだけにしといたんだがなあ」

「おなじこった。弱えモン狙いやがって」

「疲れっからな」

「なんだと？」

「ウダウダ逆らう奴がいるとカッターィんだよ。お巡りなんか何人ぶっ殺してもワラワラ出てくる、健康に悪いぜ」

影がクックと笑みを漏らす。

「リフレッシュすんのにストレス抱え込むのはバカのやることだ」

「.....てめえにやあれが..... 娯楽だって一のか.....」

「やっただろ？ ガキの頃、蟻だの蝉だの踏んずぶしたり足もいだり。グツチャグチャにしてよ。面白かったよなあ、どうだ？」

「ヒトと虫けら一緒にすんじゃねえ」

「なんでだ？ なにが違う？ 生まれて生きて死んで、なんにも違わねえじゃないか。勝手にエラそうにしてるだけなんだよ、人間だってだけでな」

「てめえだって人間じゃねえか！」

「そうさ。オマエらよりちっとばかり利口な、な」

ちょっと喋り過ぎたか.....

眩いた影がゆらりと前へ踏み出して来た。

第四十八章 笑う獣（中編）

第四十八章 笑う獣（中編）

生温い潮風に押されるように、人の形をした『闇』が迫ってくる。

吐き気のする笑みを浮かべて。

嫌な臭いが鼻腔に入り込んできた。

張りつめる。

空気。気配。闘争の予感。

唾に鉄の味が混じる。

予感はすぐ歓喜に変わった。

『ゴミ』だ

おれの獲物だ

公園の惨状が頭ん中で『あの日の光景』になり、身体の芯が凍り、血が沸騰する。

殺された子供達も倒れてるシローも、みな忘れた。

ころす

「……しまいだぜ……山田……」

「ん？」

「たっぷり楽しめ。あの世逝きの絶叫マシンは楽しいぜ。泣いて喚いて……死ぬ」

軽く出した前足に体重を掛ける。腕は両脇に垂らしたままだ。

舐め上げるように奴を見た。

山田が足を止めた。

じっと俺を見下ろしている。

笑いが消えていた。

「空手じゃないな。レスリングでもない、柔道やボクシングでも」

先程までとは別人のような声で山田が呟いた。

「その構え……オマエ『邪魔屋』だな」

思わぬ言葉だった。

虚を突かれて昂った気がしぼんだ。

「しってるのか」

「逃げ歩いた先の『街』で、オマエみたいな奴を何度か見た。裏の始末屋……どの『街』にもいる飼い犬だ」

「おまえなんぞに『犬』呼ばわりか。ナメられたもんだ、『邪魔屋』もよ」

「舐めちゃいねえよ。恐ろしい連中だった。狙われたらまず逃げられないだろう」

「オマエはよく生きてられたな」

「近寄らなかつたからさ、そんな奴らには」

「今度は逃げらんねえぜ」

もう一度、血を沸かせようとした。

強く睨みつけ唇の内側を噛んだ。

本物の血の味がアドレナリンを吹き出させた。

「にげる、だと？」

山田の顔に、再びあの気持ち悪い笑みが浮かび上がった。

「俺は『必要とされてる』のさ、この『街』に」

「必要とされてる、だと？」

「知らねえのか。『裏の住人』のくせによ。教えてやる、この『街』はなあ……」

その時だった。

いきなり光の束に目を焼かれた。

角に停まったピックアップトラックから、サーチライトが闇を無遠慮に切り裂いていた。

「いいタイミングだぜ。今日はここまでだ」

「山田あ！」

じゃあな

言い捨てた影が駆け出し、逆光の向こうに消えた。

第四十八章 笑う獣（後編）

第四十八章 笑う獣（後編）

山田が去った後も、サーチライトは動かぬシローと俺を照らし続けていた。

「だれだ!？」

目に刺さる光を腕で遮りながら怒鳴ると、俺の声に応えるように逆光の向こうから人影が出てきた。

細身のシルエットがゆっくりこちらへ歩いてくる。

「生きてみたいね、とりあえず」

いつものダークスーツに身を包んだ水草屋が、横たわるシローの脇に屈み込んだ。

首筋に触れ、瞼をこじ開け、口のそばに耳を寄せて身体のあちこちを撫で回す。

「こっちも生きてる。骨はそこかしこで折れてるけど、脈も呼吸もしっかりしてる。頑丈ね、この坊や」

「なんでてめえがここにいる？ 誰にきいた!？」

「ご挨拶ね。使える奴ら集めて大急ぎで駆けつけたのに。追っ払ってあげたのよ、感謝しなさい」

「追っ払っただと、フザけるな！ てめえが邪魔しなきゃブツ殺してやったんだぞ！ なのにしゃしゃり出てきやがって。肥溜屋といいテメエといい、そんなにやりたきや……」

怒りに任せ口から出した言葉に引っかかった。

あの時

狙ったように肥溜屋から電話が入った

こいつもそうだ

出来すぎてるじゃないか

誰が情報を流している？

耳屋は、肥溜屋のことは知らないと言った

なら水草屋はどうなんだ

「どうしたの？ 勢い止まったじゃない」

「さっきの質問に答えろ、水草屋。俺達がここにいると誰に聞いた？」

「耳屋よ。『邪魔屋が手こずりそうだから人集めて向かえ、港ならオマエのほう詳しいだろうから』ってね」

決定的なひとことだった。

「ボロ出したな。耳屋は知らねえ、知る筈がねえんだ。ここを」

「え……」

水草屋の鉄面皮に動揺が走るのを初めて見た。

「ここが判ったのは、耳屋があのヘンな野郎の店を出た後だ」

「ならその後に電話をしたんじゃないかしら。何もおかしな所は無いわ」

「あるね、おおありだ。あそこで判ったのは携帯の位置だ。シロー本人の居場所じゃない。俺が携帯を拾ったのがC埠頭、ここはA埠頭、見つけどすのはひと苦労だった。車があったって、こんなドンピシャで来れる訳がねえ。てめえ……なに隠してやがる」

睨みつけた。

返答次第じゃ水草屋を殺る。そう決めた。

第四十九章 執行者（前編）

第四十九章 執行者（前編）

水草屋は動かなかった。

気配を察したのか、トラックから降りてきたガタイのいい連中が水草屋のそばに集まってきた。

俺達の間を割って入ろうとする。

すっと細い腕があがり、それを制した。

「凄い目ね。食い殺されそう」

「オマエしだいさ」

「……まあいいか、いずれ知る事になるのだし。ワタシが命張って隠さなきゃならない事でもないから」

水草屋がマルポロをくわえた。

脇の男がライターを差し出す。

黙って火をつけ、ほうと煙を吐き出した。

「アイツは監視されてるの」

「監視だと」

「そう。紐付きってわけ」

「梟どもがついてるってことか」

「違う。耳屋とは関係無い、直接は」

「遠回しに喋るな。オレの邪魔するなら容赦しねえ、死にたくなきゃちゃんと言え」

「監視してるのは『街』よ」

水草屋が言った。

「『街が監視』って……やってんじゃないかよ、オレらがいつも」

「それとは違うの。いい、山田は『ゴミ』じゃないの」

「『ゴミ』だろーが！ めちゃくちゃタチ悪い『ゴミ』じゃねえか！！」

「彼は『執行者』なのよ。『街』が選んだ『執行者』」

「『執行者』？」

訳がわからなかった。

『執行者』ってなんだ？

んなモン聞いたこともないぞ。

『ゴミ』じゃないって……

「これを話すのはワタシの役目じゃないケド、いいわ、教えてあげる。『街』は表と裏で人間を飼ってる。それは『街』が自分自身を維持する為。『街』が『街』としてあり続ける為。その為には秩序が必要なの。ここまではいいわね」

目を逸らさぬまま頷いた。

「秩序を保つには、秩序を守る者の存在が不可欠よ。警察も『邪魔屋』もその為にいる。でもそういう仕組みは逆に、秩序を脅かすものがあって初めてその存在を許されるの。『邪魔屋』はともかく、少なくとも表の世界に属している警察は、社会的な脅威がないと自分達の存在理由が無くなってしまうのよ。『執行者』はその為に選ばれる。必要悪として、ね」

「……つまり……奴は事件を起こす為に選ばれ『脱走させられた』って……そういうことなのか？」

信じられなかった。『街』が『ゴミ』を飼っていたなんて。

何かが壊れ、崩れた。

第四十九章 執行者（中編）

第四十九章 執行者（中編）

「三年だ……その間ずっとオレは騙されてたのか、『街』に……」

山田と対峙していた時の高揚はもう何処にもなかった。

「騙されてた、ね。耳屋は教えようとした筈よ。でもアナタはずっと拒んでいた」

「拒んだ？ オレが？」

水草屋がまた煙を吐いた。

「何年たってもアナタは忘れなかった、恨みを、復讐を。それだけを生き甲斐に今日まで来た。『邪魔屋』はダーティワークよ、綺麗事など何も通用しない、何でもありの世界。でもそれはアナタの為にあるんじゃない。いつまでも泣き続ける坊やに鬱憤晴らしさせてあげるものじゃないの。これは『仕事』なのよ」

灰を落とし、煙草をくわえたままじっとこちらを見る水草屋は、煙が顔を撫でても瞬きすらしなかった。

「耳屋は待ってた。アナタがいつかこの稼業を『仕事』として割り切れるようになるのを。でも駄目だった。『ゴミ』をいたぶって殺すことしか頭にないアナタに『執行者』の存在を教えれば、きっとアナタは全てを呪い、目にするもの全部に牙を向ける。そうなれば『街』は、私達はまた『邪魔屋』を喪うことになる。だから言えなかったのよ、たぶん」

話は終わりよ

そう言ってぷっと煙草を吐き捨てると、くると背を向け歩きだした水草屋が男たちに手で合図した。

トラックがこちらへ走ってくる。

「そのうち『街』から指示が来るわ。それまで待ってなさい。なにもせずに、ね」

遠ざかる声と人影を呑み込んだトラックが走り去る。

俺はなにも言い返せなかった。

◇

闇に覆われた埠頭。

膝を落としたアスファルトも、自分が居る筈の空間もただただ黒く塗り潰されていた。

目を開けていても何も見えない。映らない。

おんなじじゃないか

今までずっと、オレはこうだったんだ

メクラのくせに、わかったようなツラしてよ

したり顔で殺し続けてきたんだ

知りもしない奴を『ゴミ』と呼び、命を掌で転がしてナニサマかになった気でいた

オヤジやオフクロや、小夜子の復讐を果たしてる気になってたんだ

違った

『街』が殺させ、ソイツをオレが殺す

糞まみれのマッチポンプの歯車だったんだ

これからどうする

動かぬ頭に、シローが身動きする音が虚しく響いた。

第四十九章 執行者（後編）

第四十九章 執行者（後編）

『街』へ戻ったのは夜も更けてからだった。

来た時と同じように机に突っ伏していたボギーを蹴飛ばすと、死にかけイマジンが目を覚ました。

「んあ……メシ、買ってきたんか……」

「怪我人だ、場所貸してくれ」

シローは重かった。

全身の打撲と骨折。

内臓にもダメージがあるだろう。

表から見えない場所が少しずつ壊れているかも知れない。

早く医者に診せたかったが、派手に揺れる交通機関での移動は論外だった。

だから背負ってここまできた。

何も考えなかった。

人ひとり抱えて歩き続けるのにアタマ使う必要はない。足は放っておいても前へ進む。

今の俺にはそれが有り難かった。

水草屋が告げた事実は、俺も、俺の生きてる理由も、何もかも根こそぎブツ壊しちまっていたから。

真っ暗な道をただ歩いてきた。

光など何処にも見えない中を、トボトボと。

「どうしたんだ、ソイツはなんだ」

「アンタに逆探してもらった奴だ。『ゴミ』にやられた。医者がいる。呼べるか？」

「いけすかないジジイでいいなら一人しってるぜ。とにかく奥へ運べ」

そっちから回れと、まるでこのゴミ平原の中に道でもあるかのようにボギーが指図してくる。

大小のスクラップをかき分けて奥へ進むと、四畳半ほどの部屋が半開きの扉の向こうに隠されていた。

剥きだしのスプリングに汚いマットレスが敷いてあるベッドが1つ、無造作に置かれているだけの殺風景な部屋。

店の粗大ゴミが無いだけマシだと思いながらシローの身体を横たえた。

「呼んだぜ」

面倒臭そうにボギーが覗き込んできた。

グズグズとこちらを伺い続けている。この男なりに心配をしているのだろう。

「すまねえ。恩にきる」

「耳屋んトコ行きゃあよかったんじゃないかねえか？」

「……」

「なんかあったみたいだな」

「……」

「まあ、言いたくないならいいや。とりあえずその坊や何とかしねえとな」

「……しってるか……」

「なにをだ」

『『執行者』って、アンタしってるか』

ボギーの顔が引きつった。

「幾らかはな。オマエの方が詳しいだろ」

「知らなかった、オレは。今日までよ」

ボギーが意外そうな顔でこっちを見た。

第五十章 逡巡（前編）

第五十章 逡巡（前編）

暫くすると医者が来た。よく知った顔だった。

「派手にやられとるのお」

小人のようにちっさな老人が、ベットのシローを撫で回しながら酢こんぶをくわえ直した。

「脾臓が破裂しとるかもな。出血が怖い。ちゃんとした設備のある病院に運んだほうがいいだろ、今すぐ」

「わかった、電話してくるぜ」

ボギーが即答した。

息が合ってるようで、でもどことなくぎこちない接し方だった。

電話を掛けにボギーが部屋を出ると、横たわるシローを挟んで俺と老人の二人きりになった。

「アンタが来るとはな」

「ヒッヒッヒ。わるいかよ」

「いや。丁度いい」

しゃぶしゃぶと酢こんぶを囓む便利屋を見た。

「ジジィ。みんな知ってんだな、俺以外の奴らは」

「ああ？」

『『執行者』のことさ』

「それか」

便利屋の表情は変わらなかった。

顔じゅう皺だらけだから表情なんて判らねえが。

「行ってきたよ、『街』の集まりに。山田が『執行者』だと告げられた。あの瞬間から俺らにゃ手出し出来なくなった」

「『執行者』って何なんだ？ 水草屋がぐちゃぐちゃ言ってたケドよ、要は『街』のやってる自作自演じゃねえのかよ。オレゃバカずらこいてそれに付き合ってた、違うか！？」

吠える俺を便利屋が見つめていた。

珍しく目玉がハッキリと見えた。

『『生け贄』がいるんじゃ』

「いけにえ？」

「そうだ。街が『街』として成り立ってゆくには、それ相応の『生け贄』が必要なんじゃよ」

「……」

「大昔から『生け贄』の儀式はあった。天に地に、生ある者の血肉を捧げ安定と繁栄と祈願する。今も昔もなんも変わらない。『秩序』という名の神に捧げる尊い犠牲、それを司るのが『執行者』じゃよ」

厳かに告げる便利屋を恐いと思った。

初めて抱く感情だった。

「なあ邪魔屋。オマエさんはこの世の全ての『ゴミ』を掃除出来ると思ってるか？」

首を振った。

『街』に集う全ての人達を助けられるとでも思ってるんか？」

もう一度、首を振った。

「そんな事は誰にも出来ない。あたりめえだ、オマエは『神』じゃねえ」

便利屋の顔がどんどんと厳しくなっていった。

第五十章 逡巡（中編）

第五十章 逡巡（中編）

「まあな、『生け贄』なんて格好つけちゃいるが、現実的にはそうしなきゃならん事情があるってこった。今回は警察側からの申し入れじゃがの」

少し間を置くと、便利屋の口調がぐだけた。

ざっくり口調になっても厳しい表情は変わらなかった。

「どーいうことだ」

「どこの『街』でもよ、何年かおきにデカイ事件が起こるじゃろ。大抵は大きな『街』でじゃが、そりゃちっせえ『街』の依頼で肩代わりしてやってるのさ。人の少ない所じゃ騒ぎも拡がらんからの」

「サツはとっ捕まえる側じゃねえのかよ」

「そうだ。奴らがマトモに機能するには、それ相応の組織が必要だ。規模も機材も人手も。表向きの治安を預かるんだ、手弁当の『邪魔屋』みたいによいかねえのさ。平和が続くとよ、それを削ろう、縮めようって動きが必ず出てくる。それじゃ困るのさ。連中も『街』も」

「だからこうやってヤラセするんか。人の命で」

「いつもじゃない。事件は起こる、誰も意図しなくてもな。むしろそのほうが多いぜ、当たり前だがよ。事件が続けば『執行者』は選ばれねえ。てめえがいつも通り『仕事』してる時ってのは、ある意味『平和だ』ってことなのさ」

皮肉なもんだ

俺が忙しくしてる時ほど『街』はぐっどこんでいしょんだなんて

殺るのが先か、殺られるのが先か

まるで卵とニワトリじゃねえか

「あいつ……山田の野郎、これからどーすんだ」

「殺る事やったらサツが捕まえてメデタシさ。オマエには繋ぎがあるじゃろ。多分そりゃ耳屋の役目だろうがの」

「おかしかねえか。山田がどいつを殺るかなんて誰にもわかんねーじゃんか。『街の意思』とかごたいそんなこと言ってるジジィだかババアだかだって殺られちまうかもしれねえんだぜ？ それでいいのかよ」

「いいんだ。みんな承知の上さ」

「くるってる……どいつもこいつも狂ってやがる」

もうそれ以外に言葉が出てこなかった。

無駄だった。

便利屋相手に何を言ったところで『街』は変わらない。

それでも言わずにはいられなかった。叫ばずにはいられなかった。

それも、もう尽きた。

ふらりと部屋を出た。ボギーが何か喚いている。

俺には何も聞こえなかった。

第五十章 逡巡（後編）

第五十章 逡巡（後編）

あれから二日、部屋で腐ってた。

顔を出した耳屋が言ったのは、便利屋に聞かされたのとおおよそ変わらない内容だった。

今更どーでもよかった。

シローは助かったらしい。

それすらどーでもよかった。

山田の件以外は今まで通り『ゴミ漁り』をやれと言われたがシカトした。

酔い崩れて見上げる俺を、イタい奴見るような目で見下す耳屋の視線もどーでもよかった。

耳屋自体がどーでもよかった。

◇

三日目の日が沈んだ頃。

「ひどいわね。どーしちゃったのよ」

二日酔いの頭を畳から持ち上げると、戸口で小夜が腕組みして壁にもたれていた。

仕事帰りなのか、スーツ姿で髪は降ろしている。

「髪、伸びたな」

何だか水草屋みたいだと思った。

「アタシの髪はどーでもいいの。凄い臭いよ、この部屋」

部屋に上がってきた小夜が、一つしかない窓をガラリと開け放った。

新鮮な空気が雪崩れ込んでくる。

「なにかあったの？ ジャミーもシローも、電話したってメールしたって何にも返してこないんだもの」

「シローはにゅーいんちゆうだ」

「入院？ 病気なの？」

「やられた。ポッコボコによ」

「なにそれ？ 誰によ！」

「カンケーねえ。死にやしねえよ」

「関係ないワケないじゃん！ トモダチだよっ！」

小夜の金切り声が脳髓かき回してくる。

耳を塞ぎながらうるせえあっちイケとストッキングに包まれた臍を蹴飛ばした。つもりだった。

足バタバタさせただけだった。

奥の流しへ行った小夜がコップ片手に戻ってきた。

「おお……さんきゅ～」

水を汲んできてくれたらしい。

手を伸ばした。

いきなりダイブしてた。

溺れそうになりながら、誰だ勝手にオレン部屋にプールこさえやがったのはと喚いた。

飛沫がもう一度、顔面を襲った。

それで少し頭がしゃんとした。

「どお？ スッキリした？」

「……」

「教えてもらうわよ。その前に……」

腕を掴まれ立たされる。

あっという間に服を脱がされた。

「なっなっ、なにしゃあがる！？」

「お風呂はいんなさい。ジタバタすんな、オトコのハダカなんか散々見たわよ。さっさとこい！」

そのまま風呂場に放り込まれた。

まるで捨て猫だった。

第五十一章 見敵必殺（前編）

第五十一章 見敵必殺（前編）

まるっきりガキ扱いだった。

有無を言わせず頭からシャンプー浴びせられ、石鹸まぶした垢落としで泡だらけにされた。

いつの間にか下着だけになった小夜は手加減無しだった。洗車でもするみたいに擦ってくる。

色気どころか情けも容赦もなかった。

「お……おいバカ、なに脱いでんだ、いくらオレだってココロのジュンビってもんが……」

「なに寝ぼけてんのよ、立派な身体してたって昼間っからベロベロじゃ勃ちもしないでしようが」

前にかがみ込んだ小夜は、俺の股間にデコピンかます暴挙に出た。

ぎゃっと叫んで飛び上がろうとしたら、むんずと頭を押さえつけられた。

「ホラ、だめじゃん」

「むぐう……」

「おとなしくしてて」

渋々じっとしてた。ニンゲンやめたくなった。

なっさけねえ～

……

◇

小夜が張ってくれた湯船に浸かり、深々と湯気を吸い込んだ。

鬼軍曹はとっくに浴室を出ていた。

さすがにシラフの俺の前で半裸の姿を晒すのは気恥ずかしかったのだろう。

スッキリした頭は勝手に回り始めていた。

『執行者』

『街の意思』

『裏の住人』達の言葉

耳屋のこと

水草屋のこと

便利屋のこと

肥溜屋のこと

シローのこと

ボギーのこと

殺っちまった『ゴミ』ども

関わってきた人間達

助けられなかった奴ら

ミノル

弁護士佐竹

三浦のジジィ

美幸

公園の子供達

オヤジ

おふくろ

小夜子

「なにやってんだ」

無意識に言葉が口をついた。

「なにやってやがんだ」

眩きは止まらなかった。

「カンケーねえ。誰が頼んで『邪魔屋』にしてもらった？『街』が勝手にオレを選んだんじゃねえか。なんも終わらねえ、なんも始まってねえ、最初から。好きに殺りゃあいい。どうなるうが知ったことか。『ゴミ』は始末する。それだけだ」

湯を掬い思い切り顔へ叩きつけた。

四回やって風呂からあがった。

◇

「借りたよ。スーツ、皺になっちゃうから」

俺のTシャツを着た小夜が窓に腰掛け風に当たっていた。

デカすぎてワンピースみたいだった。

「話がある。オマエに話しておきたいことが」

小夜が怪訝そうな顔でこっちを見た。

第五十一章 見敵必殺（中編）

第五十一章 見敵必殺（中編）

「お酒、抜けたみたいね。話ってなに？」

火照った横顔が髪を掻き揚げ聞いてきた。

無邪気な小夜を真っ直ぐ見るのがキツかった。

「オマエが声掛けてきた時のこと、覚えてるか」

「なによいきなり。アレでしょ、『あんたバカア〜！？』ってファミレスで言った時でしょ」

「そりゃエヴァだアホ。……そうじゃねえ、オレがボウっと道の真ん中で空みてた時だよ」

額に可愛い皺を寄せ、小夜は少しだけ考えるそぶりをしてみせた。

「……思い出した。まだ寒かった頃だよ、アレ」

「あの時言ったよな、『オレは殺し屋だ』って」

「そうそう！ こいつナニいっちゃってんのかと思ったよ。でもあん時のジャミー、凄く落ち込んでた。それでアタシ思わず……」

「本当だ」

「え？」

「嘘じゃねえ。オレはヒト殺して生きてる。ホンモノの『殺し屋』なんだよ」

『え?』と言った時の半笑いの顔のまま小夜は固まっていた。

「依頼されてアブない奴らを殺して回る。それがオレの『仕事』だ」

「え……だってジャミー、まえ言ってたじゃん、探偵助手みたいなことやってるって……」

「嘘だ。口からでまかせだ。あん時あ堀川の件でオマエらの協力が必要だった。だから嘘ついた」

「シローもいるじゃん! つるんでるんでしょ? 今も」

「奴は今、オレの助手をしてる。入院したのはヤバい奴尾けて返り討ちにあっちまったからだ」

「じゃあ……じゃあ、美幸さんも?」

「知ってる。オレが何者なのか」

小夜が立ちあがった。

言葉に出来ない表情のまま、畳にあぐらをかいた俺を見ていた。

「……ホント……だったんだ……」

「『邪魔屋』、そう呼ばれてる。元の名前は捨てたよ」

「邪魔屋……じゃまや……じゃみー……」

「オマエがくれた名だ」

俺を見下ろす小夜の顔がみるみる半ベそになっていった。

「どうして? どーしてそんな……」

「家族を殺された。みんなだ。三年前、この街でな。オレは誓った。あんなコトする奴ひとり残らず殺すと。それからずっと殺し続けてる、片っ端から。そうする事でオレは生

きてこれた。そうしなきゃ……どうやっても生きられなかった……」

小夜の目が潤んでいた。

第五十一章 見敵必殺（後編）

第五十一章 見敵必殺（後編）

なんて目で見やがる……

思ったが続けた。

「堀川の事件があって、オマエやシローを巻き込んだ。すまねえと思ってる」

「すまねえって……そんなのいいよ！ シローだってジャミーのコト好きだからついてったんだよ！」

「ひとごろしだと知らずにな」

小夜が言葉を詰ませた。

「今、この『街』は『儀式』をやろうとしてる」

「ぎし……き？」

「『街』は生き物みてえなモンなのさ。ヒトが集まるから『街』が出来るんじゃねえ、『街』があるからヒトが集まり、事件が起きる。『街』はどうやってヒトを集めると思う？」

答えはなかった。

「匂いさ。安全とか安心とか、そんな匂いでな。釣られたバカどもがどんどん『街』をデカくしてく。安全ってなんだ？ なんも事件がおこんねえことか？ 違う。そんな場所なんかねえ。みんなそれを知ってるから、用心棒がいる『街』を選んで集まるのさ」

「用心棒って」

「警察だ。お巡りだよ」

「どこだっているじゃない」

『仕事』が少なけりゃオマワリは減らされる。でもそれじゃ人は集まらねえ。用心棒のロクにいない『街』は生き続けられねえ。だから生け贄が必要なんだ。血を流し叫び声をあげ、ケーサツっていうゴロツキの名を呼びながら殺されてく生け贄がな」

「……」

棚の上にあった煙草を取って一本くわえた。

火をつけようと思ったがライターがなかった。

「ケーサツ嫌い。でもアイツらわたしたち守ってくれるんじゃないの？ おかしーじゃん」

引き出しからやっと見つけた百円ライターをガシガシやってると、小夜がぽつりと呟いた。

「この間脱走した奴、あれは逃げたんじゃない。檻から出されたのさ。『生け贄』を捌く処刑人としてな。『執行者』って呼ばれてる」

やっと火がついた。深々と吸い込み、吐き出す。

「俺達『街に飼われた者』には手出し出来ねえ。アイツはタツプリ殺して、派手に捕まる。ケーサツに。それが奴の役目なんだ」

「じゃあ黙って見てるの？ 誰か殺されるまでなんもしないの!？」

煙草を口からとった。

「……奴を殺る……」

目を一杯に見開いた小夜の前で、掌に煙草を押しつけ消した。

第五十二章 影の背中（前編）

第五十二章 影の背中（前編）

「なによ」

歓迎されていない声だった。

◇

小夜が訊ねてきた翌日だった。

古めかしい建物。殺風景な事務所。

まえに来た時と何も変わってなかった。

「忙しいの。お喋りしてる暇ないのよ。用があるなら手短かにいって」

それだけは立派な机に向かい、書類に目を落としたまま水草屋が言った。

「奴はどこだ」

「奴って？」

『『執行者』。知ってるんだろ』

俯いていた顔が、ゆっくりと持ち上がりこちらを見た。

『『街』の決定は聞いたんでしょ』

「ああ」

「なら何故？ それにワタシに聞くってのはどういう事よ」

『『執行者』の監視役とアンタは繋がってる。自分でゲロったじゃねえか』

水草屋は動揺ひとつ見せず俺を見据えている。

「確かに。『執行者』の動きを『裏の住人』達に伝えるのがワタシの役目よ、今回は。だからって野良猫どもと逐一連絡とってる訳じゃないのよ」

「野良猫？」

『執行者』を追う為に、特別に選ばれた連中よ。滅多にないことだし、梟みたいに食い詰め者のホームレスが片手間で出来るものじゃないのよ、この『仕事』は。完全に野放しにしたらどこまで暴走するか判らないのが『執行者』だから」

「ならその猫どもでいい。繋ぎをとれ、今すぐに」

目を逸らさず言った。

少しの間、水草屋と睨み合った。

「……だめよ」

「なぜだ」

「殺る気なんでしょ、山田を」

「それがどーした」

「言ったわよね、あの時、埠頭で。ワタシ達は『邪魔屋』を喪う訳にはいかないって」

「んなのはテメエらの都合だろうが。俺の知ったこっちゃねえ」

『知ったこっちゃねえ』？ どっからそんなセリフが出てくるのよ！？ アナタ今までどうやって生きてきたの？ 誰に生かされてきたのよ？ この『街』で『邪魔屋』稼業を許されて、『ゴミ』ども始末してこれたからマトモでいられたんじゃない。そうじゃなきゃとっくに野垂れ死にしてるか、アナタ自身が『ゴミ』になってた筈よ、それが判ってて言ってるの！？」

堰を切ったように水草屋がまくし立てた。

「『執行者』に手出しすれば確実に『始末』される。それがアナタの望みじゃないでしょ！」

俺を見る視線が厳しさを増した。

第五十二章 影の背中（中編）

第五十二章 影の背中（中編）

どうでもいい、と言った。

「どうでもいいんだ、んなこと」

「あら、『始末』されてもいいの。ステキな覚悟ね」

ふんと鼻を鳴らし水草屋が机の向こうで立ち上がった。

くびれた腰に両手を当てこっちを見据えている。

いつもの冷たい眼差し。

今は侮蔑の色が濃かった。

俺もジャケットのポケットに両手を突っ込んだ。

「生きてりゃ『ゴミ』なんか幾らでも潰せるってのに。バカですらないわね。ただのメ・ク・ラ」

「……」

「メクラだから区別なんかつきやしない。アナタの家族、三年前『この街で』殺されたんですってね」

「……」

「で？ それがどうしたの？ あの『ゴミ』ならとっくの昔に三途の川下りツアーよ。アナタがいくら泣き喚いたって骨一本折れやしない。ちがう？」

「……」

「だから殺しまくってきた。青臭い復讐の代替。アナタが曲がりなりにもニンゲンっぽく生きてこられたのはね、『街』がアナタをコントロールしてきたからよ。でなきゃ自分の尻ひとつ拭けやしないじゃない。いつまでたってもぎゃあぎゃあウルサイだけの糞ガキがっぱし気取って何が出来るの？ 笑わせんじやないわよ」

「……無駄だ」

教えてやった。

水草屋が眉を曇らせた。お喋りも止まった。

「いまさら挑発もねーだろ」

「なに言ってるの？ 生意気なくち……」

「何年アンタと喧嘩してきたと思ってんだ？ 挑発して怒らせて矛先かえて、そうやってアンタいつもオレを巧いことあしらってきた。今もオレの気を山田の奴から別の方へ向けようとしてる。無駄なんだよ、そんなうざってえ小細工」

「アナタねえ！」

珍しく感情的になった水草屋が、机の脇を回りこっちへ食ってかかろうとした。

ずん

足が止まる。

机上に置かれた手。薄真珠に塗られたマニキュアの指のすぐ先に突き立った、漆黒の刃。

俺は吠えも笑いもしなかった。

「……なんのつもり」

「便利屋んこのセール品だ。ロシア製だよ」

あちらの特殊部隊謹製のナイフ。

柄のボタンを押すとブレードが6 mは飛ぶ。

右のポケットに小さな穴があいていた。

「そんなに『邪魔屋』が惜しいのか？ 水草屋」

そのまま返事を待った。

第五十二章 影の背中（後編）

第五十二章 影の背中（後編）

水草屋はじっと俺を見ていた。

「代わりなんぞ幾らだっているだろ。オレがどーなろうとアンタらこそ知ったこっちゃねえだろが」

左のポケットで手を動かしてみせた。

「アンタだってそうさ。死体処理なんぞ誰だって出来る。コイツをポチッとなしてグサッといきや楽になるぜ。書類なんか読まなくてすむしよ」

「正気？」

「さあな」

もう一度、手を動かした。

「なにを考えてる」

「なにも」

『『執行者』が下手打ちやアンタもヤバいのかよ』

「関係ない。『始末』されるのはアナタよ」

「じゃあ何故だ」

刺さった刃の根本を掴んだ水草屋が、無造作に引き抜いてみせた。

コイツが見かけより腕力あるのはオレの目ん玉がよく知ってる。

危うく挟り出される場所だった。

「アナタがどう思ってるか知らない。ワタシ達は血も涙もない殺戮者じゃないの。『街の裏』で生きてるのは、他に生きる術が無い連中なのよ。みんな過去を引きずってる。縛られたまま生きてかなきゃならない。ずっと」

「それがどうした」

「同じよ、アナタと。知ってるでしょ？」

「……」

「命って簡単に消える。だから群れて、庇い合うの。全部は無理、神様じゃないんだから。自分の力を少しずつ出し合って『街』という脆い存在を支えてる。わかってるよね、アナタは」

わかってるさ

喉元まで出掛かった。

いつもなら屁理屈こねてくるだろう相手が、思いもしない言葉を投げかけてきた。

反則だぜメスガッパ。

「アナタをずっと見ていたのよ、あのひとは」

「あのひと？」

「耳屋。誠さんの後釜探してただけじゃない。捨てておけなかったんだと思う。ポロポロのアナタを」

「おっちゃんとおんた、どーいう関係なんだ」

「……そのうち、ね……」

水草屋が手首を返した。

頬を掠めた刃が、後ろのほうで重い音を立てた。

「これで武器はなし。ワタシを殺ってく？」

ポケットの中身を出して、くわえてみせた。

サクッと軽い音がした。

「うまい棒がどうしたって？」

「……このクソガキ」

当てりゃよかった

いくんでしょ？ どうせ

なら勝手に逝きなさい

水草屋がファイルを放ってよこした。

『執行者』の情報が綺麗な字で書かれていた。

第五十三章 欠心（前編）

第五十三章 欠心（前編）

もぬけの殻だった。

水草屋から受け取ったファイルにあった場所。再開発のドンケツに回された廃ビルの最上階。

一階から慎重に探っていたが、山田の姿は何処にもなかった。

元はオフィスであったろう場所は、踏みつぶされ散らかされたカップ麺の容器やコンビニ袋が散乱してチョットしたゴミ屋敷だった。『ゴミ』にはふさわしい場所だ。

どこから持ってきたのか、会社の重役が座るような皮張りの椅子がそのゴミのただ中に据えてあった。山田の奴が使っているのだろう。唾を吐きかけ蹴り飛ばすと、無人のビルに椅子の転がる音が派手に響き渡った。

テーブルに小汚ない『街』の地図が放ってあるのを見つけて手に取った。意味不明の数字がマジックでゴテゴテ書いてある。深く読みもせず懐にしまった。

戻ってくるだろう。

そう踏んで、各階の階段と非常口には簡単なトラップを仕掛けておいた。

解体業者が使う立ち入り禁止のトラテープをビル内にある棚やら机やら放置資材に結びつけてあった。

引っかかってバカでかい物音を立てたととしても、奴は業者が来たとしか思わないだろう。人の気配に敏感にはなるだろうがトラップとは考えもしまし。

なにせ今、奴は『執行者』サマだ。自分は獲物を追う側であって、追われているとは露ほども思っていない筈だ。

その驕りが命取りになるんだぜ

今度はテメエが狩られる番だ

たっぷり楽しませてやる...

薄暗い部屋の隅をガサゴソやりながら待ち伏せポジションを考えていると、ポケットの携帯が震えた。また非登録だった。

嫌な気分で通話ボタンを押した。

「.....肥溜屋か？」

「おれだよ、邪魔屋のに一ちゃん。ボギーだ」

「あんたか」

「山田ならもう戻らないぜ。『執行者』は仕事にとりかかるつもりだ」

「なんだと？」

「今から1時間前、袋かついでそこから出た。海浜公園近くのホームセンターに向かったらしい。買い物すんじゃねえか？ お仕事用の凶器でもよ」

「なんでアンタがそんなこと.....」

言いかけて気付いた。

「.....アンタが『野良猫』だったのか」

「後からご指名って奴だけどな。他にもいるぜ、『猫』どもは」

ボギーがケロっと言っただけだ。

第五十三章 欠心（中編）

第五十三章 欠心（中編）

あと何人いる？『猫』は

聞いた俺に、へらへら声が電話ごしに答えた。

「そりや言えねえんだ。わりいな」

「『街』か」

「ケーヤクって奴があるからよ」

「ならいい。何人だろうと邪魔さえしなきゃいいさ」

「そいつも保証出来ねえなあ」

声が途切れ何かを呑む音が聞こえた。

飯もろくに喰ってなかった野郎が、今はどうやら一杯やりながらかけてるらしい。

「報酬で一杯かよ、いいご身分だな。酒くらってて『仕事』になるんか」

「.....つぶ。あんだって？ 追跡用の発信機もアンテナも、みい〜んなオレがこさえたんだぜ。『執行者』に気づかれないサイズで街ひとつカバー出来る高性能のカスタムビーコン作れる奴なんぞオレ以外にいねえからな。そもそも昔と今じゃバッテリー性能が.....」

「講釈聞いている暇はねえ。海浜公園のホームセンターだったな？ それで充分だ」

それだけ言って切ろうとした。

「まで待てっ、待てよに一ちゃん！」

がなり声に手を止められた。

「なんだ」

「どーしても山田を殺るんか？」

「ああ」

『街』は許さねえ。しぬぜ」

「アンタにゃカンケーねえだろ」

「ほっときゃサツがフクロにしてとっ捕まえるんだぜ。なんもしなくたって13階段逝きは決まってる、アンタが命はる必要がどこにあるってんだ」

「ねえよ、んなもん」

「だろ！ だったら……」

「ねえよ。かける命なんぞハナっから」

声が止まった。

「とっくの昔に死んでた。だからどーでもよかった。どーでもいいから『邪魔屋』になった。でもそんなモンになっちまったおかげで、誰かにとっちゃどーでもよくねえコト山ほど背負い込まされちまった。思い出したんだ、オレにはみんなカンケーねえってよ」

「……」

「アンタ家族はいるか？」

「かぞく？ ああ、オヤジとオフクロはまだ鹿児島で生きてんじゃねえか。くたばってりゃ妹から電話くらいくるだろうからよ。それがどした？」

「妹がいるのか」

「おう。くだんねえオトコとガキこさえてあっちで暮らしてる筈さ」

「いいじゃねえか。大事にしろよ」

「はあ？」

「いつか顔が見たくなるぜ。必ず」

喋りすぎた

口には出さず今度こそ電話を切った。

第五十三章 欠心（後編）

第五十三章 欠心（後編）

駅を降りるとカモメの水兵さんが集団で歩いてた。

青い目のアンチャンたちがそこかしこにたむろっている。

近くにアメちゃんと自衛隊の基地があるのを思い出した。

エラく遠くまで買い出しだな

時間かせぎのつもりかよ

バカが

何も目に映らなかった。

標識。道路。ランドマーク。それだけで充分だ。後はいらない。

歩き始めた。

奴と擦れ違ったらソッコーぶち込めるよう、剥き身のダガーをポケットの中で握りしめながら。

軽い振動。また電話だ。

シカトしようとディスプレイを見たら耳屋だった。

「ぼん。今どこだ？」

「どこでもいーだろ」

「山田を追ってるんだな。戻れ」

「いやだ」

「気持ちが判るとは言わねえ、だが駄目なモンはダメだ！……いいか、『執行者』なんて滅多にあるもんじゃねえ。一回だけ目えつむれ。そうすりゃこの先『ゴミ』なんぞ幾らでも始末出来る」

「オレはホストかよ」

「？」

『『邪魔屋サン、4番テーブルご指名ですう～、はりきってゴミ掃除、いってみましょ～』ってか。ざけんな。アンタとはこれっきりだ、じゃあな」

「まてっ！話をきけっ！！」

切った。

切ったそばから着信が入った。

いい加減にしろと路面にケータイ叩きつけようとして、やめた。

「もしもし」

「ジャミー、あたしよ、小夜」

「今いそがしい。切るぞ」

「待って！今かわるから！」

かわるって？

嫌な予感がして耳から携帯を離そうとした。

「もし……もし？」

懐かしい声。

予感は当たった。切れなくなった。

「堀川か。久しぶりだな」

「そうでもないよ。『声』、聞こえてたんだ。ずっと」

「まるで盗聴だな」

皮肉は通じなかった。

「沢山は言わないから聞いて。埋まらないよ、ジャミー」

「なにがだ」

「穴。アナタにあいたおっきな穴。今殺しに行っても埋まらない、絶対に」

「オマエになにがわかる」

「埋めたければ、生きて。辛くても生きて。死んだら永遠に埋められないよ、楽になんか
ならないから。それだけ忘れないで。おねがい」

いきて

最後に聞こえた言葉はむこうから切れた。

俺は.....

空を仰いでみた。

青かった。

第五十四章 ON THEEDGE (前編)

第五十四章 ON THEEDGE（前編）

携帯を受け取りながら、小夜は戸惑っていた。

聞かされたから。つい、さっき。

◇

あの事件の後、小夜は美幸のマネージャーとして正式に採用された。

前任者に徹底的にしごかれながら、弱音を吐くどころか逆に砂地へ水が染み込む勢いで仕事を覚えていった優秀さ。

しっかりとした対応と人あしらい。

身体を張って堀川を庇い通した根性。

事務所の社長はそんな小夜をいたく気に入り、前任者の退職もあって即座に彼女を採用したのだった。

夢のようだった。

ついこの間まで、自分はただのアルバイトだった。

家を飛び出し、愛人でもあった父親を捨て、見も知らぬ都会で隠れるように生きているだけのくだらない女の子だった。

それが今では責任ある仕事を任せられ、会ったこともない人達と話し、未来を語れるようになった。

生きるに値する日々だった。

あの事件に関わらなければ今の自分はなかった。

彼に伝えたかった。

感謝だけじゃない、胸の奥底に抱えていた柔らかくて暖かい想いも。

彼は電話に出なかった。だから思い切って訊ねてみた。

そして……

酷く酔った彼から聞かされたのだ。

『俺は殺し屋だ』と。

これからまた殺しにゆくと。

止められなかった。

彼が恐ろしく、でも心配だった。

眠れぬまま朝を迎え、今日の収録は午後からだという美幸を誘い相談してみた。

そして知ったのだ。

あの夜、何があったのか。

二人の間でどんな事があったのか。

美幸が彼をどう想っていたのか。

美幸が持つ特殊な能力の事も初めて知った。

その『力』が今も彼の『声』を美幸に伝えている事も。

◇

「止めないんですか」

携帯を受け取りながら小夜は訊ねた。

「ジャミー、いっちゃんよ。あのキチガイ殺しに。そんな事したらジャミーが『街』に殺されちゃうんだよ。いいの？」

「……わたしには無理」

「美幸さんっ！」

「どんなに好きでも、彼の中にワタシはいないの。判っちゃうんだ。やな『力』だよね。でも……」

伏せていた顔をあげ、堀川は小夜を見た。

「彼を止められるかもしれないヒトがいる」

「誰ですか！ それ」

あなたよ、小夜ちゃん

辛そうな目で堀川が言った。

第五十四章 ON THEEDGE (中編)

第五十四章 ON THEEDGE（中編）

見えた。

海沿いに立った巨大な施設。

綺麗な建物だったが、俺は嫌なものを思い出していた。

アリーナ

事件の記憶が、堀川の声を蘇らせた。

『いきて』

言って切れた、舌足らずの沈んだ声。

もう関わるな、美幸

オマエの世界は、オレから遙か彼方にある

忘れろ、そんでもって……

小夜のこと、たのんだけ

ふとおかしくなった。

まるで遺言じゃないかと。

死ぬつもりはない。死ぬ気になったこともない。

己れの生死はとっくの昔に意味を無くしていた。

それでも死のうとは思わなかった。

『ゴミ』を片づけるまでは。

ギラつく日差しの中を歩き出した。

一人殺り二人殺り、まだ足りなくて三人、四人……

どこまでいっても満たされなかった。

殺れば殺るほど憎しみは増した。

それを当たり前のこととして生きてきた。

『埋められないよ、穴』

また堀川の声がした。

しってるよ

だからどーした

オレは落ちてえのさ、その『穴』に

どこまで行っても終わらない、ナイフの刃みたいな『穴』の縁を血塗れで歩きながら、いつかフッと落ちてく

そして、なんもわからなくなって消えちまう

たぶんそれが、オレのくたばる時だ

入り口まで来ると、デカイ自動ドアがゆっくりあいた。

冷気がどっと流れ出してくる。快適とはほど遠い、ただ寒いだけの冷気が。

イツ ショウタイム

眩いて中へ入った。

◇

バカでかい売場だった。

台所用品の棚を回り、ゆっくりとDIYコーナーの方へ足を進めた。

レジ係には予め山田の人相特徴を聞いていた。まだ会計は済ませていない。

ノンビリ得物を物色中なのだろう。1時間以上かけて。

建材置き場の陰からそっと覗いてみた。

いた

このクソ暑いのに相変わらずロングコートを着込んだ奴は、嬉しそうに棚の機械をイジってる。

傍らに止めたカートの中身は……

柳包丁に出刃包丁

金属バット2本

釣り用のベスト

まな板

ガムテープが4つ

判りやすい奴だ。手製の防刃ジャケットでも作るのか。

手にしてるモン見て飽きた。

チェーンソーだと？

映画の観過ぎだアホ

移動し始めた奴を追い、俺も動き出した。

第五十四章 ON THEEDGE (後編)

第五十四章 ON THEEDGE（後編）

充分に距離は置いた。

ここでおっ始めるつもりはなかった。

別に人命尊重してる訳じゃない。人混みが邪魔になるからだ。

耳屋ならこう言うだろう。

表の連中に見せるな、俺達は『裏の住人』なんだぞ、と。

山田を殺ると決めた時から、そんな区別は意味を持たなくなっていた。

己れの生死と同様に。

釘打ち機をチェーンソーの隣りに突っ込んだ山田は、金属建材のコーナーへ寄り径の細いパイプを手を取った。

重量を確かめるように軽く振り、穴を覗きこむ。

想像する必要すらなかった。

組み合わせれば距離8m以内で十分な殺傷能力を持つ『銃』、弾は腐るほど手にはいる自動拳銃の出来上がりだ。

お買い物は終わりのようだ。

外に通じる園芸コーナーからフケるんじゃないかと思っていたが、山田は律儀にレジへ並んだ。

飛び抜けて目立つ巨体の殺人鬼が、生け贄どもに混ざって会計の順番待ちをしている

妙な気分になりながらレジコーナーの外れを回り早足に外へ出た。こっちは会計の必要はない。

有利な位置に先回りして仕掛けるつもりだった。店内と違い接近した俺の邪魔になる奴はいない。

一瞬で終わらせるつもりだった。

惨殺する手間などかけてやらない。

好きにさせない事が、奴への最大の恥辱だった。

いくぜ

サマージャケットの懐に仕込んだスピナー...アイスピックの親玉のような、長さ40cm程の刺殺具...を握り直し、出口へ向かい足を踏み出した。

！！っ

小さく柔らかいものが不意にぶつかってきた。思わずバランスを崩しながら足下を見た。

小学生くらいの男の子が俺を見上げている。

随分と大人じみた目つきだった。

「ごめんなさいっ！ ダメじゃないのサトシ！」

母親らしい女が慌てて駆け寄ってきた。

「ホントにごめんなさい、あの、大丈夫ですか？」

女が心配そうに近寄ってきて俺のすぐ前にきた。

女と、子供。

どこにでも転がってる組み合わせが一瞬、俺の足を止めた。

あの公園で見た母子の姿がダブったのだ。

軀を貫かれる感覚。

遅れて、激しい痛みと脱力感。

膝が砕けた。

ハラを押さえ見上げる俺を、女と子供が能面のような顔で見下ろしていた。

第五十五章 野良猫（前編）

第五十五章 野良猫（前編）

おまえら……

まさか……

「駄目ですよ、『邪魔屋』さん。勝手に殺っては」

女が穏やかな声で言った。

「だいじょーぶ。死なないからさ。ママうまいんだ、こういうの」

幼い声で、子供がさらりと怖い言葉を吐く。

「……『野良猫』、なのか……」

それだけ呟くのも苦しかった。

防護板の隙間から何かが刺し込まれた瞬間、わずかだが身をひねった。

たぶん肝臓は避けた筈だが、ハラ抉られたことに変わりはない。

押さえた指の間が生暖かかった。

「まさか……ガキ連れ……とは、な……」

『猫』を知っているんですか。お喋りなヒトがいるみたいですネ」

まだ若い女がニコリと微笑んだ。

今しがた目の前の男を刺した顔じゃなかった。

『街』の決定は絶対よ。なのにこんなことしようとして。いけませんねえ」

屈み込んできた女が、動けない俺の懐からスピナーを取り上げ、すっと離れた。

「……おまえら……監視だけだろ……クソッ……」

「誰がそんなこといったのかしら？『執行者』を見張って、アイツが必要以上に暴走しそうになったら『始末』する。それが確実に出来る者だけが『猫』に選ばれるの。『裏の住人』にとっては名誉なことだわ」

「名誉……だ……フザけるな……」

「あなたみたいなハンパな跳ねっ返りを止めるのもワタシたちの役目。どう？動けないでしょ？」

悔しいが女の言う通りだった。

ヒトが刺されて悶絶する場所を心得てやがる。

立とうとした。

足どころか全身に力が入らなかった。

それでも何とか立ち上がった。

「押さえててね。傷はウンと小さいから血はそんなに出ないから。でも早く病院にいかないと、お腹に血が溜まって死んじゃうわよ」

「ママあ～、アイス買ってよお～」

「ハイハイ、もうお仕事済んだからね。いきましよう」

恐ろしく異常な母子だった。

全く場にそぐわない会話をしながら、女が子供の手を引いて歩き去ろうとした。

数歩進んでこちらを振り返る。

「また何処かでお会いしましょうね、『邪魔屋』さん。会えればですケド」

フラつく俺を残し、ゆっくりとお辞儀をした女が子供を連れて離れていった。

第五十五章 野良猫（中編）

第五十五章 野良猫（中編）

ガクつく膝が他人のそれのようだった。

踏ん張れない。

嫌な味の唾が口一杯に溜まっていた。

睨み続けた。出口を。

デカイ袋を肩に、右手でキャスターを引っ張りながら山田が出てきた。

俺を見つけすぼめた目が、すぐにいやらしい笑いに垂れ下がった。

すたすたと歩み寄ってくる。

「また会ったな」

ヘラヘラ笑ってる首筋を噛み切ってやりたかった。

だが立っているのがやっとだった。

「邪魔がはいつらしいな。言っただろ、オレは必要とされてると。誰もオレに手出しできねえ。オマエがどれだけ腕利きの『邪魔屋』でもな」

そばに来ると、腹を押さえた俺の両手の上から軽く拳を当ててきた。

冗談みたいなボディブローで吐きそうになる。

「おっと、ゲロかけんなよ」

片膝が折れた。

「いい眺めだ。ニンゲンって一のはよ、見下すのがだぁ～いスキなんだぜ。しってんだろ？」

歯を嚙んで見上げた。

意地でも残りの膝は落とさなかった。

「オマエにやなんもできねえ。そこでモジモジしながら見てろよ、派手に殺ってやっからさ」

「……いけよ……」

「ああ？」

「……いけつつってんだろ……殺ってこい、好き勝手に殺しまくってこいよ」

もう一度、立った。

「……やれんモンならやってみな……ジジイのヒツキーがはしゃぐんじゃねえよ……このベド野郎……」

山田の形相が変わった。

ハラのだ真ん中にフルスイングで喰らったパンチでベンチの脇まで吹っ飛ばされた。

痛みを越えた痛みで失神しそうになる。

「どっちがだ小僧っ！ やれよ！ 殺ってみろよ！ なんもできねえクセにでかいくち叩くな！ このクソがっ！！」

唾を吐きかけてくる山田の顔が歪んでいた。もうよく見えない。

意識を飛ばさないようにするのが精一杯だった。

「なんだそのザマぁ。こいよ、楽しみに待っててやる、これんもんならな」

山田がいついなくなったのか。

それすらも判らなかつた。

◇

世界が痛みに包まれていた。赤い。

夕暮れが近づいていた。

ずりあがってベンチに座り、携帯を出した。

受信履歴一覧。非登録の一つを選んだ。

「.....どうした？」

「『仕事』だ」

電話の向こうで、肥溜屋が低く笑った。

第五十五章 野良猫（後編）

第五十五章 野良猫（後編）

近くのドラッグストアで包帯と鎮痛剤とガムテープを買った。

店員は薄気味悪そうに釣り銭を渡してきた。

多分ひでえ顔をしてるんだろう。

そのままフラフラ歩き海っぺりまで来た。

もうすぐ日が沈む海岸は人影もなかった。手摺りに掴まりながら階段を浜へと降りた。

積んであるコンクリートブロックの陰に腰を降ろすと、溜息と一緒にタマシイまで出ちまいそうになる。

強く頭を振り霞む視界を晴らした。

ジャケットを脱いだ。

Tシャツが深紅に染まっていた。

その上で、逞しいボクサーが顔を張らせてダウンしかかっている。

シローがくれたシャツだった。なんとかいう漫画の主人公だ。

みおろしながら悪態をついた。

しっかりディフェンスしろよ

ゴツイブロー、喰らっちゃったじゃねえか

シャツをめくった。腹が縦に2cmほど裂けてた。

傷は小さい。それでもダラダラと血を流し続けていた。

ナカをヤラれてる。

確かめるまでもなかった。

ナルホド

『猫』に選ばれるだけあるな

クソおんなめ

ズボンのポケットからダガーを出した。

傷の幅は、丁度ダガーの刃幅くらいだった。

ジャケットからバーナータイプのライターを取り出しダガーの刃をあぶった。

会えれば、だと？

今度会ったらガキの前で犯してやる

黒ずんだダガーの刃が真っ赤になった。

よし

落ちていた木片を拾い口にくわえ、刃先を傷にあて顔をあげた。

海に日が落ちるところだった。

瞬間、胸が潰されそうになった。

おまえ……

明日んなったら昇るんだよな

ゆっくり眠れよ

一気にダガーを押し込んだ。

激痛が世界を弾き飛ばした。

◇

どのくらい気を失っていたのだろう。

まだ辺りは見えている。暗かった。

腹をさぐった。

出血は止まっている。

中がどうなってるかなんて判らないが、今はこれで充分だ。

包帯をぐるぐる巻きにし、上からガムテープで何重にもきつく巻いた。

鎮痛剤の瓶を開け、じゃらじゃらと手のひらにだして一気に口へ放り込んだ。

飲めない。ボリボリ噛み砕いた。

少し休んだ。

ちっとだけ楽になった気がした。

それで充分だった。

立った。

『狩り』に戻る時間だ。

第五十六章 負う者、追われる者（前編）

第五十六章 負う者、追われる者（前編）

『街』まで戻るのがひと苦労だった。

駅を降りてすぐ肥溜屋へ電話した。

「どこだ」

「『街』へ戻った。奴は？」

「今、俺の向こうでコーヒー飲んでるぜ。遅かったな」

「傷の治療してた。動けなきゃ意味ねーからな」

くっくと肥溜屋が笑った。

こいつを使うのは嫌だったが背に腹はかえられない。悔しいがこんなんじゃ追跡もままならない。

「荷物はもってるか？」

「いや。手ぶらだ」

「そうか」

買い物はヤサに置いてきたらしい。

少なくとも今夜はパーティの予定が無いってことか。

「で？ このあとどーする」

「尾けろ」

「ヤサは知ってんだろ？」

「多分あそこじゃ戻らねえ、オレを見たからな。奴が阿呆じゃなきゃフツーに警戒するだろう。『邪魔屋』の怖さは判ってるみてえだからな、相手が手負いでも用心する筈だ」

「自信タップリだな、おい」

「どこまでいっても『ゴミ』は『ゴミ』さ、ハンターにはなれねえ。追われりゃ逃げて隠れる。必ず」

「ふ〜ん……」

妙に含んだような声が受話器から聞こえてくる。

「ま、そっちは現役だ。オレらの頃とは違うこともあるだろ。やりたいようにするさ」

「それでいい。今はオレがあんたのボスだ、言われた通りにやってくれりゃいい」

「へいへい、わかったよボ〜ス」

「間違っても殺ろうなんて思うなよ。山田はオレの獲物だ」

「できんのか？ そんなザマで」

「カンケーねえ。オレがくたばったら譲ってやってもいいがよ、期待するだけ無駄だぜ。それにアンタ、オレ以上にヤバいだろが。今度『街』にバレたらよ」

「……」

肥溜屋は無言で返してきた。

何故だか、黙らせたという気になれなかった。

「もうひとつ、いいか」

「なんだ」

「耳屋には言ってないだろうな」

「なんも言ってねえよ」

「……本当だな？」

「嫌でも信じな。今んとこオレしか手駒はねえだろ。心配すんな、余計なことはしねえよ。あんだけデカイ奴なら『始末』し甲斐もあるだろうからな、それで満足しといてやる」

肥溜屋の言う通りだった。今はコイツを使うしかない。

「判った。頼んだぜ」

「あとで連絡する。じゃあな」

電話が切れた。

第五十六章 負う者、追われる者（中編）

第五十六章 負う者、追われる者（中編）

ねぐらには戻れなかった。

隣は耳屋ん店だ。余計な邪魔は『猫』だけで充分だった。

その『猫』どもも、あと何人いるか判らない。

駅から離れ、ガキどもがウロウロしてる裏通りを少し入ってから道端にケツを降ろした。

だいぶ気温は下がっている筈なのに、額を滑り落ちてきた汗が目に入った。

拭うとイヤにヌルヌルしている。

目を閉じた。

頭がグルグル回ってる。

酷く酔った時みたいに世界の輪郭がハッキリしなかった。

スクラップ寸前の頭を懸命に巡らせた。

潜伏し時を待つ場所……

奇跡のように思い当たった。

あるじゃねえか

とーだいもと暗しってヤツだ

目を開け立ち上がった。一瞬グラリと景色が傾く。

手をついた看板で、トップレスのネェチャンが満面の笑みで手招きしていた。

わりい、セクハラだよな

仕事してくれ

ネェチャンの胸から手を離し歩きだした。

◇

橋の欄干の手前。手摺りを越え下に降りた。

この川はデカくて滅多に水が上がってこない。僅かばかりの護岸には、ホームレスどもの『家』がそこかしこに並んでいた。人影は無い。

連中は極端な個人主義者だ。ドラマにあるような隣近所の助け合いなんぞ俺は見たことがない。

皆、シノギが終わりゃ段ボールの城に引き籠もりだ。

ひときわデカイ『家』の前までゆき、ブルーシートをまくりあげた。

仙人のように髭ボウボウ髪ボウボウの老人がこっちを睨んでくる。

「誰だおめえ」

ニヤリと笑ってやった。精一杯、凄みをきかせたつもりだった。

「フクロウどもはどーだ？ ちゃんと『仕事』してんのかよ、『オンジ』」

「おめえ、もしかして……」

俺がオンジと呼んだ老人は目をかっと見開いて固まっちゃまった。

「……『邪魔屋』、か」

「そうだ」

「こんなトコになんの用だ」

「報酬3倍で半分しか動かねえか。随分と舐められたモンだなおい」

老人は固まったままだった。

この辺りの連中は皆、このジジィを『オンジ』と呼んでいる。

ホームレスの束ね役。そして『梟』どもの元締めだった。

「嫌味たれにきたんじゃあるめえ。なんじゃ」

「ヤサ借りるぜ。獲物を追ってる。好都合なんだ」

嫌とは言わせないつもりだった。

第五十六章 負う者、追われる者（後編）

第五十六章 負う者、追われる者（後編）

段ボールの家は思ったより広かった。

ズカズカあがりこみ腰を降ろした。オンジの真ん前だった。

「耳屋に連絡しようなんぞ思うなよ。てめえらの手抜きでこっちはヒデ目にあつてんだ」

手をヒラヒラさせた。

よこせ

それだけで伝わる筈だった。

オンジがズタ袋から黒い固まりを取り出して俺に差し出してきた。

何でホームレスが携帯電話持ってるかなんて考えず、そいつをオンジの手からむしり取った。

どうせ耳屋の配給品だ。

「おまえ『執行者』を殺る気じゃな」

「よく知ってるじゃねえか」

「死ぬぞ。わしらは知らせなきゃならん。それが『契約』じゃ」

「なにが『契約』だ。耳屋からおこぼれ貰って生きてる奴らがいっぱしの口、利いてんじゃねえよ」

「ヌシから見りゃ『梟』なんぞそんなもんだろ。じゃがな、ワシらとて『街』の隅っこで暮らしてるんじゃ」

「知ったことか。黙ってここに居させりゃいいんだ、連絡がありやとっとと出てくさ」

オンジの言葉を聞く気はなかった。

一時の潜伏場所。それだけが目的だ。

「？ ヌシ、刺されてるな」

便利屋のジジィに劣らぬ皺だらけの顔が俺を覗き込んでくる。

「『野良猫』にやられたんか」

「カンケーねえ。オレは『執行者』を殺る。邪魔するならテメエも殺るぞ」

見開くのをやめたオンジの目は皺に埋もれてよく見えなかった。

「『街』だろうとなんだだろうと勝手にやさせねえ。誰があんなチンケな糞野郎にいい思いさせてやるか、ふざけんな！」

腹の痛みも忘れ怒鳴っていた。

「.....『猫』は好かん。ちい〜とばっか腕が立つってだけで特別扱いされとる。ワシら『梟』はいつだって命を張っとるんじゃ。雀の涙みてえなカネでな」

「.....」

「いいじゃろ。好きなだけいれ」

オンジは鷹揚に頷いてみせた。

「礼は言わねえぞ」

「安心せい、追い出したりはせんよ。それよりハラぁ大丈夫かの？」

「問題ない」

「今にも死にそうな面しとるぞ」

「死ぬのは『執行者』の野郎だ。オレじゃねえ」

立った。

オンジに携帯を返してやろうと思い一歩近づいた。

床が起きあがってくる。壁になった。

なんじゃこりゃ

そのまま床に突っ込んで、なんも判らなくなった。

第五十七章 鬼嘴（前編）

第五十七章 鬼嘴（前編）

外が明るくなっていた。

座り込んだオンジの隣りには、知らない中年男が難しい顔で胡座をかいていた。

日焼けしてるように見えるのは溜まった垢のせいだろう。

「氣いついたか」

オンジがコップにヤカンの水を注いで差し出してきた。

半身をを起こして受け取り食べるように飲む。

盛大にむせると腹の傷が鋭く痛んだ。

「無茶するなあ。コータリかましたらしいが」

中年男が腕を組んだまま呟いた。

「コータリ？」

「コータリゼーション。焼灼止血法って奴だ。焼いたんだろ、傷口。ナイフかなんか突っ込んで。どんな神経してんだ」

「ちょっと死ねたぜ。アンタ医者か？」

「元、な」

腕組みを解くと手を伸ばして俺の顔に触り、あかんべえをさせた。

「鎮痛剤が効いてるようだな。応急処置もしといた。飲んどけ、抗生物質だ」

薬包を放ってよこした。

「世話んなったらしいな、アンタ……」

「マツゾウだ」

「マツゾウさん。いい腕だ。ホームレスにやもったいねえ」

傷の辺りをさすり違和感が無いのを確かめながら言った。

「刺し傷なんざ久しぶりだ。この辺りじゃせいぜい擦り傷がいいとこさ」

ふと気づいた。

「どれ位イッチまったオレは。いま何時だ？」

「夜が明けて幾らもたっちゃおらんよ。6時くらいってとこじゃろ。よく眠ったよ」

自分もヤカンに口をつけ水を飲んでいたオンジが答えた。

「連絡は？ オレのケータイはどした」

「心配すんな。ワシのもヌシのもピリリとも鳴っとらんよ」

おかしい

肥溜屋の奴、何やってんだ

まさか見失いやがったんじゃ……

ゆっくり立ち上がった。

立ちくらみするかと思ったが、少しふらつく程度だった。

「いくんか？」

「ああ」

「『猫』どもは任せろ」

オンジが呟いた。

「？」

「言ったろ。ワシら『猫』が嫌いじゃ。それに『執行者』は仲間を殺した。のさばらすのは癪じゃ」

「いいのか。あとが怖いぜ」

「ホッホ。『梟』は『猫』よりつええぜ」

「腹腔内出血がある。長くは保たないぞ」

マツゾウが脇から口を挟んでくる。

「あいよ、ドクター」

少し手を挙げ段ボールハウスを出た。

朝日が黄色がかって見えた。

第五十七章 鬼嘴（中編）

第五十七章 鬼嘴（中編）

街は目覚め始めていた。道ゆく人の数は急激に増しつつある。

出勤に通学。ありきたりな日常の光景だ。

アイツがいなければ、だが。

コンコースの混雑から離れ駅ビルのエレベーターを昇った。三階で降りる。

上がり過ぎると見落とす。下だと人が多過ぎる。程良く見下ろせるここが丁度よかった。

連絡つかない肥溜屋をあてにするのはやめた。

奴は群衆のど真ん中でおっぱじめる、必ず。

人混みは障害物、オマワリもすぐには駆けつけられない。早いのは通報だけだ。

犬コロどもが来るまでタップリ殺せる。奴ならそれをよく判っている筈だ。

なら、朝はここだ。

この時間帯を逃せば、次は昼前の繁華街。夜なら歓楽街だが.....

俺の知る限り、派手にかましたい『ゴミ』が夜に暴れたためしはない。

追跡者を殺った時を除いて山田は明らかに昼型だ。

でてこいよ

てめえがバカにした邪魔屋が待ってるぜ

タップリ相手してやる、泣き叫ぶほどな

殺人への渴望がハラの痛みを圧倒していた。

山田をブチ殺す。それだけだった。

おれの、すべて。

……じゃみー……

怪我してるのね

やめて、もどって

しんじゃダメ

不意に聞き覚えある『声』が頭ん中に響き渡った。

「堀川か？」

耳に手をあて思わず声にしていた。

ダメもとでやってみた

そしたらワタシの『声』がジャミーに響いてた

届くみ……たい……ワタシの『声』……

強く弱く、霞んだ『声』が脳味噌に伝わってくる。

「無線ごっこかよ。話しかけんな、オレは忙しい」

……いて……

きいて……

そっちに行くから……

すぐいくから

まってて

「アホか！ オマエがしゃしゃり出てくるトコじゃねえんだぞ！！」

耳を塞いだまま怒鳴った。虚空に向けて。

誰かが見たらイカれてるとしか思わないだろう。

あたしじゃ……ない……

……よちゃん…小夜ちゃんが……

だからまって……

「小夜が？ なんで小夜がくんだ！」

……

「おい、なんとかいえ！ みゆきっ！！」

堀川の『声』はもう聞こえなかった。

耳から手を離し、俺は小綺麗なタイルを力まかせに踏みつけた。

第五十七章 鬼嘴（後編）

第五十七章 鬼嘴（後編）

山田を見つけた。

堀川の声が途絶えてから30分程してからだった。

流れ続ける人混みの中で、奴は取り残された闇のように立っていた。

フード付きの漆黒のコート。両手にバカでかいスポーツバッグを下げている。

遠目で顔までは見えなかった。

でも判った。

このクソ暑いなかでコートなんぞ着てるが、奴は汗もかかずに笑っている。

絶対に。

こっちを見た。ガラス張りの3階通路の中まで見える筈がなかった。

だが奴はゆっくりと、こちらへ向けて右腕を掲げてゆく。中指を立てて。

「……殺る気か、くそ野郎……」

唇を噛んだ。

血の味が口からゆっくり全身に染みてゆく。

吹き出したアドレナリンが痛みを、そして俺の中にひと欠片くらい残ってた人間らしさを消し飛ばした。

ショウタイムだぜ、山田

目の前の非常階段のドアを蹴り開け飛び出した。

◇

一気に駆け降りた。

地面を踏むのと絶叫が響き渡ったのは同時だった。

人混みが津波のように向かってくる。突っ込んだ。

ぶつかってくる奴を片端からかきわけ突き飛ばした。

あの手製銃だろう。面白いように命中してるに違いない。

奴のバカ笑いが聞こえるようだ。

人混みが急に少なくなった。

バケツみたいな口をあけ叫び寄るOL風の女の陰にチラリと山田の姿が見えた。

とっさに足を止めしゃがみ込んだ。

女が絶叫ホラーな顔のまま急に走るのをやめた。

一瞬だけ合った目がグルリとひっくり返り白目になった。棒みたいにぶっ倒れる。

でかい釘が三本、後頭部から生えていた。

「遅かったじゃねえかボウヤ」

手製銃をこちらへ向け、ヘラヘラ笑いながら山田が言った。

「我慢できずにはじめちまったよ」

俺はそれ以上近寄らなかった。

「止めんじゃなかったのかよ、はやく止めてみなっ！ オンナ盾にしてコソコソ逃げ回ってねえでよっ！！」

モーター音。山田が引き金を引いた。

どしゃ振りの雨のように、釘が俺の全身を叩いた。

！！！！

「？」

弾倉の釘を撃ち尽くした山田が、首を傾げて俺を見ている。

「……最近の家具ってのはけっこー頑丈だな……」

頭をカバーした両腕をおろし、うずくまるのをやめ俺は奴を睨んだ。

第五十八章 欺鬪（前編）

第五十八章 欺闘（前編）

ちょっとした眺めだったろう。

臍。腿。軀の両側。腕。肩口。

あたり構わず刺さった釘で俺はさながら針ネズミだった。

針ネズミのまま立ち上がった。

「……仕込んでやがったか……」

「てめえの買い物みてたからな。バツタリ会ったとでも思ってたか？ イッパツかましてフツ飛ばして、いい気になって見下ろして、誰を相手にしてっか忘れちゃったらしいな。オレは『邪魔屋』だぜ」

軽く罵りながらジャケットを脱いだ。

落とすと固い音をたてて転がる。

腕にはぽつぽつと血が滲んでいるだけだった。

「廢材にアルミ、ステンレス。粗大ごみってのは重宝するぜ」

オンジのところを出てすぐ、近くのごみ捨て場でプロテクターになりそうなモンを片っ端から服に詰め込んでおいた。

山田が最初にあの釘打ち機を使うだろう事は読んでいた。

どれだけ屈強でも『ゴミ』が始めに頼るのはヒカリモノに飛び道具だ。

追いつめられて初めて自前の牙を剥く。そういうヘタレだからこそ『ゴミ』なのだ。

足に刺さった釘を払い落とし、Gパンの裾から幅広のオーディオラックの柱を掴みだしながら山田を睨んだ。

腿に突っ込んだのは確かストーブの反射板だったか。

「バカが。調子こいて打ち過ぎなんだよ、オレ相手にそのオモチャ使う気だったんならな」

5 m程の距離。

不意打ちを許さない、だが絶対に逃がさない距離。

『邪魔屋』の距離。

いや……

今は『殺し屋』の距離だ

山田が右手の改造銃を放り投げた。左手でスポーツバッグを持ち上げる。

「オモチャはデカイほうが面白い」

バッグから取り出した。鈍く光る、禍々しい鮫の歯。

紐を引くとエンジンが白煙が吹き出した。

「ぶった斬ってやるよお」

これみよがしにフカしながら、山田がチェーンソーを目の前に構えた。

「てめえの仕込みでもコイツは防げねえ。試してみっか？」

「アホが。んなモンでチャンバラなんぞできっかよ、くそビデオの観過ぎだぜ」

口で言うほど侮っちゃいなかった。

かなりの重量がある筈だが、山田の奴は軽々と扱ってやがる。

「始めるか」

「おう」

同時に迸った獣の絶叫。俺と、山田。

真っ正面から突っ込んだ。

第五十八章 欺鬪（中編）

第五十八章 欺闘（中編）

かすらせもしなかった。

相手はチェーンソーだ、触れただけでズタボロにされる。

チャンバラにならないだと？

ジョーダンじゃねえ

こりゃマジでキツイぜ

上から下から横から斜めから目まぐるしく飛んでくる回転鋸の歯をかわしながら、疲れを知らない山田のスタミナと怪力に舌を巻いた。

身体が重かった。

痛みは忘れていても、腹を刺されているダメージは想像以上だった。

かわしてはいるが近づけない。一步を踏み込む力が足りなかった。

「どうしたどうしたっ！ オラあ、かかってこいやガキいいっ！！」

チョーシこいた山田が叫び、振り回されるチェーンソーの歯が更に加速される。

ダメだ、分が悪い

変えなきゃやられる

俺に有利なシチュエーションへ

俺がコントロールできる『場』へ

一旦、距離をとった。素早く辺りを見回す。グズグズはしてられない。

山田が暴れ始めて3分は経った、あと2分もすりゃオマワリどもが駆けつけてくる。

ふとビルが1つ目にとまった。

『駅前保育なかよしランド』

あれだ。

目線を切らぬまま声をかけた。

「おい」

「なんだもう命ごいか、つまんねえ奴だな」

「そろそろサツが来る。邪魔されたくねえ、ショバうつすぜ」

「ああ？」

「あれ見ろよ」

大きく円を描きながら、俺とビルと一緒に見える位置で後ろを指さした。

「あのビルの四階になにがある？」

「……」

「フラッグ戦といこうぜ。俺がディフェンス、てめえがオフェンスだ。ご褒美は生け贄のガキども。どうだ？ くるか？」

「……」

値踏みするような目で山田が俺を睨んだ。

罨の臭いを嗅ぐ獣の目だった。だが奴は血に狂ってる。

血の臭いって奴はどんな猛獣の鼻も曇らせる

強烈な麻薬と同じだ、人喰いなら逆らえねえ

さあ……喰いつけ

「……いいだろう。くたばりぞこないの『邪魔屋』一匹、手間かけて殺ったってつまんねえ。ミンチはガキにかぎる」

「よし」

更に六歩さがった。

「俺があ那の入り口に立ったらスタートだ。すぐ来な、どうせ細工する暇なんかねえしよ」

「いいぜ、いけよ」

山田が舌なめずりした。

俺は一気にダッシュした。

第五十八章 欺鬪（後編）

第五十八章 欺闘（後編）

ビルの入り口で立ち止まり後ろを確かめた。

来てるな

一気に背を向け入り口に飛び込む。

チェーンソーの音があっという間に迫ってきた。

「ぐお……」

くぐもったうめき声が聞こえてきた時、俺はもう二階の踊り場にいた。

思い切り下へ怒鳴った。

「きにいったか、オレのプレゼントは！」

「……クソが……小細工しやがって……」

階下からいまいましそうな声が響く。

邪魔屋お得意の小物、ガラス製の撒き菱を盛大にバラ撒いておいた。まんまと踏み抜きやがったらしい。

無数のガラス片が足を貫き肉の中で砕ける。精神的に追いつめられた奴に死にたくなるほどストレス加える素敵グッズだ。

常人なら痛みだけで発狂する。常人なら。

「……こんなオモチャで逃げられるとおもうなよ……」

奴は常人じゃなかった。

俺に聞かせるみたいにガリバリ音をさせながら、無数のガラスを踏み抜き足音が近づいてくる。

「走ってこいよデクのぼう、オモチャなんだから、早くしろや！」

煽りながらもうひとつ階を上がった。

この程度で止められるなんて思っちゃいない

奴の動きを鈍らせればそれでいい

ゆっくり、確実に

ほくそえんだ。

戦いだの戦法だのなんて洒落たもんじゃない。

嫌がらせであり、いたぶりだった。

怒らせイラ立たせ嫌気を招き気力を削ぐ……

それが邪魔屋の遣り方だ。

何十人も地獄へ送ったフルコースの前菜だ。

タップリ味わえよ、『ゴミ』

「ほれ、ミンチの材料がまってるぜ。アンヨウごかしなベドちゃんよお」

「そこにいろ……すぐ殺してやる」

階段を昇る足音が聞こえ始めた。撒き菱エリアは抜けたらしい。

下を伺いながらポケットから小瓶を出し階下へ放った。

少しの間のあと瓶の割れる音がした。

「なんだ？ またチャライ小細工かクソガキ」

「テメェにやどーってことないだろ、『執行者』サマにはよ。早くしな、上で待ってるぜ」

袖で口を覆いながら、あと1つ階を駆け上がった。

リスクیだったが、奴が冷静な判断力を喪いつつある今がチャンスだった。オレもヤバいが自分のことは二の次だ。上がってくる頃はタップリ吸い込んでるだろう。

沸き上がる笑みに顔を歪められながら俺は更に階段を駆け昇った。

第五十九章 血着（前編）

第五十九章 血着（前編）

四階で奴を待っていた。

足音が階段を登ってくる。

ステップのリズムは近づくほどにうねり、乱れ、脈打ち、壁を蹴る音まで混じってきた。

喘ぐような悶えるような、狂気をまとった笑いの呼吸音が手摺の向こうからヒクヒクいいながら沸き起こってくる。

全身の力を込め睨んだ。

それでも発作のように、イカれた笑みが溢れ出て俺の顔を痙攣させた。

揮発性の笑気ガス。

便利屋曰く『笑死ガス』だそうだ。

大量に吸えば思考が錯乱し脳が破壊され、窒息するまで横隔膜の痙攣が止まらなくなる。

小瓶ひとつじゃそこまでは無理だが、人間ひとり壊すにゃ充分だった。

俺も吸ってた。

ガスマスクなんか持ちゃいない今、コイツを使うのは賭けだった。

少量だと効果の持続時間も短い。どっちがより正気でいられるか。それで勝負が決まる。

「……ふ……へっへっ……みい～つけたあああ～ひっひやは……」

階下からぬうと現れた山田の目は完全にイっちゃってた。

それでも両手はしっかりとチェーンソーを握り、とり落とす素振りすらない。山田は真正銘のナチュラルボーンキラーだった。

右へ左へふらつきながら、それでも一步ずつ確実に近づいてくる。笑った顔は顔面崩壊レベルだ。涎垂れ流す姿が人間に見えなかった。

「……おい……楽しそうじゃねえかオイ……おせえよオイ……」

俺もだらしなく顔を歪ませながら左手を後ろに廻し構えた。

誰かに見せられるツラじゃない、まったくフザけたヤクだ。

「いい～いキブンだけ、サクッところしてやっぞガキ……動くなよヒへへ……」

「やって……殺ってみろよお、ココだココ！ ホラこいやああ～！！」

仁王立ちになった山田がチェーンソーを高々と振り上げた。思いきりフカされたエンジンがフル回転の轟音を廊下に響かせる。

明かりとりの窓を背にした奴の姿は巨大な死神そのものだった。

死神が前へ出た。真上から回転鋸が降ってくる。

飛びずさりながら引いた。

山田が派手につんのめり、鋸の歯が目の中の床で火花をあげると重い本体ごとアサッテの方へ弾け飛んでいった。

俺は左手のテグスを外し、床に無様に這いずった山田を初めて上から見下ろしてやった。

「こっからだぜ『執行者』さんよ。……いや、『ゴミ』」

第五十九章 血着（中編）

第五十九章 血着（中編）

両手をついた山田の顔が俺を見上げていた。

だらしなく笑いながら。

そのど真ん中を蹴り抜いた。爪先で。

首から上がありえない角度にひん曲がり、戻る。

また蹴った。蹴り続けた。そのたびに奴の頭はだだっ広い背中と床の間を往復した。まるでパンチングボールだ。

変な声が聞こえた。イッチまってる笑い声。俺だった。

ガスのせいじゃない、腹の底からオモシロくてたまらなかった。

蹴れば蹴るほど止めど無い笑いの発作が沸き起こってくる。

ビルの外からサイレンの音が聞こえてくるまで、俺は止めなかった。

肩で息をしながら山田を見た。

両手と膝で這いつくばった姿勢は変わらない。がっくり垂れた頭の下から血がポタポタと滴り廊下を浸してゆく。

それがゆっくりと持ち上がった。

「やっとスッキリしたぜ」

潰れた鼻と切れた唇からダラダラ血を流しながら、思いがけずハッキリと山田が言った。滅茶苦茶蹴られたクセに顔はそれ程腫れていない。

「遊びに付き合ってたんだ、今度はこっちにも付き合ってもらおうぜ」

「……てめえのツラは鉄仮面かよ」

笑いの衝動は収まっていた。

この怪物がこれくらいでくたばるとは思ってなかったが、蚊に刺された程もこたえてなさそうな山田の口調は、第二ラウンドの始まりをハッキリと告げていた。

それでいい

ラクにや殺さねえ

ダガーを握った右手を垂らし、俺は山田が立ち上がるのを待った。

◇

駆け付けた小夜の目に飛び込んできたのは、信じられない光景だった。

駅前一带を車の群れが取り囲んでいる。凄まじい渋滞の中にポツカリと空いたエリアを埋めているのは路上に転がる夥しい数の人体だった。

動いているのはしゃがんだり血相変えて走り回る人影だけ。横たわった者で身動きするのは誰もいなかった。

心臓が凄いい勢いで鳴っている。

痛い程の鼓動に胸元を固く握り締めながら、小夜は地獄へと足を踏み出した。

シートをかけられた人……

放り出された人形のように壊れて動かぬ人……

担架に乗せられ運ばれてゆく人……

「オイッ！ しっかりしろっ！ 息してくれ、頼むからっ！！」

すぐそばで若い救急隊員が泣きそうになりながら心臓マッサージを繰り返していた。

サラリーマン風の男。首の止血帯の隙間から壊れた消火栓のように血を吹き流している。

顔を背けたら反対側に倒れている女と目が合った。

額と左目に釘を生やした彼女はうらめしそうに小夜を見ていた。

堪えきれず、小夜は吐いた。

第五十九章 血着（後編）

第五十九章 血着（後編）

屈み込んでえづいている小夜の背を撫でるものがいた。

「キミ、大丈夫か？ 怪我はないか？」

顔をあげると大柄な警官がそばにいた。

中年の、恰幅のいい男。穏やかそうな人相。制服を着ていなければ近所の商店街の店主だと言っても通るような雰囲気。

普段なら助けられた気持ちになっただろう。あの話を聞いていなければ。

『血を流し叫び声をあげ、ケーサツっていうゴロツキの名を呼びながら殺されてく生け贄』

邪魔屋と名乗った彼の言葉が小夜の脳裡に蘇る。

この惨状を企んだのは、ここにいる警察なのだ。

弾くように背中の手を払いガバッと立ち上がった。

「キミ、どうした？」

戸惑いの表情を浮かべる警官から後ずさりしながら離れた。

「……こないで……さわらないで……」

足が引っ掛かり、もんどりうって転んだ。

固いアスファルトに叩きつけられることはなかった。柔らかな感触。死体がクッション代わりにになっていた。

「ひいっ！」

「おいキミ、しっかり……」

「コッチくんじゃねえ！ くるなああっ！！」

四つん這いのまま駆け出した。犬のように。

スカートがめくれ上がっているのを気にする余裕すらなかった。

もう何がなんだか判らなかった。

ジャミー、どこいったのよジャミー！

ここから離れようと思った。

目についたビルに向けとにかく走った。

保育園の看板がかかっているビルだった。

◇

身体じゅうがヌルヌルしていた。足元が定まらない。

血溜まりで滑る床と腹の痛みがフットワークを奪っていた。

気持わりいぞ

クソッ

全身血まみれだった。

致命傷は負ってないが、いいように切り刻まれていた。

チェーンソーのほうはまだマシだったかも知れない。山田の両手に握られた長大な柳包丁は、まるで扇風機のように目まぐるしく振り回され、オモシロいように俺の身体を撫で切ってゆく。

俺は右手にダガー、左手にロシアンナイフ。得物の長さも不利だった。

オマケに奴は手製の防刃ジャケット着てて、俺の腹には風穴が一個空いてる。

どうしようもねえ

だがよ

「なんだ、てえしたコトないな。そろそろ飽きた、おわらせっぞ」

勝ち誇った顔で山田が言い放った。

「おう……終わらせてやるよ……そろそろ」

俺も答えた。手を振ってダガーを捨てる。

ロシアンナイフを両手で握り腰の辺りにしっかり構えた。

「いくぜ」

そのまま雄叫びあげて突っ込んだ。

薄ら笑いを浮かべながら山田が迎え撃つ。上から二本の柳包丁が降ってきた。

突進してくる進路を外し、長いリーチを生かして先に刺し殺す。山田の計算はそんなトコだろう。

相打ち覚悟で刺殺を狙ってくると読んだ動きだ。だが俺の読みは奴を上回った。

ぶつかる寸前にナイフを捨てて伸びあがり、突きだされた山田の両腕を抱え込んで門に極めた。

そのままの勢いで廊下を爆走する。押して押して押しまくった。

向こうには、明かりとりの窓。

うおおおおあああああ～！！！！

山田を抱えたまま窓ガラスをブチ破り、ビルの四階から虚空へ飛び出した。

第六十章 BETRAYER（前編）

第六十章 BETRAYER（前編）

落下の感覚は短かった。

抱え込んだ腕のすぐ目の前に、驚愕と怒気を孕んだ山田の顔があった。

叫びながらヤツの頬に噛みつき噛みちぎった。

そこまでしか覚えてなかった。

チラリと壁のようなものが見えて……ぶつかった。

全身バラバラの衝撃。プツンと全てが消えた。

停電みたいに……

……

◇

……………うっすらとした光。

見えない。ただぼんやり明るい。

何も聞こえなかった。

水に潜った時の、あのホワイトノイズのようなサァーっという音だけが辺りに漂っている。

揺れてる。

揺さぶられている。

誰かが身体を激しくゆすっていた。

それに気づくのと、真っ白だった視界に景色が戻ってきたのは同時だった。

そして音が……声が……

「ジャミー、じゃみい！ アタシの声きこえる？ しっかりしてっ！！」

「……おまえか……」

「おまえかじゃないよ！ ナンであんなトコから落っこちてきたのよ！ しんじょうじゃん！！」

髪振り乱した小夜が、目から鼻から口からいろんなモン垂らした形相で俺に覆い被さっていた。

何か言おうとしたら、身体感覚が周回遅れで戻ってきた。

凄まじい激痛に息が詰まり……いや、息が出来ない。

痙攣するようにむせた。

苦しくて仰向けから横向きになると、下になった手と足が悲鳴をあげた。

その痛みでまたむせた。

「まってて！ きゅーきゅーしゃ呼んでくるからっ！」

立ち上がろうとした小夜が添えていた手を、離れてしまう前に辛うじて掴んだ。

「……まだ……だ……まだ終わってねえ……」

「なにが？ なにってんのよ！」

「お……こして……くれ……」

「じゃみい！」

「いいから……はやく……やれ……」

小夜が俺の手を振り払った。がばっと立ち上がる。

マスカラがグシャグシャだった目から、黒い筋が幾重にも重なり流れ落ちていた。

そんなスゴい顔のまま黙って俺を見下ろしていた。

「……」

無言の小夜がもう一度屈み込んでくるまで、エラく長く感じた。

小さな手が背中に差し込まれ、俺はゆっくりと抱え起こされた。

目だけ動かしてビルを見上げた。

1階と2階の間にコンクリートの庇があった。俺と山田はどうやらそこでワンバウンドしたらしい。

ノンストップだったらそのまま途中下車無しあの世逝きだったろう。

視線を下ろした。

5 m程離れた所に大柄な男がうつ伏せに倒れている。山田だ。

全く動かない。

ウマイことくたばってくれたか

淡い期待は、痛みを堪えながら肺を動かし続ける俺の目の前で崩れた。

右腕の肘が、そして左腕の肘がゆっくり持ち上がり、地べたに手をついた。

身体を起こそうとして、すべり、へたる。ノロノロと繰り返していた。

腕だけ別の生き物みたいだった。

まだ生きてやがる

俺も小夜の支えを離れ手をついた。

第六十章 BETRAYER (中編)

第六十章 BETRAYER（中編）

どこを動かしても痛みが走った。

地べたについた手。

上半身を持ち上げた腹筋。

下になった尻、曲げてみた足。

やっとこさ四つん這いになった途端、胃から猛烈に気持ちわりいモンが喉に溢れ出してきた。

吐いた。吐き出した。吐瀉物は真っ赤に染まっていた。

まだ出やがる……

「ウぼうあ……ばはっ……」

「じゃみい！」

小夜の金切り声。背中をさすられてるのを感じた。

不思議とあんまり痛くなかった。

「……でーじょぶだ……ペッ……どいてろ、ゲロかかっぞ……」

くたばりかかった犬みたいな格好のまま山田の方へと這った。

右手……右足……左手……左足……また右手……

ノロい。ウンザリするほど遠い。痛い。

繰り返した。痛みも吐き気も、気が遠くなりそうな感覚もみんな無視してひたすら這った。

少しずつ、くたばりぞこないの姿が近付いてくる。

蠢いていた奴の両手が地面を掴んでいた。

『執行者』、『殺人鬼』、『ケダモノ』、『怪物』

いや

『ゴミ』だ

こいつあただのナマゴミだ

.....や.....まだあ.....

.....やま.....だああ.....

俺の呟きに呼応するように奴が身体を持ち上げた。

滅茶苦茶な形相だった。

俺が食いちぎった左半分はごっそり肉が抉れていた。

反対側は変な形に陥没し、右の目玉が飛び出してヒモみたいのでブラ下がってる。

顎には何か刺さってた。

ようやくと目の前まで辿り着いた。

醜悪な動くオブジェが手を伸ばしてくる。四つん這いのまま払った。

肩口から倒れた山田が仰向けになる。そのままのしかかって首を絞めた。

ゾーキン絞るみたいに締め上げた。残りの力、全部込めて山田の太い首を捻じ切ろうとした。

グローブみたいな手が下から締め返してきた。首の中の血管やら筋肉やらが一気にひしゃげて潰れた。

まるでパンチだった。

俺も倒れた。

横倒しになったまま互いに締めあっていた。

「……ぐあき……しねえ……ガキ……」

「……てめ……こ……そ……ハヤク……逝け……くたばれ……」

地獄の我慢比べは分が悪かった。

死にかけていても山田の怪力はバケモノレベルだった。

視界が暗くなってくる。脳に血が来ない。息も出来ない。

腕の力が抜けてゆくだけ判った。

霞む視界に笑うゾンビが映った。

勝ちを確信したらしい山田が上になって俺の首をへし折ろうとした時……

ふっと力が消えた。

バケモノパンチがズルリと首から外れた。

ひと抱えもありそうな石だかコンクリの欠片だかの塊を持った小夜が山田の後ろに立っていた。

そいつでブン殴ったらしい。

「……なんだ……テメエも殺らせてくれんのか……ウッヒッへへ……」

塊が落ちて転がった。

小夜は射竦められたように立ち尽くしていた。

目が落ちそうなほど見開き、這い寄る山田を見下ろしていた。

その姿は……

小夜じゃなかった。

小夜子。惨殺された『あの日』の小夜子だった。

気がついたら飛び掛っていた、ロクに動けない筈なのに。

後ろから山田に抱きつき顔をまさぐった。

右目の眼窩。ドッキリ血の詰まった穴に人差し指と中指を突っ込んだ。

奥の骨にぶつかる。そのまま思いっきり指を押し込んだ。

ペキ

何かが割れる音と、生温い泥に指を差し込んだ感触。

脳味噌掻き回された山田が、ゆっくりと、地響き立てて倒れた。

第六十章 BETRAYER（後編）

第六十章 BETRAYER（後編）

息が荒かった。

俺の下の山田は完全に動かなくなっていた。

完全に、死んでいた。

「じゃみー……じゃみいい」

腰を抜かすように膝を折った小夜が、ゆっくりと俺を包み込んだ。

「もう泣くな。終わったよ……小夜子……」

眩くと、小夜が身体を離して俺を見た。

少しの間、大きな濡れた目で俺の顔を覗き込むと、躊躇いながら言った。

「……だいじょーぶだよ。妹さん、怒ってなんかいないよ、ジャミーのこと……」

その言葉で我にかえった。

「小夜、おまえなんで……オレなに言ってんだ……」

「聞いたの、全部。美幸さんから。アタシ似てるんだよね、殺されちゃった妹さんに。だから今まで、なんだかんだ言いながら優しくしてくれたんでしょ」

「……」

「いいんだ、それでも。アタシは身代わりかも知れないけど、アタシにとってジャミーは一人しかいないから。口が悪くてイジワルで、殺し屋で、でも悩んで苦しんで。それでもっていつもアタシのそばにいてくれた」

「小夜……」

「アニオタってさ、よわいんだよ、そーゆーのに。どんだけツンデレなんだよ」

小さな手が頬に触れた。

「美幸さん、ジャミーのこと好きだよ」

「知ってる」

「でもね、こないって。行っても何も出来ないからって。ウソだよ、そんなの。ホントは駆けつけたかった筈だよ。でもアタシに行けてって言って送り出してくれた。『ジャミーを救えるのはアタシしかいない』って」

「オレを、救う？」

『あの人は穴に落ちたがっている。自分の中にポツカリ空いた穴に。それが罪滅ぼしだと思ってる、それで楽になれると信じてる。でも違う。いきてる人はね、何があっても生き続けることが、死んじゃった人に出来るたった一つのことなんだよ』……美幸さん、そう言ってた」

「そんなコトいってたんか。お見通しなんだな、アイツには」

素直に言ったつもりだった。それでも皮肉な口調になってしまったかも知れない。

小夜が目を吊り上げた。

「バカッ！『声』が聞こえるからって美幸さんがいい気になってるとでも思ってんの？ スゴく辛かったんだよ美幸さんは。ジャミーのどこ飛んできたかったんだよ。でも諦めた、自分じゃジャミーを助けられないから諦めてアタシにゆずったんだ」

「ゆずった？」

「そうだよ！ アタシだって……アタシだって好きなんだよ！ ジャミーのことだいっすきなんだよ！！」

もう一度、小夜が抱きついてきた。

暖かかった。堀川みたいに。

いや、違う。これは小夜の……小夜だけの温もりだった。

それが心地よかった。

「なんだ、もうオシマイか。まるで月9ドラマだなあ」

突然、ノンビリと間の抜けた声がした。男の声。山田じゃない。

振り向くと知った顔だった。

「肥溜屋。てめえドコほっつき歩いてやがった」

「悪いな。別契約が入ったんでね、チト外してた」

「もう片付いたぜ。見ろ、ヤマダのヌケガラだ。お前にやるよ」

男を見た小夜が声をあげた。

「おじさん、あの時のトラックの運転手さん、だよね」

「ああ。あの時は庇ってくれてアリガトウ。そんでもって……すまん」

いきなり腕の肉が飛び散った。

衝撃に弾き飛ばされ、小夜と一緒に後ろへ倒れた俺を見下ろしながら肥溜屋が告げた。

「契約がおりたんでね。やっとコイツが使えるよ。いやあ、久しぶりだとうまくいかんなあ」

肥溜屋の手には、太い消音器のついた銃が握られていた。

第六十一章 去来（前編）

第六十一章 去来（前編）

「なにしやがる」

身体をおこしながら肥溜屋を睨んだ。肩に触ってみる。

左腕の付け根近くの肉がグシャグシャに爆ぜてた。全く動かない。

痛みすら感じなかった。

「いっただろ、別契約って奴さ。ま、妥当な契約だな。ちと間に合わなかったがね」

肥溜屋の表情は穏やかだった。

コーフンして目え血走らせることもなく、非情に振舞ってる風でもなかった。

ありきたりな中年男が近所のコンビニへ買い物にでもきたって感じだ。

買った煙草の封を切り、店先で一服。

そんな気楽さで撃ってきた。殺気すら感じない。

「梟どもの動きが変でな。睨まれりゃコソコソ逃げちまうような奴らのくせに、今度に限ってはミョーに邪魔臭え。おまえ連中になんか頼みでもしたのかよ？」

「……そーいうコトかい……」

肩を押さえた手を離し、地べたを押して膝立ちになった。

全身の打撲に創傷。腹には刺し傷。今さら止血なんて無意味だった。

「てめえ……『猫』になりやがったか」

「昨日の夜、『街』から繋ががあった。そうこわい顔しなさんな、俺はこれでも義理堅くてな、一度は依頼を蹴ったんだぜ」

銃を構えたまま反対の手で煙草をポケットから取り出した。

黄色のエコー。啞えて戻し、今度はライターで火をつける。

銃口も視線も微動だにしない。

「ところがどっこい、せっかくのお膳立てが梟どもの邪魔だてでポシヤリそうになった。『街』は慌てただろうな。今朝、もう1度繋ががきた。過去のペナルティを帳消しにして『邪魔屋』へカムバック。それが『街』の出してきた条件だ。『執行者』の保護は出来なかったが、奴が殺るコト殺った後なら坊やの『始末』だけで契約は成立だ。こんなオイシイ話、受けない方がどーかしてるぜ」

「そんなに殺しがしてえのか。てめえビョーキだぜ」

「現役バリバリの坊やからそんな言葉を聞くとはね、ちょっと意外だな。お前さんだって殺したいんだろ？『ゴミ』ども片っ端からよ」

肥溜屋がせせら笑った。

「そこに転がってる奴はなんだ？今しがたお前がキッチリ殺っちまったじゃねえか。どだ？サッパリしたろ？」

「るせえ。てめえと一緒にすんな」

苦い味の唾を飲み込みながら、肥溜屋の言い草につられて山田の死体を見た。

巨大な屍肉の塊。さっきまであれだけ手こずったのに、今はもう腐り始めてる。

命なんて何処にも残ってない、ただの『ゴミ』……

その『ゴミ』の傍に落ちていた。黒く細長いもの。

蹴ったのか引っかけたのか、窓を突き破った時一緒に落ちてきたらしい。

ロシアンナイフ

肥溜屋へと振り返りながら、俺も笑った。

第六十一章 去来（中編）

第六十一章 去来（中編）

「なにがおかしい」

肥溜屋の顔つきが変わった。

「てめえと一緒になんてゴメンだ。ゴメンだがよ……間違っちゃいねえ、アンタの言う通りさ。殺って殺ってやりまくって、それでもまだ足りなくてこんなバケモノにまで手を出してんだ。オレもマトモじゃねえさ、へへ……」

膝立ちのまま山田の死体へと近寄っていった。ゆっくり、ゆっくりと。

「気がついたらよ、もう殺るだけじゃ満足出来なくなってた。どん底まで墮としてやったよ、どいつもこいつも。生きる気力だとか未来の希望だとか、愉しみだの快感だの、なんもかんも根こそぎ奪ってやった。死ぬ以外に逃れられない泥沼に叩き込んでやったさ。奴らは『ゴミ』だからよ」

後ろへ振り返った。

俺と一緒に弾き飛ばされへたり込んでた小夜は、ただ呆然とこっちを見ていた。

例えようのない表情を浮かべて、知らない生き物を眺めるように。

「教えてやる小夜、コイツが……オレがなんなのか。外道を狩るって一のはな、てめえ自身も外道になるってこった。ヒトじゃねえ畜生になるってこった。一度でも畜生に堕ちた奴は二度とニンゲンにや戻れねえのさ。こんな風によ」

顔を戻し、山田の死体に這い登った。

右手を伸ばしロシアンナイフを拾い、逆手に握った。

顔の高さまで振り上げても肥溜屋は動かなかった。

銃口はピッタリと俺を狙い微塵のズレも無い。

銃とナイフ。間を隔てる4 m程の距離。しっかりした足場。

死にかけて正気を喪いつつある『邪魔屋』。

プロ中のプロである肥溜屋が慌てる理由など何処にも無かった。

それが狙いだった。

『『ゴミ袋』の中身、出してやるよここに。てめえにも見せてやる、肥溜屋！』

振り上げたナイフを思い切り死体の背中へ……

突き立てなかった。手首を返し柄のボタンを押した。

俺がのけぞると、消音器でくぐもった銃声が聞こえたのは同時だった。

◇

したたかに背中を、後頭部を打った。

撃たれたと思ったが、違った。

顔をあげると銃口は下がっていた。

肥溜屋がひきつった笑みを浮かべ突っ立っている。

笑った口になんか唾えてた。

俺が放ったロシアンナイフだった。

特殊部隊用の発射式ナイフの刃は、奴が引き金を引くより早く口に飛び込んで頭蓋骨の中まで貫通していた。

「……へめ……ほんは……ひやりはが……へ……」

ゆっくりと肥溜屋が膝を折った。

がっくりと頭が前に倒れる。

終わった

これで……ぜんぶ……

腕の力が抜けた。手からナイフの柄が落ちた。

その時初めて、そこらじゅうで鳴り響くサイレンの轟音に気がついた。

世界中がサイレンで満たされていた。

何とか立ち上がり、向きを変えた。

小夜。小さな姿が、いつも以上にちっぽけに見えた。

かえるぞ

そう声をかけようとした。

ガンッ！！

もの凄い勢いでアタマをどつかれた。と思った。

2, 3歩つんのめって頭に手をあてた。ドロリと嫌な感触がした。

顔の前にかざすと手のひらが真っ赤だった。

振り返ると肥溜屋がこっちに銃を向けていた。銃口から紫煙が漂っている。

そのままバツタリと前に倒れ動かなくなった。

俺は……

視界が回り真っ暗になった。

世界が、消えた。

第六十一章 去来（後編）

第六十一章 去来（後編）

時は、非情であった。

◇

脱獄犯、山田修が引き起こした大殺戮は、停滞と混迷を続ける政治や経済に、間拔けでチープなスキャンダルしか生み出せない芸能界にネタを見出せなくなっていたマスコミに恰好の飯のタネをもたらした。

新聞もテレビも、ネット上で囁かれていた

『魔の月曜日』

という呼び名を使い（実際には多くのネットユーザーが”皆殺しマンデー”だとか”鴨ネギチョッパー”、”クギッター”などという隠語で呼んでいたが、さすがに遺族感情を逆撫でする程馬鹿ではなかったのか、それともいらぬ訴訟沙汰になるのを避けたのか、事件の実態を表さない一番抽象的で少数派の呼び方をさも一般的なように紹介していた）、連日トップニュースとして扱い続けた。

重態だった被害者が一人亡くなる度に各社は先を争って病院へ押しかけ、遺族を、医者を見守る看護士を、事務局員を、果ては事件と何の関係も無い入院患者や一般外来、出入りの清掃業者までつかまえて、バケツの水をぶちまけるようにライトとフラッシュを浴びせかけ無数のマイクで小突き回した。

彼らには、亡くなった34人や、今なおICUで生死の境を彷徨う8人の被害者への哀悼の情などというものは欠片も無かった。勿論、この事件の直前に殺された11人の子供達にも。

このふって湧いた『天の恵み』が廃れる前に……誰もが何かを口にしなければならないと思いついて集まる集団ヒステリーが収まり、鮮度を失った話題があつという間に人々の

頭から消え去る前に……少しでも売り、稼ぎ、溜め込まなければならない

それが彼らの偽らざる本音であり、マスコミというものの本質であった。

いつの時代も、いつまでたっても変わらぬ『ハエ根性』……

ブン屋と呼ばれる所以であった。

事件発生から5ヶ月が過ぎても、マスコミの論調は変わることがなかった。

今まで見たこともないような犯罪心理学者や心理カウンセラーがほぼ毎日、どこかしらのテレビ局に出演しては醜悪な小理屈を開陳し、あの手この手で大衆を煽り続けた。彼らはまた出版社やら講演会にも引っ張りだこであった。『魔の月曜日』について語り続けることで莫大な売り上げが生まれ、関係者にもれなく配分されてゆく。

それは厳然たる経済効果であった。

だが半年を少し過ぎた頃、『魔の月曜日』事件は人々の記憶から唐突に消えることとなった。

大戦後としては最大級の地震が東北・北陸地方を襲い、2万人近い人々が犠牲となり、各地に惨たらしい被害の爪痕を刻んだ為である。マスコミの報道も人々の関心も、一夜にして震災一色に塗り変わってしまったのだ。

日頃は人命だの人権だのと叫ぶマスコミはまたしても証明してみせた、『命の（ニュース）価値』とは所詮、駄菓子屋の量り売りと何一つ変わらないのだと。ただ多いほど値打ちがあるのだと。

愛だの勇気だの絆だのと口にし続ける大衆もまた証明してみせた、より派手でより目新しい、誰もが叫ぶから自分も遠慮無く絶叫出来るカタルシスこそ、自分達は求めているのだと。

その為には誰が何処で死のうが関係無いということ。

そして……

◇

「今日の収穫は？」

相変わらず古ぼけた店の床を掃きながら、入ってきた男へ振り返りもせず耳屋が聞いた。

「ぜえ～んぜん。カラッケツだっちゃ」

「てめえちゃんとりキいれて『ゴミ漁り』やってんのか」

「モチのロン！ オレっち駆け出しだけどもソコらへんは手、抜いてないっちゃよ」

「……どーにも嘘臭くきこえんだがなあ……」

掃除を終え洗髪台の脇に箒を立てかけた耳屋がゆっくりと振り返った。

「てめえにはまだまだ仕込みが足りてねえ。今夜もミッチリやるぞ、覚悟しとけ、『手錠男』」

「ええええ～」

大袈裟に顔をしかめた男……シローが両手で頭をクシャクシャとかきむしった。

「新作アニメの第一話、今夜からなんだけどなあ」

「録画しといてやる」

「おっちゃんトコ、まだビデオデッキざんしょ？ ハードディスクかブルーレイならナットクっちゃケド……」

「おまえブツ殺すぞ。いや、ちゃんと『訓練』やんなきゃブツ殺されるぞ、『ゴミ』どもによ」

「へえ～い」

シローはしぶしぶ了解してみせた。

「ところでさあおっちゃん、いい加減教えてっちゃよ」

「ん？ なにをだ」

「アニキ。一体どこいっちゃったんだ？」

耳屋の顔から表情が消えた。

最終章 狐蛭

最終章 狐蛭

岬の先端近くに建っていた。

海の蒼となすコントラストが目には痛いほど白い医療施設。

こじんまりとした駐車場の脇から岬の先へ、広々とした芝生が広がっている。

快晴の下、幾人もの人影がそこかしこに座り、佇み、景色を眺めたり歓談を愉しんだりしていた。

パーキングゲートに入ってきた白いレクサスは、まるで建物と合わせたかのようなだった。

係員が身を乗り出して声を掛けると、運転席のウィンドウが静かに降りて、ほっそりとした腕が

差し伸べられた。助手席にも人影がひとつ。

「...ええ、そうね。いつもありがとう」

二言三言、係員と言葉を交わすと、駐車券を受け取ったドライバーはゲートをくぐり奥へと車を進めた。

◇

都内の某雑居ビル。

5階のフロアは芸能事務所がまるごと1つ入居していた。

10人弱の社員が働くスペースの奥には、接待兼用の会議室。

その隣の社長室で、二人は話していた。

「どうだ？ 新しいマネージャーとはうまくやってるか？」

恰幅のいい体躯をダブルのスーツに包んだ社長が机の向こうから尋ねた。

「柏木さん、とっても頑張ってますよ」

ソファーに腰かけた堀川が、はにかんだような笑みを浮かべながら答えた。

「ただでさえ人手不足なのに、私まで面倒かけちゃって心苦しいんですが」

「あの時『好きなだけ休んでいいぞ』とは言ったがな、ウチのようにマネージャーの少ない事務所じゃ痛い戦力ダウンだ」

「小夜ちゃんから連絡は？」

溜息をつきながら、社長は大げさに首を振ってみせた。

「早く戻って欲しいのは山々なんだが、あんな事件もあったしなあ」

「私なら大丈夫です。スケジュール管理も出来るだけ自分でやるようにしてますし、柏木さんにはもっと負担かけないようにしますから」

「そう言ってもらえると助かる。正直なところ、今の状態なら新規で人を雇ったほうがいいんだ...」

「それじゃ小夜ちゃんは」

堀川の顔が曇った。

「...いいんだが、俺はあの娘を手放したくない。今時いないぜ！ 若くて、あんだけ度胸が据わってて使える奴なんぞ。お前もそう思うだろ？」

.....

.....

...

ふふっ

少しして、俯いていた堀川が小さく微笑んだ。

「社長、ホントに小夜ちゃんの事、好きなんですね」

「バカ、俺ぁ経営者だぜ。有能な人材には惜しみなく投資するさ。...んまぁ惚れ込んでるのは確かだけだよ」

付け加えたひと言に照れたように社長も笑った。

「でもなぁ、本当に戻ってくるか？ アイツこのまま辞めちまうなんて事、ないだろうな」

「戻ってきますよ、必ず。『聞こえた』から」

「聞こえた？ きこえたってなにがだ？」

怪訝な顔で社長が聞き返した。

「...なんでもないです...」

曖昧に答えながら、微かに潤んだ瞳で堀川は窓を見た。

抜けるような青空だった。

◇

同じ蒼天の下、小夜が車椅子を押しながら岬の先端を歩いていた。

座っている男は彫像に似て微動もしない。まっすぐ前だけを見る顔は無表情だった。

中身の無い左の袖が微かな風になびいている。

「いい天気。こないだの台風の時はどうなっちゃうか怖かったけど、もう海も静かになったよ。見て」

肩の下まで伸びた髪が顔にかかるのを気にもせず、同じように前を見ながら小夜は話しかけた。

「こうやってアタシがお喋りばかりしてるトコだけ普通だよね。怒られないのはイイんだけど... ジャミーがダンマリなの、やっぱ拍子抜けだよ」

明るい声で言った。

「昨日の検査でもさ、先生いったじゃん。『反応が出てきた』って。ホントはもう喋れるんじゃない？ うがぁーとか言っておどかさうったってソウはいきませんからね！」

車椅子のブレーキをロックすると、小夜は前に回り込んでかがんだ。膝におかれた右手を両手で包み込む。

そのまま暫くの間、じっと男の顔を見続けた。

「...ジャミー。帰ってきて。アタシ待ってるんだよ、ずっとずっと待ってるんだよ... ダカラさ... 帰って... きなよ...」

泣くでもなく彼を見る小夜の目尻から雫がひと筋、頬を伝って落ちた。その時だった。

「!？」

...手が握られた。ゆっくりと。

「じゃミー!? ジャミー判る? アタシが判る!? ねえ!!」

動かなかった男が初めて、首を巡らし小夜を見た。

「……………オマエなんで泣いてるんだ……………」

「判るんだねジャミー！ やっと… やっと… オカエリ…」

今度こそ本当に小夜は泣きだしていた。

グシャグシャに泣き崩れながら男の膝に顔を埋めていた。

「…頭が…肩が痛い…」

「大怪我だったんだよ！ でももう大丈夫だから！ お医者さんも順調に回復してるって」

「オレ…事故ったのかな。なにがあった？ 小夜子」

「あのね、あの…」

言いかかった小夜が弾かれたように立ち上がる。

小夜…子…???

「じゃみい」

「なんだよそれ。また兄ちゃんに変な呼び名つけて。父さんと母さんは？」

…覚えて、ないんだ…

なにも…アタシのことも…

小夜はただ立ち尽くすしかなかった。何も出来なかった。

何を告げることも出来なかった。

だが絶望していたのは、ほんの僅かな間だけだった。

「…大変な事故だったの。今、教えてもショックだと思う。一度お医者さんのところに戻って、ゆっくり話を聞いて」

「…判ったよ。連れてって」

「ウン。行こう、『お兄ちゃん』」

車椅子のブレーキを外すと、小夜は向きを変え施設へ戻り始めた。

微かだった海風が強くなり、彼女の背を押す。

逆さに巻きあがった長い髪が、泣き笑うその顔を隠していた。

◇

「やっと終わったようね」

木の陰から二人の遣り取りを見ていた水草屋は、ほうと息を吐いてマルボロを取り出した。

「見張りに付き合わされるのは、どうやら今日までかしら」

「仕方ねえだろ、オレも免許持ってねえんだから。こんなトコまでいちいちバスでこれっかよ」

「アラ、敬老パスで安くなるでしょ？」

「どアホ、1日6便しか来ないんだぞ、『仕事』になりやしねえ。それにな」

隠れていた木に寄り掛かったまま耳屋が文句を返した。

「俺はまだ62だ、敬老パスなんぞ持ってねえよ。歳まで忘れやがったか」

「とっくに忘れたわよ、親の歳なんて」

冷たく言い放ちながら水草屋はマルボロに火をつけようとした。海風が邪魔をする。

「ほらよ」

身を起こした耳屋がポケットからジッポを取り出した。

水草屋は暫くの間、差し出されたジッポを、それから耳屋の顔を眺めていた。

「まだ持っていたのね、それ。とっくに捨てたと思っていた」

「昔、ヤニ中の馬鹿娘がいたんでね」

火打石を擦ると炎が立ち上った。水草屋が両手で囲い、マルポロに火をつける。

煙が漂うと、キンと澄んだ音を立ててジッポの蓋が閉じられた。

『街の意思』はぼんを『始末』しろってことだった。だがもう必要ねえ。そう伝えるよ」

「『皆殺しの邪魔屋』が随分と優しくなったものね」

「相方もくたばったしな、その名前ももう用済みだ。このジッポも…」

「？」

「これはな、誠にくれてやろうと思ってとっておいたのさ」

掌で弄ぶと、耳屋がジッポを放ってよこした。水草屋がキャッチする。

「奴の墓に入れてくれ。欲しけりゃ持ってもいいぜ。そりゃ『お前たちのモン』だからな、怜子」

水草屋がほんの一瞬、目を見開いた。

すぐにいつもの伶俐な顔に戻る。

「二度とその名で呼ばないで、『お父さん』」

「オマエもな」

言い捨てると耳屋は歩き出した。トボトボと。

「いいの？ 乗っていかなくて」

「たまにや歩くさ」

耳屋が片手を挙げてみせた。そのまま振り向きもせず歩き去る。

耳屋の後ろ姿を一瞥して、水草屋はもう1つの去ってゆくほうを見た。

二人が見えなくなるまで、そこでマルポロを吸っていた。

木陰の暗がりの中で、偽物の蛍のように火口が鈍く光っていた。

「...さて。『仕事』に戻るとしましょう」

吸い殻を投げ捨て、水草屋も歩き出した。

もう1度だけ振り向き、二人の去った方へ向け人差し指と親指を重ね Tiny Heart を作ってみる。

戻ってくるんじゃないわよ、坊や

誰に言うでもなく眩き、少しだけ微笑みながら彼女は芝の向こうへ消えていった。

(了)

あとがきにかえて

あとがきにかえて

2016年から4年間、完結させずに放っておきました。

こんな拙い小説を読んでもくれた方々には大変に申し訳ない思いで一杯です。

どうかご容赦頂きたい。

秋葉原の無差別殺人事件が、この物語を書く発端でした。

自分でもどうにもならない怒りが、連載を書き進める原動力だったのです。

しかし2011年の東日本大震災が、そして私自身の生活環境の激変が、キーボードを叩く気力と

時間を根こそぎ奪ってしまいました。

何年もの間、未完の物語の事を想い続けるだけでした。

どうやって着地させるか...それすら浮かんでこなかったのです。ただ想い、眺めるだけ。

元号が平成から令和へ変わり、西暦も2020年を迎え、やっと書き上げる事が出来ました。

当初はもっと残酷なエンディングを考えていたのです。しかし...

もういいだろう

そんな風に思ってしまったのです。邪魔屋の彼と小夜、二人をそっと私の手から離してあげたかった。

作者失格ですね (^_^;)

いずれまた新しい物語を紡ぐことになるでしょう。その時まで力を蓄えます。

お読み頂いた方々に心からの感謝を捧げます。

2020年1月5日

孤艇 剛

キツネボタル ～常闇の街～

著 孤艇 剛

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
